
逃走者！！～せかんど・らん・あうえいッ！！～

夷 神酒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃走者！〜せかんど・らん・あうえいッ！〜

【Nコード】

N2751D

【作者名】

夷 神酒

【あらすじ】

「ヘタレチキンでなにが悪い！！……いや、ホント、ゴメンなさい」
逃げ足が取り得の高校生、伊達だて駆カケルが、暴走する幼馴染みや無口な校医、傍若無人な先輩や不思議な双子、さらに……
……などなど、とにかくにも理不尽な不可抗力から、全速力で逃げて逃げて逃げまくる！？（ときたま反撃有り）
この小説を読む際には、前作『逃走者！！』を読むことをかなり強めにオススメします。

プロローグ 太陰が夜天に昇る刻

月………地球に一番近い自然の天体。

英名 Moon

ラテン語 Luna

それ自体は光ることが出来ず、太陽の光を反射して初めて白銀に輝く

漆黒の天空に浮かぶ孤独な星に、人は同じなにかを感じていた

2

故に、人々は月影を探し続けた
故に、人々は月相を詠ってきた
故に、人々は月輪に惑わされた
故に、人々は月下を駆け抜けた

この物語は、まるで月のような少年と、彼を彩る太陽のような人々が繰り広げられる小さな物語

プロローグ 太陰が夜天に昇る刻（後書き）

そして、チキンでヘタレな主人公の不幸を笑うための物語

Flignt1 気にしちゃいけない(前書き)

さっそく新キャラ！ バカな作者をお許してください…

「……………なんか、ヤな夢見た気がする」

真冬よりも寒さは緩み、人々は新しい時期を迎える。
そんな時期のはずなのに、僕の体は冷や汗を滝のように流して
いた。

だけど、どんな夢見たかすっかり忘れた。

「…4…30……まあまあって所かな」

薄暗い空に太陽が昇り始めた時間帯だ。
今日も枕元の目覚まし時計が鳴る前（アラームは5…30に設定）
に起きた。

……………取り合えず、今日の予定を思い出そう。

「……………あ、今日から学校じゃん」

今日は、僕の通っている^{いぬがみ}戌神高校の始業式と入学式があった。

まあ、遅刻にはならないし、余裕を持って行動しよう。
僕は朝ご飯とかの準備のために、温もりの残る布団から出る。

「クラス分け…どうなるんだろうなあ」

なんとなく嫌な予感がする中、僕は部屋の壁にぶら下がっている鏡を見る。

広がってしまった髪を軽く後ろに流しつつ、後頭部の中心から肩胛骨辺りまで、束ねた糸のように伸ばした一掴みの髪に手櫛を通す。

「…よし、活動開始しますか！」

そして、鏡から目を外した瞬間、いきなり結構な重みが僕の背中を襲うが……まあ、気にしないでおこつ。

「……そう言えば今日からあの子も学校か…頑張ってもらいたいな、うん」

僕は何度か独り言をもらしながら、二階にある自分の部屋から一階へ向かった。

体を覚ますために軽く朝の運動をした僕は、洗濯やら庭先の掃除やらを終えて、20分ぐらい前から朝食+弁当を作り始めていた。さつきから首の左側がくすぐつたい気がするが……気にしないでおう。

そんなことよりなぜ僕が、午前中で帰れる始業式の日には弁当を作っているかというと、理由は今日の予定にある

新入生である一年は、午前中に入学式があり、午後には教師紹介や学校設備見学がある。

僕ら二年や三年は、通常は始業式が終わったら各自解散の予定だ。しかし、生憎僕は午後学校に残らなきゃならない予定が入ったのだ。

それと、運悪く春休み明け一番に、一年の学校設備案内の手伝いをさせられる光ヒカルにも、今日は弁当を作っただげる約束をしていた。…いつも、カ〇リーメイトやら十秒ゼリーばかりじゃ可哀相だしね。

「……よし、これでトマトを乗せれば完成っ」と

適当に頭で考えてる間に、体はすっかり仕事をしてくれて、僕の目の前には三つの弁当と三つの朝食が出来上がっていた。

弁当は、玉子焼きやポテトサラダを作っで、彩りや栄養バランスを考へて入れており、シユウマイ等の冷凍食品も一部使っで、それなりに手を抜きながら美味しく仕上がっでるはずだ。

一つは僕僕の分。

一つは光光の分。

もう一つは……

ふと、台所と廊下をつなぐ扉が開き、そこから眠気眼ねむけまなこの少年がパジャマ姿で表れた。

「ふぁぁ……おふぁよふぁいせいまふう（おはよびいせいます）」

「おはよう」

眠そうに目を擦る彼の襟足ほどの藍色に染まった髪は、寝癖で爆発しあらゆる方向に跳ねている。

「随分眠そうだね、矢沢くん」

「すみません……昨日は緊張して眠れなくて……ふぁう……」

……彼は矢沢翔吾君。

戌神高校に入学する一年であり、僕と一つ屋根の下に住むことになった少年だ。

僕と彼が一緒の場所に住むことになったのは、僕が一戸建て＋庭付きの結構広い家に一人暮らしをしているためである。

この家に一人暮らしをしていると部屋がありあまってしまったため、有効活用と称してなんとなく部屋を貸しているのだ。

そして前の居住者がいなくなつて、一人寂しく過ごしていた四月の頭に彼が尋ねてきたため、今僕たちは共同生活をしているのだ。

「ほら、トーストと目玉焼き作つといたから、早く食べちゃいな」

「……あ、ありがとうございます」

台所の向かいに位置してるリビングのテーブル上には、三人分の朝食とコーヒーを用意しておいた。

椅子に座った矢沢くんは少しぎこちなく朝食を食べ始める。

……彼の容姿は、藍色の髪に童顔＋160程度の低身長、見た目はまるで少女のような少年である。

正直、最初見たときは中学生の少女の家出かと思ったが、今見れば素直でいい子だ。

「……………伊達さん、一つ質問していいですか？」

僕が彼の対面に立つと、彼はトーストを噛りながら突然拳手をする。

「ん？ なんだい？ もしかして家賃のことかな？ それとも、勝手に君の分の弁当作ったのは迷惑だった？」

「いや、家賃については敷金・礼金0円。食費・水道代・ガス代・電気代込みで月々7万ポッキリには文句のつけようがないし、絶品の弁当まで作って頂けて正直ありがたいです。けど……………」

彼の視線が僕目から左の首筋に移る。

「さっきは眠くて気づかなかったんですけど……………その方はどちら様ですか？ ……もしかして霊感ゼロの僕にも見える幽霊？」

「ん？ この人は幽霊じゃない。戌高いぬこうの校医だよ。……………彩アヤさんも朝ご飯どうですか？」

「……………あむっ……………私、かーくんで十分」

「僕の首に栄養は含まれてないですよ？」

…… 一部の方は気づいただろうか。

何を隠そう、僕が朝起きた時点で背中に乗っかって、運動や家事をしている間も僕の首筋を甘噛みしていた人が今も僕の背中にしがみついているのだ。

気づいてた…… だけど、背中にしがみついた一瞬、メスを突きつけられたら反抗なんてムリです。

「そのままだと僕も座れませんし、せつかく作っただんですから食べてください」

「…… かーくんが作った…… やっぱり食べる」

僕に張りついていたその人は、素直に矢沢君の正面の椅子へ座ってくれた。

その流れで、僕もその隣の席に座ってから、今まで自分が背負っていた人の様子を見る。

四谷彩…… よつやあやそれが彼女の名前だ。

成長して170後半になった僕よりちょっと小さいぐらいの身長に白衣を纏い、肩まで伸びた艶やかな赤髪で無表情な顔の左目辺りを隠している。

スタイルはモデル並に抜群で、さっきまで背中に彩さんの山×2が当たってた状態でした。

…… よく頑張った、僕の問題……

「……かーくん、ギリギリの所で、なかなか悩殺できない」

「お願いだから殺さないでください。あと、勝手に心を読まないでください」

「心が読める、本心分かる、それはいいこと」

「プライバシー侵害は悪いことですけどね」

……話を聞いて分かる通り、読心術のスキルを会得してる特殊な人だ。

そのせいで矢沢くんが完全に取り残されてたりする。

「……まあ、不思議な人だけど気にしないだね」

「は、はあ……」

返事をしながらも、その視線は正面の彩さんから目が離れない。

「で、なんで彩さんは朝からこの家に？」

「ずっと、かーくん、会えなかった。だから、会いたくなった」

「……」

「……彩さん、あなたがとてつもない発言するから矢沢くんが固まっちゃったじゃないですか」

「本当のこと、言っただけ……はむっ……」

「……僕の首は食べ物じゃありません」

固まった少年、首を噛む女性、そして見てるだけの僕……

「……………今日は厄日か？」

僕の新学年は、そう簡単に始まってはくれないらしい。

Fl i g h t 2 …あなた何者ですか？

皆さんこんにちは…いや、おはようございます。

矢沢翔吾です。

今日から戌神高校に通う高校一年生です。

今は、たまたま見つけた『空き部屋有り』の広告がきっかけで、
大家さんと高校の先輩でもある伊達さん家で一緒に住まわせてもら
ってます。

伊達さん二週間ぐらいしか一緒にいないけど、伊達さんは男性だ
けど綺麗で料理も上手くて気が利いて優しくて……とってもいい人
なんです

だけど……

「彩さん……そろそろ離れましょ？ ……そんなにツちよっ！？」

あ……あふッ」

「……あむっ……」こ、かーくんの弱いト」

……出来るなら、あ、朝からこんなことは止めてほしい。

今、目の前の伊達さんは赤髪の美女（伊達さん曰く、戌神高校の校医さん）に襲われていた。

無表情な美女は、いきなり伊達さんを床に押し倒したと思ったら、その耳や首、まぶたや指先……そしてく、唇までも甘く噛んだり、猫のように舐めたりしてた。

見ちゃいけないと思ったけど、僕は人間の興味に負けてしまった。……そして、僕が見てる間も伊達さんは校医さんのされるがままでいる。

「……や、矢沢く……ん。助け……ひう……」
「れるっ……手出し無用。入ってきたら……」

伊達さんの頬を執拗に舐めながら、僕に向かってどこからか取り出した銀色に光るものを突き出してくる。

「……伊達さん、すみません」

僕には、人にメスに向けるような人を相手にするのはムリです。僕はしばらくの間、コーヒーを飲みながら現実逃避をさせてもらった。

「…助けられなくてすみません」

「いや、仕方ないよ。彩さんに勝てる人は少ないから」

「…私、怖くない」

「…いや、メスとか十分怖い（です）」

結局、伊達さんは遅刻しないギリギリまで校医さんに弄ばれ続けてた。

そして今は、玄関に続く一直線の廊下を二人で並んで（校医さんは伊達さんの背中に張りついてる）歩いている。

「それにしても彩さん。いちよう先生でしょ？ 先に行かなくていいんですか？」

「校医の仕事、一年中特にやることない」

「それは彩さんの仕事の速さと、ファンクラブの人達を締め出してるからでしょ」

「あれ、クライだから。それより、かーくん今日も来る？」

「あれ呼ばわりって……魔王も救われないな。……今日は保健室に用はないけど、もしかしたら逃げ込むかもしれないんで、その時はお願いしますね」

「……分かった」

なんか、二人の間がとても和やかで……

「お二人ってお似合いのカップルですね」

靴を履きながら、つつい本音がこぼれる。

その言葉に校医さんの無表情な顔は少し赤くなり、伊達さんは大きなため息を吐く。

「……ありがとう」

「いや、冗談キツいって。僕なんかじゃ彩さんとは釣り合えないって」

「……むう」

伊達さんの言葉に若干膨れっ面になる校医さん。
僕には伊達さんも十分綺麗だと思っただけだなあ……

「んじゃ、彩さんは……」

「降りない、一緒に行く」

「……しょうがないか。しっかり捕まっただけだよ……いや、やっぱりむ、胸が当たるんで少し緩めに」

「ヤだ。折角だから、もっと……」

「あふう!？」

校医さんは、まるで羽交い締めのように抱きつき、伊達さんの背中に体を密着させる。

……やっぱり付き合ってるんじゃないだろうか。

「や、矢沢くん。僕達は先に家を出るから、死にたくなかったら後から学校に来てね」

「……死にたくなかったら?」

……ああ、なるほど。

別に、そんな大袈裟なこと言わなくても、二人の邪魔なんてしないのよ……

「……君、かーくんの言ってることは本当。甘く見ると……死ぬよ」

「えっ?」

こ、心が読まれた!?

これが読心術ってものなんですか!

「んじゃ、ケガだけしないようにね」

「……あっ、はい」

驚きを隠せない僕に、伊達さんは苦笑いをしながら玄関の扉を開けて、一步を踏み出…

と、思ったら一瞬で走りだして……

庭に火柱が立ち上がった。

「はあっ!？」

飛んでくる土を手で遮りながら、僕は叫んでしまった。

伊達さんが着地してすぐ飛び退くと、その後を追うようにして火柱が次々と庭に作り出される。

「まったく彩貴のヤツ! クレイモア地雷なんか庭に埋めたら……庭の景観が壊れるだろがっ!！」

「そっちじゃないでしょ!？」

ついついツッコんだ。

だってそうでしょ!？」

庭の景観より自分の命のほうが大切だって!

「んじゃあ、矢沢くんも気をつけてねッ!」

伊達さんはこっちに手を振りながら、遠くへと走り去っていった。

……そして、その後ろを黒いなが突風を起こして飛び去っていった。

嵐のような出来事の後に来たどこかの紛争地のように荒れ果てた庭の前に、ただ立ち尽くすしかない僕…

「…伊達さん、あなたいったい何者ですか？」

僕の中で二週間で感じた伊達さんの印象が、この朝で一気に揺らいだ気がした。

Flight 2 : あなた何者ですか？ (後書き)

クリスマスプレゼント代わりに小説更新！ (シヨボツ！！)

Flights 新学期から気合いを入れて

春の風。

桜の爽やかで心地いい香りが、まだ少し寒い空気に鮮やかな色をつけ、その色は風に乗って僕達を包み込む。

学校に続く一本道には、さまざまな顔をした生徒が同じ方向へと進む。

ある者は義務教育を抜け出して、新しく始まる生活に緊張する者。

ある者は夢の長期休暇から現実に引き戻され、怠そうな顔。

ある者は目の前の控えた進路に向けて、真つすくな信念を持った者。

僕はそんな人達が歩く中を、全力で走り抜ける。

僕の通り過ぎた後からは、悲鳴や驚愕の声あひきょうかんが阿鼻叫喚地獄の如く聞こえる……はずだ。

「……新学期から、気合い入ってる」

今の僕が聞こえる声は超近距離にいる彩さんの声だけ。

だってそうだろ？

春一番を超える突風が僕の後ろから吹きつける。

…全長20メートルを超えるヘリが、地上十メートル程を超低空飛行で、春の空気を引き裂くような轟音を放って迫ってくるんだもん。

「彩貴も気合いの入れ方を180°以上変えてほしいな」

「……………360°ぐらい？」

「彩さん。それ結局一緒」

僕は彩さんとショートコントをしながら、スピードを緩めないように軽く後ろを見る。

その機体からは、口径が30ぐらいある漆黒の自動式機関銃チエーンガンや、鉄パイプを何本も束ねたようなロケット弾の発射口がこっちを向いている。

…その姿は日常よりもゲームなんかでよく見る姿。

桜吹雪を巻き起こしながら迫ってきたのは、アメリカ軍の戦闘用ヘリ、A H 64 D 通称アパッチ・ロングボウ。

その搭乗口を開けて、機械式メガホン片手にこちらを睨む一人の少女。

機体が巻き起こす風が、その栗色のポニーテールを激しく揺れ動かす。

『駆う！！ 待ちなさああああああああいッ！！』

メガホンによってプロペラの爆音の中でもよく聞こえたその声は、とても透き通っていた。

…彼女は僕の幼馴染みであり、僕をよく狩ろうとする人であり、僕が守る人の筆頭である四谷彩貴だ。

まあ、守るといっても彩貴は十分強いし、僕なんか必要ないけど、一度決めたことだから自分の中だけでそう思ってるんだけどね。

…ん？ なんか同じような紹介を一回したようなしてないような

……

…まいつか。

ついでに言っとくと、背中 of 彩さんは彩貴の…

「のう！？ ……こんなトコでも撃つのかよッ！！」

読者には悪いけど、思考を中断して左に飛び退く。

僕の予感通り、左後方で地面が爆ぜる音がする。

さすがにミサイルじゃなくて機関銃だったが、通学時間帯に実弾なんて撃つたら被害者が出るだろ！

死人出るぞ死人が！

「大丈夫。四谷の操縦者、そんなへましない。かーくん以外には、絶対当てない」

「いや、ある意味嫌なんですけど！ それに、この状況だと彩さんも危ないんですよ！」

「大丈夫。あんな弾、かーくん絶対当たらない」

「あなたはどつちの味方！？」

そうツッコみながらも、飛んで来る弾を様々なパターンで動き、そのすべてを走りながら避ける。

……一部の人は気づいてるかもしれないけど、アパッチは武装以外の本体だけで5トンを超える機体であり、ある程度速度を抑えるとはいえ、高度維持のため公道の車ぐらの速度は出している。

しかし僕は、そんな速度を出す機体に追い抜かれていない…

……イコール僕はその速度を自分の足で逃げてるんです。
人の限界を超えてる気もするけど、生存本能と生命の環境適応力
でなんとかカバーされてるのさ！

「…補足、ご苦労様」

「さすがに走りながら+弾を避けながらの補足は疲れますね」

この状態じゃ、校長の長話しは聞く気が起きないなあ。

「……彩さん、少し喉が渴いたんで、あの建物の一室で紅茶でも飲
みましょうか？」

「……本音は？」

「スイマセン、朝から久しぶりに走って疲れたんで、保健室で休ま
せてください。そして、彩貴の怒りが収まるまで匿ってください」
「……いいよ」

部屋の主に許可も得た。

僕はへりを一気に突き放し、目の前にたたずむ真っ白な建物に向
かってひたすら走る。

校門を突き抜けた先には、一列の人垣が立ちふさがっていた。

Flignt 4 今ほゆっくりしよう(前書き)

今頃ですけど、前作と書き方を色々と変えてみました。それに関して読者達には是非ご意見をお聞きしたいです。

「どうしたん駆？俺と同じクラスやないのがそんなにイヤなんか？」

「いや、光。それは自身過剰というものだ。二組の欄の一番下の方を見てみる」

「一番下？……………こりやお陀仏やな」

「1/10の不運を呼び寄せるとは……………相変わらず不幸な男だ」

空に叫んでいた僕の後ろから、聞き馴染んだ二人の男の声が聞える。

僕は振り返って二人に泣きつく。

「光ヒカルうゝ、玲レイいゝ。僕はこの一年どうすればいいんだあ……………」

「すまんなあ。俺はクラス違うし、少ししか協力出来へんわ」

「本当に危機に陥った場合には保護してやるから安心しろ」

僕が泣きついた二人は僕の幼馴染みで、一年の時のクラスメート。

……………喋り方が関西風なのが小野田おのだ光ヒカル。

短く刈り込んだ茶髪に時々見せる人懐っこい笑顔、180を超え
る長身を持つスポーツ系の爽やかな青年だ。

中学時代を関西で過ごした関東人のため、喋る言葉が関西弁じゃなく関西風になってしまってる。

……………『保護してやる』って、ズレた発言をしたのが和泉玲いずみレイ。

黒髪のツンツンヘアにフレームレスの眼鏡から覗く鋭い目、僕と光の間ぐらいの身長を持つ常に冷静沈着な男だ。

玲の脳ミソには人の弱みや細かい情報がつまっていて、対抗しようとする精神がズタズタに惨殺される。

「……って、二人とも何でここにいるの？ 始業式と入学式やってるはずじゃないの？」

普通、生徒はここにいないはずじゃ……

「始業式は終わったんよ。どうせ新入生は午後会っんやし、適当にサボタージユしてたんや」

「光、正確にはサボタージユは労働争議の一つだ。……入学前に新入生256名の情報はすでに入手済みだ。直接見る必要はない」

……まあ、この二人なら理由もなしにサボってそつだな。

「それに、俺達にはそれぞれの仕事をこなし、最低限度の成績さえ取れば単位は必要ない……そつだろ？」

「まあ、そつだけどさ……」

この学校は不思議な制度がある。
その名は『特級生徒単位免除制度』。

簡単に説明すれば、学校に対して有意義な働きを一定以上行える
と判断された生徒…特級生は、その働きをするによって授業出席の
単位を免除されるのだ。

今年からあのクソ……ゲホン！ ええ……理事長が決めた制度で、
今は五、六人が対象になっている……らしい（玲情報）。

光は、その老若男女に好かれる人柄から、学校の行事やイベント
のイメージキャラクターとしての仕事。

玲は、入学予定者や生徒などの素性に問題があった場合、情報を
学校に提供する契約。

そして僕は……面倒だからまあいいや。

この仕事をこなせば、僕達は別に授業には出なくていい。
その代わり、成績はある程度取っておけてわけだ。

……そしてもう一人、俺の知り合いにその対象者がいる。

「………よりによってこいつと同じクラスか…やっぱり厄日……いや、
厄年だ」

「「まあ、ドンマイ（やで）」」

『和泉玲』の文字の数段下に『伊達駆』と書いてある二年二組の
クラス名簿。

その名簿、一番下の欄。
書いてあるのは『生徒会長としての仕事』をすることで特級生と
なった人。

「……幻覚なら早く解けてくれ」

そこには、『四谷彩貴』と、一字一句間違えなく書いてあった。

「……って、コトなんですよお。まじやってらんないです
「かーくん、運悪かった」

クラス分けを知って、僕は光に弁当を渡してから二人と別れてトポトポと保健室に来ていた。

「去年よりも来る回数が増えるかもしれないんで、お願いしますね」
「……私は、運良かった、かも」

目の前で座っている彩さんは、左右と後ろの赤髪で、頭の頂点より後ろの方に艶やかな団子を一つ作り、そこにシンプルな鬘くわんこうの髪止めを一本さしていた。

この頃、保健室ではこの髪型にしてるけど、顔の左半分のほとんど（鼻とか口とかは隠れてない）が、いつも通りに隠れているのが不思議だ。

……てか、正直この髪型はかなり色っぽい。
彩さんの大人でミステリアスな雰囲気と、赤髪のうなじ＋綺麗な首筋の組み合わせがなんともそる。
浴衣なんて着たら最高だろうなあ……

「……やっぱりかーくん、この髪型好き。だから、ここでだけ、この髪型にする」

「……さっき読心したことは、記憶から永久的に抹消してください」
「ムリ」

「……ハア」

僕は自分の失態のため息を吐き、手に持った紅茶に口をつける。

「……いつものことながら、美味しいです」
「ん、ありがとう」

やっぱり彩さんの入れた紅茶は美味しい。
コーヒーとか抹茶なら自信があるけど、紅茶の入れ方とブレンドは彩さんになわわない。

「……かーくん、午後から、生徒会室でしょ？」
「そうですねですよ……って、あなたも関係者でしょ」
「……サボる、もん」
「だったら顧問になるなんて言わないでくださいよ」
「そんなことより、今は、ゆっくりしよ？」
「……そうしますか」

それから僕は、彩さんと午後までゆっくりと紅茶を味わっていた。
それを現実逃避というかは……考えないことにした。

「へえ、地面が爆発ですか」

「俄かに信じがたいな」

「でも、本当なんだよ。…確か、伊達さんはク、クレイ…モアとか言ってた」

僕は、自分のクラスで伊達さんの絶品お弁当を食べた後、近くにいた人と話していた。

「…もしかしてクレイモア地雷ですかねえ？ それなら対人用地雷のことですから、地面が爆発するのも分かります」

「殺傷能力はそれほどではないが、足ぐらいは簡単に吹き飛ばすな」

…内容は高校生らしくないけど。

朝、僕が見たことを話したら一人が食いついてきたのだ。

「へ、へえ。二人ともそういう事に詳しいんだ」

「なに、ちょっとした趣味でな」

「それにです、普通の人が地雷の爆発をよけるなんて、ふつう考えられないことです」

会話の途中で同じように腕を組んで考え込む目の前二人。

…和倉美海

僕と同じぐらいの背丈で、ほんわかした雰囲気を漂わせる表情。
白く煌めく髪は、ツインテールでも腰まで垂れるほど長い。

…和倉美空

僕と同じぐらいの背丈で、キリツとした雰囲気を漂わせる表情。
黒く艶めく髪は、ツインテールでも腰まで垂れるほど長い。

この二人は双子らしく背丈や美人なのはまったく一緒。

父親譲りの白髪が姉の美海さん。
母親譲りの黒髪が妹の美空さん。
見分け方は髪の色と、美空さんの方だけが眼鏡を掛けている……っ
て本人達が言っていました。

美海さんは明るくて、どこか幼さが残ってる感じで可愛い人。
美空さんは物静かで、古風な感じが漂うかっこいい人だ。

たまたま、一年二組の名前の順で男子の最後になった僕と、女子

の最後になった美海さん（美海さんの前はもちろん美空さん）の席が隣になったから話してるだけで、二人には今日始めて会った。

…だから、美海さんに『女の子なのに男の子の制服着てるです』って言われたときは結構ショックだった。

いや、今までだって何度も同じようなことあったけどさ……そこまでストレートに言われるとちょっとね…

「そのセンパイっていったいどんな人です？」

「うむ、是非ともその先輩とやらに会ってみたいものだ」

「…あ、うん。学校でも会える機会はあると思うよ」

僕の思考がダウンし始める寸前に、二人に話し掛けられた。

…もう少しで、中学の頃に女装させられたトラウマが舞い戻ってくるどころだっ……………

「きゃあー!」

「むっ!?!」

「なっ!」

地面がドンツと揺らぐ。

爆音に窓ガラスがビリビリと鳴る。

教室内のほとんど生徒が、突然の事態に混乱している。

そして、僕はその音の発生源らしいグラウンドに目を向ける。

……………あ

「……………美海さん、美空さん、あの人が例の人です」

「えっ!?!」

僕の視界には、グラウンドの地面が次々と爆発する中を駆け抜ける伊達さんがいた。

「ちっ！ あのバカ新学期早々テンション高すぎだッ！」

僕は、グラウンドを縦横無尽に走り回る
そして、下手な口笛のような砲弾独特の飛翔音が、僕の後ろで大
合奏をしている。

「新入生の視線が痛いって!!！」

二年から上は、一年間の惨劇を見ているため『ああ、いつものこ
とか』ですましている。

しかし、何も知らない一年は目の前で起こってる非日常に啞然と

してる。

「それに、人に向かってッ……くっ、大型迫撃砲弾はないでしょ！」

丈夫な建築物をいとも簡単に瓦礫がれきと化す威力を持つ迫撃砲の砲弾は、着弾した瞬間に地面から火柱を吹き上げらせ、そのエネルギーは音や熱、光や衝撃になって僕に襲い掛かる。

「こうなったら……逃げるしかねえだろゴルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

爆発の衝撃に身を揺らされながらも僕は走る。

そして思う。

………僕、なんか悪いことしたかッ！？

回想中

「……………ついにここまで来ちゃったか」

僕は保健室で現実逃避をした後、生徒会室前で現実に戻っていた。今までも何度か来たことあるけど……………いつもラスボスが住まう部屋に感じるのは僕の気のせいか…？

なぜ僕がこんな所にいるかというところ、いろんな経緯があるのだ。

…今年も生徒の投票によって、生徒会長は彩貴に決定した。まあ、僕に対しての攻撃以外はカリスマ性を発揮してしっかり働いていたから、当然といえば当然だ。

ここで出てくるのは、『副会長は教師達の投票で決まる』という戌高独特の仕組み。

そして……………僕は、ほぼ満場一致で副会長に推薦された。

理由は『会長のサンドバツ…ゲホゲホツ…補佐に相応しいのは君しかない！』と、ある先生に言われた。

唯一反対してくれた彩さんも、副会長の担当顧問になることを条

件に買収された。

……でも、サボる気満々なのに担当顧問になる必要なんてないのにナゼ？

そんなこともあって、僕は生徒会副会長として生徒会室に来てるわけだ。

「……ま、ここで時間を食っても仕方ないな」

ため息を一つ吐いてから、僕は重厚な扉のドアノブに手を……

「ッ！ ……あつぶねえ」

ドアノブに触れる寸前で手を引き、ポケットの中に入れておいた黒い革手袋を取り出し、その中に手を入れる。

「本当は用途は違うんだけどなあ……」

僕は愚痴を言いながら手袋をした手でドアノブを握り、今度こそ目の前の扉を開ける。

横に長い空間にあるのは、全面の床に敷かれた深紅のカーペットの上に、対面式の綺麗なロングテーブル。

その周りには、重厚感のある黒い革張りの椅子が五、六台置かれていた。

…そこはまるで、ドラマに出てくる大企業の重役専用会議室のような場所だ。

そして、ガラス張りの壁から差し込む光を背にして座った人……彩貴は俺を見据えていた。

「ちっ…黒焦げにはならなかったのね」

「ああ、この手袋がなかったらケシ炭になってたろうな」

…あのドアノブは触れた瞬間に高圧電流が流れ、一瞬で変死体が出来上がる罫「ラップ」が仕掛けられてた。

それに気づいたのは…まあ、生命の危機を感じたとしか言いようがない。

そして僕がしている黒革の手袋は、超絶縁性+超断熱性（防水加工済み）だったため感電死体にならずにすんだ。

「…僕以外が触れたらどうする気だったんだ」

「今日はアンタしか呼んでないし、ここに来る必要があるのは私とアンタ以外いないでしょ？」

「…確かに」

…彩貴の言う通り、僕と彩貴以外はこの部屋に入ることはない。

それは、『今の』生徒会役員が僕と彩貴しかいないからだ。

戌高（いさか）の生徒会の役員は、投票で選ばれる会長と副会長以外はその二人が推薦して決められる仕組みだ。
そして、その生徒を決めるために僕はここに来たのだ。

僕は取り合えず手袋を外し、彩貴から一番離れた席に……

「なにしてるの？ あなたの席はここよ？」

…座ろうとした瞬間、彩貴が自分の右隣の席を指差す。
それも、普通の席の間隔は二メートル以上あるのに、彩貴と右隣の席は間隔ゼロの状態。

……………あんま座りたくねえ。

「え、別にここで……」

「ここよ……」

「いや……」

「ここよ……」

「あ……」

「コトヨ……」

「……はい」

彩貴の言葉から殺気を感じ取った瞬間、僕は素直にその隣の席に行き、反抗一つせずに座る。

…どーせ、僕はヘタレですよ。

「それじゃあ、今から生徒会役員を決めることにするわね。情報資料はここにある和泉の調べた全校生徒の能力のデータスキルを使用するわ」

僕が素直に従ったことに気をよくしたのか、少し笑みを含ませながら、横から出したノートPCを開く。

「この全校生徒スキルデータから、生徒会の役職…会計・会計監査・書記・事務。その四つの役職に適している人物を今からこのPCで弾き出すわ」

そう言っつて、彩貴はキーボードのENTERキーを指で叩く。

画面上では、0と1の数字が上から下へと駆け抜ける。

ん…ちっと待て。

「……………てか、これがあるなら一位になったやつに決めればいいだけじゃん……………僕、来る必要ないよね」

だって、その役職に一番合ってる人が分かるんだから、彩貴一人でも決めてよかったはずだ。

僕の発言に、彩貴は少しだけ表情を濁らせる。

「……そう上手くいけばいいんだけど……ほら、結果が出たわ」

彩貴の言葉に、僕は彼女に向けていた視線を画面に移す。

〈結果〉

会計 一年二組、和倉美海

会計監査 一年二組、和倉美空

書記 二年二組、和泉玲

事務 二年二組、伊達駆

「……今年の二組には精鋭が揃ってるんだな。そして、なんで僕の名前があるんだ」

「やっぱり……クラスが偏ってるのは目を瞑るとして、やっぱり問題発生ね」

彩貴は、軽く呆れたようにため息を吐いてから背もたれにその体を委ねる。

「僕と玲のデータを抜いてもう一度やり直せば……」

「ムリよ。この個人データは編集どころか、算出結果以外は閲覧さえ不可能……一回使用したら、個人データは自動的に削除されて和泉が言ってた」

「……玲がそう言ってるなら仕方ないな」

……一回似たようなシステムファイルを使ったことがあるような、ないような……まっ、いいか。

「会計と会計監査は決定でしょ？ 玲は絶対に役職はやらないし……」

……僕は副委員長だから事務はムリ」

「……駆、アンタ決まるまで事務と書記もやりなさい」

「なんでッ！？ ……って言っても副委員長って暇だし、穴埋めぐ

らいならやっつてやるよ」

「物分かりがいいわね。…私も手伝うから、適任者が見つかるまでよろしく頼むわよ」

「りょーかい」

こちら辺で反抗すると、僕と彩貴の問題じゃなく学校全体が機能しなくなる可能性がある。

どうせ雑用ばっかだろうし、なんとかなるだろう。

…さて、これで仕事は終わったし、帰りにスーパーにでもよって帰ろう。

「んじゃ、僕はもう帰るよ」

「……待ちなさい」

僕が立ち上がって出口に行こうとした瞬間、後ろから右手をガツシリと捕まれた。

この展開、いやな予感が……

「今朝、彩ネエとなにしてた？」

さっきと違って声のトーンが下がり、僕の右腕がミシミシと音を立てる。

せ、説明し忘れたけど、彩さんと彩貴は姉妹なんです。

Flight 6 しなやかな闇

「フウ…死ぬかと思った」

あの状況から、僕は生存本能で逃げ切ることが出来た。

そして、僕は生徒会室より豪華な扉の前に来ていた。

僕は手に持った黒く長い革紐で、肩甲骨まで伸びた一筋の黒髪を
しば……

「……らなくてもいいか」

殴りたいのは山々だけど、わざわざ戦闘態勢に入る必要ないな。

僕は手に持った紐をポケットに入れ、ノックもなしに目の前の扉
を開ける。

その部屋は、教室一つぶんほどの空間に、生徒会室と同じような
深紅のカーペットと重厚な机と椅子が一つあるだけのシンプルな部
屋。

そして、その席に座っている茶髪のオッサン。

「お、ノックもなしとは随分だビヤツ!？」

その姿を見てムカついたから、なんとなくぶん殴ってみた。

「……な、なにするんだ馱！？ いきなり殴りおって！！ 昔の恩を忘れたかッ！！」

「それは昔につり銭が出るほど清算しただろボケが。ついに老化が脳細胞に來たか？」

「なにを言う。ワシの愚息はまだまだ若いモンには負けんゾビヤッ！？」

「このエロジジイ！！」

汚^{けが}らしい下ネタ発言は、顔面パンチで制裁しときました。

……この男は四谷源蔵^{よつやげんぞう}。

四谷財閥の現当主であり、彩貴と彩さんの父親であり、…僕に力の制御を教え、しばらくの間僕の上司だった男だ。

昔はカツコよかったが、この数年でメタボリックの流行に乗った男だ。

茶髪（地毛）の髪をオールバックにしたポツチャリオツサンだと思ってくれば簡単だ。

そして、こいつは現在の戌高の理事長である。

学校の設備等には目を通してはいるはず。

と、いうことは…

「テメエ、屋上に迫撃砲を設置する事了承しやがっただろ」「イタタ……仕方ないだろ。ワシの娘の頼みジャバツ！？」

ジジイの顔に、今日三度目の歪みが起こる。
もちろん、僕の拳によって。

「親バカもいい加減にしる。この学校を武装化する気か？」

「そ、そこら辺は安心だ。『伊達駆以外の生命体には使用しない』
と誓約書を書かせたから」

「……一回逝つとくう？」

「遠慮しとくう……ちよつと待て、電話だ」

ムカつく笑顔を殴りたい衝動に駆られるが、電話中に殴るのは相
手に悪いのでなんとか押さえ込む。

「あ……ハイハイ……なるほど……うん……分かった……駆、一
年二組の教室で生徒数十人を人質に立て込もりだそうだ」

「へえ、んじゃあその携帯の1を二回、0を一回押せばポリスマン
が来てくれるんじゃない？」

「彩貴も一緒にイヴツ！！？」

四発目は、椅子ごとその体を吹っ飛ばす威力でジジイの顔面を捉
えた。

「それを先に言え！！………つたく、たぶん勝手に頭突つ込みやが
つたな会長様は！！！」

急いで部屋から出た僕の手には、どさくさに紛れてジジイから取った携帯。

「……玲、敵と武器と人質の数を教える」

『やはり駆もいたか。…組織性はない九人、刃物六拳銃四、逃げ遅れた新入生二十四人と生徒会長殿が一人だ』

「まあ、身代金目的の寄せ集めか……人質以外の一般人を学校の外に出して、警察への連絡を遮断してくれ」

『分かった。九人の中に一人、その筋がいる。時間はかけるな』
「了解」

僕は携帯の通話を切ってポケットにしまい、その代わりに黒紐を取出して、自分の髪を一筋伸びた後ろ髪を中心に纏めて縛る。

「まったく、なんで早速トラブルに巻き込まれんだあの無鉄砲女が！
後始末する俺の身にもなれ！」

喧騒が広がり始めた廊下を、一つの闇がしなやかに風を切った。

「テメエ等、動くんじゃねえぞ」

「お兄さん達キレやすいから、この鉄砲で撃っちゃうよお」

「なんなら一人ぐらい殺つてもいいんじゃない？」

「よせ、血の臭気は好ましくない」

「ハッ、こんなかで一番殺してる野郎がなに言ってるんだか」

∴あの、なんで僕は入学初日からこんな目にあってるんでしょ
うか？

伊達さんが見えなくなってから三人で話してた時、教室にいきな

りフルフェイスヘルメットにライダースーツを着た集団が入ってきて、僕達に銃を向けてきた。

その後、教室の端に追い詰められ、カーテンを閉めて薄暗くなった部屋の中に僕達はいる。

あまりの驚きで、僕は変に冷静だ。

…と言っても、僕が出来るのは下手な動きをして相手を挑発しないようにするだけ。

それが今の一番適切な対応。

美海さんと美空さんも冷静に周りの様子を見てるだけだ。

だけど、パニックを起こす人だっている。

その人たちをなんとか抑えているのは……

「大丈夫だから、助けはちゃんと来るから落ち着きなさい」

入学式の時、壇上で凛々しい姿で僕達に挨拶をした…四谷生徒会長がみんなを落ち着かせていた。

四谷会長は新入生の各教室を見回ってたらしくて、ちょうど僕達の教室に来た時が侵入者と一緒になったみたいだった。

「……会長、あなたは大丈夫と言うが、その理由はどこにある」

騒いでいる侵入者に聞こえないぐらいの声で、美空さんが会長に話し掛ける。

「私は……信じてるから……駆のことを」

「駆？ あ、伊達センパイのことですね。でも、逃げてばっかりの頼りないセンパイらしいですよ？」

会長の口から伊達さんの名前が出たことに、僕は驚いた。

美海さんの言う通り、伊達さんは学校でいるんな人に追い掛けられて、まったく反抗もせずには逃げるだけらしい。

暴力を振るうような人じゃないのは分かってたけど……格好いいイメージはなくなった。

「そのような先輩は信用ならない。私達は私達で行動させていただけ」

「私も早く帰りたいです」

そう言って、美海さんと美空さんはゆっくりと立ち上がった。

「ちょっと、二人とも待つ……」

「翔吾君はじつとしてるです」

「巻き込まれて命を失いたくなければな」

僕が声をかけると、二人は僕の制止を遮って……消えた。

「グブア!？」

「な、なんダブエ!？」

「お前等ドオツ!」

「な、なんだテブエ!?!？」

そして、その一瞬の間に侵入者四人は床に倒れていた。
そして、その一瞬の間に二人は一人の男に捕まっていた。

「ッ!？」

「……まさか、そっちの人がいるとは思わなかったです」

残った男は両膝で二人を床に押さえつけて、その二つの背中に両手に持った大きなナイフを突きつけてた。

「それはこちらのセリフではないか？ 高校生の女子がここまで動けるとは……」

ヘルメットの中で反響する声はやけに冷たく、背筋が震える。

「ちょっと！ 早くその足を退けなさい!！」

事態が飲み込めずに騒めくだけの僕達の中、会長はその男に向かって走りだした。

「威勢のいい女子だ……血は好かぬが、邪魔者は消えて頂こう」

男は容赦なく会長に向かって片手のナイフを投げた。

数名の女子が甲高い叫び声をあげた。

僕は反射的に目を瞑る。

…見たくない

人が死ぬところなんて

いやだ

逃げたい

僕はもう………

「まったく、相変わらず無鉄砲過ぎんだよテメエは。テメエがそんなんだから、俺が体を張らなきゃならねえんじやねえかよ」

「……遅いわ！ アンタの仕事なんだから、文句なんて言っていないでもっと早く来なさい！」

聞いたことのあるいつもやさしい人の声は、聞いたことのないよ
うなぶつきらぼうな口調だった。

「アンタが遅いせいで新入生はパニックになりそうになるし、そこ
の二人は勝手に飛び出すし……私だって怖かったんだから……早
く助けに来てよ……」

「弱音吐いてんじゃないよ。テメエは完璧超人の生徒会長だろうが
……後は俺に任せとけ」
「……うん」

聞いたことのあるとても凛々しい人の声は、想像出来ないほど弱
々しい口調に変わった。

「メンドクせえから、とっとと終わらすぜ？」

その声に反応してきつく閉じた目を開くと、ここにいるはずのな
い人がいた。

「……外の見張りは何処へ？」
「ちゃんといるぜ。ただ、四人仲良く夢の世界だけだな」

その人は、男と会長の間に立って、その手で男が投げたナイフの
刃を握っていた。

その手からゆっくりと流れ出る血が、一筋の赤い線を引く。

「だ、伊達さん…？」

その姿は髪を縛ってるみたいだけど、間違えなく僕の住んでる家の家主。

だけど、目つきはやけに鋭くて、いつも優しい雰囲気は欠片もなく、まるで別人。

「その迷いなき行動と一片の痛みも見せぬ表情……只者ではないな」
「テメエに言われても嬉しくねえよ、三下が」

二人の睨み合い。

ヘルメットで顔が見えなくても、男からは怒りが見える

「……フツ、私が三下と言うなら、私がこの女子を殺すのを止めてみる…」

そう言った男は、両手で一本のナイフを振り上げ……

「……ッたく、ウゼエな」

吹っ飛んだ。

男はいきなり僕等と反対側の方向に飛んだ。

そして男がいた所には、踏まれていた二人と、それを助ける伊達さんがいた。

「この生徒にそんなもの突き立てるなんて、テメエには一生涯ムリだな。三下はおとなしく公園の砂場のお城に、お子さまセットについてくる国旗でも突き立てろ」

……一瞬、伊達さんの姿が二人に見えた。

助けられた二人も、目の前の伊達さんを見て啞然としていた。

この部屋で驚いてないのは、気絶している数人……あと、会長だけだ。

「…さて、テメエにはしっかりと落とし前をつけてもらわねえとなあ」

伊達さんは一歩一歩吹き飛ばされた男に近づく。

一歩が踏み出されるたび、後ろに纏められた黒髪が揺れる。

その動きは、まるでそれ自身が生きてるみたい。

「クツ……その気配の消え方……き、貴様！ まさか……ヤジユウ
！？」

野獣……？

その男の叫びに反応したのは、伊達さんだった。

「まったく、通り名のバリエーションが多すぎだろ。たぶん、あのク
ソジイのせいだろうから、あとで通り名の種類の数だけブン殴っ
てやる」

意味深な言葉を残し逃げようとした男を、伊達さんは正面から両
手で頭のヘルメットを掴んで止める。

「奴らに俺のこと言う時は『シンゲツのクロネコ』って言え……
んじゃ、あばよッ！」

伊達さんが言葉の最後にした膝蹴りは、ヘルメットを貫通して男
の顔を潰していた。

…ただ今、僕は一仕事を終えて下校中。
いちようスツキリしたけど…面倒なことになっちゃったなあ。

「伊達さん！ さっきのはなんだったんですか！」
「あなたが伊達センパイですかぁ。…意外と綺麗です」
「美海、今はそんなことよりこの先輩の正体だ」

侵入者を倒した時、そこにいた新入生達には、黒猫の状態でプレッシャーを与えながら『俺がいた事は誰にも言わない』って強迫し
といた。

世間に流れるのは、『凶悪犯が学校に侵入！ しかし、勇敢な美
人生徒会長が犯人を撃退！！』ってあたりだろ。

…だけど、新入生の中でこの三人だけが首を縦に振ってくれな
った。

一人は、僕の左手を握ってる我が家の住人、矢沢翔吾。
もう一人は、僕の右手を握ってるやけに長い白髪ツインテールの
少女A。

さらにもう一人は、僕の前でジト目で見ている黒髪ツインテール

の少女A'。

「センパイ、双子だからってAとA'で分けないでくださいです。そして私は和倉美海です」

「ヲイ、人の心を読みながら平然と自己紹介するな」

「普通に口に出していた。ちなみに私は和倉美空。そして私が妹でそちらが姉だ」

「口に出してて恥ずかしいなあとか、なんとなく落ち着きのある君が姉かと思ひ込んだこととかはそっちに置いて、君達はなんで僕についてくる？」

「さっきのことを説明してもらったため（です）」「僕にも説明してください！」

クソッ

両手が捕まれてる時点で逃げにくいし、家には結局矢沢くんが帰ってくるし…

助けてくれそうな彩貴と彩さんは、さっきの事件を生徒会長と職員として処理するためしばらくは学校だ。

まさに八方塞がり…どーするよ僕！！

「そこまで言うなら話してやればいい」
「そやで。出し惜しみは程々にせんとな」

後ろから聞き慣れた二人の声。

首だけそつちに振り返ると、そこには玲と光が二人並んで立っていた。

「いや、新入生を巻き込むわけには…」

「同居人としてと、生徒会の一員として…理由としては十分ではないか？」

「その双子は生徒会会計と会計監査に選出された…って玲が言ってたで」

なるほど、和倉つてどこかで聞いたことあると思ったら、生徒会室で出力された名前だったな。

…と、なると、いつかは絶対バレるな。

「…しょうがないか。まあ、立ち話もなんだから家に来な…あ
と玲、説明は頼んだ」

「分かっている。この小説での詳細説明は俺の担当だ」

「こら、大人の事情は説明しなくていい」

取り合えず僕達は我が家に行くことにした。

様々な理由により、俺達は伊達家の居間に来ており、そこにある机が事実を知る二年（俺、駆、光）と質問する一年（矢沢、和倉姉妹）を分割していた。

「…と、言うわけだが、何か質問はあるか？」

「「「……………」」」

駆に説明を任された俺は、取り合えず伊達駆という人間の『一部』を新人生三人に説明した。

『一部』とは、『新月の黒猫』伊達駆の事実』と『四谷と黒猫の関係』。

彼等が見たのは黒猫状態の駆だけだ。

それ以上、駆のスペックや情報を露出する必要はない。

「…新月の黒猫。新月、黒猫、夜獣^{ヤシユウ}など、様々な呼ばれ方をする四谷財閥を守る最強の男。……数年前に死んだと言われてから、その名を語る者が多く見られたが、その者達はこの一年間でほとんどが刑務所行き。本当の生死さえ不明の伝説的な隠密者…」

「ずいぶん詳しいな和倉妹」

「美空は不思議な情報が好きなのです。時々危ない情報まで知ってるのが心配なのです」

「美海ちゃんのその気持ち分かるわぁ。俺も玲が未恐ろしくなる時

があるわ」

…随分な言われようだ。

光と駆以外なら、情報操作で絶望の淵に叩き落としていただろう。

「…ま、そんなものだよ。本当は隠しておきたかったんだけど、今年から特級生にされたから仕方ないんだよねえ」

「……特級生？」

「特級生徒単位免除制度の対象となった生徒のことだ。分かったか矢沢？」

「は、はい」

まあ、『特級生』という言葉は俺達特級生徒単位免除制度対象者でしか通用しないからな。

「しかし、伊達先輩はどんな理由で特級生なのだ？ …それに小野田先輩と和泉先輩も特級生のようだ」

眼鏡の縁を上げながら、こちらを見据えてくる和倉妹。

…なかなか、キレ者のようだな。

「美空ちゃんは鋭いなあ。大正解や」

「和倉妹の言う通り、光は学校の広報のキャラクターとして。俺は……企業秘密だ。そして駆は……」
「それは、僕の口から言わせてもらうよ」

俺の話を遮って、駆は落ち着いた口調で話し始める。

…駆の仕事は複雑ゆえに、本人が説明したほうがいいだろう。

「僕の仕事は……」『特異な方法で戌神高校を害する者を排除する』。
今日みたいに学校が対応出来ない事件の時に、いち早くその人達を
追い出すのが僕…そして俺の仕事だ」

78

髪を縛ってないため、一人称を変えても駆は黒猫になりはしない
が、その瞳が微かに輝くのが見えた。

…やはり、教えないのか。

「ま、これで話は終了だ。ほら、用件は終わったんだから帰った帰
った」

「えー」

「私はもう少し話を聞きたい」

「俺も俺も！」

「早く帰らないと…彩貴との戦闘に巻き込まれるよ？」

「……お邪魔しました」「……」

駆の言葉に、渋っていた三人は一瞬で玄関から出ていった。

「…なぜか、矢沢くんまで出てっちゃったな」

「誰も自身を蜂の巣などにされたくないだろう」

「それはそうだな…で、僕に聞きたいことがあるんでしょ？」

駆は、机の上に置いてあった六人分の湯呑みを片付けながら平然と語り。

こいつはいつもそうだ。自分に対する好意には疎^{うと}いが、人の心の揺らぎはポーカーフェイスをもものともせず^{うと}に読み取ってくる。

…ここは潔く話そう。

玲独特の無表情な瞳が、レンズ越しに僕を見据える

「なぜ、文章の一部を省いた？　そこは、重要な文章だろう」

その口から出てくる言葉は、事実を元に考えられた正確無比な言葉のみ。

…まったく、玲は痛い所を的確に突いてくる。

「…だって、それを言ったらみんな恐がっちゃうだろ？」

「しかし、和倉姉妹もお前が黒猫という事実を疑っていた。それを言えば少しは…」

「別に信じられなくてもいい。僕は守りたいものを守る…それだけ出来れば僕はいいんだ」

…僕が言わなかったのは『特異な方法で戌神高校を害する者を排

除する』に続く言葉。

それは『そして、当人はそのために命を捨てることも、人命を奪うことも厭^{いと}ってはならない』。

もし邪魔があつたら殺害さえ黙認し、四谷の権限によってその事実を消すということだ。

「…駆がそう言うなら俺はかまわない。しかし、和倉姉妹の事は注意しておけ」

「うん、ありがと」

「気にするな…さて、そろそろ矢沢も自分のミスに気づいて帰ってくるだろう。それでは失礼する」

そう言って玲は僕の家から出ていった。

「さて、矢沢くんが帰ってくるまでゆっくりしてよ……確か、彩さんから貰^{もら}ったいいお茶があつたはずだ」

…僕はそれから一時間あまり、久しぶりの休息を取ることが出来た。

Flight 8 黒い扉（前書き）

今回の話は伏線 + 特異設定が多く、分かりづらいです。次話で少し解説しますのでお許しく下さい。

Flight 8 黒い扉

国語、数学、科学、物理、世界史、日本史、地理、英語、古文……
etc

大体の学校生活中で最も多い時間は、もちろん卓上の授業だ。でも、その授業を受けないというのも、ちょっとした優越感がある。

「ふう、これでよしッ」と

僕は机の上の書類を片付け終わって、椅子に寄り掛かりゆっくりと伸びをする。

机といっても、教室の机じゃなくて生徒会室の馬鹿デカイ長机だ。

他の生徒が授業を受けている中、僕は特級生の権利で授業を休み、生徒会室で副会長兼書記兼事務の仕事をこなしていた。

さすがに掛け持ちすると仕事量が半端ないため、作れる時間を有効利用しているのだ。

……でも、まだ時計の短針が12の所を登りきる前にだいたいの仕事が終わってたりする。

「後は…弁当食べてから部屋の掃除でもしとくかな」

手持ちぶたさになった僕は、少し早いけど弁当を食べるために、書類をずらしてスペースを作り、足元に置いといた弁当を机の上に広げる。

ん？ …廊下から誰かが走る足音が聞こえる。

それも物凄い速度でこっちに迫ってる気が……あ、この部屋の前で止まった。

「伊達エ！！ 弁当食べるぞ！ てか、食べさせる！！」

ノックもせずにドアを開けてきた人は、笑顔でそう言った。

……萩野はぎの 杏子きょうこ。

肩の辺りでバツサリと切り揃えられたオレンジ色の髪は、他の生徒とは一線違う。

背丈は僕よりも少し大きく、スレンダーで無駄な肉がついていない体は、日頃の鍛練の成果を表している。

「……萩野先輩、ノックぐらいはしてください」

「いいじゃないかそんなこと。それより飯食わせるか、陸上部に入れ」

「弁当はあげますから、部活には入りません」

「ダメかあ……ま、分かり切ってたけどね」

そう言っつて、萩野先輩は僕の差し出した弁当を流れるような動作で取り、僕の隣……つまり彩貴の席で食べ始めた。

……この人は成高の三年生で、陸上部の部長である。

短距離、長距離、走高跳びの三種目において全国レベルの頂点に達するという超人的な実績を持っていて、その功績で『特級生』となった人だ。

性格は男勝りのアネゴ肌っつてやつで、その容姿のよさもあつて男女構わず人気がある。

そんなスゴい先輩と僕が関わる理由となつたのが、僕の逃げ足の速さだ。

僕が彩貴とかファンクラブとかに追い掛けられてた時に、先輩が遊び半分僕を捕まえようとした所、僕の防衛本能が実力以上の走りを見せ、先輩をブツちぎつた事がきっかけらしい。

それ以来、週に一度は陸上部の勧誘に先輩自ら来ている。

……まあ、僕が縦に首を振らないのは薄々分かつていて、今では僕の弁当を食べるために来るとしか思えないけど。

「ごちそーさま。いつもながら美味かつたッ！」

「早ッ!? ほんの数分で完食!？」

「今日は少し早く食つてみた」

「……なんでですか？」

「なんとなく」

「……………」

なんとというか、豪快な人だなあ。

そういえば、彩貴は萩野先輩の事が少し苦手らしい。「あの豪快さにはついていけない」だそうだ。

その代わり、萩野先輩は彩さんが苦手らしい。「あの雰囲気はアタシにあわない」だそうだ。

危険な幼馴染みや豪快な先輩さえ退ける領域……僕が保健室によく行く理由が分かるでしょ？

僕は取り合えず先輩にカラの弁当箱を返してもらい、隣の給湯室に向かう。

「おい、どこ行くんだい」

「先輩に食べられた弁当の代わりにお茶でも飲もうかと」

「んじゃ、コーヒーくれるか？」

「ハイハイ」

随分と強引な気がするが、この遠慮のない性格が先輩のコミュニケーション方法だ。

僕には出来ないなあ……

「って、なにしてんの君達？」

「「えっと……学校探険をした（です）」」

給湯室を開けると、そこには同じ顔が二人並んでいた。

「はあ……君達はまだ生徒会員じゃないんだから、入って来ちゃダメだろ」

「……もうしわけない」

「ごめんなさいですう」

そこには、まだ授業中の筈の和倉姉妹がいた。
つか、なぜここにいる？

「理由は……まあ、別にいいか」

「えっ!?!」

「どうした？もしかして聞かれないのかい？」

「……いや」

「聞かないでくださいです」

素直でよろしいな、うん。

まあ、給湯室に盗まれて困るものなんてないし、生徒会の資料だつてこの二人はイヤというほど見ることになる。
これくらい気にすることじゃない。

「ほら、君達も向こうでお昼でも食べな」

「えっ?」

「さつきは入ってはいけないと……」

「君達の侵入を許したのは僕だ。早く出てけなんて言わないよ。…
飲み物は紅茶でいい?」

「「は、はい」」

「ほら、向こうに気のいい先輩がいるから行ってきな」

そう言つて、僕は給湯室から二人を押し出す。

双子なんて珍しいものを先輩に見せたら……二人とも、餌食になつてこい。

「さてと……」

一人になった僕は、お茶を入れる前に目蓋を閉じて集中する。

『僕達』と対話するために……

黒絵具に塗り潰されたような空間……どこが上でどこが下かさえ分らない。

この空間は、『僕達』が対話するために作られた精神のたまり場。そしてここは『僕達』の部屋に繋がっている。

「今日は……お、珍しく全部揃った」

念じることで暗闇から五つの扉が表れる。

その扉の色は様々で、それぞれに独特の雰囲気を持っている。

……普通は一つ扉が出てくればいいほうなんだけどね。

「でも今は『俺』としか話せる時間がないんだ」

僕は取り合えず、用件のある真っ黒な扉の前に立つ。

その扉は真っ黒な空間よりも濃い黒で、どこかのアンティークなバーのような古びた様子をしている。

僕はノックもせずその扉を開ける。

その部屋は、真っ黒の中心にスポットライトが一つだけ当てられていて、そこには背もたれのない丸椅子が二つあった。

「久しぶり」

【つたく、なんのようだ】

「いやあ、君の意見が聞きたくてさ」

その椅子の片方には、この部屋の主がいた。

「気配とかは『僕』よりも『俺』の方が専門でしょ？」

【そりゃそうだが…メンドくさ】

その椅子に座った主は、右手で器用に顔を拭き始めた。僕は、主と向かい合うようにもう片方の椅子に座る。

「さあ、新月の黒猫としての意見を聴こうか」

【…仕方ねえな】

その主……毛並みも艶やかな黒猫は顔を拭くのを止め、その金色の瞳で僕を見つめる。

この猫こそが僕の心に住み、僕の性格を変える存在……『朔望月相』の一つ、『新月の黒猫』の正体だ。

そして、『僕』と『俺』の対話が始まった。
これから起こることに備えるため……

Flight 9 黒い猫と危険な山×2

前回僕が入った黒い扉は、僕の心の中。
その中でも『新月の黒猫』の性格を司る者が眠っている場所だ。

…『朔望月相』は多重人格に似ているようなものだけど、少し違う。

一つは、主人格である僕の意識は入れ代わることはない。
例えば新月の黒猫の場合、『僕』が『俺』になることでこの扉とリンクして、扉の住人の力を引き出しているのだ。

そしてもう一つは、各人格によって能力が著しく変わるといふこと。

各人格は主人格のデータカードのようなもので、僕が力を引き出す時にその経験や知識を体や脳に送ってくれる。

その代わり、引き出している状態で得た経験や知識は、主人格である僕じゃなくて、各人格が記録する。

つまり、『僕』には新月の時の記憶はあるけど、その時の動きは出来ないってことだ。

…そこ、『説明へタ』とか言わないッ。

【テメエは説明ヘタだなあ】

「だからそれを言うなよ。ボキャブラリーのなさは自覚してるんだからさあ」

【自覚してんだっいたら直せっつーの】

目の前の黒猫は僕に文句を言いながら、椅子の上で後ろ足を使って首をカリカリ搔いている。

……呑気な野郎だ。

【で、なんのようだ？ テメエがわざわざ部屋に来たってことは、なんか聞きに来たんだろ？】

「あ、そうだった」

すっかり忘れてた。

…早くしないと先輩に文句言われるな。

「じゃあ、一つだけ聞くよ……あの二人は白か黒か？」

【あのチビ共か……黒じゃねえと思う。しかし、…俺達に近いものを感じる。しかも、俺に近い】

「…なるほど、黒じゃないわけか……ならいいや」

【おいおい、放置すんのか？ 俺は白とは言ってねえぞ】

「黒じゃないんなら何も言えないよ」

【…ったく、お人好しだよテメエは】

「それが僕だからね」

目の前の黒猫は、僕に呆れたように大きな欠伸を欠く。
お人好しで悪いか？

「んじゃ、僕は戻るよ」

【おう、とつとと出てけ】

僕が立ち上がって部屋を出て行くとする僕に、黒猫は背を向けて尻尾を振るだけだった。

素っ気なくて面倒くさがりな黒猫らしい別れ方に、ちょっと笑える。

「じゃあね」

僕はゆっくりと扉のノブを引いた。

さて……問題は解決したし、先輩達にはお茶でもいれ……

「遅いぞ伊達エー!!」

「ゴビョッ!?!」

僕の名前を呼ぶ声と同時に、後頭部に走る激痛。
痛みに耐えながら振り返ると、そこには萩野先輩がフライパン片
手に仁王立ちしていた。

…なにが起こったかは聞かなくても分かるね。

「イタタタ…先輩なんで叩くんですか！ フライパンは十分鈍器で

すよッ!！」

「ちよつと、そのツッコミは『そのフライパンはどこから!?!』
でしょ!！」

「どうせ給湯室のフライパンなのは分かり切ったことです」

生徒会室の給湯室は、お茶以外にもある程度の食事が作れるよう
になっているのだ。

「そんなことはどうでもいいや。早くお茶くれよー」

「ハイハイ」

僕との絡みに飽きた先輩は、生徒会室の方に戻っていった。

それからコーヒーをいれてる間に、『双子ちゃんゲッチュー』
とか『だ、誰かッ!!’』とか『助けてですう!』とか聞こえた……
気がするけどシカトした。

いや、誰でも自分が大切でしょ？

「センパイ。ヒドいですっ」

「し、死ぬかと思ったぞ…」

「すまないすまない、萩野先輩の性能スペックを考えてなかった」

「フツ、お姉さんをナメちゃいけないぞー」

僕がお茶を持っていくと、先輩は二人を両脇に抱えて遊んでいた。
…二兎を追うもの一兎を得ずの法則をブチ破っちゃったよこの人。

98

「で、伊達。このカワイコちゃん是谁？」

「その聞き方、どこのナンパ男ですか…この二人は一年生で、生徒会の会計と会計監査です。ほら、自己紹介して」

取り合えず、面識のないお互いを自己紹介させる。

「…和倉美海です。一年生です。よろしくです」

「和倉美空。学年は右に同じく。よろしく願います」

…かなりビクビクしてるけど普通の自己紹介だな。

てか、そこまでひどいことされたのか？
でも、今の問題は……

「三年の萩野杏子だ。陸上部で部長をやってる。ぜひ見学……いや、ぜひ入部してくれ。あと、伊達との関係は……運命の赤い糸で結ばれてるぞ」

「……なに言ってるんですか？」

やっぱりやつちやったよこの人。

ふざけるのもいい加減にしてほしいよ。

「先輩と僕はただの知り合いです」

「そんなテレなくてもいいじゃんか」

「テレてません！！ てか、そんなこと後輩達の前で言わないでください！」

「ほらテレてるじゃんか」

……いや、テレるでしょ。

このアネゴ風サディスティックな性格を除けば、十分綺麗な人だ。
そんな人にそんなこと言われればねえ……テレるでしょ？

「……かーくん、浮かれてる」

「浮かれてませんッ！」

テレビてるの次は浮かれてるかよ。ずいぶんな言いようしてくれるな。

……あれ？

さっき『かーくん』って言われた気が…

「…浮かれた、かーくんに、お仕置き」

「ゴブア!？」

いきなり、僕の頭上になにかが落ちてきた。

床とキスする+額がいい音を立てたぞ。…うう、カーペットがあつてもかなりイタい。

「伊達センパイ!？ 大丈夫ですか!？」

「こ、この方は…いつの間にかこの部屋にいた？」

「ゲッ、校医さんじゃん」

…三人の声の中に『校医』という言葉がでたね。
もしかして、僕の上に乗ってるのは人で、さらにその人は……

「かーくん、浮気、メッ」

「浮気って…僕はそんなことしてないし、まず誰とも付き合ってません！」

「私と」

「そこ違います。あと、先輩も便乗しない！」

…やっぱり、僕の上に乗ってたのは彩さんだった。
出不精の彩さんが、なんのためにここにいるんだ？

「かーくんと、赤い糸、結ばれてるのは、私」

「…それを言うために？」

僕の問いに、彩さんはコクンと頷いた。
わざわざ冗談を言うために…どんだけですか。

「…かーくん、立って」

「？いきなりなんです…」

「立って」

「ハイ」

いきなり、喉元に冷たく尖ったもの…彩さん十八番のメスが突きつけられ、僕は彩さんの命令通りに動く。
な、なにか悪いことでもしたか!?

「……………むぎゅ」

「あふっ!?!」

いきなり、後ろから首を絞められた!?!
いや、首を絞める力はそんなに強くない。
それよりもヤバいことがッ!

「むむむ、胸ッ、胸がつ当たって!」

僕の背中に、彩さんの豊満なお山二つが当たってるう!?!?

「このまま、保健室に」

「だ、だから胸がつ」

「早く」

「…ファイ」

メスなんか突きつけられたら、僕に反抗なんて出来…
…そうだ! だ、誰かに助けを求めればッ…

「ざんねん…三人とも、教室に戻った」

「この薄情者おお!! ……いや、彩さん、静かにするんで腕に力を込めないでください。心臓に悪いデフッ!?!」

「ふみゆ……なら、騒がないで、早く行こ？」
「ハイ」

…それから僕が保健室に行く間、彩さんの精神攻撃は続いた。

Flight9 黒い猫と危険な山×2 (後書き)

私は思う……彩さんの出番が多い。…一番使いやすいキャラだけど、少し控えよう。

Flignt10 脅される者と探る者(前書き)

後半は完全に伏線です。意味が分からなくても放置しておいてください(焦)

前回、彩さんに……あれは誘拐っていうのだろうか？
どっちかって言えば連行か？

…まあ、一時間ほど彩さんに保健室で遊ばれてから、僕は生徒会室に戻ってきていた。

「…ふう、これでOKかな」

この場に戻ってきた僕は、まず迷わずに盗聴器発見器を使った。

そして、結果は見事大当たり。

六十三台の盗聴器と三十四台の小型監視カメラが見つかった。

前回突然彩さんが来たのは、生徒会室の様子を、ずっと監視してたかららしい。

てか、僕は『月』と書いて『ライト』って名前でも、『神』と書いて『キラ』と呼ばれてる人でもないんで、そこまで監視しないほしい。

んで、放課後になってやっと、その盗聴器等の取り外し+部屋の掃除が終わったのだ。

「やることやったし………帰るか」

部活に入っていない（勧誘はあるけどすべて拒否）僕は、バツパと帰りの用意をして……

「カ〜ケ〜ル〜？」

「ん……？」

名前を呼ばれてその方向を向くと、音もなく開けられたドアの先に、仁王立ちした彩貴の姿があった。

「彩貴か……どうした？ なに

「なんで授業受けなかったのよ！！」……へ？」

訳の分からないことを言いながら、彩貴はズンズンと僕に近づいて来る。

その威圧的な雰囲気、僕は胸ぐらを掴まれるまで動けなかった。

「なんでこんな所で時間潰してるのよッ！……」

「ちょッ！ やめれえ！ 首がもげるう……！」

首を前後左右にブンブン振られて、まともに喋れない。
の、脳ミソが揺れるって！

「いや…マジ…ギブ………」

「あッ…ゴメン。やりすぎた」

僕の状態に気づいたのか、彩貴はパツと手を放す。

「…ゲホツ……いきなりなにすんだよ」

「だから！　なんでアンタは教室にいなかったのよ！」

僕がむせながら質問すると、意味不明な質問返しが来た。
てか、なんで僕が教室にいなきゃ行けないんだ？

「いや、特級生なんだから別にいいでしょ？」

「関係ない！！　私が出てるんだからアンタも出なさい！！」

「…なんだその理不尽」

お前の物は俺の物。俺の物は俺の物的なヤツか？
イジメっ子の法則か？

「…せつかく一緒のクラスになれたんだから………」

「ん？　なんか言ったか？」

「な、なんでもないッ！！　とにかく！　これからなにもない時は
必ず授業に出ること！！　拒否権はなし！！　いいわね！！」

「いや、それは個人の自由……」

言葉の途中で、僕の目の前に鈍く黒光りする一本の筒が突き出される。

彩貴は目が笑ってない笑顔で、その筒についてる引き金に指を掛けていた。

「い・い・わ・ね？」

「……………はい」

……アサルトライフル自動小銃なんて、どこに隠し持ってただよ。
そんなことを思いながら、僕は武力に屈した。

「新月の黒猫……四谷のサーバーでは新井月朔夜にいじつきさくやの名前で登録あるが……これは偽名か」

暗闇の中にぼんやりと光を放つ液晶画面には、ネット中に広がった新月についての情報が纏められている。

新しい情報には幽霊説や宇宙人説など……はつきり言ってきた臭い。それに対して古い情報……特に四谷令嬢誘拐事件時の警察庁や報道機関のサーバーにハッキングした方が数十倍信用できる

「……今度は本物と見て間違いないだろう」

対象が見つかり、叩くキーボードがいつもより軽快に音を刻む。その速度は人の指が動く限界に近づきながら、指の一本一本が正確に目標のキーを叩いていく。

「これで片割れの目的は達成出来る。後は…」

言葉と同時に指は動きを止め、最後の仕上げに右手の人差し指が Enter キーを押す。

すると、画面の様子が変わり、ある人間の情報が画面上に映し出される。

新月の黒猫が四谷『最強』なら、この人間は史上『最悪』。

史上最悪のコンピュータウイルスを製作した者であり、全世界のハッカーの頂点といわれる人間。

その人の手掛かりは、『薔薇のような深紅』と言われる瞳を持っているということのみ。

「三十日八雲…いや、深紅大蛇…お前も必ず見つけだす」

文字と数字だけの画面に、まだ見ぬ相手を見据え、ゆっくりと眼鏡を押し上げた。

前回、僕は彩貴の武力に負けて、『用事がなきゃ授業を受けること』を約束する不平等条約を結ばされた。

それに、担任（田口さん 国語辞典標準装備）のふざけたアイデアで、新学期早々くじ引きで席替えをすることになり、最近絶不調の僕のクジ運が、窓際が一番後ろ…そして『彩貴の隣』というデットライン玉砕戦線圏内を引いてくれやがった。

…まあ、一年前は普通に授業を受けてたわけだし、蜂の巣になるよりマシだと思った…… ンだけど。

「っ、疲れたあ〜」

で、現在は久しぶりの授業をすべて終えた放課後の教室で、一人グダ〜ってしていた。

…いや、本当は心身ポロポロでグツタリしてるンだけどね。

はつきり言って、こんな日々が続いたら…死ぬ。

回想

今回の回想は描写なし、音声のみでお楽しみください

一時間目 化学

「はい、今日の実験は硫酸を使うため、十分注意してください」

「…なに見てんのよ」

「いや、授業真面目に受けてるなあって思った」

「当たり前じゃない。生徒会長の私が不真面目に授業するわけないじゃない」

「……去年まで校内で銃乱射してる奴が言うセリフじゃないよ」

「う、うっさい！！ 死ね！！」

「いや、死ねって……ちょっとまで、それは硫酸じゃ……」

「問答無用！！」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

二時間目 国語

「ZZZ…」

「こら伊達ッ!! 授業中寝てんじゃない!」

「グヒヤ!? …… 出た! 田口さん必殺『広辞苑の「大当たり」の次の項目は「大穴」チョップ』……ゴブツ!?!」

「ふざけてるんじゃないよッ! それと『さん』じゃなくて『先生』だろうが!?!」

三、四時間目 家庭科

「今日は、班でグラタンを作ってもらいます」

「…もっ…ダメ…」

回想終了

…なんか、まともに授業を受けてる気がしないんだけど…気のせいじゃないよね。

あと、大体の人が分かっているとと思うけど、僕は逃げるために黒猫まで使った。

気配を消して隠れるためとはいえ、基本的に緊急事態にしか使わないようにしてたんだけど……まあ、いいか。

「……………取り合えず帰ろ」

こんな所でグダグダしてても仕方ない。

早く帰って夕飯の用意をしなきゃ。

僕は、髪を縛ったまま沈み始めた真っ赤な夕日が射し込む教室を

あとに……

「伊達センパイ見ーつけた　こんな所にいたです」

なぜか僕が教室から出た瞬間、ドアの影から一人の少女が表れる。夕焼けに赤く染まる真っ白な髪をしたツインテール少女は、愛くるしい笑顔でこっちを見ていた。

「えっと……和倉姉妹のお姉さんの方だから……美海さんだけ？」

矢沢君のクラスメートの」

「センパイ、美海の名前覚えていてくれたんですね！　それも、私の方がお姉ちゃんって！　私、感激ですう！！」

「い、いやあ、結構印象的だったからね」

白髪と黒髪の双子…まるでオセロみたいだから、名前も序列もちやんと記憶されていた。

そのことが嬉しかったのか、少女は目の前でキャツキャツ喜んでいる。

「で、なんのようかな？ さっき『見つけた』って言ってたってことは、僕を探してたってことでしょ？」

「あ、そうですね。喜びのあまり、目的を忘れるところだったです」

僕が指摘したところ、美海さんは少しごまかし笑いをしながら、右手を僕に向ける。

その手には鋭利に黒光りする鉄の固まり……

「な、なんのつもり……」

「動かないでくださいです。美海としても、今はセンパイを傷つけたくないですから」

美々さんが握っていた鉄…正確には全長十五センチはあるクナイが、僕の胸元に突きつけられていた。

僕は両手を頭の後ろに持っていていき、降参の意志を伝える。

「さすがセンパイ。物分かりがいいです」

「そんな危険なもの持つてる後輩に、物分かりがいいと言われても

嬉しくないよ」

「護身用です」

「クナイって護身よりも歴史的な武器でしょ。てか、人を脅してる時点で護身用じゃなくなってるのは僕の気のせいかな？」

「きつとそうです」

「……」

笑顔で僕の攻撃を弾き飛ばす美海さん。

…柔らかそうな見た目と違って、実は腹黒いのかもしいな。

「じゃあ、ちよつと時間をもらえるですか？」

「何時間ぐらい？」

「分からないです」

「分からないのか……じゃあ、今から帰って夕食の準備があるからムリ」

僕は問いに素で答える。

その答えに、美海さんの笑顔が少し引きつった気がする。

「……命と夕食、どっちが大事なんでしょう？」

「命は大切だけど、矢沢君も待たせちゃってるんだよね」

夕飯を作るのは僕の仕事だ。

矢沢君が家で待ってるのに、何時間掛かるか分からない寄り道してる暇はない。

しかし、その答えに美海さんの笑顔は消えた。

「仕方ないです。少しだけ痛くするです」

ため息を吐いた美海さんは、クナイをゆっくりと僕の胸に近づける。
刺さったらただじゃすまないけど、逃げたら背中にグサツてされる。

「『仕方ないかです』か……なら……」

仕方ない。だから、僕は自分のスイッチを切り換える。
それは『普段の僕』から『漆黒の俺』に……

「……俺がテメエになにしようよと、仕方ねえよな？」

暮れかかった日は沈み、世界に闇が訪れた。

いきなり、センパイの雰囲気が変わった。

優しそうだった瞳が、刃物のように鋭い金色の輝きを放っているです。

これが黒猫…一度見たけど、かなり怖いです。

…けど、この人をなんとかしないと私は…

「…すみませんです」

私は目を閉じて、手に持ったクナイでセンパイの胸に突き刺す。
命の容赦なんてなくて、完全に殺すつもりで。
そして刃先がセンパイに……

「……なにしてんだ？」
「エッ!？」

突き刺さるはずだったクナイは空振りして、背後からセンパイの
声がしました。

急いで目を開くと、目の前にセンパイの姿はないです。

そして、目に映るのは闇、闇、闇。

さっきまで学校の廊下いたはずなのに、前後左右を見回しても、
私の周りには先の見えない闇しかいないです。

「なっ、なんですかこれは？」

「…白チビ、すまねえがソッコで終らす」

暗闇からセンパイの声が反響するように聞こえ……

「喰い尽くせ…黒夜」
「いへ」

一瞬で空気が冷たくなって、全身が硬直する。

それと同時に、体の中は焼けつくように熱くて、体が溶けそう。外は極寒、中は灼熱。

まさに地獄のあまりの苦しみに、意識が遠退きそう。

いや、意識が遠退くんじゃない…喰われる。

「あ……イヤ……ヤめッ…イヤアアアアアア…！」

私…の意…シキは…や…ミに…クわ…ね…

絶叫した美海さんは、意識を失って床に倒れこんだ。
静まり返った廊下に、クナイが落ちる甲高い音が響き渡る。
てか…

「…ちよつと、やりすぎたかな？」
「やりすぎだな。今日は部活もなく、周囲に他者がいなかったのが
幸いだっただな」

僕の独り言に、背後から答えが返ってきた。
振り返ると、そこには眼鏡をかけた仏頂面で僕を見ている玲がいた。

「玲か…何でこんな時間にこんな所に？」

「それはこちらのセリフだ。俺は身辺調査の資料を整理していた所、経験のある悪寒を感じてここに来た」

「ああ、久しぶりに本気出しちゃったからね」

さっき使ったのは…黒猫状態の奥義・黒夜。

自分の気配を凝縮、そして爆発させて強烈なプレッシャーを周囲に撒き散らす技。

特に、直接触れている相手に対しては、闇に堕ちるような感覚が襲い掛かる。

まあ、バカみたいに体力を使うため、普通は使わないようにしているけどね。

「黒夜か…：…それほど和倉姉の精神は強かったのか？」

「いや、それを知るためにやったんだけど…：…十秒だった」

「十秒か…：…ある程度の訓練は行っているらしいな」

僕は顔を見合わせた後、倒れている美海さんを見る。

黑夜は奥義と言われるだけあり、一般人なら三秒で意識が飛び、プロボクサーでも七秒で白目をむく。

それを十秒も耐えたなんて……常人でないのは確かだ。

「で、どうする？ 拷問して素性を吐かせるか。それともここで存在を消すか？ まあ、お前の事だから……」

「取り合えず家に連れていこうか」

「……やはりな」

だって、このまま置いていっても可哀想だし、彩さんは帰るの早
いから保健室も開いてない。

もちろん、玲の言ってることなんて論外だ。

「……もう、俺はお前にはなににも言わない。……お人好しすぎなければ
駆ではないからな」

「それは褒められてるのか？ けなされてるのか？」

「これでも褒めているぞ」

玲と会話しながらも、僕はクナイを回収して、美海さんを背中に
背負う。

……一瞬、彩さんの背負った時の感覚さかひかんと比べてしまったことは、
脳内のマシンガンで蜂の巣にした。

「んじゃ、僕は帰るから。玲も早く帰りなよ？」

「俺はもう少し仕事がある……しかし、早く仕事を終わらせ帰るとする」

「うん、じゃあ、また明日」

僕は玲に別れを言ってから、ゆっくりと昇降口へ歩きだした。

背中で寝息を立て始めた少女が起きないように……ゆっくりと、ゆっくりと。

Flight 11 波乱の日常、襲撃者を喰らう闇（後書き）

前にも言ったことがあるのですが、今作は前作と書き方を大きく変えました。それに関して読者方の意見を聞きたいと思っています。これからの作風に関わってきますので、ぜひともお願いします。

Flight 12 眠る姫と深紅瞳の嘔吐き

眠ってる美海さんをおんぶして自宅に帰ると、玄関で出迎えてくれた矢沢君が僕を見た瞬間、固まった。

それはまるで、北欧神話のメデューサに見入られ、石化してしまったように。

それはまるで、不倫の証拠を突きつけられ、思考が停止した夫のように。

それはまるで、保険医の彩さんに迫って、眉間に麻酔注射を射たれた男のように。

まあ、矢沢君は綺麗な顔してるから、つつついても動かない姿はまるでお人形さんのようだ。

…どっちかって言えば、男の子と言うより女の子の人形だけど。

そして、現在進行形で固まってるけど、自然解凍するまで放置プレイにしておく。

「……………すう……………すう……………」

そして今、一階の空き部屋に布団をしいて、そこに美海さんを寝させたところだ。

ゆっくりとした寝息を立ててる分、しばらくは起きないだろう。

「さてと……これからどうするかな」

僕は、自分の髪を縛った黒革の紐を解きながら考える。

矢沢君は固まっちゃってるし、美海さんは寝てるし……

…よし、取りあえず夕飯作ろう！

「確か、昨日の豆腐ステーキど余ったお豆腐が残ってるはずだから

……今日の夕飯は麻婆豆腐だ」

僕は美海さんを置いて和室を後にし、台所に向かった。

………矢沢くんが解凍されたのは、それから三十分後の事だった。

＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝

……寂しいです

なんで、みんな遊んでくれないです？

……悲しいです

なんで、みんな離れていくんです？

……苦しいです

なんで、みんな苛めるんです？

ママ！ パパ！ 美空！ 私を置いていかないでです！

＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝

「いや、あの時はびっくりしちゃいました。いきなり帰ってきたら
と思ったら、美海さんを背負ってるんですけどん」

「あはは……。確かに、誘拐してるようにも見えるかも」

「それはないです！ 伊達さんが誘拐なんてことしそつには見えま
せん。むしろ、優しい兄に見えますよ」

「ん、ありがとう」

僕と矢沢くんは、夕飯を食べ終わってから、リビングのテーブルで
たわいのない話をしていた。

『食事はみんなで食べたほうが美味しい』って言うのは、こつうい
う時間もあるからだと僕は思う。

「さて…じゃあ、食器洗っちゃおっか」

「あ、待ってください」

僕が腕まくりをしながら席を立とうとすると、矢沢くんに止めら
れた。

「なに？」

「今日は僕が洗い物します」

「えっ、いいよ。そんなに気をつかわなくても」

「遠慮しないでください。それに毎日お弁当を作ってもらってるん
ですから、その恩返しです」

そう言って、矢沢くんは食事の終わったの食器を持って、笑顔で
台所に消えていった。

……ああ、とつてもええ子やわあ。

きっと将来、いいお嫁…いや、いいお嬢さんになるな。

「さて…じゃあ、お言葉に甘えることにしますか」

椅子に掛け直した僕は、深呼吸をしてゆっくりと瞳を閉じる。
そして、僕はゆっくりと堕ちていく。

深層心理の奥底へと……

「って、待ちきれなかったのかな？」

黒に塗り潰されたような真っ暗な精神のたまり場には、僕が念じる前から一つの扉があった。

その扉は『黒猫』の部屋へと繋がる扉じゃない。

黒い空間に嫌でも栄える真っ赤な扉には、違和感のない金色のノブがついていた。

その派手な色以外はおかしくない普通の扉……
しかし、その扉は押しても引いても開かないことを、僕はすでに知っている。

「まったく……この扉はなんでこう偏屈なんだろ」

ただ一枚の板に文句を言いながら、僕はノブを握る。

押してもダメ。引いてもダメ。。だったら……

「…スライドさせてみるってな」

僕はノブを回転させながら、そのノブを横にスライドさせる。すると、ドアはすんなりと動いて、中へと続く入り口を開く。

扉の中は、一昔前の監獄のように四方を風化を始めたコンクリートで固められ、その古びた壁には植物が伝っていて、毒々しいほど赤い薔薇のような花が所々に咲いていた。

そして、その部屋に備えつけられた鉄格子つきの窓から、三日月より細い月の赤い月明かりが、闇の世界を赤黒く染めていた。

「まあ、主が偏屈っていうのが、この扉に現われてるな」

「偏屈とは失礼ですね」

この部屋の真ん中には、部屋の主…真っ白な蛇がいた。

その蛇はマムシ程の大きさで、とぐるを巻いてる胴体の真ん中から、首をもたげてこつちを向いている。

僕はその蛇にゆっくりと近づき、目の前で足を止めて、よく観察できるように片膝を床について屈む。

「私は偏屈などではなく、筋金入りの嘔吐きですよ」

「それじゃあ、君の筋金は相当軟弱なんだろうね」

「ええ、嘔吐きですから、入っていてもいなくても同じようなものです」

自分のことを嘔吐きと言う蛇は、目を細めながら赤い舌をチロチロ出している。

「で、なんで君は僕が来る前に入り口を繋がた？」

「理由はありません。気分ですね」

「嘘だよね」

「はい、嘘です」

僕の指摘をもともせず、蛇は自分の嘘を堂々と認める。

…なんてタチの悪い性格だろう。

「夕チの悪いとは失礼ですね」

「……僕の考えていることを読まないでくれないか？」

「いえ、これは私の勘であり、貴方の思考を読んだものではありません」

僕のことを見る蛇の瞳は、周囲の薔薇や空の月、その舌よりも深い赤色をしていて、僕のことを見透かしているようだった。

そしてその瞳から感じる光は、世界を敵に回しても揺らぐことなく嘘をつける自信を放っていた。

……こういう存在が、本当の最低なだろうなと思う。

「最低とは失礼ですね。私は最高の嘘吐きです」

「……もういいや、本題に入ろうよ」

「分かっています」

平凡な僕は、嘘吐きの蛇にペースを乱されながら、なんとか話をすることにした。

Flight 13 真実よりも純粋なウン（前書き）

更新が遅くなってすみません（汗

短編小説に手間取ってしまいました。

これからペースを戻しますので、見捨てないでください（懇願

私が目を開くと、視界には見たことがない天井が見えたです。いい匂いのする布団に、私は寝ていました。

「また……あの夢ですか」

……本当の恐怖としか言えない夢。
その夢を見るたび、今みたいに体中が汗でベトベトして、ほっぺたを拭くと涙まで出てきます。

142

「イヤな夢なんて……忘れるです」

頭をブンブン振って、私は夢を振り切り切ります。

そして、取りあえず体を起こして周りを見ると、ここは畳やふすまがある純和風な部屋です。

でも、ココは私の記憶にないです。

……もしかして！

「ココはどこ？ 私は……美海ですね」

ために記憶喪失の定番セリフを言ってみただす。
でも、自分がいる場所は分からなくても、自分の名前が分かるか
ら、記憶喪失じゃないですね。
— 安心です。

……

……

……！？

「安心しちゃダメです!!」

どこかも分からない場所で安心しちゃダメです!!

「ココはどこですかッ!？ 私は美海ですッ!!」

完全にパニックです!!

自分で言ってることが分かりません!!

私は……どうすればいいんですか!？

「ここは僕の家で、君は確かに和倉美海さんだ」

突然、私の目の前に人影が出てきた。

いつの間にこの部屋に？ …… パニックだったから、気づかなかったのかもしれないです。

その声に反応して、私はその人影を見上げ……

「そして安心してくれていいよ」

私の目線の先には、優しい笑顔を浮かべた伊達センパイがいました。

そして、私は思い出しました。

私はセンパイを襲って……返り討ちにあったことを。

「……センパイ、なんで私はこんな所にいるのですか？」

確か、私がセンパイを襲ったのは学校だったはずですが。

ここがセンパイの家だとしたら、私を連れてきた理由が分かりません。

……もしかして、尋問されるのですか？

それとも、証拠が出ないようにならなくて消されるのですか？

あの新月の黒猫のことです。きつと、ただではすまない……

「ああ、本当なら君の家に送り届けるべきだったんだけど、夕食の準備があつたからちよつと寝ててもらつたんだ」

……えっ？

私の予想を完全に裏切つた答えが、先輩から返つてきた。

なにか企んでいるような笑みではなく、どこか悪びれた苦笑いを浮かべているセンパイ。

自分を襲つた人を、夕飯の準備という理由だけで自宅に入れるなんて……ありえないです。

絶対に裏があるはずですよ。

「……ほ、本当にそんなことで、私を家に連れてきたんですか？」

私はセンパイの考えを探るため、恐る恐る聞きます。

すると、センパイは私が乗っている布団の横に座り、苦笑いままで頭をかきまします。

「本当ゴメンね。夕飯のためなんかには、僕の家には連れ込んでやっ

お詫びに、その夕飯なんてどう？ 麻婆豆腐なんだけど……」

センパイは、この部屋の柱にかけられた時計を見ながら、私に提案してきた。

確かに、今思えばお腹は減ってるですし、麻婆豆腐は好きです。でも……

「センパイッ！ とぼけないでくださいッ！！」

私は確実にセンパイを殺そうとして、それを宣言しました。

でも、センパイは何もなかったかのように、私に接してきます。最後の慈悲か誘導尋問か分からないけど……そんなのいらぬです！！

「拷問するなら早く拷問してくださいッ！！ 殺すなら早く殺してくださいッ！！ 無駄話はやめて煮るなり焼くなりしてくださいッ！！」

私は大声でセンパイに怒鳴ってから、ゆっくりと俯く。

自分を殺すように言うなんておかしいですけど、無駄な慈悲を受けるなら……死んだほうがましです。

私は俯いたまま、センパイの言葉を待つです。いたぶられるのか、殺されるのか、それとも……

「えっ？　なんで僕が君のこと殺さなきゃならないの？」

センパイの口から出たのは、殺意も悪意も感じられない、ただ純粹な疑問。

私はその事実に関き、俯いてた顔をバツと上げます。

「僕が君を殺す理由なんてないでしょ？　てか、殺人を奨励しちゃダメだよ」

「だってッ！！　私はセンパイに刃を向けたですッ！！　私はセンパイを殺そ…ッ!？」

私かとぼけるセンパイに痺れを切らして、眞実を言おうとすると、私の口をセンパイの人差し指が塞ぎました。

いきなりすることに驚いた私は、すぐにセンパイの顔を見ます。

私の見たセンパイの顔は……

……一切屈託のない、綺麗で優しい笑顔。

「美海さんは僕と会った時、たまたま持ってた刃物を僕に向けながらコケた。臆病者の僕がそれを避けたから、美海さんは頭から床にぶつかって気絶した。……それだけのことだよ」

センパイの言ってることは、まったくのウソ。
私……そしてセンパイも、事実を知ってます。
なのに、センパイは笑顔でウソを吐きました。
真実よりも純粋なウソを……

「あとこれ、危ないからあんまり外で持ち歩かないようにね」

私の唇から指を離れたセンパイは、どこからか私の持っていたクナイを取り出します。

センパイは私の手を取って、その手にクナイの柄を乗せました。

「んじゃ、お腹減ったでしょ？ 麻婆豆腐持ってくるから食べてよ。
今日は特に美味しく出来たんだ」

私がクナイを受け取ったことを確認すると、センパイは立ち上がった後すぐ、私に背中を向けて部屋を出ようとしています。

……背中を向けたセンパイは完全にスキだらけです。
新月の黒猫になる様子もありません。

そして、私の手にはさつき返されたクナイがあります。

センパイを殺すなら……今です。

僕は歩みを進める。

一歩踏み出すたびに、足が畳に擦れて沈黙に音を加える。

僕は美海さんにクナイを渡し、背中を向けて出口に歩いてる。

襲い掛かってきた人間に武器を渡し隙を見せる……こんなこと
僕は死にましえ〜ん』と言ってトラックの前に飛び出す人でもやらないだろう。

……でも、僕は信じたい。

『……すみませんです』

彼女は僕を刺そうとした時、確かにそう言った。

その時、彼女の瞳は僅かに揺らいでいた。
人を殺すことに躊躇していた。人の命が大切なことを知っていた。
た。

それでも、僕を殺そうとした。

そんな彼女が僕を殺そうとするのには、なにか理由があるはず。
……それも、僕に関することだろう。

その理由が彼女にとって消せないものなら、この場で僕は刺される。
る。

僕の血でその理由を塗り潰すしかない。

その理由が彼女にとって消せるものなら、この場を僕は出れる。
そして、僕が出来る範囲でその理由を消す。

つまり、これは賭けなのだ。

殺るか生かすか、死ぬか生きるか、命を賭けた大博打。

そして僕は……彼女の優しさに命を賭けた。

「んじゃ、持ってくるまで少し待っててね」

センパイはそう言ってから、出入口であるふすまを閉めました。そして、部屋中に広がる沈黙。

……私は結局、センパイを殺せなかったです。

殺す気になれば、手に持ったこのクナイを首に刺せば、一発で殺せました。

センパイもスキだらけの背中であまり『殺してくれ』と言っているみたいでした。

でも、私は殺すどころか、一步も動けなかったんです。

センパイになにかされた訳でもなく、私の体自身が動こうとしませんでした。

逆に、丸分かりなウソを吐いた時のセンパイの笑顔が、意識に焼き付いて離れません。

「なんで……ですかね……」

私は答えの出ない心のモヤモヤを、沈黙に問いかけました。

Flight 14 殺意の黒、羞恥の白(前書き)

今回は短いです(汗)

Flight 14 殺意の黒、羞恥の白

「はあ……はあ……はあ……」

私は夜闇に包まれた街中を走り抜ける。

すれ違う人は少なく、遅く散り始めた夜桜の香りが、私の頬を撫でる。

私は足を止めずに、手に持ったの携帯電話型小型端末を開く。

その画面にはこの周辺の地図が表示されている。

そして、その地図上では青い矢印が移動しており、停止している赤い点が点滅していた。

155

「まったく……困った姉だ」

姉は定時になっても帰ってこず、連絡にさえ応答しないため、私は姉の携帯電話に仕込んだGPSを頼りに搜索した。

通常ならば、急ぐことなくその場に向かい、姉を連れて帰るだけだ。

しかし、姉の現在地が問題だった。

「……着いた」

手の平の画面では、青い矢印の先端が赤い点に重なっていた。
そして、私の目の前には純和風の家屋があった。
そこは、一度来訪したことがある……しかし、現時点で侵入嚴重
注意とされる場所。

「黒猫……どうするべきか」

私の目の前には『伊達』と書かれた表札があった。
誘拐されたのか自ら侵入したのか……この際気にするこ
い。ではない。

姉に何かあった場合……

「……命、貰い受けるぞ」

私は自分の中に殺気が渦巻くを感じながら、手に持った端末を
パチンと閉じた。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

布団の上で座ってる私の目の前に、センパイは麻婆丼を出してきました。

小降りの器には、一粒一粒がつつやつつやしてて、綺麗に立ってる白米が盛られています。

そして、その上には白い湯気が立ち上る、お店で出てきそうな麻婆豆腐が乗ってて……美味しそうな匂いを漂わせてるです。

「……麻婆豆腐、嫌いだった？」
「違います！ け、けど……」

これが普通なら私は飛びつきます。
けど、私は一度センパイを殺そうとしました。
そのお返しに毒が入ってるかもしれない……

「まったく……食べないんなら僕が食べるよ？」
「えっ!？」

そう言ったため息を吐いたセンパイは、私の目の前に置かれた麻婆丼を取り上げました。

「いただきますッ」と
「ああ……」

センパイは私の目の前で、麻婆丼をレンゲですくって食べました。
その姿を見てるだけで、口の中からよだれが湧き出て……

ぐう~~~~

……私の体から正直な音が出ちゃいました。
とつても恥ずかしくなって、私は俯いて顔を隠します。

「……まったく、正直に食べたらいいのに」

私を追い詰めるセンパイの声は、少し笑ってます。

センパイの言う通りです。

センパイを信用して食べてれば、こんな恥ずかしいことにならな
かったかもです……

「じゃあ、ここに置いていくから食べたくなったら食べなよ」

私に笑い気味の声をかけて、センパイは部屋から出ていきました。

「センパイ……意地悪です」

部屋には美海一人だけなので、つつい本音がこぼれます。
私が迷ってる間に食べるなんて……鬼畜です！ 下道です！

「こうなったら……心置きなく食べてやるです！……」

私は素早く麻婆丼とレンゲを取り、急いですくって一口食べます。

「……………」

ビックリです。

あまりの驚きに、言葉が見つかりません。

驚きすぎて、私は次の一口を運ぶこともしないでいました。

美味しさにもビックリしましたが、センプイの料理を口にした瞬間に……分かったんです。

センプイが私の目の前で食べたのは『意地悪』じゃなくて、毒が入ってないことを『証明』するためだったんです。

だって、さつきセンプイが一口食べたから、この麻婆丼に毒が入ってないことが分かったんです。

……私の考えを完全に読んでいても、センプイはなにも言わずに私を受け入れてくれる。

「……センパイ、なんでそんなに優しいんですか？」

たった一口の料理で、私の心は充実感と罪悪感に満たされてしまったです。

センパイの溢れるほど優しさに満たされます。
センパイを疑うしかない私がイヤになります。

「本当に……優しすぎです……センパ……イ……？」

私の目に熱いものが込み上げてきた時……気づいてしまいました。

私が今、口にいるレンゲは……さっきセンパイが使ってた。
つつつッ、つまり……わわ私はせせせセンパイと……

「間接キスウ!?!?!?!?」

ヤバいですヤバいですツ!!

しかも、レンゲだからセンパイの口の中にとっぷり入ってたです
!!

今思えば、センパイの唾液でレンゲが濡れていた気が……って、
なに思ってるですか私!!

これじゃ間接キスよりも……あの……あう……そのっ!

「……はう〜」

顔を真っ赤に染めてる思われる私は、目の前のレンゲをただただ
見ることしか出来ませんでした。

センパイのバカ………はう………

Flight 15 深紅の虚像(前書き)

すみません!! 小説編集をしていたら15話が消えてしまいました(汗) 原文が残っていたので再投稿します!

Flight 15 深紅の虚像

暗闇を携える大地……
闇夜に染まる空間……
暗黒が満ちる天空……

「赤外線センサー……監視カメラ……やはり、なにも反応がない」

私が姉の所在地……黒猫の屋敷に到着して、すでに数十分が経過した。

その数十分の間に、私はこの家の敷地に存在している赤外線センサーや監視カメラ等の侵入探知装置、地雷等の爆発物の位置を調べていた。

手に納まる程度の簡易探査機を使用しているが、機能的には全くといって問題ない。

しかし、この家の庭からは地雷どころか監視カメラさえ見つからない。

「……まさか、罾が一つもない？」

トラップ

仮にも、この家の住民は『四谷最強』と語られる黒猫の住み家。
なかなか表舞台には姿を現さない黒猫だとしても、なにかしらの
防衛手段を持っていていいはず。しかし、目視でも探知装置でも
それらしいものが一つも確認できない。

「クソッ……………」

確かに、見た目や機器では全くといって問題はない。
しかし、感じるのだ。

この屋敷全体から、私を死へ誘うような禍々（まがまが）しい雰
囲気を……………」

「……………仕方ない、鬼が出るか邪が出るか」

……………安全かつ正確に事を進めたかったが、これ以上時間を浪費す
ると姉の身に危険が及ぶ可能性が上がるばかりだ。

「しかし、なにが出ようと邪魔をするなら……………容赦なく消す」

私は常備している使い慣れたクナイを逆手に握り締め、得体の知
れない屋敷へと足を踏み入れた。

「伊達さん……おやふみなさい」

「はい、おやすみなさい」

台所に座っていた僕に、眠そうに挨拶をした矢沢くんは、彼の寝室である一階の一室へと入っていった。

てか、猫模様の大きめな水色パジャマって……男の子とは思えない程可愛いな。

「ふう〜、家計簿もつけ終わったし……」

矢沢くんは寝たし、美海さんも方もさつき様子見に行ったら、幸せそうな顔で寝ていた。

安心できなくて眠れなくなるんじゃないのかと思ってたけど、あの様子なら大丈夫そうだ。

これでこの家で起きているのは僕一人になっ……

「……いや、お客さんが来たみたいだ」

自分自身に語り掛けるように独り言をぼやきながら、僕は家計簿を閉じて、ゆっくりと背伸びをする。

十分に体を伸ばした後、僕は机に置いてある、アルミ製の真っ赤なメガネケースを手に取る。

「これ使うのも久しぶりだなあ」

そのケース手に取ってまじまじと見ると、真っ赤というより……まるで鮮血が塗りつけられてるような深紅色をしている。

そしてケースを開けると、小さな小箱とフルフレームのメガネが入っていた。

そのメガネのフレームは、ケースと同じ深紅色をしてる。

「これをつけたら……僕は世界の癌になる」

そう、これをつけたら『僕』は『私』になる。

そして、四谷財閥がネット社会での高地位を得た最大要因でありながら、史上最悪と呼ばれた私に……

私は黒猫の敷地に侵入してから、細心の注意を払って屋敷の周辺を探索していた。

それは侵入口を探すと同時に、屋敷に仕組まれているかもしれない罠やセンサー等を探知するため。

しかし、未だにその類のものは一つも見当たらない。

「まさか、本当に罠が一つもないのか……？」

最初はあまりに無防備な様子に疑念を覚えたが、今は確信に近いものを感じる。

しかし、私の感じた雰囲気は気の迷いだっただのか？

……いや、今はそんなことよりも目の前の事に集中しなければ。屋敷内については矢沢から大体聞き出し、一度訪問したため大まかな構造は知っている。

二階は黒猫の寝室のため侵入不可、一階裏口は周辺の一室が矢沢の寝室のため同様に侵入不可。

その他の問題要因も考慮すると、結果的に侵入可能な入り口が一つになる。

「しかし、玄関から侵入とは……」

すでに、私は唯一の侵入口の前に立っていた。
侵入とは正々堂々としたものではなく、玄関から入ることなどま
ずないため、かなりの抵抗がある。
けれども、目の前の入り口こそが一番危険度の低い侵入口なのだ
から仕方ない。

「姉……どうか無事でいてくれ」

姉の無事を願ってから、私は意を決して入り口の扉に手を掛け……

「美空様、ご訪問有難うございます」

……このッ！

目の前の扉に集中するあまりに、何者かに後ろを取られた。
音も気配もなく背後に迫るなんて……同職の人間か？
だとすれば、迂闊に動けば私の命はない。

しかも、後ろからかけられたその者は、私の名前まで知っている。
……いつたい誰？

「どづいたしました？ 早く入ればよろしいのでは？」

背後からかけられた声は、丁寧な口調でありながらも、まるで人を馬鹿にするような言葉の羅列。

……いや、挑発に乗ってはダメ。

口調からして黒猫ではない。

黒猫ヤツでなければ、そこまで恐れる必要はない。

冷静になれ……

「どづなされました？ ……倭国わのくにの影人かげびと、倭玖羅美空わくら様ミソラ」

しかし、話術は話し掛けている途中で対象が予想外な方向に動けば、一瞬の隙が生まれやすい。

……その隙を突く！

「……無視でございますか。名も知らぬ私には掛ける言葉もないというところでございますね。……仕方ありません。余計な事と思えますが、名乗らせて頂きましょう」

私はクナイを握り締める。

どの方向に動く？

右？ 左？ 前？

……いや、どの方向へ跳んでも逃げ切れるなんて思えない。なら、私の動きはただ一つ……

「最初に言わせて頂きますが、私は『偽り』です。名乗る名前も偽名ですので御了承ください」

……今しかないッ！

片足でバックステップ。

さらに空中に跳んだ後、もう片方の踵かかとで地面を蹴る。

蹴りの勢いで体に横回転が加わり、私は真後ろを向く。

同時に視界の正面に映る人影。

その影の中心……心臓部を瞬時に判断。

その一点をクナイで突く……！？

「なっ!？」

私の狙いは正確だった。

目標も全く動いていない。

私のクナイは確実に、影の心臓部を貫いた。

しかし、私の手には肉塊を抉る手応えはなく、飛び散る鮮血も見えなかった。

……そう、私はその影を『通り抜けた』のだ。

「……言い忘れておりました。今、貴方の目の前に存在している私は^{グラフィック}立体映像。つまり虚像ですので、無駄な警戒は不要でございます」

私は着地した瞬間、勢いで前のめりになった態勢を戻し、急いで影の方向へと振り返る。

振り返った私の視界に入ってきたのは……く、黒猫？

「貴方は私の姿を見たことがあるでしょう。しかし、今の私は貴方の知っている『伊達駆』とも『新井月朔夜』とも異なります」

影がこちらに振り返る。

その姿はじっくりみて、どこからどう見てもこの屋敷の主。

しかし、その人は見たことのないメガネをかけている。

そして、メガネの奥に光る瞳は……薔薇のような深紅。

「私の名前は『三十日八雲』。別名『クリムゾンサーベント深紅大蛇』や『World Server Breaker』、『ほおすき鬼灯の瞳』と呼ばれております」

その目は、私が探し求めていた人物。
そして……

「ですか、私個人としては『つこもりつき晦月の遠呂智』の別名がお気に入りでございますね」

……こいつこそ、私が命を賭けて復讐しなければならぬ史上最悪な人物だった。

Flight 16 嘔吐は知っている(前書き)

敬語で描写を書く……これほど大変だとは思いませんでした(トホ
ホ

Flight 16 嘔吐きは知っている

ここで、『僕』でも『俺』でもない、『私』の特徴を蛇足ながら紹介させて頂きましょう。

最初に言わせて頂きますが、私は虚であり偽りであり嘘でございます。

私は虚飾を纏った土人形。

私の述べる言葉は、虚実で無意味な音の羅列。

表の反対は裏

本当の反対は嘘。

充実の反対は空虚。

信用の反対は疑念。

実勢の反対は虚勢。

真実の反対は虚実……

突然ですが、ここで貴方に簡単な質問をさせていただきます。

貴方の前には、一枚のトランプが置かれています。
描^{えが}かれているのは、『表』のスペードのA。

私はそのカードを裏返します。

するとカードは裏側になり、そのカードの種類は分からなくなりました。

貴方の前には一枚のトランプが置かれています。
描かれているのは、『裏』の全カード共通模様。

次に私がこのカードを裏返した時……貴方はどのような絵柄のを見られると思いますか？

「お前はッ！！」

私の目の前には、苦虫を潰したような顔をして私を睨みつける方が一人。

名前は和倉美空様となっておりますが、正確な漢字は倭玖羅美空様と、私は認識しております。

倭国の影人……古くは大和政権の頃に設立された、日本裏歴史上最古の忍一族。

伊賀忍者、甲賀忍者の発祥とも言われるその一族は、日本の歴史を大きく左右していたと、私の友人の情報通に聞きました。

「お前とは失礼ですね。それよりも、私の家にご訪問されるのは構いませんが、時間帯と所持物を考えて頂けないでしょうか？」

「なぜお前がここにいる！？」

「また、無視でございますか……ここは私の家ですから、ここにいるのは当然かと」

……嘘。

確かに、この家は私の両親の残した遺産であり、思い出や愛着が存在します。

しかしながら、私はここにいる理由としては、取るに足りないものでございます。

「そんなことはどうだっていい！ 姉はどうしたッ！！」

「必要ないなら聞かないで頂きたいですね……確かに、美海様はこちらにいらっしやいました」

私の言葉に口を歪め、眉間に皺を寄せ反応する美空様。

次の言葉で、そのお顔はさらに歪むのでしょうか？

「美海様は……殺しましたよ。貴方のご両親同様に」

……相当歪むと思われた美空様のお顔は、私の言葉が終わる前に
カメラ
視界から消えてしまいました。

そして、マイク
聴覚が集音致したのは、地面を蹴る音と地面を滑る

私の言葉通りに、美空様は叫びと動きを止め、私の虚像の前で頭を地につけます。

最初に申し上げますが、これはギ〇スではありません。

まず、魔女と契約もしておりませんし、一人に一度しか使用できない制限もございません。

要は、混乱等で不安定になった心に直接語り掛け、その言葉が絶対的に正しいと認識させる……それだけの事でございます。

「私が許可するまで、貴方は一歩たりとも動きません。一言たりとも話しません。その間、貴方は私の言葉を聞き入ります。」

私の言葉に拘束力も強制力もございません。

しかし、美空様は動く事も話す事も出来ません……いえ、動く事も話す事もしないのです。

それが嘘偽りであっても、美空様にとって『絶対的』に正しいのですから。

「……ようやくお静かになられましたね。これから話す二つの事は貴方にとって、きっと有意義な事でございます」

目の前の美空様は一歩たりとも動かず、一言も話しません。

土下座の状態で、しっかりと私の話をお聞き頂けます。

「まず一つ、美海様は私が誠意を持つてお持て成し致します。お食事も美海様の『体質』を考えておりますので、安心してください」

……白変種。

それは、突然変異により体毛等が白い個体の事でございます。

白変種はメラニン色素の遺伝情報欠損による白化^{アルビノ}とは異なり、メラニンは生成されておりますので、紫外線耐性や遮光性は正常に働いております。

さらに、倭国の影人は一族の秘術を守る為に、近親者での婚姻を長くに渡って行っているそうでございます。

……説明が諄^{くど}くなりました、申し訳ありません。

簡潔に申しますと、美海様は近親姦^{インセント・タブー}によって偶然生まれた人間の白変種なのでございます。

「次に二つ、この家には探知妨害装置搭載の監視カメラを設置しております。深夜や留守時に起動しておりますので、その映像に映りたくないのでしたら、是非とも私が在宅中にご訪問ください」

美空様は忍の者、映像等の存在が残ることは極力避けるはずでございます。

これで、無防備時の侵入を避けると思われませぬ。

「最後に一つ……もし、貴女が私に復讐したいのでしたら、私は一週間後の7:00・00”00から8:00・00”00に四谷の

中央サーバーにハッキングをかけます。その時に私のハッキングを止めることが出来れば、私の命を差し上げましょう。『黒剣』の和倉美空様？」

言い忘れておりましたが、美海様と美空様は『私達』の後釜として、四谷に雇われているそうです。

『白盾』と『黒剣』……名前だけ聞いておりましたが……悲しいものです。

……おっと。少々、時間を取りすぎましたね。

「さて、私が話す事はこれがすべてでございます。質問はございますか？ “開口を許可いたします。貴方は頭を上げます”」
「くッ!？」

私が許可した瞬間、憎悪に満ち溢れた表情で私を睨みつけてきます。

仕方ありません、私は彼女達のご両親を殺した張本人の一人……いいえ、二人なのですから。

「……ここは一旦引く。決着は一週間後、必ずつける」
「はい、私は嘘つきですが約束は守らせていただきます」

美空様も落ち着いたのか、この場で一番賢いと思われる選択を致しました。

それに賢さに誠意を持って、私も美空様に許可を……

「貴様……」

「はい、なんでもございましょう?」

「もし、明日姉が帰ってこなかった時は……」

美空様の目から放たれる殺意。

体を動かす許可をしておりますのに、今にも飛び掛かりそうなプレッシャー。

モニター越しからでも、その恐ろしさが伝わってまいります。

「……私が貴様を切り裂く。腕がもげれば貴様の頭蓋ずがいを蹴り碎く。足が削がれば貴様の喉笛を噛み切る。たとえ私を殺しても、貴様を呪い殺す……それを忘れるな」

「承知いたしました。肝に命じておきます……“倭玖羅美空。貴方の全行動を許可する”」

……私は私を殺す可能性を生かしました。

タイムリミットはあと一週間。

Flight17 食べ物への怨みは怖い(ちょっと理不尽)(前書き)

二週間に一話のペース……やっぱり遅いッスよね(汗)

Flight17 食べ物への怨みは怖い(ちょっと理不尽)

僕は……駆け抜ける。

廊下を全速力で走ってた僕は、右足を前に突き出してブレーキ。そして左に体を向けて、方向転換を無駄なく行う。

すると、目の前に現れるのは二階と一階を繋ぐ階段……。

僕はその段を一步たりとも踏むことなく、下り階段を一回のジャンプで飛び降り、一階へ着地する。

着地の際、衝撃を吸収するために曲げ切った脚^{パネ}。

その脚の力を一気に解放、0になった僕の動きを最高速度^{トップスピード}に持つていく。

僕は……駆け抜ける。かなり必死で。

理由？ そんなの決まってるじゃないか……

「伊達エエエエエエツッ！！ 待ちやがれエツッ！！！」

理由は単純明快。

僕は人に追われ、そして逃げてるんです。そりゃあ全力疾走で。

僕の十メートル背後からは『捕まえたら〇〇〇〇してから×××
の してやるッ！！』って気配がビシビシ伝わってくる。

……でも、いつもと違う。

いつも、彩貴に追い掛けられる時は『K O R O S U U U U U
u u ! ! 』って殺意が、僕の背中にグサグサ突き刺さってくる。

さらに、もれなく弾丸や砲弾が襲ってくる。

それに比べたら、この程度の逃走はどうってことない。

……いや、絶対に捕まりたくないけどね。

結局の話、今僕を追い掛けているのは彩貴アケマじゃないのだ。

「つたく！ 一時間以上走ってんのにまだ潰れないかいッ！！ バ
ケモノだねあんた！！」

「そんなバケモノの僕を一時間以上追い回してる先輩も十分バケモ
ノでしょうがッ！！」

「霊長類ナメんなッ！！」

「織田〇二ですか！？」

「いや、山本〇広の方」

「さいですか……てか、僕も立派な霊長類です」

……え、分かったでしょうか？

今、僕を追っ掛けているのは、戌高陸上部のエースにして部長。肩の辺りで切り揃えられた、光り輝くオレンジ色の髪。その髪を風になびかせながら走るその人は、萩野杏子先輩。

「まあ、取り敢えず捕まりな」

「取り敢えずで捕まる気にはなりませんッ！！」

この人は、ある意味彩貴より恐ろしい。

人並み外れた身体能力で、僕の最高速度には追いつけないみたいだけど、結構なスピードとあり得ないスタミナで永遠と追い掛けてくる。

そして、一番恐ろしいのが『どこでも』入ってくる豪快さだ。

先輩の前では『男性用トイレ』さえも、ただの一室でしかない。

「先輩！ 男性用トイレに入っている異性は恥を捨てたオバサンだけですよ！！ 先輩が入る場所じゃありません！！」

「そんな細かいこと気にすんなって」

「性別の差って先輩が思ってるより絶対大きいですよ！！」

僕は文句を言いながら、授業時間のため人の姿が無い廊下を走り抜けている。

ああ、授業に集中してる優等生さん、騒がしくてゴメンなさい。
睡眠中の一般生さん、起こしちゃってゴメンなさい。

机の下でPOPやってるゲーム族さん……バレないように頑張っ
てね。

「ほらほら、集中しないと捕まえちゃうぞ?」

「ウソツ!? いつの間にか差が縮まってる!?!」

いつの間にか、先輩との差が五メートル程に縮まっていた。
その差を、自分の中のギアを一段階上げることによって元に戻す。

「お、まだ逃げるか! やっぱりあんたセンスがある! 陸上部に
入れ。そしてアタシの奴隷になれ」

「奴隷って何ですか!? 陸上部に奴隷制度なんて存在するんです
かツ!?!」

………何で僕がこんな目にあってるかというところ、約一時間前………お
昼休みにまで遡る。たかのぼ

一時間とちよつと前

僕は一、二時限目の授業をそれとなく終わらせて、担当教師が奥さんの出産に立ち合うため、急に自習になった三時間目に生徒会室に来ていた。

理由は、そろそろ毎年恒例の球技大会が始まるため、生徒会として取り締まりやアンケートの整理をするためだ。

……彩貴に不平等条約を結ばされて授業は受けなきゃならないし、

放課後は家事があるから遅くまで残るわけにはいかない……
だから、彩貴に許可を取って自習や昼休みの時間でちよくちよく
仕事をしているのだ。

「……まあ、彩貴のほう忙しいんだけどね」

彩貴は種目に対する職員等の説得、外から来る人達への対応の検
討、大会に必要な備品の予算編成…… e t c .

普通職員や他の実行委員がやるような仕事を、授業をこなしなが
ら一人でキツチリやってのける。

さすが、二年連続で生徒会長になっただけはある。

僕はそんな超人じゃないので、アンケート整理（約1200人分）
等のデスクワークで手一杯だ。

「……んーッ！ お腹へったし、ちよつと早いけどお弁当食べよ
う」

僕は一端背伸びした後、目の前にそびえ立つ書類の山とノートP
Cを横にずらして、開いたスペースに持参のお弁当を広げる。

ああ、今思えばこの行動がミスだった……って、いつの間に
か先輩近ツ！！ 足速いつて！！

「ふん……結構意見が偏ってるなあ」

僕は食事をしながらも、PC画面とアンケート用紙を交互に見る。アンケート用紙の結果を入力する時、右手で箸を持っているため左手でキーボードを叩く。

……僕は弁当を食べながら、アンケート整理をしているのだ。ちよつと行儀悪いけど、そこはご愛敬ってことで。そのおかげで、弁当を食べ終わると同時にアンケート整理も終わった。

その整理した結果を一部抜粋してみよう。

『Q、今回の球技大会で、あなたがやりたい競技は何ですか？』

一位、野球

二位、ゴルフ

三位、ボーリング

この学校にはゴルフ場もボーリング場もありません。やりたいなら勝手にやっちなさい。

『Q、この球技会に求めることは？』

一位、友情！！

二位、努力！！

三位、勝利！！

ジャ○プみたいだな。皆さん心は少年か？

『Q、この球技会中に消したい人物は？』

一位、伊達駆

二位、ダテカケル

三位、DATE KAKERU

……これはイジメですか？ イジメだよね？ ねえ！？

『Q、この球技会で実は狙っているものは？』

一位、優勝の座！！

二位、伊達駆の命

三位、彼氏（彼女）が欲しい！！

：

：

二百五十七位、かーくん（一票）

……なんか、もういいや。

てか、彩さんは生徒じゃないんだからアンケートに答えなくていいですよ。

僕は集計結果から僕に関係するものを消去しながら、お弁当を片付ける。

……え？ さらっと改竄してらって？

HAHAHA！ これは改竄じゃなくて、身の危険を未然に防いでるだけだよ。

「さてと、一仕事終わって暇だし、教室……いや、保健室……やっぱりここにいよ」

僕は『修正』を加えたデータをUSB式のメモリに保存してから、目を瞑って椅子の背もたれに体を委ねる。

……だって、教室には彩貴がいるし、保健室には彩さんがいるし……少し一人っきりで考えたいことがあるんだ。

今朝、美空さんと約束した通り美海さんはしっかりと家に帰した。

しかし、今日二人は学校に来てない

やっぱり一週間……いや、六日後まで顔合わせはできそうにない。

「伊達！！ 飯食わせろ！！」

出来るなら説得して和解しようと思ったけど……無理か。

「……って、おーい聞いてるか？」

……命を奪った罪は、生きては償えないって事か。

それでも、僕は死ぬわけにはいかない……『約束』を守るために

……

「おいッ！！ 大丈夫か！？」

ん？

なんかさつきから、思考の間に声が聞こえるんですが？

てか、誰だ？

僕は声の主を確認するため、瞑っていた目を開け……

「どうした？ かなりツラそうな顔してるぞ」

目を開けた瞬間、僕の網膜に映ったのは……クリツとした大きな瞳にスツと筋の通った鼻、柔らかそうな唇は艶やかなピンク色をしていた。

健康な肌に、サラサラと輝くオレンジ色のショートヘアが栄える。

多分、これは萩野先輩の顔。

へえ、近くで見分かつたけど、先輩って意外に睫毛とかも手入れしてるんだなあ……

イヤイヤイヤ！！ ちょっと待てえいッ！！

どう考えても顔が近すぎるだろ！！

睫毛まで見える距離ってヤバいって！！ 鼻先が触れそうだよ！？

僕は咄嗟に前方の長机を蹴って、椅子ごと後ろに下がって先輩から離れる。

「……………どうした？ 目を開けたと思ったたらいきなり机蹴ったりして」「い、いや、その……………あ、そうだ！ 机を蹴らなきゃならない使命感が、僕を突き動かしたんですよ！！」

と 混乱して訳が分からない事を口走ってる気がするけど、先輩に見

惚れてたなんて言うよりましだ!!

Sサな先輩にそんなことバレたら……確実にイジリ倒される。

「……まあいいや。それより伊達、弁当食べろ」

……ほっ、よかったあ。

先輩にはバレてないみたいだ。

—安心、—安心

「お弁当はありませんよ」

「……へ？」

「さっき食べちゃいました」

僕はバレなかった事に浮かれながら、軽い口調で先輩に答えた。
その瞬間、先輩は俯いて……ツて殺気イ!?

「伊達？」

「は、はい」

「陸上部入れ」

「イヤです」

「じゃあ……死ね!!」

「イヤーーーーー！！！」

先輩が襲い掛かって来る寸前に、僕は生命の危機を感じて椅子を身代わりにサイドステップで先輩の強襲を回避。

回避の勢いを殺さないように、僕は迷わず生徒会室に向かって走る。

そして追ってくる殺気を感じながら、タックルでドアをブチ破って外に逃げ出した。

ハハハツ……回想してる間に追い詰められてしまった。

「せ、先輩……ちょっとタイム」

「ふふふふ……お姉さん、あんたの言ってる意味が分からないなあ」

ヤバい……完全にサディスティックモードに入ってるよ。
スゴく綺麗な笑顔だけど、目が笑ってない。

僕は先輩と向かい合いながら後退りをする。

場所は……野外に設置された六畳ほどの体育用具室。

僕はその用具室に入り、内側から金具をいじくって鍵を掛け、なんとかこの場をやり過ぎそうと考えた。

けど、相手は陸上部の部長……合鍵ぐらい持ってたっておかしくない。
はない。

しかし、それに気付いた時には、時既に遅し。

鍵を解かれ、扉は開き、そこには先輩の姿があった。

そして今、一ヶ所しかない出入口を先輩に封じられて、まさに袋小路状態に陥っていた。

「さあ、食べ物の怨み晴らしてくれる」

「イヤイヤ！ 食べ物に怨みつて、元々お弁当は僕の物だから」

「伊達の弁当は私の弁当！ 私の弁当は私の弁当！」

「先輩はいつからジャイオンになっただんですか？」

そんな会話の間にも、先輩はジリジリと近づいてくる。

それに対して、僕は既に背中が一番奥の荷物棚に背中がついていて、もう逃げ場がない。

僕は制服のポケットに手を突っ込み、中に入った紐を握る。

……髪を縛るのさえ間に合えば、この場を逃げる事が出来る。

『俺』になつた瞬間、プレッシャーで動きを止めて、その隙に首筋に一発手刀を入れて意識を刈り取る……

……つて、なにを考えてるんだ僕は。

先輩は『裏』に関係しない『表』の人。

その人に『僕』以外が干渉するなんて、許されることじゃない。

ふう……どうやら和倉さん達の件は、予想以上に僕の心を揺さ振っているらしい。

「……先輩」

「どうした？ 何か残したい言葉でもあったのか？」

「参りました。降参します」

僕は両手を上げて、降参のポーズを取る。

もちろん、ポケットに入れてた手に黒皮の紐は握ってない。

「どうした、いきなり。さっきまで逃げてたのに……気持ち悪い」
「気持ち悪いって何ですか……この通り、僕は袋のネズミ。逃げる
ことなんて無理です」

僕は上げた両手を下ろしながら手首を合わせて、手錠をつけられ
たような動きで降参を示し、先輩に近づく。

先輩も僕に抵抗の意志がないことが分かったのか、ため息を吐き
ながら僕の左手だけを右手を掴む。

「抵抗は逃げるだけかい？ ヘタレだねえ」

「ハイハイ……ヘタレで結構です。とつと煮るなり焼くなり好き
にしてください。……でも、痛いのは嫌いなので、優しくしてくだ
さいね」

僕は口角を無理矢理上げながら自虐的に笑う。

僕の顔を見た先輩は、嫌そうな顔したと思ったら、何か考え込ん

だのち……なにやら怪しい笑顔を浮かべた。

「なんか、気に入らないねえ……伊達がそう言うなら、アタシの好きにさせてもらおうよ」

そう言うってから、先輩は空いた左手を振り上げる。

まあ、一、三発、四、五十発殴られるぐらいは甘んじて受けるか

……

僕は覚悟を決め、これから来るだろう痛みに備えてゆっくりと目を瞑った。

ポンッ

……………へ？

なんか、頭に優しく何かが当たってるんですけど……
目を開けると、その何かが先輩の右手っていうのが分かった。

「お姉さん走るの得意だけど、殴ったりするのは苦手なんだよね
え」

先輩は相変わらず怪しい笑顔を浮かべてるけど……なんだろう、心が暖まる優しさがその笑顔から滲み出ている。

「だからさ、アタシは考えたのよ。伊達、あんた明後日暇かい？」

……なんで僕の明後日の予定を聞く？

でもまあ、明後日は土曜日だから休みだし、予定はないはずだ。

「はい、確かに暇ですけど……」

「よし！ じゃあ決まりだ！！」

僕の答えを聞いた先輩は、僕の頭をクシャクシャと少し乱暴に撫でてくる。

「伊達、明後日アタシとデートしな！ それで今日の事はチャラにしてあげるから。ちなみに拒否権はナシな」

……成る程、だから明後日の予定を聞いてきたのかあ。

よかつた、デートなら痛い事は無いだろうからね。

……ん？
デート？
Dayと？
イヤ、デート？

Flight 17 食べ物への怨みは怖い(ちょっと理不尽)(後書き)

『死にたくても死ねない!?!』の方が一段落するしたら本格的に始動しますんで、ちょっと……いや、結構待っててください

Flight 18 強制デートは天国or地獄？（前書き）

是非、今回から後書きまで目を通すことをお勧めします。

……お。俺に視点が回って来たんか？

まあひさびさの登場やから、作者も気い使ってくれたみたいや。
ほんま出番少なかったからありがたいわあ。

《 光、そのような露骨な裏話はやめておけ》

俺の片耳につけたイヤホンから、いつも通りの冷めとる声が聞こえてきた。

やけど、その声の本人さんは近くにはおらん。

その代わり、俺は右手に持つとる小型マイクに話し掛ける。

「そんなぐらいええやん。てか、なんで俺の考えとること分かんねん」
《 簡単なことだ。最近お前が自分の出番が少ないことを気にしているのは知っている。さらに、作者の情報を事前に入手していれば容易に予測できる》

「……なんちゅうか。俺の悩みは後で相談するとして、後半は冒頭の考えより露骨な裏話やん」

《 なに、それぐらい露骨な方が面白い》

「その露骨な話をやめろっゆったのはどこの誰や？」

《 それは多分俺の事か？》

「その言葉から『多分』と疑問形の『か？』を抜いてみい？」

《それは俺の事》
「正解や」

会話の相手……玲は淡々とした口調で俺と喋つとるけど、いつもはゆわへん冗談をゆうとる。

「玲？ 今日メツチャ気分いいやろ？」

《……なぜだ？》

「玲が冗談ゆうんは、気分がいい時と情報が欲しい時だけやさかい」

《成る程、自分の情報は盲点だった。後で情報収集をしよう》

「ああ、後にしてくれや。今は目の前のことを思う存分楽しむで」

《無論。人の不幸は蜜の味……特に駆の不幸は極上の嗜好だからな》

俺は心の中で玲に賛成しながら、視線を動かす。

それで、視界に入ってきたんは風情のある日本家屋。

その入り口に立つとるのは、この家に住んどるメツチャお人好しな俺の親友と、そのお人好しな親友の家に居候してちっちゃんい後輩。

「さて、そろそろ出発するみたいや。そっちはどうや？」

《こちらはすでに待ち合わせ場所に向かっている。大体、九時十分に到着するだろう。あと、四谷姉妹が合流することになった》

「ホンマに？ 彩貴は校外で発砲せんと思っけど……彩さんは抑えきれんん？」

彩貴は周りの目を気にする事ができるからなんとかかなりそうやけど……彩さんは駆に関する事に見境無いからなあ。

《問題は既に解決済みだ。今回手を出さなければ、駆の私生活を写した画像データを数枚差し出す交渉は終えている》

「……用意周到やな」

《とある友人の言葉で『伏線さえしつかりしてれば、どんな状況も容易に覆せる』と言っていた。その言葉を見習っただけだ》

「その友人さんはきつと玲と似てるんやろな」

その友人さんの事は知らんけど、そんな小難しいこと言うんやら、多分玲みたいな人やと思う。

《フツ、まあいい。そろそろ開始するぞ》

「なんやねんその不敵な笑い。別にかまわへんけど」

そして俺達は行動を始める。

多分、最高におもろそうな事を見るために。

……玲にはこの情報を手に入れたことを誉めてやらなあかんなあ。

《Missionplan 駆の初デートを楽しめ。Missionstartだ》

「おっしや、なら行くで！」

ツ！
貴重な休日を潰すんやから、
駆にはしっかり楽しませてもらうで

僕は自家の玄関先で矢沢君と向き合っていた。

理由は、矢沢君に留守番をさせるため、注意事項を教えているのだ。

……そこッ！ 『別にそんなこと適当に任せりゃいいんじゃない？』とか考えたでしょう？

しかあし！！ 家主が居なくなるのは責任者が居なくなると言う事で、住人にとっては重大なことなんです！！

「はあ……じゃあ、お昼ご飯は作つといたから、レンジでチンして食べてね。帰りは遅くならないと思うけど、もしも時はメールするから、出前でも取って先食べちゃっていいからね？」

「はい、分かりました」

目の前で頷く矢沢君。

ちゃんと答えてくれるなんて、いい子だなあ。

「後、留守にする時はちゃんと戸締まりしてね。セールスマンとかが来たら、玄関横のボタンを押してね。鉛の玉がその人を追い払ってくれるから」

「はい、分かりました」

さっきと同じように頷く矢沢君。

……やっぱりいい子なあ。

いきなり大声で叫びだす矢沢君。
なに？ そんなに驚くことあった？

「伊達さんってデートしたことなかったんですか!？」

「う、うん。 なにか変かな？」

「変ですよ!! 生徒会長とか校医さんとか、相手は沢山いるじゃないですか!!」

生徒会長とか校医さんって……？ もしかして彩貴と彩さんのこと？

……あの、一言いいかな？

「矢沢君は勘違いしてるみたいだけど、彩貴は僕の事を目の敵にしてるだけだし、彩さんは僕で遊んでるだけ。それに、僕みたいな人がデートなんて出来るわけないよ」

なんたつて僕はヘタレだぞ？

デートなんてしたことないし……精々女性と出掛けた時だって、結局は荷物持ちくらいだ。

「伊達さん……鈍感すぎでしょう」

「へ？ なんか言った？」

「いいえ、なんでもありません。それより、そろそろ出掛けなくていいんですか？」

「余裕あるんだけど……先輩を待たせるのは悪いよな」

指定された待ち合わせ場所は駅前の変な銅像前だから、今から行っても約束の五分前には着く……てか、待ち合わせ場所&時間以外は全く知らされてない。

……でも、先輩より遅く着いたらなんか言われそうだ。

「んじゃ、出掛けるから留守番よろしくね」

「はい、伊達さんも楽しんできてくださいね」

僕は『地獄は楽しめないよなあ……』とか心の中で思いながら、矢沢君の見送りを背に受けて待ち合わせ場所に向かった。

この戌神地区は四谷財閥の力で発展した五地区の一つで、名前の由来は犬を祭^{まつ}った神社があったらしい。

しかし、その既に神社は焼け落ちてしまい、今は跡地である駅前に犬の銅像が立っているだけである。

「でも、これを見るたび八〇公のパクリに見えてしまう僕は不謹慎なのかな？」

僕は先輩との待ち合わせ場所である駅前の銅像を見ながら、一人呟いていた。

一人で居るのは待ち合わせ時間になっても先輩がまだ来ていないから、ただそれだけの事だ。

「……………つか僕、変な格好してるのかな？」

現在、ただ駅前銅像近くのベンチに座っている一般高校生の僕に、不自然に多くの視線が向けられてるのは確かだ。

服装が変なのかな？

白いシャツは……第二ボタンまで開たって変じゃないし、黒いジヤケットは……皺になってるわけじゃない。

ま、まさか！？ 黒いデニム……よかった、チャックはしっかり閉まっていた。

「ねえねえ　その君、よかつたら私たちとお茶しない？」

自分の服装を確かめてる僕に、突然かかる女性の猫なで声。その声のするほうを見ると……ブランド物で完全武装している派手なお姉さん×3がいた。

お茶か……待ち合わせ時間過ぎてるから、先輩がいつ来るかわからないからなあ。

「……すみません。人と待ち合わせてるんで」

僕は無難に断って、その場を離れようと立ち上がった。

「ええ、ちよつとぐらいつきあってくれたっていいじゃない」「絶対その人より私達という方が楽しいわよ」

シカシ、マワリコマレタ。

な、なんだこのお姉さん達、ドラ○エか!? 名前の後にA、B、Cがつくのか!?

ひのきの棒さえ持ってない僕に倒せる相手じゃないぞ!

「ねえねえ、どうするのよお〜」

僕は自問自答してる間に三人に囲まれ、さらに傍観してる人達からの熱い視線を感じていた。

こ、これは、必死に逃げ切っても二、三步進んだらまた敵が出てくる最悪なパターンか!?

遭遇率高すぎてのびた君並みに泣きたくなるぞ!!

た、助けてドラ○も〜ん!!

「そこのお嬢さん方。ちょっとどいてくれ」

なんか、正面にいるお姉さんAの後ろから、タイミングよく知ってる声が聞こえる。

あ、知ってる声といっても、大○のぶよさんでも水○わさびさんでもないからね。

僕を含めたお姉さんA、B、Cも、その声のした方を向く。

「それ、アタシのツレなんだ。ちょっかい出さないでくれないかい？」

僕の視線の先には、純白のワンピースを可憐に着こなした……

「……誰？」

「オイ、なんか一人多いだろ？」

「その反応は……先輩？」

「よし伊達、後で覚えとけ」

目の前に現れた萩野先輩は、目の笑ってない笑顔を浮かべながら、僕に向かって中指を突き立てる。

いや、だつてさ、しょうがない。

いつもサバサバしてる先輩が、こんなお嬢様みたいな雰囲気を出して現われるとは思わなかった。

髪もいつもと違ってヘアピンで止めてるし……髪色がオレンジじやなかったら未だに誰だか分からなかったと思う。

「なによ。いきなり出てきて」

「そうよそうよ。私達が目をつけたんだからどっか行きなさいよ」

「邪魔しないでよ」

突然現れた先輩に対して、お姉さんA、B、Cの口攻撃。
さつきまでの猫なで声から、敵意丸出しの声に変わってる。
しかし、その攻撃にも先輩の顔色は変ることなく……

「もう一度だけ言う。それ、アタシのツレなんだ。ちょっかい出さないでくれないかい？」

清楚な見た目とは裏腹に格好いい事を言う……いや、こつこつという格好いい所が着飾っても変わらない先輩らしさなのか。

そして、先輩の声はさつきまで騒いでいたお姉さん達を黙らせるプレッシャーを含んでいた。

「こんな女たちに囲まれたのがどんな奴かと思って来てみれば、まさかあんなだったとはね」

「アハハ……とにかく助かりました」

「まあ、ちよつと待たせたからね。これでチャラにしておくれよ」

そう言いながら笑う先輩は、僕の手を掴んで、まだ硬直してるお姉さん方の中心から僕を引っ張りだす。

「さて、こんな所で時間を食うより、とつとと目的地に行くよー！」

「あの、僕はどこに行くか知らないんですけど……」

「あんたは行ってからのお楽しみだよ」

「いや、教えてくださいよ……っちょつとおー！ー！」

先輩は笑みを浮かべ、僕の手を掴んだまま走り出す。
いきなり引つ張られた僕は、前につんのめりそうになる。
なんか、今日は先輩に振り回される予感がする……

「ほら！ しっかり走れ！」

「ちょッ！ だったら手を離してください！！！」

「それは無理だね！」

……けどまあ、今日は地獄じゃなさそうだ。

矢沢君の言った通り、僕も楽しめるかもしれないな。

そう思うと、僕も自然と笑っていた。

僕は周囲の視線なんか気にせずに、人込みの中を走り抜けた。

Flight 18 強制デートは天国or地獄？（後書き）

こんにちは夷神酒です

今更ですが……この小説はどうですか？

なるべく読みやすいように＋一人称と三人称を混ぜないように＋伏線を振りまくように気をつけてきました。

それでも、やっぱりド素人の私の文章は分かりづらい所が出てしまいます。

そこで、次更新から後書きに小説に出てくる人物や用語について説明&裏話を改めて書いていきたいと思います。

227

「よく分からない」や

「……の裏話が聞きたい」等のご要望があれば、感想やメッセージを使って私に伝えてください。

そうして頂ければ、ネタバレに片足を突っ込むぐらいの情報は余裕で書き入れます。

第一回目は……多分ヘタレ主人公、伊達ノーマル駆ノーマルについてです。

読者方の貴重な意見を、神酒は首を長くして待っております

Flight 19 二人のデートと二人の破壊者（前書き）

今回は焦って書いてしまった……拙稚な文が幼稚な文になってないことを祈ります（願

いやあ、僕は先輩を甘く見ていたらしい。

いくら純白のワンピースで着飾ったって、先輩は『萩野杏子という名のアネゴ系 + Sサディスティックな女性』だ。

そんな当然極まりない事を、僕はすっかり忘れていた……

僕は先輩に駅前の町中を連行……もとい連れ回されていた。

と、言ってもいるんな店を見て回っても何も買わない、いわゆるウインドーショッピングってやつらしい。

「まあ、今金欠だからねえ。見てるぐらいがちょうどいいんだよ。あ、あのネックレス欲しいかも」

「先輩のお財布事情はあえてツッコみませんが、人の心を読まないでください。……ちよつと値段張りますね。てか、ペアネックレスですしね」

「んな、細かいこと気にすんなくて」

「それはなにに対してですか？」
「さあ〜ね」

僕の会話の相手……萩野先輩は機嫌良さそうに笑みを浮かべ、僕の隣を歩いていった。

青空が広がる晴天の中、先輩の髪は太陽の光を浴びてキラキラと輝いている。

いやあ、先輩と並んで歩く機会なんてほとんどないから、ここまです綺麗な人だとは、今まで気づかなかった。

それプラス、いつもと違って純白のワンピースという、清楚な姿は恐ろしい程の破壊力キヤップを持つてる。

なんかもう反則だろ！！

……なんて、先輩の横顔を見ながら心の中で叫んでいると、進行方向に向いていた横顔がいきなりこっちを向いた。

「あんだよ。そんなじーつとあたしのこと見て……なんだ、あたしに見惚れたのかい？」
「うっ」

先輩は『へっ、イジリ甲斐がありそうだ』と思ってそうにニヤニヤと笑いながら、的確に僕の核心を突いてくる。

……失敗ミスった！

的確な先輩の言葉に僕はついつい言葉を詰まらせてしまい、次に『そんなことないです』なんて言っても説得力がない状況になってしまった。

「ホレホレ」 観念して白状しちまいな」

ああ、この人僕が見惚れてたこと絶対知ってる。

それを知ってる上で、僕をイジってるドSがここにいますよお！！

……さて、現実逃避はここまでにして、早めに白状^{ゲロ}するか。

「……はい、正直見惚れてました」

「まったく伊達ったら、『見惚れてたました』ってウソついても、
アンタが見惚れてたのはバレ……バ……アレ？」

「だって、仕方ないじゃないですか。目の前に物凄い美人がいるん
ですよ？ 見惚れない方が難しいですって」

「……………」

僕が包み隠さず本音を言うと……先輩は固まった。

まるで、先輩の時間が止まったかのよう^{まぼた}に、歩みから瞬きまですべ
ての動作が停止し、硬直している。

「おい、先輩？ 生きてますか？ 個人的にザ・ワードとか使
われてませんか？」

僕は声を掛けながら、先輩の面前で手をフラフラと振る。

ん、全然反応がない。

……仕方ない、奥の手を使うか。

がらプレッシャーを与えている。

起きない程度でプレッシャーを与えることで、寝苦しくなったお寝坊さんは悪夢を見るのだ。

それを約一週間続けると、ちょっと強いプレッシャーを与えるだけで、どんなに図太いお寝坊さんでも、悪夢を見たくないが為に跳ね起きるようになる。

いやあ、いちいち起こしに行かなくてすむし、全員一発で起きるから便利だよ？ …… って、そんなことは別にいいか。

そんなことよりも……

「てか、何で先輩固まってたんですか？」

「そりゃ、アンタがいきなり美人なんて言うから……… って、なに言わせんだッ！！」

いや、僕は何も言わせてないから。

そんな僕の心のボヤキを知るわけもなく、先輩は顔を真っ赤にしながらポカポカと殴ってくる。

避けられないわけじゃないけど、なんか怒らせちゃったみたいだし甘んじて受けるか。

………なんてこと思っていると、先輩はポカポカ殴るのをやめて、僕のことを不満げな目で見てくる。

「ハア……… どうやらアンタを殴っても無駄らしいね」

「無駄ってことはないですけど、彩貴………生徒会長のお陰で殴られる耐性についてますからね」

昔から殴られてばっかりだったから……いや、蹴られたり掴まれたりもあつたなあ。

他にも殴り殺されそうになったり、斬り殺されそうになったり、打ち殺されそうになったり……あれ、なんかスゲー泣きそう。

「……あれ、先輩？」

僕が今まで積み重ねられてきた心的外傷トラウマの扉を強引に閉じた時に、僕の視界から先輩の姿が消えていた。

その代わり、右腕が柔らかくて暖かい感触に包み込まれている。

僕は薄々嫌な予感を感じながら、自分の右腕を見る。

そこにはイタズラが成功した子供ののように、にこやかに笑う先輩がいた。

……しかも、僕の腕を抱くように。

「……先輩。なにをしていられるんですか？」

「ん？ アンタが前に『女性に引つつかれるのは慣れない』って言うってたの思い出したから、試しに引つついてみた」

「そんなことをしても無駄でございますからなんで、やめていただけないでございませんでございましょうか？」

「そう言ってる割に、さつきから口調が変だねえ……まさに効果抜群」

「クッ！」

いや……だって…慣れるわけないでしょう。
女性独特の柔らかさとか……メチャクチャ心臓に悪い。
ワンピースの薄い生地越しに、僕の腕に密着してくる先輩の胸から心音が伝わるたび、僕の心拍数は跳ね上がる。

「先輩、さっきのことは全面的に僕が悪かったことを認めます。だから許してください。そして僕を放して下さい」

「お姉さんにも聞こえない」

「ちょ！？先輩引っ張らないでくださいいッ！？」

「ははっ！伊達エ、顔真っ赤だぞー」

先輩は僕の右腕を抱き締めたまま、勝手に走り出した。
僕は笑顔の先輩に抵抗できるはずもなく、引っ張られるままに走る。

ちよつと楽しいけど、心臓に悪いのは変わらないし……周りの視線が集まってて恥ずかしい。

それも、一部に殺気が交ざった目線も向けられてる気がする。

「よしッ！このままランチを食いに行くぞー！」

「いやああああ！せめて放して下さいー！」

神よ……滅びてないならこの状況をなんとかしてください。
いや、結構マジで。

現在、俺は駆の様子をビルの屋上から観察していた。

双眼鏡のレンズ越しに観察する限りでは、陸上部部長に大分遊ばれているようだ。

俺は面白ければそれでいいのだが……そうでない者が俺の近くに二名ほど存在している。

「駆つたらあんなに鼻伸ばして！！ 今すぐ殴って肅正してやるわ！！」

「……………私のかーくんに触るな……………」

俺は目から双眼鏡を外し、騒がしい声のする右方向を見る。

俺の視界に入ってきたのは、目視可能なほど殺意を発している四谷姉妹である。

彩貴はいつもより三割増しで騒ぎ、四谷姉もいつもより口調が攻撃的になっている。

そして、俺の譲渡した二機の双眼鏡は、既に二人の手の中で無惨にも粉碎されていた。

「取り合えず、二人とも落ち着け」

「なに玲？ 私は冷静よ。冷静にアイツ駆を殴りに行くのよ？」

「……………かーくんにくつつく……………萩野……………死に値する」

俺の注意では、二人の暴走は止まらない。

この状態……………正に俺の危惧した通り。

陸上部部長は高確率で駆に悪戯を仕掛ける事は、事前に予想でき

た。

その状態を見た四谷姉妹が激昂する^{ヒートアップ}のも、同確率で予想できた事態だ。

……俺はその事態が悪化する前に、切り札の一枚を提示する。

「その二人、もしここで接触した場合、報酬は無しとなるが……それでいいのか？」

俺の言葉に即時に反応したのは四谷姉。

放出されていた強烈な殺気は消え去り、俺に向かって手の平を出してくる。

俺はもう破壊しないよう忠告してから、その手に先程粉碎された物と同型の双眼鏡を渡す。

「ちよつと彩ネエ！！ そんな写真ぐらいで諦めるの！？」

そこで食い下がるのが彩貴。

流石と言いたい所だが、俺は彩貴さえ一言で攻略する方法を既に心得ている。

「いいのか？ 報酬の中には入浴時の姿も存在する。流石に局部が写る物は処分したため無いが……鎖骨の曲線美やうなじの色気はしっかり写っているぞ？」

「うっ」

その映像を想像したのか、彩貴は顔を紅に染める。

彩貴の好みは鎖骨というのは調査済み。ちなみに四谷姉の場合はうなじである。

蛇足だが、駆の好みは綺麗な髪だと、本人が証言していた。

俺が頭の中で情報を取り出している途中に、彩貴の隣で四谷姉が不敵に笑い……

「……彩貴……行くの？ 私は行かない……そして……かーくんの写真もらうの……」

言葉の最後に幸せそうにクスリと笑う四谷姉。

……その四谷姉の言葉が、彩貴の行動の決め手となった。

先程の四谷姉と同様、放出されていた強烈な殺気は消え去り、俺に向かつて手の平を差し出してくる。

俺はもう破壊しないよう忠告してから、その手に先程粉碎された物と同型の双眼鏡を渡す。

「彩ネエでも、抜け駆けはさせない」

「……私も……同じ」

二人はお互いに牽制した後、手にした双眼鏡で目標を^{カケル}追う。そんな二人の様子……そして二人の『足元』を見て、俺は心の中

で溜息を吐く。

二人の足元には合計六機分の双眼鏡の残骸が山となっていた。
……実は、このやり取りは既に三回行っている。

初期は、俺が目標の居場所を確認し、他の三人が一定の距離を取って追跡する予定だった。

しかし、四谷姉妹は駆と陸上部部長が手を繋ぐという行為のみで暴走。

四谷姉妹に追跡は不可能と判断し、目標と距離を取るために二人をこの場に留置している。

それにしても、今日はどの位の双眼鏡が破壊されるのか……

《玲、聞こえるか？ お二人さん今度はカフェで休むらしいで。

……あ、背中に抱きつくなんて、萩野さんも大胆やなあ》

俺が破損数を予測しようとした瞬間、突然右耳に装着したイヤホンから聞こえてきた光の通信こへん。

それと同時に、四谷姉妹の居る方向から『ミシッ』という破壊音が二回ほど聞こえた。

「……光？」

《ん？ どうしたん？》

「ホームセンター辺りで双眼鏡を二十機ほど購入してきてくれ」

《二十機！？ またなんでそんなぎよーさん》

「どつやら、四谷のお嬢様達はご機嫌斜めらしい」

《 ……うん、なるほど、分かった。そっちもガンバってや》

光は俺に同情する言葉を言いながらも、早々と通信回線を切る。

残る双眼鏡は四機。

光が来るまでに全滅する確率は、驚異的に高いと推測……いや、断定できる事態だった。

うむ、初回はこれくらいで十分ですかね（自己満足）
ネタバレのしそうな部分も書いておいたんですが……今回はあえて削ったとききました。

まあ、削った部分は一生お蔵入りかも知れませんね。

あと、これからこの後書きで書いてほしいこと、解説してほしいことがあれば、是非とも私めにご報告ください。

その報告がなければ……次回は天下無双の生徒会長、四谷彩貴さんについて、ネタバレのない程度に書かせていただきますでしょうか。

ネタバレ希望があれば、中核以外はバラしちゃいますけどね

では、夷神酒でした

Flight 20 毒のバベルと断罪(前書き)

この話は後で書き足すかもしれませんが、とはいえ、内容は変えないので問題ないです

なんでかなあ……

今日は萩野先輩とデート（強制）してたはずだったのに、なんでこうなるんだ？

……あ、冒頭早々すみませんが、僕は正直困ってます。結構本気で。

面前にはサングラス＋黒スーツの男。

右手にはサングラス＋黒スーツの男。

左手にはサングラス＋黒スーツの男。

背後にはサングラス＋黒スーツの男。

今現在、僕はとある公園で同じ姿形の人間に四方を囲まれています

……この状況なら困っても仕方ないでしょ？

なんか、エージェント・ス〇スに囲まれたネ〇の気持ちだが、約一割ぐらい分かった気がする。

「……さて、このまま立ち去ってくれと、私としては助かるのだがね少年君」「」

怖ッ！！ 声がピツタリ被ってるせいで威圧感も四倍だ。

普通だったら、絶対逃げ出したい状況だけど……

「離せッ！！ この変態ッ！！ 強姦魔！！ クソ野郎！！」

「立ち去るんで、そこで暴れてる先輩も一緒に返してもらいたいなあ……なんて思ったりして」

僕を囲む四人から二、三步離れた所に、五人目と六人目のエージェントが立っていて、先輩はその二人に捕まっていた。

てか、女性が強姦とかクソとか大声で言うのはどうしたものかと思う。

……あっ、片方に先輩のキックが顔面にヒットして倒れた。うわあ、かなり痛そう。

「……少年君、ちょっと待っている」「……」

「いや、立ち去れとか待ってるとか、言ってること矛盾してるからね」

僕のツッコミを無視して、四人のエージェントは先輩の方に向かってしまった。

……でもまあ、この状態からして、エージェントの五人や六人じや、今の先輩は止められないだろう。

「それにしても……」

なんでこんなことに巻き込まれなきゃならないんだろっ……
僕は心の奥からため息を吐いた。

回想開始

“ 季節のフルーツてんこ盛りスイーツ
　　↳ 苺の天達塔^{ハベル} ”

生クリームやアイスといったパフェの基礎に、イチゴジャムやドライストロベリー、『とよのか』『女峰』『とちおとめ』『越後姫』など、日本各地の大粒苺がこれでもかと使われた、苺づくしの春季限定パフェ。

全長約六十センチにもなるその巨大な姿は、天に達した伝説の塔、まさにバベルの如く。

その値段も伝説級の¥6980……庶民的カフェのスイーツとは思えない（店の最高額）。

また、その甘い誘惑の中には、巨大な姿から予想できるように桁外れな糖分とカロリーを所持しており、周辺では『ダイエットの天敵』とされている……らしい。

主に、パーティーや打ち上げ（大人数）、失恋後の自棄食い（個人）等に注文される……らしい。（ちなみに『……らしい』はすべて先輩の受け売り）

「」

「先輩……随分と上機嫌ですね」

「そりゃ、伊達が奢ってくれてるって男前なこと言ってくれからねえ お姉さん喜んじゃうよ」

僕は先輩と向き合いながら、そのおふざけとしか思えないパフェを見ていた。

……まあ、実物が目の前にあるわけじゃなく、その写真が載ってるメニューを見てるんだけどね。

こんな化け物メニュー、先輩でも注文しない。

てか、注文されたら僕のお財布は阿鼻叫喚の地獄になる。

僕は『アサリと茸のパスタ』（¥980）を既に食べ終え、先輩

が『ガトーシヨコラ』（¥480）を食べているのを見ていた。

「てか、それだけでお昼大丈夫なんですか」

「ん？ 全然平気だよ」

……おかしいな。

いつもは僕のお弁当を平らげる先輩が、デザート一つで満足するとは思えないんだけど……なんてことを思っていると、先輩は怪訝そうな顔で僕の顔を覗き込んできた。

「あんだ。私がこんなもんで足りるのか？ とか思ってたんだろ」

「……バレました？」

「バレバレもバレバレだよ。これでもかってほど顔に出てる」

僕ってそんなに考えが顔に出やすいのか？

じゃあ、僕のプライバシーはどこに行ってしまったんだ？

そうになると、今後の行動も考えなきゃならないなあ。

「……まあ、伊達がそう思うのも仕方ないねえ。実際全然足りないし」

先輩はガトーシヨコラの最後の一口を口に放り込んでから、手に持ったフォークを自分の目の前でクルクルと回す。

「でもね、明日ハイジャンの大会があるんだよ。だから、極力脂肪分とかは取りたくないのさ」

「明日！？ 大会前なのに、こんな所で油売っていいんですか？」
「フツ、お姉さんをナメちゃいけない。日頃の練習で体はしっかり作つてあるから、大会前日は精神面メンタルを休ませるのさ」

先輩は自慢気に胸を張って言った。

なるほど……今日は俺をイジメ倒して、精神的にリフレッシュさせようって魂胆なのか。

ドSな先輩らしいリフレッシュ方法だけど、俺を生け贄にしてほしくなかった。

「さて、じゃあ行きますか」

「午後はいつたいたいどこに行くんですか？」

「どっか行く」

「……決まってるないんですね」

まあね、と言いながら早々に席を立つ先輩。

僕は伝票を持ってその後を追うように立ち上がる。

……あ、いいこと思いついた。

「先輩、ちょっと」

「ん？」

「午後は一時間程度、各自で自由行動しません？」

「なんで？ せっかくのデートじゃないか」

僕の提案に先輩は少し眉間を寄せる。

本当に付き合ってるわけでもないのに、せつかくのデートとか言うのはおかしい気がするけど、あえてツッコまない。

「午前中に行った店にめぼしいものが出来たんで、買いに行くんです」

「それで、一度行った店に行くから、あたしに気を使って一人で買っていくってわけか」

「その通り。………すみません。お会計お願いします」

さすが先輩。察しがいい。

無駄な事が嫌いな先輩に、僕個人の買い物につき合わせるのほどうしたのかと思ったのだ。

「ちよつとつまらないけど………まあ、使われた気を無下にすることもないね」

「じゃあ、集合場所はどーしましょうか？ ……あ、すみません。

大きなのしかないんです」

「人込みは面倒だからねえ………八子公なんてどうだい？」

八子公とは戌神之鉢公園いぬがみのはちじゅうえんの略称で、この駅前繁華街から少し離れた場所に存在している。

適度な樹木の中に適度な遊具が存在する、どこにでもありそうな平々凡々な公園だ。

特徴と言えば……この公園からは騒音やゴミのポイ捨て、ホームレス等の問題点が発生しない、とっても平和な所かな。

時々、僕も散歩がてらに立ち寄る公園の別名が『八子公』なのだ。この略称が某忠犬のことを意識しているのは明白だよね。

でもまあ、その公園が集合場所ってことに、反対する理由は僕にはない。

「いいんじゃないですか？　じゃあ、一時間後八子公で……あ、レシートいります」

「んじゃ、あたしは適当に他の店見とくわ」

お会計を済ませながら、落ち合う約束をした先輩と僕は、店の外に出ることに……

「……ご注文を繰り返します……い、毎の天達塔^{パベル}二点、でよろしでしょうか……？」

ふと、店の奥から聞こえた、引きつったウェイターの声。

……なんか不気味なオーダーが聞こえた気がしたけど、きつと気のせいだろう。うん。

僕は耳の調子が悪いんだなあと思いながら、そのウェイターがいる方向を見ないように、僕達は店の外に出た。

回想終了

はい、大体分かったでしょ？

僕はカフェを出てから先輩と別れ、あるものを買ってから待ち合わせ場所のとある公園……つまり八千公にきた。

そしたら先輩がエージェントに捕まえられてて、僕も囲まれる羽目になっていたのだ。

僕がいない間に、先輩はなにをしたんだろうか？

喧嘩でも吹っつけたのか？ ……無論先輩の方から。

「……………待たせたね、少年君」

「まあ、回想してる間暇でしたからね……って増殖してるッ!？」

先輩の行動を想像することに集中してた僕は、声を掛けられて……驚いた。

だって、エージェントが六人から十二人（先輩に倒された人も復活）になってるんだもん。

こ、これがエージェント・ス〇スの執念が生み出した増殖能力なのか!？

「……………増殖ではない。増援が来たのだよ」

「は、はあ……」

僕の叫びに、全員で律儀に答えるエージェント達。

……でも、なんか普通すぎて拍子抜けした。

って、そんなことより先輩はどこ行っ……!？

「先輩!？」

僕の視界に入ったのは、エージェントの一人にお姫様だった先輩だった。

……相手が六人でもなんとかなる先輩でも、その相手の人数が二倍になれば人海戦術で負けるのは仕方ないことだ。

先輩は何かで気絶させられたらしく、さっきまでの元気な姿は消え、ぐったりとしていた。

「……………さて少年君、君はこのことを忘れた方がいい。それが君のためになる」
「……………ちよつと待ってください」

僕は立ち去ろうとするエージェント達を呼び止め、ジャケットの内ポケットに手を入れる。

取り出すのは前回使った扇子じゃなく、輪形に纏めた黒皮製の細い紐。

「あなた達に二つほどお願いします。一つは同じこと言うんだっただら、誰か一人が代表して言うてください。正直」
「が多過ぎて見苦しいです」

その紐を手を振り上げるだけで解き、後ろ髪を簀巻きすまきのように巻

いて纏め上げる。

この間ジャスト3・4秒。これぐらい出来ないと『朔望月相』を使い熟こなしてるとは言えない。

「もう一つは……」

先輩は気絶してるから、『俺』の姿を見られる心配はない。

つまり、僕が裏側になっても問題はないってことだ。

だったら容赦はしない……なんせ、このエージェント達は『僕の前でやつちやいけないことベスト3』に入ることをしたんだから、それなりの制裁を受けてもらわなきゃならない。

「そいつから手え離せゴキブリ共。さもねえとテメエ等……命を手放すことになっぞ？」

俺は久しぶりにブチキレた。

いやあ、いわゆるプツンってやつだな。こりゃ。

この怒り沈めるには、誰かを一方的に圧倒的に壊滅的にブツ潰さなきゃ気が済まねえ。

てか、もう対象は決まっただけだな。

「……………雰囲気が変わった……少年君、君はいつたい何者だ」

「一気に喋んなって言っただろぅがこの低脳生物。出来ねえなら黙ってる害虫コックローチが。テメエ等が知つとく必要があんのは一

っただけだ」

俺の変化にクソ野郎達の顔に緊張が走ったが、もう遅え。

さっきのプツンで、自分の中の制限装置リミッターは破壊されちまってるから……手加減は出来ねえ。

てか、元々手加減なんて生ぬりい真似する気はサラサラねえけどな。

俺は一度視界を閉じて大きく深呼吸した後、ゆっくりと目蓋を持ち上げる。

そして……

「テメエ等は俺っていう猫の尻尾を踏みやがった。それで十分だ」

257

萩野杏子って女は、気兼ねなく俺に話し掛けてくる珍しい先輩。

いつも弁当か勧誘を目的に来る迷惑なオレンジ頭の女。

そして……俺が守ると決めた人の一人。

だから俺は……許さねえ。

一方的に動きを封じ

「束縛れ……黒一夜 天奏」

圧倒的に心を墮とし

「腐食せ……黒一夜 地颯」

壊滅的に精神を砕く

「破断れ……黒三夜 人葬」

俺は名も知らねえ野郎共に、絶望の絶望の声を出す暇も与えない、
私刑の断罪を食らわせた。

Flight20 毒のバベルと断罪（後書き）

これはヨーグルトですか？
いいえ、後書きです。（某CM風）

四谷彩貴^{よしむさき}

四谷財閥次女

戌神高校二年

特級生制度適応者

戌高生徒会所属 役職：生徒会長（二期連続就任）

・身体的特徴

身長：160後半

体重： 後半

頭髪：栗色髪。頭の頂点から少し後ろで纏められたポニーテールは、腰まで達している。

・内面的特徴

性格：強気で積極的。天性のリーダーシップとカリスマ性を持っているため、人望が厚い。

駆に対しては素直になれず、ことあるごとに射撃、砲撃による攻撃が目立つが、泣くとガタが外れて甘えん坊になる。
鎖骨フェチ。

自分に厳しく、他人に優しく、駆にはとつても厳しいけど少し優しい女の子。

成績：主席

一人称：私

大切なもの：意志、責任、約束

ポリシー：すべての事に努力を惜しまない。

今回彩貴のプロフィールを書いてみて、駆以外の精神面が整理できてなかったことに深く反省している夷神酒です。

基礎設定がなってないキャラは、いつか話の波に飲まれてしまいますからね……うん、これからは気を付けよう。

次回は……誰になるでしょうか？ 見てのお楽しみって事でお願ひします。

あと、読者の皆さんに真剣な質問をします。

この小説は面白いですか？

……唐突でシンプルな質問ですが、これでも結構悩んでいます。

自虐が入りますが、私は元々文才なんて持ってなく（どっちかと

言えば理数系)、更新スピードや執筆努力も誉められるものではありません。

そのくせに、二作品同時連載なんて……二兎を追うもの一兎を得ず状態になってるんじゃないか?と思ったのです。

皆さんの意見によっては、この状態を維持するかも知れませんが、こつちを一時連載休止にして片方を仕上げるかも知れません。

また、最悪の場合はこの小説が消えるかも知れません。

ランキングも個人サイトもなく、人目につきづらいこの小説を読んでくれている皆さんの意見を、どんな方法でもいいので神酒に教えてください。

お願い致します。

Flight 21 断罪の裏にもバベル(前書き)

たいつつつつつへん長らくお待たせしましたッ!! 夷神酒再始
動です!! (後書きに真面目な謝罪文有り)

Flight 21 断罪の裏にもバベル

前々回、俺は確実にビルの屋上で駆と陸上部部長の様子を監視していた。

三人の遠距離監視と一人の近距離監視……妥協点を補う意味では高レベルの監視態勢だと言える。

しかし……現在、俺は駆達を見失っていた。

挙げられる原因は三つ。

それは『四谷姉妹の予想外行動』と『光の選択ミス』、そして『予想外行動に対する対策を備えていなかった俺のミス』だ。

その様子は回想で……と、行くのが神酒かみくしやの定石だが、今回の件は俺の説明だけで解説することになった。

やはり、執筆を怠っていた者に時間軸まかのぼを遡るのは難儀な事なのだろう。

さらに、通りすがりに指摘された誤字（『一応』を『一樣』としていた）を引き摺っているのだろう。

打たれ弱くdashらしい作者に代わり、役不足かもしれないが俺が感謝する。

必ず修正させるから、今暫く待っていてくれ。

「玲……黙つたらんで、この状況なんとかしてくれや」

俺が感謝の意を示していると、隣から光が小突いてきた。

横目に見てやると、いつも笑顔を絶やさないその顔が、今は軽度
に引きつっている。

「俺に打破する手があると？」

「その言い回しは……ないんやな」

「無論、皆無だ」

俺は光に断言する。

俺にはここ……駆達がいいたカフェの最奥席である四人掛けテーブ
ルで起こっている惨劇を止める事は出来ない。

「これ以上見ると……一週間は甘いモンいらへん」

「俺は一ヶ月以上だ。天達塔バベルの威力がこれほどとはな……」

そう、俺と光の前には巨大な糖分の集合体……このカフェの春季
限定商品である『苺の天達塔バベル』が立ち塞がっていた。

更に、一つのみでも十二分な存在感を放出するこの塔が、俺達の
面前には二つも存在しており、その大部分が既に崩壊している。

分かっていると思うが、この塔を攻略しているのは俺でもなければ
光でもない。

「バカ駆ッ！ あんなに楽しそうに……今度会ったら蜂の巣にしてやる」

「ダメ……かーくん、月曜は保健室に……軟禁する」

俺と光の向い側で危険発言をしながら、二つの天達塔を解体しているのは、暴走気味の四谷姉妹……この二人が自棄食いしているのだ。

理由は……言つまでもない。

しいて経緯を説明するとしたらこうだ。

駆と陸上部部長が仲良く食事しているのを見ていた四谷姉妹。光が追加購入してきた双眼鏡も悉く破壊した二人は、俺の静止も聞かずに駆達に接触しようとしたため、俺が急いでカフェの店長を呼び出し脅迫。

普通に入店した場合、駆達に発見される可能性があるため、店長に裏口からの入店と駆達から死角となる最奥席を手配させ、四谷姉妹を食物で釣る事で接触を防いだ……そこまではよかった。

その時、四谷姉妹が注文したのがこの『バベルの天達塔』だ。しかも二つ。

その注文の声を聞いた時、店内の空気が凍結したのは、まだ記憶に新しい。

そして今、既に店内から駆達の姿はなく、追跡方法を失った……いや、正確には追跡方法はまだあるのだが、面前の光景にやる気を削がれた。

俺と光は四谷姉妹が暴走しないように見張りながら……甘味に対する軽度の心的外傷トラウマを植付けられているのだ。

そして、二つの巨塔は俺達の面前から完全に消え去った。

「やっと終わってくれたわあ」

「三十一分五十三秒……今までの記録を二十分以上縮める奇跡的記録だ」

四谷姉妹は、その体型からは考えられないほど量の甘味をその体に収めきった。

俺達は驚愕しながらも、この状況から解放される安心感に胸を撫で下ろし……

「なんか……足りない」

「彩ネエもそう思った？ 私もなんか物足りない」

「……おかわり、する？」

「そうしましょ。すみません、注文お願い」

隣を見てやると、光は不自然な笑顔のまま硬直していた。

……今回ばかりは俺の顔も引きつっているだろう。

呼ばれたウエイターも、完食された天達塔を一目見たのか、苦笑いを浮かべながら、こちらに接近してくる。

「いかがいたしました？」

「追加注文よ。これと同じ物を二つ」

「……………は？」

「聞こえなかったの？ このパフェを二つ、お願いできる？」

……………この店に、二度目の衝撃と寒波が訪れた。

「……………玲」

「なんだ？」

「俺、ホンマに帰りたくなってきたわ」

「……………右に同じく」

俺は店内のほぼ全員から来る多数視線を感じながら、面前の二人を見る。

…………… 駆、何故いつもこの姉妹の近くに居られるのだ？

現在位置不明な親友に一種の敬意の念を覚えながら、俺は現状分析という現実逃避を開始した。

Fl i g h t 2 1 断罪の裏にもバベル（後書き）

さて、今回の後書きではしなければならぬことがあります。

i n s e c t 様、アマバラ様、かい様、スーさん様、通りすがりの愛読者様、実行者様、メーデー。様、d o u b t e r 様、P U P U 様、亜紀様、めーでー。様、カイン様、ラグ様、れん様。

嬉しいご意見、ご感想本当にありがとうございます。

また、他読者様にもこの場で謝罪させていただきます。

長くに渡り、更新を滞らせてしまい誠に申し訳ありませんでした。

270

また、通りすがり様。

誤字の指摘、本当にありがとうございます。

貴方に指摘してもらえなければ、これからも同じ間違いを繰り返していたことでしょう。

これから時間がある時に修正させていただきます。

そしてかこ様。

厳しいお言葉ありがとうございます。

私はプロなどではなく不完全な未熟者なため、貴方のご期待に答えられるコメデイは書けないと思います。構成見直し等の努力をさせていただきます。

今回長期に渡り投稿停止した事で、私は多くの事を考えさせられました。

その事を踏まえて、これからも未熟ながら執筆活動を続けていきたいと思います。

頼りない私ですが、これからもよろしくお願いいたします。

2008 8 / 7 夷神酒

Flight 22 二人の子供、二つのリング

この戌神之鉢公園……通称『八千公』は前に紹介した通り、適度な樹木と適度な遊具が存在する平和な公園だ。

前回みたいなのは……まあ、僕達が運んできた事件トラブルだから、例外だと思っしてほしい。

だって、今僕がベンチに座りながら見ている景色は、『平和』そのものなんだから……

ブランコの椅子を占領して、ふてぶてしく寝てる黒い猫。

その周りを恐れることなく、さえずりながら飛ぶ小鳥。

そのさえずりを緩やかに運んでいく、穏やかなそよ風。

そのその風に合わせ踊る、青々しい新緑の葉。

そのすべてを茜色に染めながら、暮れ泥むなす夕陽。

こんな裏表のない、本物の平和の中にと、まるでこの公園が別世界のように思えてくる。

特に……

「ねえ……そのスコップ、かして」

「だめ……。いまからこのおやまにトンネルするの」

「……じゃあ、いつしよにトンネル……していい？」

「うん！ いいよ」

小学生低学年ぐらいの男の子と女の子が、目の先にある砂場で和気あいあいと遊んでる。

少し言葉が足りないのが、子供らしくて可愛いもんだ。

「あんな頃も……あつたのかな」

正直、僕は小学生の頃の記憶があんまりない。

二人には悪いけど、いつから玲や光と友達になったのかも覚えてない。

記憶があるのは……そう、彩貴にビンタされた頃と……両親の思い出だけだ。

どこにでもいる優しそうな外見の割に、硬派で昔気質むかしかたぎで芯の通った父さん……

そんな父さんにいつも笑顔で寄り添って、誰にでも平等な優しさを持っていた母さん……

二人はもうこの世にいないけど、今でも二人は僕の両親であり、僕の目標だ。

だから、僕はどんなに難しくても父さんのように約束は守るし、どんなに馬鹿にされても母さんのような優しさを忘れない。

だから僕は……ッて、なんで感傷に浸ってるんだ？

『動けない』状況だからって……何恥ずかしいことしてるんだ僕は。

僕が自分のやってたことを静かに反省していると、砂場で遊んでいた男の子が、女の子の手を引っ張ってこっちに近づいてきた。

よく見ると、男の子の頬には細かな砂がくっついていてる。

「ねーねー、お兄ちゃん」

「君は誰かな？」

「ぼく？ ぼくはむーくん！ こっちはじゅんちゃん！」

やんちゃそうな男の子は、頼んでない女の子の説明までしてくれた。

逆に女の子の方は人見知りか激しいらしく、男の子に隠れてこっちを見ている。

そんな二人の様子に和みながら、僕は笑顔で話し掛ける。

「で、むーくんは僕になんのようかな？」

「ううん。ぼくじゃなくてじゅんちゃんなんだ」

男の子は、僕の質問に首を横に振る。

すると、男の子に隠れてた女の子が不安そうに僕の前に出てきた。どうやら、この女の子の方が僕に用があるらしい。

「じゅんちゃんだっけ？ どうしたの？」

「あの……その……お姉ちゃん……どうしたの……どこかわるいの？」

女の子は恥ずかしいのか、蚊が鳴くような声を出しながら、僕の膝の上を指差す。

その指差す方には……安らかに眠る萩野先輩の顔があった。

もちろん、永眠しんめいって訳じゃない。

あのエーゼント達に気絶させられた際、ちょっと深く手刀を入れられたみたいだったから、万が一のためにこうして膝枕をして安静状態で寝かせている。

……まあ、もう起こしても大丈夫だと思っけど、綺麗な寝顔を見せられると起こすのが気の毒になって、結局三時間以上こうしてるのだ。

膝枕に先輩の頭を乗せてるため、僕は動けずにさっきみたいな恥ずかしい感傷に浸ったりしてたのだ。

あー、今考えても恥ずかしい。

「ねえ！ お兄ちゃん！」

「ん？ あ、ゴメンゴメン」

いつの間にか黙り込んでた僕は、男の子の声で質問に答えてないことに気づいた。

それにしても、知らない人の心配をするなんて……この女の子はとても優しい心を持つてる。

男の子の方も、引っ込み思案な女の子を無理矢理じゃなく、優しくリードして、女の子の思いを汲み取ってる。

そんな仲睦ましい二人に向かって、僕はゆっくりと話し掛ける。

「大丈夫、せん……このお姉ちゃんは寝てるだけだから、どこも悪くないんだよ。二人とも、心配してくれてありがとう」
「だいじょうぶだって！ よかったねじゅんちゃん！」
「…うん」

僕の言葉を聞いて、男の子は笑顔で喜び、女の子は少しはにかんだ表情を浮かべていた。

「君達は優しいんだね。その優しさをなくしちゃダメだよ」
「うん！ あ、ママきたよ！ じゅんちゃんいこー！」
「あ……さよなら、お兄ちゃん」

公園の入り口に母親の姿があるを見つけたらしい男の子は、女の子の手を引っ張って走りだす。

そんな二人の後ろ姿を見送ってから、僕は膝の上にある先輩の顔に目をやる。

整った顔立ちに光り輝くオレンジ色の髪……その寝顔からでも、男勝りな性格が垣間見える。

僕はヘアピンに引っ掛からないように気をつけながら、肩の辺りでバツサリ切られた髪に手櫛を通す。

……陸上競技で日光を多く浴びてるはずなのに、髪はほとんど傷んでなくて、むしろ毛先までサラサラしてる。
毎日丁寧にケアをして維持してるんだろう。

男勝りでアネゴ肌……でも、女性らしい繊細な部分を先輩が持ち合わせてる証拠だ。

僕はそんな先輩の寝顔に見惚^{みと}れながらも、その髪に手櫛^{てし}を何度か通す。

「んう……」

起こすつもりはなかったけど、先輩は僕の手櫛に反応したらしく、色っぽい声を漏らす。

その後、先輩は寝呆け眼を二、三回擦って……僕と目が合った。

「……伊達？」

「はい、伊達ですよ」

「……あんたの膝枕、最高だな」

「起きて第一声がそれですか……」

先輩は僕が膝枕してることに、夕日が射してることに驚かず、僕に笑いかけた。

……と思ったら、僕に背を向けて膝に頬摺りを始めた。

これは……ちよっ、こそばゆい！？

「先輩、ちよ、やめてください！」

「フッフッフ　よいではないか、よいではないかあ……と、言っても、落とされちゃたまらないからね」

先輩は珍しく素直に行動を止めてくれた。

けど……先輩は僕の方を向かず、背を向けたままだ。
先輩らしくない、暗い雰囲気を感じながら……

「先輩、どうし……」

「……伊達、今日のことは忘れてくれ。その代わり、私はあんたが
なにしたのかも聞かないからさ」

先輩は僕の言葉を遮りながら、断言するように……そして、弱々
しさを吐き出すように、僕に背中を向けて僕を拒絶の言葉を発した。

でも……まあ……やっぱり、か。

僕が先輩に『朔望月相』のことを知られたくないように、先輩に
も僕に知られたくないことがある。

今回のエージェント達の話は、先輩にとってその『知られたく
ない』ことなんだろう。

先輩の提案に乗れば、僕のことでも先輩に知られずにすむ。
でも……

「先輩」

「なんだ？　なんか文句がある……」

「信じられないかも知れませんが、あの人たちは『俺』が倒しまし
た」

「……は？」

僕はあえて先輩に事実を言う。　そうしないと、先輩はまたエー

ジエントに襲われるかもしれないっていう不安を抱えなきゃならぬい。

だから、僕は最低限のことを教えて、その不安を解消したかった。その先輩は僕の言葉を聞き、背を向けてた体ごと顔をこっちに向けてきた。

「倒した？ 俺？ なんだ？ あんたは何を言ってるのさ？」

「先輩、『私はあんたがなににしたのかも聞かない』って、言いましたよね？」

「……あッ」

自分の言葉を返されて啞然とする先輩。

……ここまで先輩を手玉に取れることは初めてだ。

もう少し楽しみたいけど……後がメチャクチャ怖いからこれ以上は止めよう。

「まあ、もうあの人は来ないです。その事だけ覚えといてください。……って、そんなことよりいいものがあつた」

僕はとっさにポケットに入れていた『ある物』を思い出し、そのポケットに手を入れ、『ある物』を取り出して先輩の目の前に出す。

「……これって」

「先輩が欲しがってたネックレスですよ。僕から先輩にプレゼントです」

この存在はきつと、忘れられてただろう。

このネックレスは先輩とウインドーショッピングをした時に見たけど、描写さえしてないペアネックレスの片割れだ。

あえて描写するなら、革製の紐に金属性の白いリングが通されているシンプルな物。

「なんで、あんたがこれを？」

「先輩だったら明日の大会優勝できるでしょ？ だから優勝の前祝いでやってやつです」

僕が先輩に自由時間を提案したのは、これを買ってくるためだったのだ。

先輩は、僕の言葉に一瞬唖然とした顔をしてから……笑った。

「ハッ！ 優勝ってあんた、あたしに期待しすぎだろッ！ ククク

ッ……ハハハハッ！！」

「先輩……ちよつと笑いすぎッ！！」

先輩にとって、俺の言葉は相当面白かったらしい。

先輩は腹を抱えて涙を流しながら笑っていた……ツツか、酷いでしょ！？

「ヒイヒイ……だつてあんた、能天気すぎなんだよ。こんなの渡し

て、私に絶対優勝しろってプレッシャー与えてるようなもんだよ？」
「た、確かに……」

僕は、先輩に言われるまでプレッシャーを与えるなんて考えもしなかった。

先輩の自信満々な態度と今までの実績から、僕は『先輩は絶対優勝する』って思ってたけど……実際はやってみないと分からない。そんなことも気づけないなんて……玲とか光とか、最近は矢沢くんにまで『鈍感』って言われるけど……やっぱりそうなのかな？

「……すみませんでした」

僕は一言謝って、先輩の前に出したネックレスをポケットに戻す……はずだった。

けど、ネックレスを持った手は、ポケットに入る前に先輩にガツシリ掴まれた。

「え、先輩？」

「伊達、気遣いできるのはあなたのいい所だけど、ちっと気が早いねえ」

先輩は僕の手からネックレスを取ってから、サツと起き上がって僕の目の前に立つ。

そして流れるような動作によって、ネックレスは先輩の胸元に飾られる。

……そのシンプルなりんぐ一つが、先輩の素材を引き立たせていた。

「どうだい？ 似合ってるだろ？」

「……」

僕に質問する先輩は綺麗で無邪気な笑みを浮かべていて……僕はその笑顔に飲み込まれていた。

「あんたはあたしがプレッシャーに負けると思ってるのかい？ せっかく目の前にある欲しいものを、そんなちっぽけな理由で諦めるなんて、あたしには出来ないね」

……ここにさっき僕に背を向けてた弱々しい先輩はもういない。

僕の目の前にいるのは、男勝りでアネゴ肌、時には強引に人を引っ張って行く大胆さ、時には一人一人に気を配れる優しさを持つ、僕の知る中で一番『先輩』の名に相応しい存在。

その先輩が夕日の茜色に染まりながら、屈託のない笑顔を僕に向けていた。

「ほら、ペアなんだからもう片方あるだろ？ 早く出しな」

「あ、はい」

先輩はいつも通りの少し強引な口調で話しながら、手の平を僕に

向けてくる。

先輩の要求に、僕はポケットの中に入れておいた片割れを取り出して、その手の平の上に乗せた。

形は先輩の首に掛かっているのと一緒にだけど、リングの部分が黒く光っている。

「そんじゃ、あたしからもプレゼントしなきゃねッ」

僕が先輩の手にそのネックレスを置いた瞬間、先輩は滑らかな動きで僕に両手を伸ばす。

僕はその行動に殺気がなかったため反応が遅れ、その腕が後ろ首に回るのを許していた。

一瞬遅れて反射的に後退りしようとしても、ベンチに座っているため背もたれに詰まるし、仰け反っても先輩の腕に阻まれる。

……てか、鼻先が先輩の首筋に当たってるせいで、少し甘い香水の匂いに女性独特の匂いが交わって……頭の中がフワフワ浮いているような……ってヤヴァい！！

「せ、先輩!？」

「少し黙っとけて」

先輩の威圧感たつぷりの声に、僕は黙り込む。

けど……口を閉じると自然と鼻呼吸になって……匂いが匂いが匂いがあああああ!？」

「……よし 装着完了つと」

僕の理性が先輩の匂いによって連撲フルボッコされながら、本能の暴走を耐えてると、自然と先輩の体が離れてくれた。

……よ、よく耐えてくれた、僕の理性。

—安心した僕は、胸に手を当てて深呼吸を……つて？

「これつて……」

「ペアネックレスなんだから、あたしが二つ持ってんのはおかしいだろ？」

僕が胸に手を当てた時、その手にさっき渡したはずの黒いリングが触れた。

……なるほど、さっきの急接近は僕にこれをつけたからか。

「でも、いいんですか？ 僕が先輩のペアなんて持ってて」

「なんだい？ 私と同じものはつけられねえってか？ あゝあ、今まで可愛がってた後輩に拒否されるとはなあゝ。お姉さんショックだよ」

「いやいやいや、そんなわけじゃないですって！ 有り難くもらっておきます」

先輩のいじけ方は冗談丸出しだったけど、僕は焦って弁解する。だって……ここで下手に断れば、後々先輩のドSっ気に溢れた行

動の餌食になりかねない。

軽く想像しただけでも……それだけは勘弁してもらいたい。

僕の答えに満足したのか、先輩はいじけるのをやめて、僕の目の前で満足そうに腰に両手を当てながら笑ってくれた。

「伊達、さっきの言葉は訂正する。今日のことは忘れるな。だけど、誰にも言うな。楽しかったことも忘れたいことも……あたしとあんなの秘密だ」

先輩はそう言って、小指を立てた手を僕の前に差し出した。

……これは僕が子供扱いされてるのか、それとも意外に先輩の精神年齢が子供なのか。

僕はそんなことを考えながら、先輩の小指にゆつくりと自分の小指を絡める。

「指切り拳万嘘ついたら……」伊達があたしの奴隷になる。指切った！」

……なんか、今日は先輩に振り回されてばかりだ。

「ちよつと待てええええええい！！ 普通針千本でしょ！ 針千本も奴隷も人道的にどうかと思いますけどねッ!？」

心身共にスゴく疲れたし、エージェントには絡まれるし……一番痛いのは、財布から福沢さんが何枚か消え去った事かな。

「ええ〜。でも、もう指切っちゃったからねえ？」

でも、まあ色々あったけど……

「これは詐欺でしょ！！この約束は無効ですッ！！」

……今日は先輩といて、本当に楽しかった。

「お姉さんなんにも聞こえないなあ」

二人が夕日を浴びながら騒ぐ中、ブランコで寝ていた黒猫が夕闇に輝く一番星に向かって、音もなく大きな欠伸していた。

遠呂智のハッキング予定日まで、あと四日

Flight22 二人の子供、二つのリング（後書き）

我輩は後書きナリイ〜（某コロッケ大好きカラクリ人形風）

最近友人に『君って傍観者の鑑だね』って笑顔で言われた神酒です。

まずはみなみ様、けせる様、ご評価ありがとうございました。
そして神羅様、doubter様。ご意見ありがとうございました。

さて、前回の後書きは謝罪文で終わってしまいましたから、今回は少しリハビリ+サービスを兼ねて、とある読者様の質問に答えましょう

Q・『展開が早すぎるような気がします』

……これは届いたメッセージの一文なので、疑問形になってないのはスルーしてください。

A・確かに、私は作風と性格上展開が早いのは事実です。

前作『逃走者！』よりゆとりを持つようにはしていますが……やはり番外編を考える必要もありますね。

でも、実は登場してない主要キャラが二人、出演決定サブキャラが五人ほど居たり居なかったり……結構長編予定？

さて、私はこれからも読者からの質問や指摘の二つ二つに答えていくつもりです。

是非ツ是非ツ、この作品に対する質問、意見をよろしくお願い致します。

評価や感想……出来ればメッセージでお願いします（悲願

F l i g h t 2 3 校医さんの何気ない一日(前書き)

今回は彩さんの暴走率が120%を超えました。ご注意ください！

僕の週末はある意味極端だった。

土曜日は先輩との約束を守ってデート（なのかな？）をしてゴタゴタがあったけど、日曜日は矢沢くんと一緒に家でのおんびり何事もなく過ごした。

……あ、唯一出来事としてあげられることがあるとしたら、日曜日の昼頃に先輩本人から大会で優勝したってメールが来たんだ。

その時添付されてた写真には、優勝のトロフィーを掲げながら満面の笑みでピースしてる先輩の姿があった。

その先輩の胸元には、白いリングのネックレスが輝いてて……ちよっと嬉しかった。

そして僕は今日、普段通りに起きて、普段通りに運動して、普段通りに矢沢くんを起こして、普段通りにお弁当を作って、普段通りに制服に着替えて、普段通りに家を出た。

それから普段通りに矢沢くんと雑談しながら登校し、普段通り彩貴と遭遇し、普段通り逃げ出し、普段通り追われ、普段通りに撃たれ、普段通りに避け切り、普段通りに逃げ切って、普段通りに校門を通った。

そこまでは普段通りの学校生活だった。

……え？ 途中でおかしなものが混ざってるって？

しょうがない……彩貴に追っ掛けられたり撃たれたりするのは、

悲しいけど既に日常だ。

まあ、なぜか今日はいつもに増して殺気立ってたけど……って、そんな可哀想なものを見る目で見ないでください……余計悲しくなります。

コホン……さて、そんなことは記憶のゴミ箱に入れときましよう。僕が校門を通過って昇降口に入ると、誰かに背後からがっしりと抱きつかれて、その瞬間首筋をチクツと痛みが走り僕の意識がブラックアウト。

そして今、意識が戻った僕は清潔なベッドの上で横になっていた。清潔感漂う純白のシーツに消毒液の匂い……ここは保健室？

「ってことは、あれは彩さんの仕業か……」

昇降口で首筋がチクツとしたのは、いつも彩さんがファンクラブに投擲なげしてる超即効性睡眠薬入り注射器を直接射ち込まれたらしい。彩さん曰く副作用はないらしい……てか、保健室の先生が薬使ったり傷口縫ったりできるのも、今思えばおかしいよな……なんでだる？

「……私は養護教諭じゃない……校医だから……」
「へえ、それどう違うんで……って彩さん!？」

横から突然、声に出してない質問の答えが返ってきたことに驚いて、急いで声の方を振り向くと、僕の寝ているベッドの横で彩さんがパイプ椅子に座っていた。

いつもの仕事モード（白衣着用＋お団子ヘア）の彩さんは、僕が起き上がるうとするのを、それを無表情で白衣の袖からメスをちらつかせることで止めた。

「あ、彩さん？」

「……」

僕は遠慮がちに彩さんに話し掛ける。

でも、彩さんは無表情を崩さず、その艶やかな赤髪で隠されてない右目だけで異様な眼力を放ちながら、僕の目を真っ直ぐ凝視してくる。

……彩さんは基本的に常時無表情だ。

でも、よくよく見れば嬉しい時はほんの少し目を綻ばせるし、悲しい時はほんの少し伏し目がちになる。

そして、今はほんの少し唇を尖らせている……これは拗ねてる証拠だ。

でも……なんで拗ねてるんだ？

僕が腕を組んで拗ねてる理由を考えると、拗ねてる本人の彩さんは椅子から立ち上がって、僕の寝てるベッドの上に……って!?

「ちょッ!? 彩さんッ!?!」

彩さんは流れるような動作で僕の上に乗った……こ、これはボコボコ殴られること必至の馬乗りマウントホシシヨウッ!?

焦った僕は急いで彩さんの方に手を突き出し……たら、両手をしつかりと掴まれた。

これじゃ防御が出来ない……僕は本能的に目を強く瞑る。

ああ……神様仏様マリア様、何であなた達は僕を谷底に突き落とした後、谷底に生コンを流し込むようなことをするんですか？ 僕はそんなにあなた達に嫌われること……

カチャカチャ……カチャリ

ん？

なんだ、この金属が当たり合う音は……それに左手首に冷たい感触が……？

カチャチャキ……カチンッ

固定音と一緒に、なんか右手首にも同じような冷たい感触がするんですけど……

「かーくん……目、開けて……？」

「いや、見たくないものが目に入りそうで……」

「開ける」

「はい」

精一杯の抵抗虚しく、僕は彩さんの言う通りに目を開ける。
恐る恐るゆっくりと目を開けると……僕の両手には、ゴツい銀色のリングが一つずつ装着されていた。

……はい、いわゆる刑事ドラマでご拝見できる手錠ってやつですね。

しかも、右手錠の鎖の先には彩さんの左手の手錠が、左手錠の先には彩さんの右手の手錠がある。

でも、鎖が結構長くて身動きぐらいはとれる……ってえッ!?

「彩さん!! 何で手錠を!?! そして彩さんまで手錠してるんですか?」

「ふふふ……かーくんとお揃い」

「お揃いってレベルじゃないです!?! これは確保とか逮捕ってやつでしょ!?!」

「……かーくん……たいほー」

「どこのサスペンス劇場でそんな気の抜けた逮捕する人いるんですか?」

言葉では抵抗してる僕だけど、状態としてはマウント取られながら手錠つけられてる……抵抗できないし逃げられる状況じゃない。

てか……

「なんで僕はこんな目に?」

「分から……ないの?」

「はい、全然」

「……………むむむ」

「ぶほッ!？」

僕の解答が気に入らなかったのか、彩さんはまた少しだけ口を尖らせたと思ったら、突然僕の顔に向かってダイビングしてきた。

しかも、彩さんの腕は僕の後頭部に回されて、彩さんの体に引き寄せられる。

な、なんだ？ この柔らかくて心地いい密着感は……彩さんのいい匂いがいつもより濃厚な状態で僕の鼻孔に………って!？

「はががん(彩さん)!! はかげへふががひ(離れてください)

!?!」

「……や」

「じげばがびげふ(これはヤバいです)!! びごんはびげばがびげふっべ(いろんな意味でヤバいですって)!!」

「あ……んっ……かーくん喋ると……いい」

「ばびばッ(何がッ)!？」

そう、ヤバいのだ。

今、僕の顔は彩さんの胸に埋まってる状況……これはヤバい。

二つのマシユマロのような感触が顔を挟み込んで彩さんの女性的で甘美な匂いが意志と関係なく僕の中に入ってきて意識が………それよりなにより息が出来ないッ!!

「じぶじぶじぶ(死ぬ死ぬ死ぬ)!!」

「……あん………もう少し」

「ほぶずじでじぶッ(もう少しで死ぬッ)!!」

「…………むう」

僕の必至さを感じ取ってくれたのか、彩さんは腕を放してくれて僕は窒息死せずにすんだ。

でも、心臓はバクバクしたままで、顔は真っ赤に熱くなってるのが見なくても分かる。

……………危ない……………いつも、スキンシップが激しい彩さんだけど、さすがにさっきのは理性やら倫理やらがすべて吹っ飛びそうだった。

僕を精神的に破壊してきた彩さんはそのままベッドを降りて、いつの間にかベッドの横にあった紅茶セットを手にして、手早い動きで二人分の紅茶を入れていた。

「今日はストレートじゃないの……………サモワールを使って……………ミルクで煮出した」

「あ、ありがとうございます」

僕は上半身だけを起こして、差し出された紅茶のカップを取る。ミルクと紅茶が交ざりあったいい匂いが、暴れていた心を落ち着かせてくれる。

そしてゆっくりと口をつけると、口の中に香りが一瞬で広がって……………うん、美味しい。

この手錠さえなければ、もっと美味しいだろうになあ……………

「かーくん」

「はい？」

僕は手錠から目を話して彩さんの方を見る。
すると、彩さんは僕のことを下から見上げるようにして……つまり、上目遣いで僕の目を見ていた。

「な、なんですか？」

「今日は一日……ここに居て？」

その右目は、まるで捨てられた子猫のように寂しさに溢れていた。
……こんな風にお願ひされて、僕にどう拒否しろと？
でも、特別なことがない限り授業に出ないと……後で彩貴に殺される。

どうすれば……僕の選択肢は『逃げる』『従う』『断る』の三枚。
ライフカード

逃げる……両手にしっかりと手錠されてるから無理だ。

従う……後で彩貴に殺されるけど、彩さんを笑顔に出来る。

断る……彩さんはどんな反応するだろ？ 取り合えず聞いてみるか。

「もし、断ったら？」

「……さっきみたいにギョッとする」

「抵抗したら？」

「……食べる」

うん、捨てられてたのは子猫じゃなくて虎だったみたいだね。だって、涙目から一転して真顔で食べるって……完全にマジだよ？ そんな怖いこと言われた僕が出来る選択なんて一つしかない。

「分かりました……今日は一緒にいます」
「……ん」

僕の解答を聞いた彩さんは、首を横に傾けながら、目を細めてほんの少し微笑んだ。

いつも無表情な彩さんが微笑むと、綺麗だし可愛いしなんていうか……胸がとつても暖かくなる。

……よし、せっかくだしこの時間を楽しもう。

「じゃあ、質問していいですか？」

「……うん」

「さつき彩さんは養護教諭じゃなくて校医って言うてましたけど、養護教諭と校医ってどこが違うんですか？」

「養護教諭は職員で……保健室の先生……校医は医者で非常勤職員なの」

「へえ〜。でも、彩さんが校医なら、なんでいつも保健室にいるんですか？ それに、ここいるはずの保険医はどこに？」

「前に言っただけど……私が校医になったのはかーくんのため……学校にいれば、かーくんがケガしてもすぐに治せるから……養護教諭の人は職員室でよく寝てる」

「……いろいろありますがとうございます。でも、保険医が保健室にいないのってピンとこないですよね」

「……知ってる？ 『保険医』って実際はいないの……」

「えッ、マジですか？」
「……うん」

こんな他愛ない話をしながら、僕は彩さんという時間を楽しんでいた。

でも、僕と彩さんを繋いでいる二つの手錠は外してくれなかった。
むしろ……

「彩さん、トイレ行きたいんで、手錠外してください」

「……その必要ない」

「え？」

「ほら……行こ？」

「ちよッ！ えッ！？ 僕が行くのは男子トイレですよッ！？」

「知ってる……でも、レアなかーくん見れる……クスッ」

「彩さんッ！？ やっぱ僕トイレ行きませ……ストップストップ！

！ 手錠引つ張らないでええええッ！！」

「……れんこー」

……僕はなんとか男としての威厳を守り通し、それから手錠が外された放課後までの間、僕が保健室から一步も出なかつたのはい言うまでもない。

でも……なんで僕はこんな目にあってるんだろっ？
……なんてことを彩さんに聞くと、次こそ本当に窒息死させられ
そうなので、僕は一生聞かないことにした。

遠呂智のハッキング予定日まで、あと二日

Fl i g h t 2 3 校医さんの何気ない一日（後書き）

It's depends, on the postscript of the postscript, the postscript for the postscript!!

（これは後書きの、後書きによる、後書きのための後書きだ!!）

四谷彩よしむらや

四谷財閥長女

戌神高校勤務（学校医）

年齢2才

・身体的特徴

身長：160後半

体重： 前半（彩貴より軽い）頭髪：赤色髪。襟足や横髪は肩の辺りまで伸びている。前髪は左側だけが顔の半分まで伸びていて、左目が隠されている。 仕事中は、前髪以外を頭の頂点より後ろ側に艶やかな団子にして、その団子に鬘べっこう甲かんざしの簪型の髪止めを刺している。

・内面的特徴

性格：無表情で感情を表に出さない。言葉の間に沈黙が入る独特な話し方をし、人見知りが激しく、基本的に無表情を貫く。

駆に対しては感情が滲み出し、抱きついたり積極的になり、ヤンデ

レ要素が入って盗聴等をするなど容赦がなくなる。

武装は射撃以外、メスや薬剤入り注射器等を使用。

項^{うなじ}フエチ。

自分には普通、他人はシカト、駆にはベタぼれの子供っぽい大人の女性。

成績：三年前に海外へ留学し、医学部を跳び級二年という短期間で卒業し医師となり、一年前、日本に戻って校医になった経歴の持ち主。偏差値は現在首席の彩貴より上の可能性がある。

一人称：私

大切なもの：家族、かーくん、保健室

趣味：紅茶、かーくんの写真整理

……さて、どうでしょう？ 今回の話は彩さん一色だったので、人物紹介の方も彩さんにしてみました。

うん、今回はちょっと本編から外れて、暴走気味に終わりました。どうですか？ 楽しんで頂けましたか？

それにしても、彩さん……彩貴より目立ち気味です……アハハハハ……どうしょ（涙）

Flight 24 灰色の空（前編）（前書き）

この作品を愛読してるといの方は是非、後書きまで呼んで頂きたい所存です。

Flight 24 灰色の空（前編）

早朝から続く、雨が降るか降らないか天気予報士でもはっきりしない曇天灰色の下……私は少し廃れたビルの屋上で空を見上げていた。

まるで無限に広がる絨毯のように、四方の彼方まで続く雲は薄暗く、人の心まで曇りを作る。

しかし……今の私にはその程度の曇りはどうということはない。

「明日……か」

私が伊達……いや、遠呂智おんろちと接触し、完全に屈伏させられた。

その際、奴は四谷財閥の中央サーバーへハッキングする事を宣言した……その宣言通りなら、四谷の中枢は明日ハッキングされる。

四谷財閥の隠密・障害抹殺部隊長である姉と私にとって、これはピンチであり……復讐のチャンスである。

私の……私達の両親は『倭国の影人』の中でもトップクラスの力を持っていたらしく、当時四谷財閥と対立していた大手企業の下、異能の力を持った者から企業を守る防衛の要として、夫婦揃って雇われていた。

そもそも、異能というものは『才能』として世界に溢れている。

絵の才能がある人がいるように、手に火を灯す才能を持つ人が世界にはいて、高い身体能力を持つ人がいるように、高い飛行能力を

持つ人がこの世界にはいる……それが異端なる才能、それが『異能』。
しかし、歴史上魔女狩りや異端肅正などの対象となりえた才能の持ち主は生き残るため、自然に世界の裏側で生きるようになった。そして現代、殆どの異能者はその力を隠し、または自分が異能者という事に気づかず社会に溶け込んでいるが、一部の強力な異能者は裏組織や大企業、さらには国家や軍隊の裏でその力を発揮するものがある。

そして、そんな異能者の一族である倭玖羅は後者の異能者として暗躍し、その一族のエースだった私達の両親は裏世界で名を馳せていた。

しかし……五年前、何らかの事情で四谷の逆鱗に触れたその企業は、当時は無^{ノーマーク}注意だった二人によって壊滅状態に陥った。

一人は『新月^{にいづき}の黒猫』の名を持つ『新井^{にいづき}月^{つき}朔夜^{さくや}』。
一人は『晦月^{くわいげつ}の遠呂智^{おんろち}』の名を持つ『三十日^{みそひ}八雲^{やくも}』。

その二人は社長等の上層部の一部を抹殺し、電子システムのシステムを全て破壊した。

一度に二つの必要不可欠要素を失ったその大手企業は一晩で壊滅状態陥り、一週間後に倒産した。

世間に公表された理由は『社長の乱心』という不信感極まりないものだったが、後に私が四谷内部から当時の事を調べた結果、四谷が裏で手を回し事実を隠蔽した形跡が残っていた。

そして企業が倒産した次の日、私達は両親が上層部を守るために二人と対峙し……殺された事を聞かされた。

私達は泣かなかった……いや、泣けなかつた。

両親はいつも私達に笑いかけてくれた、優しくしてくれた、誉めてくれた、撫でてくれた。

そんな二人がもうこの世にいない……その事実を認められなかった私達は泣けなかった。

それから私達は倭玖羅本家に引き取ってもらい、『倭国の影人』としての本格的な修行励んだ。

当時小学生だった私達にとって、その修行は毎日血反吐を吐くような苦痛を強いられるものだった。

しかし、私達は復讐の為に生きた。

一心不乱に血反吐を撒き散らしながら『倭国の影人』としての『術』を得て、自分が吐く以上に敵の血を撒き散らしてきた。

そんな時、そんな私達の所に『四谷が黒猫の代わりを探している』という話が来た。

私達は舞台から忽然と消えた『黒猫』と、元から表舞台に姿を現わさない『遠呂智』の情報を掴むため、その話に乗った。

そして、過去の黒猫の行動の多くに、四谷財閥当主四谷源蔵の娘『四谷彩貴』がある事を突き止めた私達は、なんらかの手掛かりを得るために四谷彩貴が通い、当主のもう一人の娘である四谷彩の勤める成神高等学校に裏口入学した。

「しかし……あの当主は本当に当主なのか？」

私の視界の真ん中で灰色に染まる曇天を貫かんばかりの超高層ビル……四谷財閥が経営する企業の中樞が集う四谷グループ本社ビルを見ながら、私は当主の脳天気な顔を思い出す。

戌神高等学校に裏口入学を志願した際、私は当主に『基本的教養を補うため』という偽りの理由を提示したが……当主は私の理由をまともにも聞かずにそれを許可した。

『あゝいいぞ。入学したいのなら書類……いや、メンドイから書類はいらん。適当に名簿に名前突っ込んでくから、入学式から適当に行って……よしッ!! 来たああああ!!』

当主はいつもの席に座りながら、競馬新聞と赤鉛筆を持ちラジオを聞きながら、私達の裏口入学を許可した。

雇用された当初から思っていたことだが……あの性格でよく巨大な四谷財閥を従わせる事が出来る。

しかし……そんなことはどうだっていい。

賃金は桁外れで住居も二人で住むには十二分を与えてもらったが、黒猫と遠呂智の居場所さえ分かれば用済みだ。

黒猫と遠呂智の正体である『伊達駆』……奴への復讐を終えた暁あかつきには、証拠隠滅の為に家族共々消えてもらおう。

「恩を仇で返す……か。それでも私は迷わない」

独り言を呟いた私は、代わり映えのしない空を見切りをつけ屋上を去る。

階段を降り最寄りのエレベーターに乗った私は、最上階である七階のボタンを三回押し、三秒以上の間隔を開けずに最下層である地下二階のボタンを三回押し。

すると、私の乗ったエレベーターは『最下層』であるはずの地下二階を通過し、『真の最下層』に向かう。

目的に到着したエレベーターの扉が開くと、私の視界に入るのは暗闇の中で光を放つ一枚の巨大なスクリーン。

そのスクリーンは、教室程度の広さの部屋に設置された十二機のPCとコードで接続され、0と1の羅列が絶え間なく駆け巡っている。

そして、十二機のPCには倭国の影人の中で電子機器の扱いが出来る者達が、この狭く薄暗い空間でひたすら手元のキーボードを叩いていた。

ここは四谷のネットワーク機器を一手に管理する部屋であり、四谷のネットワークセキュリティを制御できる唯一の場所だ。

なぜ、本社ビルから離れた地下にこのような場所があるかは、『万が一本社が破壊されてもデータを守るため』や『当主の思いつき』など、様々な説がある。

……私は後者が有力でないかと踏んでいるが。

そのような事を頭の端で考えながらある程度部屋を見回した私は、そのスクリーンを直立不動で見上げている一人の大男に近づき、声をかける。

「百爪、調子はどうなっている？」

「む……黒剣か」

獰猛な獣が獲物を前にして喉を鳴らすような低音の声色。

私の倍ぐらいある身長とがっしりした体格を、黒いスーツに無理矢理ねじ込んだ印象を受ける。

深く被った黒いソフト帽で表情を隠していて、何度か一緒に仕事をしている私も、その顔を見たことはない。

彼の声と体躯はあまりに威圧感があり、私も初めて会った時は無意識の内に警戒していたものだ。

そんな彼は、私の声に反応しながらも体はピクリとも動かさず、帽子の影に隠れた口を開く。

「……全プロトコル層のPFファイアウォールの確認は終了した。後は無害なコンセプトウィルスをインストールして、起動と性能を確かめればいいと考えられる」

「そうか……後はサイト内にハッキングの情報が出回っていないか確かめないと」

サーバー等のネットワーク系機器への攻撃方法として、DOS攻撃というものがある。

簡単にいえば過剰アクセスにより、ネットワーク機器に過負担を与え異常動作や停止を誘発する攻撃方だ。

『遠呂智が四谷財閥をハッキングする』という情報が流れたとしたら、野次馬効果で自然に過剰アクセスされDOS攻撃が成立する。

私はその事を調べるために、この部屋に並んだ十二機のなかで手近なPCを借りようとすると、黒皮の手袋をはめた百爪の手が私を止めた。

「それは既に確認済みだ。掲示板や個人サイトを中心に約三十万件

ある。しかし……日時やハッキング先に様々な誤記があり、四谷のサーバーに極端な負担は掛からないと考えられる」

「……流石だな」

この百爪は倭国の影人の中でもトップクラスの切れ者で、今回の件で現倭玖羅本家に増援を頼み込んだところ、電子系を扱える者達を引きつれてきたのがこの男だった。

きっと、両親の仇を討つこのチャンスに、本家も動いてくれたのだろう。

しかし、その百爪さえすぐに答えの出せない謎の行動を、遠呂智はしていた。

「四谷内部からの裏切りなら正確な情報を流すはず。このことから、これは敵の故意的行動である事は確実であるが……意図が読めない」

「私にもさっぱりだ。しかし、警戒を強めたほうがいいのは確かだ」「うむ……コンセプトウイルスを何度かインストールし、セキュリティホールの改善点を今一度洗い直すべきと考えられる」

コンセプトウイルスとは、ネットワークセキュリティの不備等の問題点を発見するための試験的なウイルスであり、その問題点の事をセキュリティホールと言う。

百爪がその作業を指示するために巨体を動かそうとするのを、今度は私が手をかざして止めた。

そして、百爪の前に真っ赤なUSBメモリーをさしだす。

「コンセプトウイルスならこれを使って。遠呂智の使ったコンピュータウイルスを無害にした物らしい。私のPCで何度も確認したが有害性はなく、ステルス技術だけが群を抜いて異常に高い」
「……なぜ君がそんなものを？」

私の差し出したメモリーを受け取りながら、百爪は重低音の疑問をぶつけてくる。

その問いに、私は迷い一つ無く平坦な声で答える。

「私が奴を殺したいから……それ以外に理由は必要ない」

「復讐の業火に己が身を燃やすか……」

「黙れ、百爪。これは私達の問題だ。私達以外に口を出す権利など一辺もない」

「……」

百爪はそれ以上言葉を発することなく、メモリーを懐に入れた後、最初の時のように巨大モニターを見上げる姿勢を取った。

ソフト帽を目が隠れるほど深く被っているため、どんなに見上げてもモニターなど見えないはずなのだが、この百爪には見えている……しかし、そんな事は今は関係ないことだ。

私はモニターの薄暗い光を浴びながら明日の計画を綿密に考える傍ら、一つの心配を抱いていた。

今日の朝、『夕方には帰ってくるです』という置き手紙を残し、その姿を消した姉への不安を……私は捨て切れないまま、私は思考を続けた。

我が辞書に後書きの文字は……あるッ！！

はてさて、前回と比べコメディらしくないシリアス全開の今回でしたが……いかがでしたでしょうか？

次々回から晦月（美海・美空）編が佳境に突入します。

これが終われば一段落つきまますので、神酒はあることを考えました。

今まで読者様から頂いた意見で最も多かったのは『展開が早かったです。』

なので、それを解消するために、一段落ついた後に物語から脱線する番外編を投稿したいと思います。

それにつきまして……折角ですから人気投票もかねてどんな話がいいか、読者の方々にお聞きしたいと思いますッ！！

『 駆と のデート 』

『 駆が に追い掛けられる不様な姿を！！ 』

『 と の、のほんとした日常会話 』

『 駆をめぐる VS の壮絶なバトル 』

……等々、いろんなシチュエーションを募集しています。

気に入ったキャラの名前と合わせて、ご応募お待ちしております！！

……まだ、出演予定主要キャラが二、三人残ってますがそれは次の機会があれば、ということ。

次回は、彩貴と駆、美海と駆、玲と駆の、色とりどり二段重ねの対決前日……お楽しみに

Flight 25 灰色の空（後編）

さて、いきなり質問で悪いんだけど、君はオープンで焼かれたことがあるだろうか？

もちろん、僕はあんな狭い箱には入れないし焼かれたことなんてないし、あの箱の中で焼かれるグラタンやローストチキンの気持ちは分からない。

ていうか、聞いた僕が言うのはなんだけど、焼かれたことないのが普通だと思う。

でも……僕は今日、オープンに焼かれる気持ちを理解した。

今日は彩貴の強襲もなく、ゆっくり灰色の空の下を歩いて登校していた僕は……完全に油断してた。

校門を通過した瞬間、彩貴独特の強烈な殺気を感じた僕は、回れ右して逃げようとした。

……けど、突然背中に業火のような高温が襲い掛かり、異常な熱

に体を焼かれた僕は、その場に膝を着いて動けなくなつた。

そして数十秒間……体感時間は何分もあつたけど、その灼熱地獄に僕が為す術なく耐えていると、霞み始めた視界の前に雪のように白くスラツとした足が二本、立ちはだかつた。

「作戦成功ね……パパ、もういいわよ」

その声と同時に、僕の背中を焼いていた高熱は嘘のように消え去つていた。

そして、俺がその足の主を見上げると……我が校の生徒会長様が、仁王立ちをしながら天使のような悪魔の笑みを浮かべていた。

「……さすがのアンタでも、最新鋭兵器の攻撃には反応できなかつたみたいね？」

生徒会長様……彩貴の発した『兵器』と言う単語を聞いた瞬間、ある兵器が僕の頭をよぎつた……その名はADS。アクティヴサステム

米軍が暴動鎮圧などのために開発中の非致死性の対人兵器システムで、電磁波を照射することで皮膚の表面温度を五十度近くまで上昇させ、対象に火傷のような感覚を与えるという、トンデモ兵器である。

射程距離は現段階で約五百メートル……たぶん校舎から狙われたんだろう。

そんなことを考えてると……いつも間にか僕の眉間に、黒く冷たい拳銃の銃口がしっかりちやつかりぴつたり突きつけられていた。

そして、その拳銃の引き金に指を掛けているのは、どう考えても彩

貴に決まっていた。

「さあ、生徒会室に行きましょ？ 聞きたいことたーっっっつぷりあるしね」

そう言った時の彩貴の顔は天使よりも女神のような、悪魔というより魔王のような笑顔だった。

……そして、そんな笑顔をされたら、いろんな意味で従うしかない僕だった。

そんなこんなで現在、僕は授業を受けることなく、生徒会室という名の監獄で、逃げようのない尋問を受けていた。

色鮮やかな深紅のカーペットに傷一つない対面式のロングテーブル、黒く重厚感のある革張りの椅子……まるで大手企業重役の会議

室のような生徒会室内部。

その中で最も上位な上座にあたる生徒会長席に座る彩貴と、そのすぐ隣で次の位こゝろである副会長席に座る僕。

いつもは生徒会のミーティングのため、ロングテーブルを向いている二つの席が、今はお互いに向き合う形になっていた。

それにしても……あの源蔵クワジジイめ、あんな兵器まで彩貴に渡すんじゃないよ。

A D Sはまだ開発途中で、実際に運用はされてないはずだ……いや、あのおとぼけオヤジは、どんなものでも自分が気に入れば、金や危険性なんて眼中にしない人間だった。

まったく迷惑な人間だ……でも、そうじゃなきゃ僕みたいなのを手元に置いて、更には修業させるなんてしな……

「駆ッ!!」

僕の思考は、彩貴の大声と眉間に突きつけられた鉄塊の冷たさによって遮断された。

「……余計なこと考えてないでちゃんと質問に答えましょ?」
「ら、らじゃー……」

彩貴に脅されながら僕は質問に……って、僕どんな質問された?

……ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイツツ!! 完全に

考えごととして質問の内容全然聞いてなかったッ！！

聞き直すか……いや、聞いてなかったことがバレたら殺されるッ

！！

こ、こうなったら話を誤魔化すしかない！！

僕は取り合えず、自分の身にも関わる拳銃についての話題を振ることにした。

「それにしても彩貴……僕に向けてるものって本物？」

「私が紛い物を使うわけじゃないじゃない。SIG SAUER社のMOSQUITOよ。安心なさい。装填されてるのはゴム弾だから」

やっぱり遊戯銃エアガンじゃないのか……

彩貴の持つてる自動拳銃は、海外ドラマでよく登場するP226という拳銃を小型化したもので、暴発などの危険要素の少ない安全性・安定性のあるタイプである。

名前の由来でもある小口径の使用弾薬はあまりメジャーではなく、ゴム弾があるか不明だけど……まあ、なくても四谷の技術で作るんだろうな……ってッ！！

「この超至近距離に銃口がある時点で『あ、そうなんだ。よかったあ』なんて絶対無理でしょ！？ それにゴム弾が非致死性で実弾じゃないからって、この距離で撃ったら死ぬよッ！！ しかも頭部ならほぼ確実に即死だって！！ ていうか、ゴムって言っても輪ゴムとかゴムボールなんかじゃなくて、ボーリング玉の表面に使うようなものスゴい硬いゴムかもしれないからね！！ そちらへん分かってるッ！？ わざわざその口径で作ったのは凄イと思うけど、

こんな至近距離で撃つたら実弾と大差ないってッ!?」
「煩い煩い煩いッ!! うだうだ言ってる撃つわよ!!」

彩貴の強烈な眼光と迫力の脅しに対して、僕はすぐさま口を閉じた。

ほら、そこ、チキンって言うな。

だって……まだまだ僕には未来があるのに、こんな所で死にたくない。

僕が沈黙を始めて数十秒後、彩貴は僕を睨むのをやめて大きなため息を吐いた。

「まったく……聞いてないなら聞いてないって正直に言いなさいよ。聞いてないことより、それを誤魔化されるほうがム力つくんだからね」

「……えっ」

彩貴に思考を完全に読まれていたことに、僕は驚きを隠せなかった。

彩さんにはよく読まれるけど……彩貴には感情が不安定な時以外で読まれた時はなかったのに。

当の彩貴は、僕が本気で驚いたことが不満だったらしく、ジト目で僕のことを睨みつけていた。

……ある意味普通に睨まれるより怖い。

「まったく、甘く見られたものね。私が伊達に何年あんたと一緒だと思ってるのよ。彩ネエみたいになんか心を読むことは出来なくても、あ

「んたの癖は百も承知なんだからね」

彩貴は銃口の照準を僕から外し、逆の手で僕の頬を流れるように撫でて……頬の摘む。

そして、銃をテーブルの上に置いた後、もう片方の頬も摘む。

微妙な力加減で摘まれてるため、痛みはない……けど、なんか、こそばゆい。

「あんたがよく喋る時は、何かを誤魔化そうとする時なんだから……」

「うっ……」

「元々、あんたは嘘を吐くのが下手でしょ？ そんなあんたが私に隠しごとなんて十年……いや、一生無理ね」

322

彩貴の瞳は僕を見透かすような真っ直ぐな視線を向けてくる。

さすが幼馴染みってことか……僕のことには彩貴にはすべてお見通しみたいだ。

「あんたは嬉しいことがあればよく笑う。怒ってると口調が大雑把になって、気分がいいとやけに丁寧になる」

「……本当に？」

「本当よ。そうやって、驚いた時に一瞬黙るのも癖ね」

やっぱり分かりやすいわね、と無邪気な笑顔を浮かべながら、彩貴は僕の頬をいろんな方向に引っ張る。

「そして……悲しい時は無理して平気そうに笑うし、辛い時はもっと無理して笑う。苦しい時なんて余計酷いわ……」

彩貴は言葉を止めると同時に、僕の頬を掴むことを止めて、膝の上に置いてた僕の手を取った。

僕が驚いて彩貴の顔を見ると……目線が厳しくて、ちょっと怒ってる感じだった。

「……でね、私が見るかぎり昨日と今日のアんたは無理して笑ってるの」

「そ、そんなこと……」

「そんなことあるのよ。あんたがなにをしてるかなんて分かんないけど、私にはあんたがどこかで無理してるのが分かるんだから」

彩貴の手は怒った表情に反して、僕の手を優しく包み込む。

……彩貴の言う通り、僕は最近無理している。

理由はもちろん、明日……美空さんとの約束である『四谷のメインサーバーへのハッキング』を果たすためだ。

その準備のために睡眠時間はほとんど削ってるし、精神的にも辛い生活が続いていて、限界とまでは言わなくても、健康は維持できていない。

周囲には心配かけたくないから、疲労の色を見せないように元気に振る舞ってた……読心術を使える彩さんまでも誤魔化せたけど、彩貴だけは誤魔化せなかつたみたいだ。

もう、幼馴染みだからというだけじゃなくて……彩貴は僕を一番理解してくれてるのかもしれない。

そう思うと、自然に口が動いて本音を語りだしていた。

「……ちよつと、弱音吐くけどいい？」

「いいわよ」

彩貴は一瞬も迷わずに、僕の手を握ったまま、ゆっくりと頷いてくれた。

僕は感謝の意思をこめて、その手を少しの力で握り返してから、ちよつと本音を溢した。

「僕は昔、ある人を助けられなかった。その時、僕はその人と一つの約束をしたんだ」

「……約束、ね」

「そう、約束。僕はその約束を果たすために頑張ってきた。……けど、僕はその約束の意味を取り違えたのかもしれない。間違えたのかも知れない。そう思うと迷うんだ……このままでいいのかって」

僕にとって『約束』というのは、命のように大切なものだ。

僕が意味を履き違えてその約束を果たしても、それは約束を守ったことにはならない。

そして今……僕は自分のやってることが正しいのか分からない。その迷いが僕の疲労を増加させているのは、自分が一番分かっていた。

「……バツカじゃないの」
「え？」

僕は出すつもりもない、間抜けな声を上げてしまった。

……だって、いきなり彩貴の顔が視界いっぱい迫ってたんだから、驚くに決まってる。

彩貴は僕の手を握ったまま、おでこ同士を痛くない程度にコツンとぶつけてきた。

……いつもならビックリしてすぐに飛び退いてしまう状況だけど……僕は今、彩貴の視線に捕われて動けなかった。

強い意志を宿した瞳が、僕から数センチにも満たない距離で、僕の瞳を射貫いて、僕の心を鷲掴みにしていた。
その彩貴が口を開く。

「だ・か・ら・あんたが馬鹿だって言ってるの。なにが『かもしれない』よ。あんたは約束を守ろうとして、今まで頑張ってきたんじゃないの？ だったら、それを続けなさいよ。間違ってたとしてもそれが分かるまでずっと続けて、間違えが分かった時に直せばいいじゃない」

「でも、もし手遅れになったら……」

「それはあんたが手遅れになる前に気づけばいいのよ」

ある意味無茶苦茶なことを言いだす彩貴。
僕からすると、ちよつと無責任な感じがしないでもない。

「……でもね、駆。私はあんたを信じてるから」

「……彩貴は、僕にとって『約束』の大きさを知っている。それを知ってるからこそ、『そのままがいい』って僕の背中を押してくれてるんだと思う。」

「……だったら、僕は約束を守るために迷わず進もう。
僕は彩貴に包まれてた手で、逆に彩貴の手を包み返す。」

「……ありがとう、彩貴」

「べ、別にいいわよ、お礼なんて。……あんたが普通じゃないと、私も調子が狂うんだから、早く元に戻りなさいよ」

「大丈夫。明後日ぐらいには戻ってる気がするから」
「気がするってなによ。……まっ、駆らしいけどね」

それから僕達は額を重ね合わせたまま、どちらともなく微笑み始めた。

それがちよつと恥ずかしいけど、とても幸せな感じがして……なんか恋人同士みたいだなあ……と思ったけど、口に出したら怒られそうだから、このことは彩貴には内緒にすることにした。

美空に置き手紙を残して久しぶりに学校に来た私は、くもり空の下で……正直機嫌が悪いです。

「……なんかラブラブしてるですう」

私は学校の屋上から、双眼鏡片手に伊達センパイの様子を観察してたんです。

最初は生徒会室で生徒会長さんに銃を突きつけられて、伊達センパイは緊迫状態だったんです。

でも……いつの間にか伊達センパイと生徒会長さんは、おでこが当たるぐらい顔を近づけて笑い合ってるです。

その姿はお似合いのカップルみたいで……なんかつまらないです。

「随分つまらなそうだな」

「はい……なんか胸がムカムカして面白くないです。……確か、和泉センパイですよな」

「さすがに素人では足音を消すのが限界か……いつから気づいていた？」

「センパイが屋上の入り口に来た時です」

私は伊達センパイから視線を外さないで、背後にいる和泉センパイと言葉を交わします。

和泉センパイとは一度会ったことがありますから、気配はしっかり覚えてるんです。

死角に敵をいさせるのは暗殺者として致命的なことですけど……和泉センパイからは殺気が一つも感じられないのです。

和泉センパイの動きや気配からして、殺気を消せるほどの技量がないのは確実です……つまり、和泉センパイに私を殺す気はないで

すから、警戒しても無駄なのです。

だったら、伊達センパイを見てたほうがいいのです。

「で、なんのようです？ 友達の伊達センパイを守るために美海になにかするんですか？」

「心配するな。俺は今回の件に直接関わることはない。用件は別にある」

「なら、早くしてほしいです。私は忙しいのです」

「了解した。要件を手早く済ませよう」

会話が途切れてから、背後で和泉センパイが何かを取り出す音がするです。

殺気はなかったですけど……もしかして得物を取り出しているのかもしれないですね。

私は少しだけ背後に警戒を……

『あーあー……玲、ちゃんと音声入ってる？』

声に反応して振り向くです。

そこには眼鏡の奥から冷静に私を観察する和泉センパイ。

最初に見た時にも思いましたが、和泉センパイは人間というよりまるで機械のような印象がするです。

……って、そ、そんなことより、私の反応した声は和泉センパイの声じゃなくて、和泉センパイの持つてるノートPCからのもので

した。

『ええ……美海さん、久しぶり。学校に来ないからなかなか会えないね。てか、生徒会の仕事が溜まってるから早く戻ってきて欲しかったりするよ』

私に向けられたPCの画面には、さっきまで私が見ていたはずの伊達センパイの姿が映っていました。

『そんなことよりも……明日は先輩後輩じゃなくて敵同士として会うことになると思う……悲しいけど仕方ない。だって、君達は僕のことを恨んでるはずだから』

映像のセンパイは微笑んで……でも、それが逆に痛々しいほど悲しそうでした。

『でも、これだけは覚えて欲しい。僕は君達と戦いたくはないってこと。そして……僕は遠呂智になったとしても、嘘の約束はしない。約束は必ず守るから……って言っても信じてもらえないかもしれないけどね……それじゃあ』

PCの映像は予想よりも早く終わって、画面はブラックアウトしました。

一分にも満たない映像です……それでもセンパイの悲しすぎる笑

顔は私の中に強く残ってるです。

「俺は駆に、この映像を今日中に和倉美海に見せるように言付けを頼まれた」

「……………」

私は黙りこくって役目を終えた真つ黒な画面から、生徒会室にいる伊達センパイに視線を移すです。

私の目に映るのは、もうおでこを離して、椅子に座りながら生徒会長さんと楽しそうに話してるセンパイ……………さっき映像で見た悲しそうなセンパイの姿はないです。

悲しそうなセンパイと楽しそうなセンパイ……………なんでこんなに違うんですか？ どっちが本当のセンパイなんですか？ あんなに優しいセンパイが……………本当にパパとママを殺したんですか？

分からない……………センパイがなにを考えてるか全然分からないです。

「……………もう行っていいですか？」

「ああ、駆に頼まれた依頼は済み、俺の用件は終了した」

頭の中がグチャグチャになった私は、和泉センパイの横を通って出口に向かいます。

すれ違った一瞬、和泉センパイは私の目の前に四つ折りにされた手紙のような一枚の紙を出してきたのです。

「恋文等ではないから安心しろ……………これは駆ではなく俺個人からの

譲渡品だ。興味があれば読め。興味がなければ捨てればいい」

目の前に出された白い紙……そこになにが書かれてるかは分からないですし、和泉センパイが私になにかを渡す理由がわかりません。

……それでも、私はその紙に興味を持ったんです。

私はその紙を受け取ってから、一目散に出口に向かって屋上から出ていきました。

私は後書きとは違うんだ。（某元首相の発言風）

はてさて、個人的な用事等によって執筆が進まなかった神酒です。前回の予告……『駆と彩貴』は実現できたけど『駆と美海』『駆と玲』は省いちゃいました……えへへ（笑ってごまかすな）

ええつと……前回の後書きで人気投票とやってほしいシチュエーションを応募したところ……なんと三人も意見を頂けました！（マジ嬉）

人気投票は、まだ発表しませんが、シチュエーションだけは発表します。

『美海と美空の生活の様子』

『駆と彩貴のほのぼの』

『ごったごたの後、彩貴とデート』

なんか……最近影が薄くなってしまった彩貴が、ちゃんと出れる機会が増えますね！！

この三つは番外編候補 + 本編に使用する可能性絶大です。

これからも人気投票とシチュエーション希望調査はしばらく続きますので、是非とも清き一票とよりよい意見をよろしく願います。

人気投票で一位に輝いたキャラは……何しましょうか？

もう日も暮れて、暗闇が深く夜空を染めきった頃、僕の家では既に夕食を食べ終えていた。

……でも、いつものような食後の空間は、そこには存在しなかった。

「……ふむう……だてさぁん……」

僕はサイズのあったダークスーツに身を包み、矢沢くんは制服姿のまま眠っていた。

僕は熟睡してる矢沢くんを、彼の部屋に運んで、布団へ寝かしつける。

……今夜、矢沢くんに出した夕飯には、彩さん調合の睡眠薬を盛ったのだ。

今回の件に、矢沢くんを巻き込む訳にはいかない……

「さて……んじゃ行きますか」

心の中で矢沢君に謝ってから、僕は部屋の戸を閉め、静寂に包まれた一直線の廊下を歩き、黒靴を履いて玄関の敷居を跨いで外に出

る。
すると、玄關脇に凭れ掛かっている人影が視界の端っこに入ってきた。

僕はあえてその影の方を向かず、敷居を跨いだ状態で立ち止まる。

「駆……行くのか？」

あまりに感情が籠もらない平坦な声……玲が黒縁眼鏡の奥から、僕を凝視してるのを横顔に感じる。

その視線は、僕の真意を確かめるように、刃物のように冷たく鋭く突き刺さる……でも、僕はその視線を受けつつ口を開く。

「ああ、約束だからね」

「無謀だ。敵方はこちらが『新月』と『晦月』を相手にする事を想定し、それに見合う戦力を用意しているはず。その中に単体で挑むか……見るところ、お前は『朔望月相』の力を全力で使う準備はしていない……まさに飛んで火に入る夏の虫。想定上では七割方死ぬぞ」

「……」

玲の言葉を僕は否定できなかった。

確かに、僕は和倉さん達の両親の仇として、これ以上なく恨まれている……彼女達がこんな好機を逃すはずなく、本気で僕のことを殺しに来るだろう。

そんな場所に行くのは、まさに自殺行為だろ。

でも……そんなのは最初から百も承知だ。

僕は身につけたスーツの内ポケットに入れておいた、漆黒の紐状装飾具を取り出して、その紐でゆっくりと自分の後ろ髪を纏め上げる。

時間を掛けて纏め上げることで、自分自身の気を引き締めると共に、『俺』に必要なパーツを自分から引き出し、一つ一つを組み上げていく。

そして……『僕』を『俺』に作り変える。

「死なないさ。俺は彩貴に元気な姿を見せなきゃならねえからな」

俺は手に持った黒い外套を羽織る。

その膝下まで届く外套は見た目より暑苦しくねえが、季節外れもいいトコだ。

そんな外套の胸ポケットから、深紅の視力調整具を取り出す。

伊達だから普通は特別な意味を持たねえけど、俺にとっては『私』を作り上げる一つのピースとなる。

「……Mundus vult decipi, ergo decipiatur……」

俺は言葉を紡ぎながら、精神、肉体、思考回路、立ち回り、口調、在り方……その一つ一つを、把握し分解し解析し整理し組み換える。

そして『伊達駆』を『新井月朔夜』に、『新井月朔夜』を『三日八雲』に、自分自身の体を器として使い、その中に赤の他人を作り上げる……排除けす者の『俺』から、欺瞞だます者の『私』に。

「……世界は騙される事を欲している。それゆえ世界は騙される……」

私は外套のポケットから取り出しました、黒革の手袋をはめます。そして、私は世界を欺かせて頂きます。なぜなら、私は偽りの担い手でございますから……

「三十日八雲の世界は、深紅に染まります」

私の身につける季節外れの防寒具は、私の紡ぐ偽りの言葉によって、鮮血のような深紅に染まります。

それが事実なのか幻想なのか……それは私が知る由もありません。なぜなら、私も世界の一部……私という虚言師ライアーに騙される対象なのですから。

「世界を欺くための布石は全て揃いました……では、参りましょう。誰かの世界を真つ赤な嘘で染め上げるために。……そして、私が交わした約束を果すために」

私は深紅の外套を翻し、再び歩きだしました。

史上最悪と謳われる虚言師として、私の地獄道を全^まつするため

……

「……では、まずは日常を乱す野暮な方々に、この舞台から退場して頂きましょう」

昨日の曇り空から抜け出せずに、ジメジメした夜を迎えた戌神の地。

私は和玖羅一族伝統の戦闘用衣装である、自身の黒髪が同化する袂たもとの無い筒袖の和服に、腰板のない細めの馬乗袴を身に纏う。

小手には防御用の鎖帷子くさりかたひらを筒袖の中に巻き、髪止めもゴムではなく、軽金属製のしっかりしたものにし、底に軽量硬度の金属板を仕込んだ足袋たびを履く。

そして、懐や袖口、袴の隙間等には、必要最低限の武器を仕込む。

……今日は『新月の黒猫』と『晦月の遠呂智』の正体である伊達駆が、四谷の中央サーバーをハッキングすると指定した日。

この日の為に疑似ウイルスでのセキュリティホール改善も終了し、対ハッキング用ソフトも、今日の暁に染まる早朝に完成した。

今回は、遠呂智のハッキングと同時に逆探知を開始し、伊達家や四谷の本社ビル、戌神高校校舎など、遠呂智が関係する場所周辺に倭国の影人で編成した小隊を配備しているため、遠呂智の位置が判明した場合には、いち早く最寄りの部隊が強襲し、その間に他の部隊が合流して敵を叩く、一定範囲の索敵戦術を用いている。

そして現在、私は索敵範囲の中心である、サーバーがあるビル内に留まり、司令塔の役目を果たしているが、遠呂智の位置が確認されれば即座にその場に向かう。

そして必ず……その首を討ち取る。

「……………美空」

名前を呼ぶ声に、私は後ろを向く。

そこには背丈も服装も私と同じで、その闇に映える白髪を除けば同一人物にも間違えられかねない姿があった。

「姉さん、どうしたの？」

「百爪さんから連絡が入ったです。『第二、第三、第七部隊からの通信が途絶えた。警戒態勢を強めるべき』だ、そうです」

「……………そう」

私は返事をしながら瞳を閉じる。

第二、第三部隊は伊達家の周囲に配備された部隊であり、第七部隊は伊達家とこのビルの延長線上に配備されていた。

状況からみて、小隊を潰したのは遠呂智なのは間違いないだろう。倭玖羅本家に応援要求して、送ってもらった倭国の影人だったが、流石に敵も一筋縄ではいかないらしい。

しかし、遠呂智が指定した時刻には一時間ほど早い……………四谷のセキュリティ能力は、遠呂智もよく知っているはず……………ハッキングはハツタリで、元からサーバーを破壊しにきたのか？

「……………まあいい。こちらとしてはそっちの方が好都合だから」

私の目的はサーバーの防衛ではなく、両親の敵討ち……目標がこちらに近づいてくるなら、私はそれを待つのみ。
自分の腕が震えているのが分かる……これは強大な敵に向かうための恐怖か、それとも武者震いか……

「美空……私は……」

「分かってるよ、姉さん。姉さんは優しいから」

私は目を閉じたまま姉の躊躇いを含んだ声を聞き、そして遮る。
姉さんは人を傷つけることを嫌う……遠呂智かたきのことだって、少し深く関わりすぎたがために、刃を向けることに戸惑いが生まれてしまったのだろう。

「姉さんは純白の『盾』……無理にその力を使う必要ない」

私が目蓋を開くと、その視界には悲しそうな顔をした姉さんが映る。

それに対して、今の私はきつと鬼のような形相をしているだろう。

「奴の首は……『剣』である私が必ず討ち取る」

なぜなら、今の私は復讐に身を焦がす 鬼そのものだから。

私は倭玖羅本家の当主殿直々の命に従い、双子の少女が行う復讐に付き合わされる羽目になった。

百爪として名を知られている我にとって、これはつまらぬ任務と予想していた。

「だが……良い意味で予想外だ」

街頭もなき路地裏に入り込んだ私の目の前には、黒衣でその身を包んだ私の部下が、目立った外傷もなく意識を刈り取られた状態で何体も転がっていた。

これは敵の所業……数年前に忽然と姿を消した暗殺者『新月の黒猫』が唐突に姿を現し、その力をこのような形で現した。

「この好機……逃す意味なし」

あの黒猫の首を取ったとなれば、私が名により一層高名となり、世界に私の強さを示すことが可能だ。

私が自らの幸運を心中で歓喜している最中、私の足元に転がっていた部下の一人が動いた。

「……………うっ……………あ……………ひゃ……………くっ……………めさま？……………」
「む？ 目を覚ましたか」

未だ意識が混濁しているのか、呻きながら体を震わせるだけで、立つこともままならないようだ。

私は一つ息を吐き、呻く部下に黒い手袋を着けた自らの右手を差し出す。

「……ひやくつめ…さま…お気をつけを…やつは…化け物です…」

「うむ、承知した。奴と対峙する時は、細心の注意を払おう」

私の差し出した右手を掴もうと、まだまともに動かない腕を必死に伸ばしている部下に、私は溜め息混じりに述べる。

「……しかし、私に君達は必要ない」

私は差し出した手を、流れるように横へと風ぐ。

その刹那、私に伸ばされた部下の腕は突如として血を吹き出した。噴霧する鮮血が暗闇に妖しく煌めく。

アスファルトが黒紅色に染まる。

血染めの地にポトポトと落ちる、幾つにも切断された部下の腕「
だった」肉塊。

「いや、先程の言葉は訂正しよう」

『一瞬で腕を細切れにされた』という、自らの状況を把握できていない顔をしている部下を余所に、私は左手を夜空に掲げ、勢いをつけることなく振り下ろす。

「君達には、私の爪研ぎとして役立つてもらおう」

生きた爪研ぎは、私の爪によって血の大輪を闇夜に咲かせ、原型を残さぬ肉塊となって散った。

Flight 26 蛇と剣と爪の夜（後書き）

最近、KOTATHUという暖房器具に合体している夷神酒です。

久しぶりの更新……予想以上に時間が掛かっている私ですが、引き続き読んで頂けると有り難いです。

ラブもコメもない、バトルへ向かいます。ラブとコメを求めて見ている人にとっては

「ツマンネー」と思われるかもしれませんが、頑張らせて頂きます。

ちなみに、人気投票＋見てみたいシチュエーションですが、様々な人からいろんな意見を頂けて、私としては最高に嬉しいかぎりです 全部参考になります。

では、また。

次回の更新こそは早くしたい……（切実）

取り敢えず、自宅周辺にいらした野暮な方々には、『俺』によって多少強引にご退場願いました。

そして、現在は美海様と美空様がいると推測される四谷の中央サバーの在処へと歩を進めています。お二人があそこにいる確率は約八十%なので間違えはないでしょう。

因みに私は一人ではなく、隣には玲様がいらっしやいます。

「さて……貴方は嘘をどう定義致しますか？」

「なんだ？ いきなり」

「このような暗い夜道を黙って歩いていても虚しいですので、暇潰しとして貴方と議論を交わしたいと思ひまして」

「なるほど……なら、応えよう。嘘は真実の対義語だ。事実と反する情報事態も嘘の範囲内だろう」

「一般的で平坦で模範的で凡庸な解答ありがとうございます」

「……全く感謝してないだろう」

「いえ、私は世間で言うツンデレなのです」

「そうか」

「そうです」

「嘘だろ」

「嘘です」

私は嘘を隠すつもりなどありません。

玲様に指摘された嘘を、私は躊躇なく明かします。

「なら聞き返すが、嘘吐きのお前は嘘をどう定義する？」

「嘘吐きにそれを聞くのは失礼ですね」

私は眼鏡のブリッジを上げながら、横を歩く玲様の方を一瞥致します。

……玲様は『僕』の親友でございますし、私としても友好関係を維持したいと思っています。

なので私は視線を進行方向に戻した後、ゆっくりと口を開きます。

「……嘘とは一番手短な道具ですね」

「道具か」

「はい。嘘はこの世界に蔓延していますが、危害はありません。むしろ人間関係を築く上で、重要な道具ツールでございます」

冗談、お世辞、嘘も方便、法螺、言い訳、知ったか振り、創作物フィクション語……人は生活の中に多くの嘘を吐きます。

ですが、それらの嘘は人として普通の事であり、虚言師の嘘とは訳が違います。

「その道具は、使用方法によって、自らを護る道具アーマーにも、敵を駆逐する道具ウェポンにもなります」

「なるほど」

「……などというのは全て戯言で、嘘に定義などありません。嘘は

不明瞭不明確不確定なものなのです」

「なら、なぜ俺に質問した？」

「暇だったので意味もなく話を振らせて頂きました」

私の答えに玲様は少々呆れたようで、ため息にもならないように小さく息を吐きます。

しかし、私はそのまま無意味な言葉を続けます。

「ですが、嘘について一っだけ断言できることがあります」

「また嘘か？」

「いえ、虚言師の戯れ言と聞き流すも、一興として耳に残すのも貴方の自由でございます」

所詮、私を嘘吐きと知っている方に私が真実を申しても、心から信じることなど不可能です。

それを理解しながらもなお、私は言葉を吐きます。

「世の中には、吐いていい嘘と悪い嘘があります。その線引は曖昧ですが……私は思うのです。一番吐いていけない嘘は……………」
「……………」
「……………」

私が足を止め、言葉を発することを中断したことを気づいた玲様は、ご自分も前進することを止め私の方に視線を向けます。

「……どうやら、不毛な雑談は目的地に着く前に終了しなければならぬようでございます」

「つまりは敵が来た、と言うわけか」

「」名答でございます」

私は玲様と談義を交わしながらも警戒を怠らなかつたのですが、後方から普通とは異なる速度で接近してくる足音を感知いたしました。

なので、私は後ろを振り返り一歩踏み出し玲様に背を向けます。

「玲様は先に目的地に向かってください」

「なんで俺が先に行くことになる？ 普通ならお前が行くべきだろう」

「つまりは玲様が足止めして頂ける、と言うわけですか？」

「」名答だ」

私の脇を擦り抜けて、私に背を向ける玲様。

確かに、私は極力早く美海様方の所へ向かわなければなりませんし、玲様は逃げに撤すればある程度の手練てだれでも問題はないでしょう。

……ですが、そのようなことは微々たるものです。

私は玲様の肩を多少乱暴に後ろへと引っ張り、私の後ろに引き倒します。

「ッ……なにをする」

「それは私の台詞でございますよ。ここで勘違いしないで頂きたいのは、私は貴方の実力を信用していない訳ではございません。しか

し、この場に貴方を残すということは、残念ながら無理でございます。そのようなことをいたしましたら、私は『僕達』の存在意義を否定することになりますので」

『僕達』の存在意義……それは私の周りにいてくださる皆様をお守りすること。

この場に玲様を残すということは、『玲様をお守りすることを断念する』ことに繋がります。

『僕』は勿論、私もそのようなことは望んでいないのです。

「玲様、貴方が私の存在を認めてくださるなら、先に向かってください」

「だが……」

「私はあなたに『虚言』を使う気はありません。しかし、嘔吐きにこれ以上本音を言わせないで頂きたい」

「……分かった。後から来い」

「了解致しました」

玲様は私の願いを聞き入れ、目的地の方向へと走り去ってくれました。

私はその足音が遠ざかるのを確認してから、深紅に染まった黒皮の手袋をキツチリとはめ直します。

そして一言。

「……やはり、私は嘔吐きですね」

正確に言えば、私は嘘を吐いたわけではありません。

私は玲様に言いませんでした。後方から迫る手練が玲様の手に余る……つまりは『玲様が残ってもすぐに殺けされてしまう』ということなのです。

聡明な玲様のことですので、私の態度からその事実気づいたのかも知れません。

その上で、私を残して先へ向かわれたのなら十全でございます。

それは玲様が私のことを信用して下さっているということなのです。

ご友人とはいえ、この嘘吐きを信頼して頂けるなど感無量でございます。

「ならば、私としても嘘吐きらしくその信頼に答えましょう」

私は追跡者がいらっしやる暗闇を見据えながら、自分自身の舌を出します。

赤い舌。

赤い朱い舌。

赤い朱い丹い紅い緋い茜い深紅い生命い業火い警告い血肉い嘘い舌。

「……Omnes una manet nox……」

私は重ねる。

意味のない言葉羅列を重ね、来世への罪を重ねる。

「……私達全てを同じ夜が待つ」

嘘吐きは欺く。

三流の嘘を一流のように欺き、現世の罪を欺く。

「では始めましょう……いや、既に始まっていますか。虚言師による疑心の戯曲は」

虚言師は謳う。

現実さえ歪める嘘を謳い、前世の罪を捻曲げ謳う。

所詮、嘘ですが。

Flight27 アカイウソツきと嘘の議論(後書き)

……いやあ、投稿スピードが遅れる遅れる。私のような青二才以下の作者の作品を待っていてくれる読者の皆様には、とても悪く思っています。

『次回は早く投稿する』とは言いません。確約できませんから。ですが、この物語は必ず最後まで成し遂げると確約しますので、これからお願いします

私は嘔吐きでございます。

口から意味のない言葉を吐く私には、『僕』のような驚異的な脚力も、『俺』のような暗殺者としてのスキルもありません。

全ての『技術』はこの身体に備わっておりますが、それを扱う『技能』を私は持ち合わせてないのです。

ですから、私は目の前の夜闇に潜んでおられる敵方に対しても、私の代名詞である『虚言』で対応をしなければなりません。

……では、初対面の方には最初は牽制けんせいから始めましょうか。

「お互いに姿を見せるべきでしょう」

暗闇に飲み込まれる私の言葉。

それが意味のある言葉だったとしても、闇に飲まれてしまえばその意味さえ消えてなくなってしまう。

しかし、私の言葉は意味のない空虚なものでございます。

ですが……いえ、だからこそ無意味である私の言葉は意味を持つのです。

「うむ……これが黒剣の言っていた術か。幻術や呪術たくいの類とは異なるようだ……言霊による精神への誤認、それに伴う間接的肉体操作と考えられる」

猛獣の唸り声を彷彿とさせる声とともに現われましたのは、闇を上塗りする漆黒のシルエット。

そのシルエットは十メートルほど先ですが、その巨大な体軀はこの距離でさえ威圧感さえ覚えます。

そして、黒い帽子に黒いスーツ、黒い手袋に黒い革靴……まるで『俺』のような、闇に溶け込む全身黒尽くめ。

「……晦月の遠呂智か？」

「いえ、私はただの嘔吐きでございます」

「本人のようだな」

私の言葉は完全にスルーされてしまいました。

ですが、私の言葉に反応して頂けることだけでも十分でございます。

「私のような三流にも満たない嘔吐きの名をご存知とは、貴方と私は個人的な交友関係がありましたでしょうか？」

「いや、君と私は初対面だ」

「それでは私の記憶に間違えはなかったのですね。些か不躰ぶしゆげでございますが、お名前をお教え頂けますか？」

「……その必要はない」

私の願い事は却下されてしまいました。

その代わりに敵様は、スーツのポケットへ両手を入れ、それと同時に膨れ上がった圧迫感が私へ向けられます。

「君は私に討たれるのだから」

ポケットから手が抜かれると同時に、その手から幾つかの鋭い光が私に目掛けて闇を裂く。

私は運動能力の低さを動きを見切ることでカバーします。

光は刀子系チのナイフ、数は八つ、速度は弓矢程度アロー、時間差はなし、軌道はほぼ直線。攻撃範囲は横に広く縦に狭い……この通路上での最善の回避方法は低姿勢。

一秒以内に回避方法を割り出した私は、羽織っている深紅の外套を脱ぎます。

そして迫るナイフを『回避せず』に、外套を横に薙ぐ。

私に当たる軌道を描く六つが分厚い外套に突き刺さり、その動きが『止まる』。

「……ッ」

前方から聞こえる舌打ち。

外套で止めなかった二つのナイフが私の左右を通り過ぎる瞬間、その軌道が私に向かって『曲がる』。

私は後ろに一歩下がることでそのナイフを回避し、同時に手にしている外套を二本のナイフが交差する点へ振り下ろし地面に叩き落とします。

結果として、私の外套はズタズタのボロボロになってしまいました

た。

この外套は衣裳棚の肥やしとして何年間も世話になってきたのですが……非常に残念です。

更に、刺さったナイフは誰も触れてもいないのに外套から引き抜かれ、空を飛び敵様の手へ収まりました。

「……いやはや、流石でございますね。糸境しきょうと刀擲とうてきを組み合わせ、投擲後の軌道変化や糸による拘束を中心とした暗殺術まやわ『紛』を習得し、倭玖羅一族でも切れ者と称される……あ、名前の由来はこの外套を見ればなんとなく理解できますね、百爪様？」

私が手にしている外套には、まるで猛獣の『爪で引き裂かれたよ
うな』鋭利な傷跡が残されています。

ですが、暗殺術『紛』の本命は八本の『刀』ではなく、その後
張り巡らされる『糸』であります。

私が百爪様の思惑通りに回避していれば、この通路に糸が張り巡
らされ、私の動きは著しく制限され……私の身体は外套と同じ目
あっていたことでしょう。

本当に、恐ろしい限りでございます。

「……君は無知を装ったか？」

「装う、とは失礼ですね。私は貴方の初撃を観察して、その原理や
意図を理解して、自身の知識から検索した結果を申したまでです」

この通路上では回避範囲が限られます。

その中で回避範囲が残されている場合、それは回避方法があるの

ではなく、相手が誘い込んでいると考えるのが嘔吐きの捻くれた考
え方でございます。

それに百爪様の纏う空気には手練てだれの気質があり、もしも初撃ドローイングナイフが本
命なら、本数を増やすことで回避範囲を綺麗に塗り潰すのがセオリ
ー。

それがないということは……簡単なことでございます。

「嘔吐しているのか？」

「私が嘔吐きであることを認知しているとはいえ、浅薄な判断です
ね。嘔吐きを名乗るからには、正確な記憶力と確実な観察力、何事
にも動じない度胸は最低限必要なのですよ」

私は使い物にならなくなった外套を足元に捨てます。

残念ですが、不要なものは捨てるしかないので。

『私が身につけなくなった』外套は、早々と鮮やかな深紅を失い、
最後には衣裳棚の奥から取り出した時と同じ、味気のない黒へと色
を変えます。

その変化の一部始終を観察し終えてから、私は動きを見せない百
爪様に対して、一步前に踏み出します。

「さて、ある程度お互いに相手のことを理解しました所で、私の親
切心から一つだけ言わせて頂きます」

百爪様は私の言葉に対して、ナイフを手にしながらも一切動きま
せん。

深く被られている帽子に隠れて表情は見えませんが、様子を見る

ために私の言葉を聞いているようです。

暗殺者として、自分の初撃を払い除けられることは致命的なことですので、警戒するのは当然のことなのでしょう……ですが、その行動は嘔吐きに対峙する場合、それは更に致命的な矢陥となります。

「私は嘔吐きでございます。ですので、私の言葉を鵜呑みにするのは危険でございます。しっかりと私の言葉を理解して考察して判断して、虚実か真実かを自らの判断でお答えください。そして“この場の刃物はとても重い”」

「ッ!？」

私の言葉が終わると同時に、百爪様の態勢が一気に崩れます。

まるで手が地面に引きつけられたように……手にした刃物ナイフが急に重量を増したように。

私の隙を討つことに意識を向けながら、私の虚言を聞き入れたようです。

片暇で嘔吐きの話を聞いてくださるとは……まさにいい鴨です。

「貴方と私は同じ夜を迎えておりますが、私と貴方の迎える結果は違つという事です」

「」のッ」

「ああ、忘れていました。“私達は刃物から手を離してはいけません

ん”」

「くッ」

『とても重い刃物』から『手を離せない』百爪様は、自らの手に

阻まれて、立ち上がることさえ許されなくなりました。

刃物を一切所持してないので自由に動くことができる私は、先程の動きでずれた眼鏡の位置を修正しながら、百爪様に背を向けます。

「……何の真似だ？ 私に情けを掛けるか？」

「いえ、残念ながら私は貴方にそのような義理はありません。しかし、私には時間がないのです。更に、貴方を有効的かつ合理的に殺害する手立てを私は持ち合わせておりませんので、この場合は貴方を放置させて頂きます」

「すぐに後悔することになる」

「ご忠告、深く心に染みます。確かに、貴方は私の『虚言』の原理を理解しておりますので、約十分後にはその束縛を看破されてしまうでしょう。ですが、私からも少々言わせて頂きたいことがあります」

この期に及んで百爪様が、馬鹿の一つ覚えのように私の言葉を安易に聞き入れることはないと思われませぬ。

ですが、私は宣言しなければなりません。

自らが世界の悪性腫瘍であることを理解している私は、その危険性をお教えする必要があります。

「私は嘔吐きでございます。しかし、約束いたしましたでしょう。私は貴方が私の嘘を見抜く以上に、貴方を見抜き見通し見透かし、そして貴方を欺かせて頂きます」

「……」

百爪様からのご返答はないようなので、私はそのまま歩きだします。

玲様は先に向かっておりますし、美海様と美空様も待たせてはいけません。

救う者。

救われる者。

破壊する者。

消えゆく者。

そして……嘘を吐く者。

五名の役者が舞台に揃った時、物語は終演を迎える。

Flight28 蛇を狩る暗殺者、爪を止める虚言師（後書き）

今回は割と早く更新できました、夷神酒です。

しかし、話が短いのが心残り……内容を取るか、更新を取るか……
悩みの種です。

あと、蒼叡様から誤記のご指摘がありました。

Flight5より

『RPGP』x

『RPG』

上記の通りに修正させて頂きました。

それでは、また。

予告時刻よりも早く動きだした遠呂智と、我々の先行部隊が接触してから、既に五十分ほど経過していた。

そして戦況は……こちらが圧倒的に不利な状況に陥っていた。

「ッ！ ……目標に接触した第六部隊、連絡が途絶えました」

「……百爪は？」

「未だ消息不明……返答ありません」

最初は淡々と報告をしていた者達も、徐々に声に焦りが出始めてきた

最初に展開していた部隊の過半数が遠呂智との接触後に連絡が途絶えている。

そして、頼りとなるはずの百爪が早々とその姿を消した。

そして、その犠牲に比べて敵の情報があまりに少ない。分かっているのはその姿と、連絡の途絶えた部隊の位置や時間などを考慮した結果から導きだされる、遠呂智は一定の速度で着々と目的地へ近づいてきているという事実。

「第五、第八部隊が合流。……黒剣、ご指示を」

「……戦力を集中して籠城戦に持ち込む。残存部隊にも帰還するよう指示を出せ」

「了解しました」

このまま先手を打ち続けても、遠呂智は確実に来る。

しかし、敵は一人……いや、二人か。和泉先輩と一緒に行動しているようだが、あの人は闘気や覇気の部類が全く感じられない……戦力外とみていいだろう。いざという時はすぐに消せばいい。

ともかく、多勢で囲まれ攻め落とされるという心配がないこの状況において、周到に罠を張り巡らせて迎え撃つ方が優れた戦略といえる。

この場に誘き寄せるということは、遠呂智に容易なハッキングの機会を与えるということになる……しかし、逆にいえばハッキングの間に隙ができる可能性もある。

「サーバーの様子はどうか？」

「本社を含むサーバーに接続可能な回線を随時スキャンをかけていますが……未だハッキングらしき接続は見られません」

「そうか……引き続き警戒を怠るな」

姉さんには単独で消息を絶った各部隊の捜索にあたってもらっているが……戻ってきてもらおう。

「この指揮を姉さんに任せ……私は直接遠呂智を討ち取りに行く。

「それにしてもわざわざココに攻め入ってくるとは、ハッカーの行動としては予想外だな……ん？」

ふと、先程から変化のない状況を表示し続ける画面の右下で、唯一変化し続ける時計に目をやる。

味気ない黒字で現在時間を表示するオマケ機能は、6:59を表示していた。

それを見て思い出すのは、この戦いの始まりとも言える遠呂智の言葉。

『7:00・00”00から8:00・00”00に四谷の中央サイバーにハッキングをかけます』

無駄にコンマ単位まで指定された宣戦布告の時刻。

そう、六時から七時を跨ぐ時　赤い蛇が、上げた鎌首を目標に振り下ろす時刻。

時が変わる瞬間

ハッカー
侵略者の蹂躪が始まった。

「ッ!?　第二ブロックに通常とは異なるアクセスの形跡……ハッキングですッ!!」

「クソッ　律儀なやつだッ!!」

私は一言毒を吐いてから思考に走る。

一体どこからハッキングを？ ヤツはまだこの場に到着していないはず……もしや例のウィルスの仕業か？

いや、サーバーを幾度も検索した結果からも可能性は限りなく少な
いやッ今は推測より結果に対処すべきッ！

「逆探知だッ！！ 早く元をたどれッ！！」

「そ、それが……」

「なんだッ！ アクセスが切れないかぎり問題ないだろうッ！！」

画面を噛みつくように見つめ必死にキーを打ち続けていた一人が、その動きを止め私へと振り返った。

その顔から読み取れる感情は……限りない絶望感。

「四谷のネットワークへのアクセス数が急激に上昇……処理が間に合いません」

「なっ……そんなものバックグラウンドで処理すればいいだろうッ！！」

「それでも……一度に何千万というアクセスは無視できませんッ！！」

「……は？」

桁外れの数字にただただ愕然とする。

どんなことがあっても、はじき出されるべきでない膨大な数字は、そのままサーバーの過負荷を示す。

これは完全なDOS攻撃……しかし、その可能性は『間違った情

報しか流れていなかった』という事実の下に切り捨てた確率。

想定外の突然の状況に、この場合全体が混乱し錯乱する……私にもこの状況で冷静な判断はできない。しかし、一つだけ分かることがある。

これは人為的な 遠呂智の仕業だということツツ ！！

「クソツ……アクセス処理を最優先にしろッ！！」

「しかし、それでは遠呂智のハッキングへの対応が……」

「守るべきサーバーがリリースしたら元も子もないだろッ！！」

私の言葉に反応して、止まっていた部屋全体が動き始める。

回線を入れ換えてアクセスを予備のサーバーに流したり、アクセス制限を追加してサーバーの負荷を下げる……だが、この状況でそう上手くいかない。

「……ダメですッ！！ こちらからの操作を一切受け付けないッ！！」

状況は最悪。下手すればハッキングでデータ破壊どころか、サーバー自体がスクラップになりかねない。

「クソツ……引き続きアクセス処理を最優先しろ。私はサーバールームに行く」

「しかし……」

「口答えより手を動かせ。私に同じことを言わせる気か？」

「……了解しました」

チャンスはこの一度きり……伊達駆という人物は、普通の条件下においてそうそう倒せるレベルの相手じゃない。

それには新月の黒猫や晦月の遠呂智の強さ関係しているが、一番の理由として挙げられるのは、その後ろに存在する『四谷』という巨大財閥。

そして、問題となるのは今回の件……遠呂智のハッキング行為が当主に容認されているということだ。

理由を当主に聞いたものの、巧くはぐらかされた。しかし、その対応から遠呂智が『私達の敵でも、四谷の敵ではない』であることを意味し、同時に今回以外は“伊達駆を攻撃すること”四谷を敵に回す”という事実等式を成り立たせる。

まだ経験の浅い私達のような暗殺者が、顔の知られた巨大な組織ともいえる財閥にかなうはずない……だからこそ、遠呂智自身が提案したこの勝負に勝たなければ、今後復讐の成功率はゼロに等しくなる。

「……勝たなければ……復讐できない……私が今まで生きてきた意味がない」

私は一人確認するように呟いてから、このビルから数キロ先に存在する、同じようなビルの最下層、サーバー本体の在処へと足を進め……止まった。

それは、突然目の前に現われた黒い影に、進路を遮られたから。

「……なんだ、帰還したのか。百爪」

まるで壁のように立ち尽くす黒尽くめの大男を見上げる。
下から見上げて、目深に被った帽子の影でその表情は見えない。

「……黒剣」

「遠呂智と接触後に消息を絶つたらしいが、無事だったのか」

「外傷はない。奴のまやかしに化かされて足止めをくらっただけだ」

確かに、一見して彼のスーツには乱れや汚れはなく、激しい戦闘をした様子は見受けられない。

多分、私が初見で受けた、言葉による幻術のようなものだろう。

「まあいい。それで、何故戻ってきた？」

私は辛辣とも取れる言葉で、百爪に問う。

百爪は私を知る中でも実績のある手馴れであり、手馴れとしてのプライドも持ち合わせている。

そんな百爪がまったく手を出せなかった事実……そこから『プライドを傷つけられながらも、易々と帰還する』という結果が生まれるのはおかしい。最低でも、帰還する前に一度は遠呂智に接触して、多少なりとも手合せするはずだ。

その不信感を私は疑問符で伝えた。

「……なに、態勢を立て直すためだ」

「そこまで手間取るのか」

「ああ、君も対峙したなら分かるだろう。あの言葉は偽物だ。しかし、偽物でありながらも本物を打ち消す」

「……」

確かに、人の行動を縛る遠呂智の言葉は脅威だ。

実践経験豊富な百爪なら、対応できるかと思っただが……百爪でも万全な状態で挑まなければならぬほど、奴の言葉は強い力を持つらしい。

そして、わざわざ態勢を立て直すためにここに戻ってきた百爪には、それを攻略する心当たりがあるということ。

「私に何かできるか？」

復讐の為なら藁わらだろうが灼熱の鉄だろうと掴む決意を私は持っている。

私の問いに、一瞬の間を空けた百爪は

「……うむ、しいて言うなら」

その一瞬で

「君にはこの戦いから退場してもらおう」

私の意識は漂白された。

「ア　　ガッ
」

胸部の激痛

突き刺さる拳

空気が抜ける

肋骨が軋む

息ができない

倒れる身体

力が入らない

霞む視界

闇に喰われる意識

「なに、後の指揮は私が受け持つ。君は問題ないから、少しの間眠
っていてくればいい」

低音が脳に響く

離れる黒い影

途切れる意識の中

甦る記憶の中

私が見たのは

私が視たのは

親を失った悲しみに泣きじゃくる幼き私と
ずっと傍にいてくれた姉の姿だった

.....遅くなってゴメンなさい

この台詞を、私は何度言ったことか。自分自身でもよく分かっているし、できることならこの状況を打破したくて必死に藻掻いている日々を過ごしながら本分である学生生活をこなしている身としてはなかなか思い通りにことが運ばないのが自分から見ても（中略）

取り合えず、ゴメンなさい

そんなダメダメな神酒も、評価ページに書かれた隠匿様の優しすぎる言葉に泣きそうになりながら、必死に執筆しました。

それにしても読者が作者に与えてくれる力と言うものは凄いですね。染々感じました。

私の作品を読んで頂ける喜びを力にかえて、この作品を頑張って書き続けたいと思います。

それでは、また

Fligitt30 爪と盾が交わる時、怒れる蛇は……（前書き）

……前回より早く更新できた 目標が低い

Flight30 爪と盾が交わる時、怒れる蛇は……

急げッ！！

速く速くもつと速くッ！！

私は闇夜を斬るようなイメージで一直線に走る。

イヤな予感……胸騒ぎがする……この感じは、妹が大ケガした時と一緒だ。

勘違いならいい……私は胸騒ぎが示すほうへと一直線に向かう。
見えづらい電線を一気に跳び越え、小さなマンションの屋根に着地し

「ッ！！」

突然、目の前に表れた巨大な黒い影。

反射的に右袖口に隠した短刀を逆手に持ち、影を切り裂く。しかし、甲高い金属音だけが響く。

初撃が防がれた瞬間、もう片方の腕を振るい上げ、袖に仕込まれた数本のクナイを正面に飛ばす。

同時に、短刀を手放し片足を軸に体を右へ一回転させ、その遠心力で右裏拳を放つ。

そして影に対して全体重を乗せた掌底を体勢の崩れた影の中心へと打ち込む……が、影は後退することで私の攻撃範囲から脱していた。

「ッ!」

「突如の襲撃に反応し、なおかつ一瞬で四手を繰り出すか……これほどの力を持つならば、盾の名は相応しくないのではないか?」

よく見ると、その影は表情の見えない仲間だった。

私の投げつけたクナイをすべて片手で掴み取り、もう片方の手には私の斬撃を受けたらしい四本もの小刀が爪のように握られている。

「驚かせるな……です。いきなり目の前に表れないくださいです」
「これからは善処しよう」

私は焦りすぎて乱れた口調を、いつも通りに戻すです。

……それでも、胸騒ぎは一向に治まらないです。

「で、なにかようですか?」

「君の妹に、君を早急に連れてこいと言われたのだ」

「え、そうなんですか?」

「そうだ。どうやら遠呂智相手にてこずっているらしい」

意外なことに私は驚いたです。

私が頼りないのもあるですが、美空は自分で殆どの仕事を成し遂げ、私をあまり頼りにしないです。

そんな美空が私を呼ぶなんて……

「……どうした。こうしている間にも遠呂智は黒剣の元へと近づいてきている。早く行こう」
「はい、分かったです」

百爪さんは、さっきまで私が向かっていた方向へと跳んだです。見た目とは裏腹に身軽な動きで民家の屋根に跳び移った百爪さん。私はさっき手放した短刀を回収してから、その背中を追うように跳ぶです。
そして

「
四斬爪しよんめづ」
九十九巡りくじゅうじゅうきゅうめぐりッ！！」

百爪さんの左手が動いた瞬間、手にした短刀を含め、袴や袖口、足袋などに仕込まれた武器を一齐に投げ、そして打ち出す。黒い左手から放たれ、不規則な動き迫り来る四つの刃。そのすべてを圧倒的な数によって打ち落とす。
そして、数多く打ち出された武器は追撃のみならず容赦なく百爪さんへと迫る……しかし、私が打ち出したすべて武器は、命中する寸前で不自然に止まり、瞬時に細切れへと形を変える。

一瞬の攻防……私はその標的から目を離さずに着地をします。

「……なにをする」

「それはこっちのセリフです。先に攻撃してきたのはそっちですよ」
「……」

「仕方ないですよ。それがあなたの本当の任務なんですから」

私の言葉に、百爪さんの殺気が膨れ上がるです……バレたら隠す必要はないってことですか。

私は唯一投げなかった背中のカナイを手に取り、追撃の構えを取るです。

「その様子、本当に知っているらしいな……一つ聞こう。どこからの情報だ？」

「怪しい人のいかかわしい情報だったんですよ。私も貴方の話を聞くまでは、ほとんど信用してなかったんですけどね」

和泉センパイに屋上で渡された一枚の紙に、それは書かれていたです。

でも、私は仲間を信じてさっきまで行動してたですけど、今は和泉センパイの情報を信用することにしたです。

「だって、『増援として来た』百爪さんの真の目的が『一族に災いをもたらす私を殺しに来た』なんて、信じられなかったですよ……さっきまでは」

「……」

倭玖羅の一族が衰退しているのは知ってたです……そして藁にも縋る思いでおこなった占いの結果、私を殺せば一族は災いから抜け出し見事に復興する……そう、占いにでたそうです。

……今更この白髪がそういうことになるなんて、思いもしなかったです

それも、百爪さんの言葉を聞くまでは、ですけどね。

「美空は強情で意地っ張りな妹です。そんな美空が『てこずってる』ぐらいで私を呼ぶはずないんです。美空が私を呼ぶ時は、任務完了か任務失敗で撤退する時……すべてが終わった時だけなんです」

「そんな不確定な経験で、そこまでの確信を持つとは……流石姉妹といったところか？」

「誉めてくれてありがとうございます」

敵を騙すならまず味方から……そんなのは、奇策としては良策でも策としては愚策……私を騙す理由は数えるほどしかないですし、一番有力なのは、私の隙を作り出すためということです。

あとは推測ですけど、私の目の前に表れたのも奇襲だったです。そう考えれば、私の短刀に対してわざわざ四本もの爪で止めたのも、『襲撃のために最初から出していた』なら自然です。

そして実際、百爪さんは私を殺す気で攻撃してきた。

「ふむ……白盾の噂を耳にする機会はありませんでしたが、予定より手間取りそうだ」

「手間取るだけですむと思ってるですか？ 確かにあなたは強いで

すけど、防御と逃亡に撤すればやられる気はしないですよ？」
「うむ……確かに、その実力なら叶わないことではない」

こうして会話してる間も、意識は敵を警戒し続けてるです。
相手は実力も経験も私以上です……この場はなんとか逃げて、美海にこの情報を伝えて……

「しかし……人質がいれば、素早い子兎もおとなく捕まってくるか？」
「ッ」

一瞬、自我を失いかけた。
いつの間にか一步を踏み出していた足を、元の位置に戻す。
落ち着け……落ち着くです。これは嘘かもしれないですし、ここで無茶しても意味がないです……今は冷静でいるべきです。
ただ、その黒ずくめの姿を目線で射殺すように睨み続けるです。

「一人前の殺意だ。いつもの気の抜けた気配は演技か？」
「……」
「沈黙か……まあいい。私は私が与えられた任務を果たすまで」

ゆっくり掲げられた黒い片腕……その手が振り下ろされる時が、
攻撃の合図です。

ここで逃げれば、美海に危害が及ぶ可能性があるです。
でも そんなことを姉の私が許すわけがないです。

「痛いのはイヤなんですけどね……やるんだったら全力でやらせていただくです」

「ならば、私もそれ相応の覚悟で相手をしよう」

私は手にした短刀を逆手に持ちかえ、姿勢を低く構える……武器はこの短刀と小手の鎖帷子くさりかたひら、そしてこの腕だけ。さつきみたいな派手なことはいけません。

ここは、敵の出口を見るのが最善策……でも、美空の安全を確保するには、一秒でも早くやるしかないです。

それは一瞬の思考 瞬間の判断 刹那の無防備。

「 早々にけりをつけよう」

振り下ろされる手。

同時に逆の手が振り上げられ、その手から四つの光が打ち出されたです。

それは百爪の十八番『紛まぎれ』。変幻自在の軌道による回避不能の刃。その刃に対して、私は低姿勢のまま前方に全力で跳ぶ。

「…………ツ……」

一つは短刀の峰で弾き上げる。

一つは右掌の帷子で防ぐ。

残り二つは……左手で掴むッ！！

「ッ……はアッ……！」

手のひらを冷たい痛みが走る。

その痛みが現実味をおびる前に、その刃を飛んできた方向へ投げ返す。

「……無駄なことを」

飛んできた刃物は不可視の糸によって操られているため、私が投げ返した小刀は軌道を変えてコンクリートの地面に落ちる。

しかし……そんなことはすでに知っているッ！！

軽い金属音が二つ鳴った時、私は既に目標を間合いに捕らえていた。

「確かに、早くけりをつけないとですよね」

手にした短刀に力を込める。

突き出すのは先端、目標は百爪、穿つはその心臓いのちッ！！
私は自身が出せる最高速の突きを

「無駄といつただろう？」

全力で突き出した刃は、目標に触れることなく止まる……いや、止められた。

まるで右腕だけが空中に貼りつけられたようにびくともしない。

「ッ!？」

「紛の原型である糸境しきょうとは、元来、糸のみを指で操り対象を捕らえる拘束術。未熟な者は糸の先端に錘をつけるが……私がその程度の実力だとはおもうまい？」

「ッガア!？」

分厚い黒靴の爪先が私の体を突き刺す。

その力によつて体が宙を舞うが、固定された右腕の枷がそれを許さず、肩が鈍い悲鳴を上げてすぐに重力に引かれ落とされる。

……『紛』は本来八本の刃を飛ばすが、さつき私に飛んできたのは四本……くッ、小刀を飛ばした左手は右手の糸を隠すためのフェイクッ!!

地面に倒れることも許されず、右腕にぶらさがるような無防備な

体勢をとっている私の前には、私を殺す刺客。

「さて、私としては任務を完遂してから、黒猫と手合せ願いたいのだが……痛む死か、痛まぬ死か、君が選べ」
「……………」

絶望的な状況……でも、私は死ねない。
美空を一人にするわけにはいかない……妹に絶対に淋しい思いをさせないって決めたから。
だから、私は最後まで諦めない。

「…………死ぬのはあなたの方です」
「そうか……それは叶わぬ願いだ」

振り上げられる右腕、その手には四つの刃。
それが振り下ろされる時、私の命は消え落ちる。
防ぐ力は残ってない、回避することも不可能。
だから、私は目の前の敵を睨みつける。
眼力だけの無駄で無意味な抵抗、それでも睨みつける。
黒い影を、暗殺者を、私を殺す者を。

ふと、私の脳裏に場違いなことが浮かんだ。

目の前の黒い影は確かに黒い。でも、私は見たことがある……
この黒より深い黒を。

あの、すべてを喰らう漆黒を……

「少しどいて頂けますか？ 百爪様」

その声は不意に……本当に不意にかけられた。

「ぐっ!？」

私を殺す黒い影は、突然目の前から消えた。

同時に右腕を絡みつくような拘束感も消え、私は地面に倒れこむ。私は驚いて視線を前に戻す。

そこにあるのは黒い影。漆黒のスーツを纏った背中に、闇夜の中でもくつきりと浮かぶ深くしなやかな黒髪。

「セ、センパイ？」

「……フツ……敵に回った私をまだ先輩と呼んで頂けるとは……」
『僕』もいい後輩を持ったものですね。いいでしょう、私は貴方の先輩です」

それは紛れもない伊達センパイの背中だったです。

前に見せた無防備な背中じゃないけど……その背中には不思議と私に安心感を与えるです。

そして、その背中の中にはさっきまで目の前にいた百爪が両手を
使い防御の姿勢を取っていたです。

「貴様……なぜここに？ ハッキングは進行しているはずだ」

「あちらはあちら、こちらはこちらでございます。私もただ通りすがっただけとは申しません。私は確固たる目的を果たすためにこの場に来ました」

いつの間にか両手に八本の爪を装備し、既に臨戦体勢を整えた百爪。

右肩が外れてまともに動けない私。

そして、私を庇うように突然入り込んできた伊達センパイ。

「……まあ、いい。黒猫、貴様を狩るのも私の目的の一つだ」

「失礼ですね、この眼鏡をかけている間、私は遠呂智でございます……まあ、構いません。私は後輩を可愛がって頂いたお礼はきっちりとお支払いするだけです」

睨み合う二人……さっきまでの空気とまるで違う。あまりに冷えすぎて、逆に体が嫌な熱を持つです。

それでも、私はこの二人に釘づけにさせられる……異様な緊迫感が私の視線を独占させるです。

そして、なにより……

「貴方には選択する権利がございます……一瞬で逝きたいか、一瞬でも生きたいか……どちらがお望みでございますか？」

センパイをまだよく知らない私がかかるほど明白に

疑う余地がまったくないほど確実に

嘔吐きとしては失格としか言えないほど露骨に

センパイが怒ってることに、私は驚きを隠せなかつたです。

Flight30 爪と盾が交わる時、怒れる蛇は……（後書き）

さあ、今回の分かりにくい三つ巴を簡潔に解説タイム。

百爪 和倉の増援……と思いきや、一族の命令で災悪をもたらす者を殺しに来た暗殺者。

美海 一族の占いで『黒き死神と対をなす白髪の死神が一族に災いをもたらす』という結果が出たために、百爪の襲撃を受けた。

遠呂智 ハツキング中にもかかわらず登場。目的や真意は不明。

しかし、嘔吐きのくせして感情丸出しでぶちギレ中。

次回はハツカーが活躍します……たぶん。

では、また。

F l i g h t 3 1 黒き剣に語る者とは・・・(前書き)

今回はあの人をめっちゃくちゃ語ります。

夢を……見た。

「パパは？ ママは？」

それは懐かしい思い出。

「パパとママは……もういないんです」

「そんなわけないよ。だって、帰ってくるっていったもん」

「それでも、帰ってこないんです」

それは悲しい思い出。

「美空は泣いていいですよ」

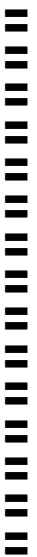
「ぐずっ……美海は……悲しくないの？」

「ッ……悲しいですよ。でも、私はおねえちゃんだから泣けないです。だから、美空が私のぶんまで泣いてくださいです」

それは涙の思い出。

「そしていっぱい、いっぱいいっぱい泣いたら、その後は笑うですよ。その時は私も一緒に笑うです」

とても悲しくてとめどなく涙を流したけど……私は孤独ではなかった。



……痛い。

体中が鈍い痛みを訴える。

意識もはっきりしない……このままにもなければ、再び眠りについてしまいそうな気念わ。

しかし、誰かがそれを妨害する。

「起きろ。熟睡しているわけではないだろう」

声が聞こえた。

冷静というよりは平坦と言った方がしっくりとくる声。

私はまとわりつく気怠さを振り払い、なんとか瞼を上げる。

あ……眼鏡がない……まあいい、どうせ度^{タテ}なしだ。

「寝起きが悪いのは感心しないな。和倉妹」

寝起きで視界がぼやけてるためよく分からないが、やけに薄暗い部屋……ただ、カタカタとキーボードを叩く音がする。

ようやく視界の焦点があつてきた時、私の目線の先にあつたのは見慣れない背中だった。

しかし、この感情の籠もっていない声の主なら知っている。

「……い、和泉……」

「ほう、その状態でよく個人を識別できるものだ。しかし、年上を呼び捨てとは感心できるものではないな」

私に背を向けてキーボードを叩き続けるのは、遠呂智と行動を共にしていたはずの和泉玲だった。

私は警戒心を強め、構えを取ろうとした……しかし、それはでき

なかった。

後ろに回された両手首には、冷たく堅い感覚が巻きついていていた。両足にも同じような拘束が施されており、下手に身動きみじろすれば横たわる羽目になる。

なぜ私がこんな格好を……そう考えてすぐに思い出す。百爪にしてやられた私の愚行をッ。

「俺が来た時にはすでにその姿だったが……いや、正確には転がっていたのを俺が壁に立て掛けたと言っべきか」

いつの間にか和泉は肩越しに振り返り、横顔を見せながら私の方を見ていた。

その温度のない異様な目線に気圧され、私は反射的に合わせていた目を逸らす……そして、見つけた。

部屋の隅に乱雑に積み上げられた……黒づくめの仲間達を。

「なッ!？」

「なに、感電による気絶だ。心停止は確認したが一人もいなかった」「貴様……どこから入った。このビルは警備されているはず。」

「今更それを聞くか。そのようなことは最初に聞くべきことだろう……いや、混乱状態では仕方ないのか。ここは四谷の管理下であり、遠呂智が管理していた場所。多少の隠し経路や侵入者を追撃する小細工ぐらいあっても不思議ではなからう」

まるで当たり前のように言う和泉……しかし、この場所を当主に

教えられた際、黒猫や遠呂智の手掛かりがないかと隅々探したが、そんな経路は一つも見つからなかった。

だが、この男はここにいる。

遠呂智の関係者の中でも頭の回転は速いようだったが、体力や戦闘能力の低いと判断されたこの男が、このビルの周囲を警戒している者達を倒してこの場に来たとは考えにくい。

つまり、ここには遠呂智しか知らない侵入口が存在し、この男は遠呂智から教えられた経路を用いてこの場侵入してきた……和泉の言葉を鵜呑みにすれば話の筋は通る。

「しかし、その隠し経路は侵入専用一方通行であり、残念ながらビル外部の見張りは継続中だ。つまり、一歩間違えれば俺は袋の鼠だ」
「……つまり、私は脱出時の人質か」

「いや、侵入口があれば出口も一方通行のものがある。古い袋なら鼠が通れる穴が開いていてもおかしくはないだろう？ それに、こちらに刃を向けかねない者は人質ではなく爆弾だ。下手すればもろとも処分されかねない」

そんな愚行は特攻隊でもないかぎり行わない、と、正面を向き直しながら私の意見を否定した。

確かに、その考えは間違っていない。

しかし、この異常な非日常の中で間違っていないからこそ和泉の考え方は普通ではない。

「貴様、何者だ」

「なんだ、和倉妹。まだ分からないのか？」

私の質問に、今度は椅子を少し回して身体を半分ほどこちらを向ける。

驚きを装っているが、表情や口調からはまったくといって驚きを感じない。

それは片手がキーボードの上に置いたままなのに対し、もう片方の手が顎に当てられたり眼鏡の位置を直したりと忙しく動くため、その落差に妙な違和感を感じたからかもしれない。

私がそんなことを考えてる間に、和泉は淡々と口を開く。

「仕方ない……ならば、俺から質問という形でヒントを与えよう。

一つ、七時を回った途端に過剰アクセスがあった理由は？」

「……」
「それが答えなら、俺も黙秘させてもらう」

沈黙は金……ここで私がなにを話しても、なんの意味もないだろう。

しかし、ここでなにも話さなければこの状態になんの進展も望めない。

前者と後者を天秤にかける……そして、私はゆっくりと口を開いた。

「……D o sでサーバーをフリーズさせるため」

「半分正解。正解はサーバーをフリーズさせまいと必死にさせ、敵の動きを凍結フリーズさせるためだ。二つ、如何なる方法で過剰アクセスを起こした？」

「それは……遠呂智が隠し回線を利用して……」

「不正解。隠し通路の話聞いて隠し回線に行き着いたことは感服しよう。しかし、その回線はこと四谷サーバーだけを繋ぐ特殊な回線だ。あと、先に言っておくが、この過剰アクセスは組織的に行ったわけではない」

本当に隠し回線があったとは驚きだ……しかし、それは不使用、そして一般回線からの大量アクセスと組織性の否定……つまり、遠呂智は一般回線から単体でD o sを行ったらしい。

だが、どう考えてもアクセス数が多すぎる。

一瞬で何千万アクセスを叩きだすには、それに見合う人員と接続端末がなければならぬ。

結論を言えば、今回の規模の過剰アクセスを起こすとしたら、一人でもどうにかなる数字ではないのだ。

どう考えても不可能……いや、実際に起こったのだから不可能ではなく不可解。

何度思考を繰り返しても私が出す結果は……理解不能。

行き詰まった私を見て、無表情な和泉は私の考えを見透かしたようにタイミングよく口を開く。

「まだ核心にたどり着けないか……では、ネット上に誤ったハッキング予告情報が出回ったのは知っているな」

確かに……それは先日百爪から報告された。

あらかじめ情報漏洩によるアクセス集中を予期し調査したが、なぜかすべて日時や対象が異なる情報しか出なかった。

それが遠呂智の行ったことであることは明白であり疑問にも思っただが、結局確証の持てる解答を導き出せず、遠呂智からの牽制とい

う解釈をした。

「なぜそれを当てつけの解答で終わらせた？　なぜ最後まで疑問に思わなかった？　それとも、復讐心に支配されたその目は、布石をただの小石と見間違えたか？　少し考えればその情報の意図が分かるはずだろうに」

「情報の意図、だと？」

「そうだ。あの情報は意図と意味を持つ。意図は不特定多数の目に情報が掲示されたページにアクセスさせる。意味はそのページにアクセスした電子端末は遠呂智特製のウイルスに感染する」

「なっ！？　では、あの情報を得た時、すでにこのPCはウイルスに感染していたというのか……」

「残念ながら不正解。直接四谷にハッキングするのは七時と明言していたはずだ。あのウイルスは興味本位で情報を見る一般人を対象とし、起こす現象は至って単純。『定時より、感染した端末はバックグラウンドで特定リンクへのアクセスを繰り返す』……言ってる意味が理解できるか？」

……分らないはずないだろう。

過去に消えたはずの遠呂智の名は、再びその名が現れることでネットワーク上に大きな波紋を作った。

その波は大企業から一般まで広まり、テレビ等では混乱を避けるため放送統制がかかったほどだ。無論、四谷が行ったことだが。

しかし、その統制もネットワークではうまく働かず、あまり興味の無い者でも一度は情報が載せられたページを開いただろう……そして遠呂智のウイルスなら、一般のセキュリティなど紙も同然。ページを開いた者の全員がウイルスに感染し、今回の過剰アクセスに参加したも等しい。

そう考えれば、何千万というアクセスは不可能どころか一瞬でパ
ンクさせることも可能だ。

そうならなかったのは運が良かったから……いや、これも遠呂智
の計算のだろう。

その答えは私達が完全に手玉に取られていることを示すが、そう
考えるのが自然だ。そうでなければ都合がよすぎる。

「どうやら理解したようだな。しかし、こちらも誤算があった。ウ
イルスのステルス性に関しては多少なりとも自信があったのだが、
この仕掛けを発見し意図を理解した者がいたらしい。更に、その中
のほんの一握りが便乗して四谷サーバーへの侵入を試みる挑戦者が
いた」

そこまで言った和泉は椅子を逆に回しPCへ向き直った。

和泉の言っていることが本当ならマズい……対処に当たるはずの者
が部屋の隅で山積みになっている今、ここにハッキングに対抗する
者がいない。

自動のセキュリティは起動しているはずだが、過剰アクセスの
処理で精一杯のこの状況下でセキュリティが正常に作動し複数の
ハッキングに対応できるとは思えない。

和泉はなにかしているようだが、そんなことは考慮している暇は
ない……こうなったら、回路切断でも何でもいいからなんとかする
しかない。

しかし、四肢の自由を奪われたこの状態ではなにもできない……
まずはこの状態から脱しなければ始まらない。

「和泉、貴様がなにをしているか分からないが、まずこの拘束を解

けッ。早くしなければ遠呂智との決着以前の問題に……」

「落ち着け和倉妹。多少のブランクは認めるが格下に先を取られるほど腕は衰えてない。そしてそれ以前に俺は『いた』と言ったはずだ。身に余る向上心を持つ挑戦者には、少々過激な贈物ウィルスと共に先程退場してもらった。故に、今の俺はアクセスをブロックしている訳ではない」

「ッ……」

「そして俺がなにをしているかに関して懇切丁寧に答えるなら、例の回線に切り換えてサーバーにアクセスしているところだ。この回線は接続切断又はサーバー本体が破壊されてないかぎり確実にアクセスを可能とする特別なものだ。また、一般回線の方はアクセス先にワクチンウィルスをつけた。因みに和倉妹が入手したであろうコンセプトウィルスはそれと同様の物だ。複数を裏に流しておいたのだが、上手く掴まされてくれたようだな。おかげでこのPCはウィルスに感染せず正常に作動してくれた。また、少々狭いアクセス制限をかけた。これでフリーズやパンクの可能性は完全に排除したことになる……そうだろうか？ 和倉妹」

私に背中を向けたまま滑らかにキーを叩く和泉は、こともなさに言う。

そんな和泉に、私は言葉を失った。

この男は普段とまったく変わらないのに、この日常から離れた状況に顔色一つ変えずについてきている。それどころか、この空間を掌握しているといっても過言ではない。

それは不自然でありながら自然すぎ、こちらの本能を狂わせその存在を危険と判断させない。

だから、私は頭で理解する……この男はまぎれもなく敵だ。

私は重い息をゆっくりと吐きだし、失った言葉をなんとか絞りだす。

「和泉……貴様何者だ？」

「なんだ、ここまでヒントを与えたというのに、まだ分からない……いや、まだ気づいてないなら分からないのも当然。眼中にない物を理解しろという方が難儀か。駆は……ここは八雲と呼ぶべきか……ああ、和倉妹に話すなら遠呂智の方がいいだろう」

相手を敵と判断し、それに対する注意と警戒を最大限とした時……ふと、気づいた。

和泉が叩くキーの音は普通のそれとは異なっている。

キーを叩く音は確かに速いのは速いが、驚くほど速い訳ではない。リズムよく一定の速さを保ち続けて、なおかつ止まらない。

そう、思い返せば私に視線を向けていた時もその手は止まらず、こちらに体を向けた時も片手はキーボードの上であり、キーを叩く音は止まらずなおかつ遅くなることはなかった。

つまり、この男はキーを片手でも両手と同じ速度で打て、さらにキーはおろか画面さえ見ずにその手を走らせることが可能ということ。

そんな馬鹿な……その否定の言葉を私は口にできない。

それは和泉玲という男が既に私の予測を超えており、私にはそれを否定する根拠が一つもないからだ。

しかし、和泉は私を見ることもなく。ただ、淡々と語る。

「遠呂智は嘔吐きだ。逆に言えば遠呂智は嘔吐きでしかない。遠呂智に嘔吐き以外の存在価値はなく、嘔吐き以外の存在意味を望まない。いや、正確に言えば嘔吐を吐くから嘔吐きなのではなく、嘔吐きであるから嘔吐を吐く」

「……なにが言いたい」
「少し回りくどかったか？ ならば、こう言えば和倉妹でも分かるか……遠呂智にとってハッカーという肩書きは『嘘』でしかない。しかし勘違いするな。遠呂智がハッカーでなくともハッキングは実際に行われている」

『遠呂智にとってハッカーという肩書きは嘘でしかない』ということとは、遠呂智はハッカーではないということの同意義。

『ハッキングは実際に行われている』ということは、すでにハッキングは進行中であるということ。

つまり、行なわれているハッキング行為は第三者によるもの……そして、その第三者は遠呂智に関係してこの件を知り、なおかつハッカーとしての技術に優れた者。

そんな都合のいい条件に当てはまる者は、いとも簡単に見つかった。

探すまでもない……その者は私の目の前にいるのだから。

「ようやく気づいたようだな。試験にたとえば赤点ギリギリと言ったところだが……では、改めて自己紹介をしよう」

鳴り止むことのなかった音が消え、この場に静寂が訪れた。

キーボードから両手を離れた和泉は、椅子を半回転させて回して完全に私の方を向く。

その温度の無い視線を私に向けながら、まるで社交辞令の一環のように自分の正体を明かした。

「戌神^{いぬがみ}高等学校二年生の和泉玲だ。見ての通りただの高校生だが、昔は電腦破壊者、WORLD SERVER BREAKERと呼ばれていたこともある。しかし、その名は既に遠呂智のものだ。とはいえ、この名を知る者より、遠呂智を知らない者の方が圧倒的に多いだろうがな」

遠呂智の別称……ハッカーとしての異名を和泉は自分の名だつたと言った。

数年前に消息を絶つたとされる今でも、世界のネットワークを蹂躪し壊滅させる者として語られるハッカーは、まるで興味のない他人事のように自分を語る。

信じ難いが嘘ではない……敵と認識している私にさえそう思わせるなにかが和泉の言葉にあった。

そして、それで自分の話は終わりとはかりに眼鏡のブリッジを上げて位置を直す。

「さて、これですべてを知るための基盤は出来上がった。今から俺は、俺が知るこの一連の騒動に関するすべてを語ろう。聞くも聞かないも聞き手の自由なのだから、語り手の俺も自由に語らせてもらう。そう この進行する状況と、交差するそれぞれの思惑と、埋没した過去の因果を」

もう、拒否する理由も意味も気もない。

毒を食らわば皿までとまでは言わないが、一度聞いてしまったのだから最後まで聞かないと気持ちが悪い。

それに、確信はないが、この男の話は私が求めていたなにかを知

るきっかけとなるかもしれぬ……そんな気がしてならなかった。

そして、私は黙って和泉の語りを聞くことにした。

たとえそれが……私の身を燃やし尽くす業火になろうとも。

Flight 31 黒き剣に語る者とは・・・(後書き)

和泉「ハッカー……結構バレバレの伏線を回収できてほっと一息の神酒です。

和泉が情報通な所もそこが所以だったりします……今の世界、個人情報なんてネットワークにダダ漏れだったりしますからね。結局、情報を護れるのは権利ではなく権力ということですか……いや、国家機密も流出するからそうとは言い切れませんか。

話が逸れましたので切り換えます。今回は遠呂智編がクライマックスに突入。しっかり書けるかが心配ですが、努力いたしますので次回もよろしく願います。

では、また。

Fligit32 紅い蛇を狩る狩人の翼爪（前書き）

ああ、何ヶ月ぶりの更新でしょうか……あ、約四ヶ月ですか。すみません（冷汗）

更新の度に謝らなければならない状況に陥っていますが、どうかこのダメ作者を見捨てないで頂きたいです。

時刻は七時を過ぎ、残業も警備も行われている様子がない、古びたビルの立ち並ぶ区画を、私は目的地に向け走っております。

既に玲様はハッキングを終えているでしょうし、後は私が目的地に着いて仕上げをすれば、この陳腐な戯曲はフィナーレを迎えるでしょう。

ですが、嘔吐きの私に罰が当たったのでしょうか。
計画通りには終わりを迎えてくれそうにありません。

「……やはり、これは私のミスですね」

私は反省の独り言を述べながら、一人夜闇を走ります。

……いえ、正確には三人と言うべきでしょうか。
私の後方から聞こえる足音は二つ。

細かいリズムを刻む足音は美海様、硬く冷たい、まるで死神のような足音は百爪様のものです……死神の足音など聞いたことはないのですが。

美海様は私のすぐ後ろをぴったりと貼りつくように走り、百爪様は図体のわりにまるで飛んでいるかのような身軽さで、嫌な距離を保ちながらついてきています。

そして私は、その二人と同等もしくはそれ以上のスピードで走っています。

どうやら、『僕』の逃走本能たつじんほんのうは体の芯から心の奥まで刻み込まれているようで、本来の身体能力を引き出せない私でも、現在のよう

に追われる状況なら、走力のみ限定解除されるようです。

まったく、ここまでくると条件反射や刷り込みの域に達していませんね。

さて、閑話休題致しまして、そろそろ本題に入りましょうか。

「嘔吐きが体を使って戦うとは……あまり気乗りはしませんが、仕方ありません」

私は意図せず走りだす足を、自らの意志で止めました。

そして私のすぐ横を美海様を通り過ぎるのを確認してから、体を後ろへと翻します。

そして紡ぐ　赤き虚言。

「……Utinam tam facile vera invenire possem quam falsa convincere……私は偽りであることを証明するのと同じほど容易に、真実であることを発見できるならいいのだがと思う……」

百爪様との距離はまだありますが、わざわざ声を強める必要はありません。

私が嘘を吐いた。その事実が存在すれば　世界を歪めるには十分。

そして、私は先ほどどさくさに紛れて拾っておきました一本のクナイを袖から取り出しまして、百爪様の方へと全力で投擲します。

ですが、所詮私の全力などでは、クナイを美海様のように『殺す刃』へとすることはできません。

それでも、虚言に含む一滴の真実としては事足りります。

「さあ、本物はどれでしょうか？」

一の刃は二の刃、二の刃は四の刃、四の刃は八の刃、八の刃は十六の刃……そして、ついには優に二百を超える刃の波と化す。

この刃の波は、一つを除きすべてが偽りでございます。

しかし、ただの目眩ましではございません。

痛覚を騙す刃は外傷を与えることはなくとも、相手が想像した痛みと同等の痛みを与えます。

そして、回避した場合には偽りの刃を多少なりとも本物と認識した、つまり『私の嘘に騙された』ということでございます。

そうなったのなら、この場は嘘吐きの独壇場。三流の嘘吐きが三流の嘘で騙し尽くしてあげましょう。

虚像と高を括って苦痛を味わうか。嘘に絡め取られて詐欺の鴨になるか。

すべては百爪様のご判断

「ペテン師ごときが、なめたことをしてくれる」

背筋を一瞬で貫く悪寒。

そして、真正面から叩きつけられる殺気。

その殺気を放つ張本人は、なんの躊躇いも見せずに刃の波へと身を投じる。

「狩技爪かきじめ」

振り上げられる両手。そして、その手には曲線を描く八つのなにか。

そのシルエットは爪というより、まるで闇夜に紛れた夜鷹の翼。そして、翼は羽ばたく。それは飛ぶためではない。獲物を墮とすため。

「……爪裂断つまさきだち」

そして翼は放たれた。

目標の寸前まで迫っていた偽りの波刃は、まるで水面に浮かぶ月のように、その羽ばたきでかき消されてしまいました。

そして 気づいた時には時すでに遅し。

「ッ……ハッ……」

私に口から空気が洩れる。

音もなく、見ることもできず、ただ、翼のようなもの的一端が自らに刺さったことを認識しました。

鳥類の、それも滑空に優れた鳥類の片翼を思わせるそれは、鎌の

ように鋭利な刃先が湾曲した、とても分厚い凶器。

そして刃の先端は、まるで獲物を捕らえるために研ぎ澄まされた猛禽類の鉤爪のよう。

そんな漆黒の刃は、咄嗟に胸部を庇った私の右腕に深々と突き刺さり、体の芯までその冷たさを刻む。

「センパイッ！！」

後ろから美海様の声がかかりますが、今は無視させていただきま
す。

私は傷口を広げないようにその刃を抜き、地面に投げ捨てて足で
踏みつけその動きを封じる。

しかし、封じたのは八つのうちたった一つ。

夜闇に隠れた残り七つの黒い凶器は、形状や大きさからは想像で
きないほど音を立てず、私達の周囲を縦横無尽に飛び回りっており
ます。

十分に警戒しながら右腕を確認……親指がまともに動かず、人差
し指と中指の力も弱まり、手首も思うように動きません。

どうやら、筋肉の一部を完全に切断されてしまったようです。

ですが、不幸中の幸い。あまり血液が流れていないことから、重
要な血管には損傷がないようです。

しかし、そんなことよりも私には気に掛かることがあり、正面に
佇む黒衣を見据えます。

「さて、色々と気になることがあるところですが、物事には優先順
位というものがありますからね　何故、貴方には私の言葉が届か
なかったのでしょうか？」

百爪様は帽子を目深に被っているため視線が分からないのですが、その動きがまるで偽りの刃物が最初から見えていないかのようでした。

ですが、百爪様は私の虚言に対し『なめたこと』という評価を致しました。

私の推測が正しければ、百爪様は私の虚言を聞いておきながら、私の虚言を無視したということでございます。

下手をすれば……この戦い、嘔吐きである私に勝ち目がなくなっ
てしまいます。

「ふん、自らの技に溺れたな」

そう言って、私を嘲笑う百爪様。

その様子は表情が見えなくとも分かるほど、勝利を確信し自身に満ち溢れています。

「元々、貴様の力は黒剣から報告を聞いている。更に、実際にこの身に受ければどのような現象か理解できる。ラテン語による対象の無意識への侵入。翻訳による無意識から表層意識への反響。そして、無意識と表層意識を暗示によって掌握。この三段階の言葉によって、相手の感覚や意志を自由に操作する。そうだな」

「さあ？ どうでしょう。例えば私がそれを認めても、本当とは限りませんよ？ 私は嘔吐きですので」

「白々しい……だが、かまわん。貴様から聞き出さずとも、実際にそのまやかしを無効とできればいいだけのこと」

膨れ上がる殺気。この場に満ちる空気は、私の不利を告げます。しかし、私は嘔吐きでございます。空気に飲まれてしまうなら、それは三流以下の嘔吐きです。

どのような時間、場所、相手、状況でも、なんの躊躇いもなく嘔吐を吐いてこそその嘔吐き。

「ならば、試してみますか？ “ B i s v i v i t q u i b e n e v i v i t . ” ……」

頭の芯にチリチリとした痛みが走る中、私はそのまま虚偽の言葉を紡ぎます。

先程より丹精込めて紡いだ嘘で、完璧に騙し尽くして

「 させると思つか？ 」

突然、横面に衝撃が走る。

それは冷たい痛みを伴う。しかし、それは表面的で、腕を貫いたものとは似て非なるもの。

そして、その衝撃は 身につけていた真紅の眼鏡を吹き飛ばした。

「自己暗示による人格変異。なかなか面白い壊れ方をしている……虚言の仕組みを知る私が、その眼鏡のからくりを知らぬとも思っ

たか？」

頭部への衝撃により意識が一瞬の混濁を起こしている最中、ぼやけた視界の中で鋭く輝く一筋の光。

それが黒刃^{くろやぶ}であることは分かる。

しかし、脳と三半規管が揺さ振られたため、体が思うように動かない。

そして

「一説によれば、嘔吐きは地獄に墜ちると言う。一足先に見てきてくれぬか？」

ストン。

そんな音を立てて、右腕を襲った冷たい衝撃が胸の中に入り込んできた。

Fligit32 紅い蛇を狩る狩人の翼爪（後書き）

鋭い刃物を硬いものに対し上手く投げると、本当に「ストーン」って音がして刺さるんですよ……現実逃避してスイマセン。

次回は早く更新します。きっとします。やればできる子なんです……たぶん。

因みに主人公は死にました……嘘だといいなあ。

Fligitt33 右手には憎悪を、左手には純潔を

どさっ、と音がしたです。

砂袋を落としたようだけれど、中身のせいで嫌に湿っぽくて生々しい音。

それは、人体が力なく倒れる音。

今まで生きてきた中で何度も聞いた音なのに、今回の音は異様に耳の中で響いているです。

「……………呆気ないものだな」

その虚しさを含んだ呟きの後、仰向けに倒れたセンパイの胸から黒刃が勝手に引き抜かれ、空を舞ってから百爪の手元へ戻るです。

夜の緩い風に乗って、黒みの多い血が放つ特有の匂いが、私の所にまで届くです。

私の左手の傷口からの匂いとは違う、生命の近くを流れる血が持つ、死の香り。

四谷に入るまではことあることに嗅いでいた赤色の鉄臭い匂いが、今ではとっっても懐かしいです。

「ああ……………そう、懐かしいですね。いつの間にか、懐かしくなってきたですよ」

懐かしいだけ……記憶として私自身に刻みこまれ、消えることはないです。

自分の聴覚や嗅覚が、死というものを忘れてないことを気づかさ
れ、心の中で大きいため息を吐くです。

そして、血濡れの左手で外れたままだった右肩に触れて　ねじ
込む。

「　っあ」

言い表せない痛みと骨と骨が削り合う音が身体を走る中、必要な
動きができることを確認するです。

……私の心は、先パイの死に対して、ため息を吐けるほど落ちつ
いているです。

別に、シヨックのあまりおかしくなった訳じゃないです。

ただ、戻ってきただけです……私があるべき場所に。

「……百爪」

私の呼び掛けに、先輩との延長線上に立ち尽くしていた百爪は、
黒い帽子に隠された顔をこちらに向けてきました。

そして　なんの前触れもなく片腕が振るわれたです。

そして飛ぶ、四重の黒刃。

「『紛まがれ』。その本分は糸による投擲物の誘導……あなたのそれは、
暗殺者として一流の技術です。でも……」

その刃は距離がほとんどないため、ほぼ一瞬で私の面前まで迫ってきた黒刃。

右半身を後ろにずらすことで、それを最低限の動作で避けるです。しかし、紙一重の動きは、代償として右目の下に小さな痛みを走らせる。

「その性質上、操作と誘導との間に時間差が生じるため、対象の動きを先読みできないといけません。つまり、こういった先の読みづらい微細な動きには対応しにくいです」

そう言うてから、私は刃の通過した空に向かって右手を振り上げるです。

その瞬間、小さくも耳障りな高音が空間を斬り裂く。

そして、それは『紛』の根本を斬る音でもあったです。

「そして、操作肢と誘導物を繋ぐ糸が切れれば誘導は不可能となります」

私は話しながら姿勢を百爪の方へ戻し、地面を蹴って跳ぶです。左頬を伝う血を拭う暇もなく、倒れるセンパイを飛び越えて固く冷たい地面に着地するです。

血の匂いが充満するこの場で、私は体ごと回るように右腕を振るい、標的をセンパイへと変えた四重の刃を打ち払う。

「私が避けてから糸を斬るまでの間に、ここまで誘導したですか……さすがですね」

「君こそ、私に反射的に仕掛けさせる殺気と、この糸を切る力量に技量……そして、その右腕……いや、その剣はなんだ？」

「ああ、これのことですか？」

私は右腕を自らの目の前に上げるです。

その右腕は、いつも見ている私自身の腕となんら変わりないです。ただ、身につけていた小手と腕の間から一本の黒い剣が生えているこの右腕は、普通の腕にはどう間違えても見えることはないです。

「あなたなら知ってるですよ？ 私の『右腕』と美空の『左腕』が義肢だったこと」

「……起源の時から手を繋ぎし、奇形なる陰陽の双子。倭玖羅の血が受け継ぎし罪の結果」

「酷い言われようですね。世間一般では結合双生児って言うんですよ。まあ、罪の結果というのは、否定しないでですけど」

そう、私と美空は濃すぎる血ゆえに、二つの命、二つの意志を持った、一つの身体としてこの世に生まれてきたです。

互いの片前腕が繋がっていた私達は、物心つく前に身体を分けられたですが、同じ血が流れていた美空は、私にとって大切な妹であり、同時に私自身の半身でもあるのです。

そんな出生から、私は右腕を、美空は左腕を義肢で補い生きてきた……それは倭国の影人に属する者なら、ほとんど知っている事実です。

「……でも、あなたは知らなくて当然ですよ。この、私の切り札とってまきはね」

私は右腕の小手を外し、その下の破けてしまった擬似人皮を取り去るです。

乾いた音を立てながら肘から先の皮が剥がれ、外界に曝される硬質な黒鋼。

明らかに機械的でありながら、同時に人の腕としか表現できない異形の右腕。

そして、一番の特徴は肉厚幅広の刀身を持つ、黒い両刃の剣。

ナイフにしては長く、刀剣としてはかなり短い長さを有したそれは、手首の部分から手の甲に沿うようにして生えていました。

「シンクロ・マキナ・アームズ
生体兵器義肢、型式〇伍番。ゼロコ 別名黒百合。クロユリ 機械偏愛技師の作った、最高の義肢ですよ」

とある天才機械技師が一つの義肢を見て触発され、試作段階のそれを実用段階まで持っていったです。

神経と義肢内の回路を繋ぐことで、神経を流れる微弱な電気を受け、装着者の意志通りの動作が可能とした、最先端さえ超えた技術。しかし、その変態的な性格の技師の意向によって、その技術が表に出ることはなく、作品自体も希少とされてるです。

そして、その数少ない作品、しかも特注の一品が私の右腕としてこの場にあつたです。

「黒き剣……まるで、君の妹のようだな。二つ名通りであり 憎悪で染まっている」

「ええ、あの変態技師曰く、これは美空と常に一緒にいることを意味しているらしいです。ですから、この剣は美空が恨んでる相手……センパイに向けるべきなんですけどね」

……私の後ろで倒れてるセンパイ。

血溜りに沈むその体は、今すぐに安全な場所に連れて行って、適切な処置をすれば助かるかもしれないです。

けど、百爪相手にそんな余裕はないですし……両親の仇を助けるなんて、今までの私や美空を否定することになるです。

だから、私はこの手を差し出さず、この手を下さない。

自分でも卑怯な選択だと思うですが、センパイが死んでいくのを傍観するです……それが両方を裏切らず、両方から逃げる選択肢。

だから、私は私の弱さの償いとして、センパイが人のまま死にけるよう、この剣を振るうです。

「私の敵はあなたです。せいぜい楽しんでくださいです」

「……いいだろう。せいぜい付け焼き刃でないことを祈るぞ」

そういつて、百爪は片腕を広げる形で黒刃を構えたです。

私も黒剣の剣先を百爪に向けたまま地面スレスレまで下げるように右腕を構え、腰を下げて姿勢を低くするです。

そして……呟く。

「付け焼き刃ですか……あなたは勘違いしてるですね。この腕は、私と対となる者の二つ名を有する黒き剣なんですよ？ あなたの敵は私じゃない」

この剣は一人で振るうものではないんです。

切り札は最も適した時に切るから切り札であり、剣は盾があつてこそ最大の力を発揮することが可能です。

つまり 黒き剣を向けたその時点で、この戦いは一対一ではないんです。

「つまり……貴様の敵は私達ということだ」

私でない声とともに、百爪の後ろにゆらりと姿を現す黒い影。

そして、闇夜の中で白く浮かびあがる、左腕の^{ヒトカタ}人形。

私の右腕とは、まるで正反対の

「……甘い」

百爪は瞬時に体を翻したです。

振り返りざまに影へと振るわれる、指の間に挟まれた四重の黒刃。

「誰が甘いんだ？」

まるで巨獣の爪のような斬撃を白い腕が受け 刹那、斬撃は甲高い金属音とともに上に弾かれ、黒刃が百爪の手から離れたです。その時、既に私は飛ぶように疾走し、百爪を自らの間合いに捉えていたです。

そして右腕を振り上げ、下からすくい上げるような突きを

「小賢しいッ」

百爪が動き、上げられていた片腕が振り下ろされるです。

その動きに合わせ、弾かれて空中に浮いていた黒刃が垂直に落下。私は突き上げる剣の軌道をずらし、自分に向かってくる四つの黒刃をすべて弾くです。

そして、そのまま右腕を大きく振るい、糸を斬って黒刃を落とす。糸を斬るためとはいえ、派手な動きをしたために生まれた隙。

その隙を確実に狙い、私の頭部に潰すが如く突き出される百爪の拳……でも、私に防御は必要ないです。

「そんなこと、させると思っかッ」

私と百爪の間に割って入る影。

その影は、私の代わりにその拳を受ける。

そして 百爪の巨体が不自然に吹き飛ばす。

吹き飛んだ百爪は私達から距離をおいて着地をし、血らしき液体が滴り歪に変形している『潰れた』拳を、もう片方の手で庇うように押さえるです。

二つに束ねた黒髪を揺らし、私に背を向けて百爪と対峙する影の

正体は、私の右腕の元となる二つ名を持った私の妹　美空。

「私がいる限り、姉さんには指一本触れられると思うな」

その左腕は　黒百合と対をなす、型式〇陸番、別名白百合。
その意図から、私の右腕と酷似した形状をしているです。
違いを上げるなら三点。

穢れを感じさせない、純粹かつ純潔の純白。
鏡写しのような、左腕としての形状。

そして、手首から飛び出している、扇子のような形状をした
白き盾。

「……なるほど。それが白盾、というわけか」

「ご名答。この盾に斬撃や打撃は無意味。斬撃はあらゆる方向に弾き返され、打撃はその威力まで跳ね返される」

美空が言葉の締めには左腕を振るったとたん、白い盾はパンツ、という音とともに折り畳まれ、まるで笏のような形状になるです。

そして　美空の姿が消える。

「　ぐッ」

次に美空が現れたのは、百爪の目の前。

懐に入り込んだ美空が突き出した左腕……正確には変形した白盾

が、百爪の腹部に深々とめり込んでいたです。

「その代わり、この盾による打撃は、本来の何倍にも増加する……
一発の借りは返したぞ」

「ぐぬ……ッ！」

苦しみなながらも振るわれた百爪の反撃を後ろに跳んで避け、そのまま私の隣まで後退した美空。

嫌な胸騒ぎを感じていたですから、美空の身を心配してたですが……
いつも通りの冷静な横顔を見て、私は一安心するです。

「姉さん、状況は百爪が本性を現したって解釈して間違えない？」
「そうですね……って、なんで美空がそのことを知ってるんですか？」
「たぶん、姉さんと同じ。残りの説明は後になるけど、今は百爪と
対峙することになる。次の接触を合図に、和泉が遠呂智の身柄をこ
の場から運び出すけど、姉さんは異論ない？」

「和泉センパイですか……こっちとしては、色々気になって仕方な
いですけど 異論はないですよ。説明を聞いてからなんて、悠長
なこと言っではいられないみたいですね」

美空の攻撃を受けた百爪は、確実に痛手を負ったはずですけど、
すでに片手に新たな黒刃を持ち、体勢を立て直しているです。

なぜ、和泉センパイがここにいるのか……そして、なぜ、私より
大きな恨みを持った美空が、その対象であるセンパイを助けること
に異論がないのか……ますます気になることが増えて、早く説明し
てほしいところですけど、私はそれらすべて飲み込むです。

そして、先ほどと同じように刃先を地面と紙一重まで下げ、姿勢を低く構えるです。

美空は再び白盾を扇状に開き、私のような分かりやすい構えは取らず、ただ直立の姿勢を保っているです。

これで、互いの準備は整ったです。

後は、どちらが先に仕掛けるか……精神を集中させ相手の隙、もしくは踏み込むきっかけを探り合う。

「……いや、助けるんでしたら、早い方がいいですよね」

私は探り合いをやめ、足にためていた力を解放して地を蹴り、その一蹴りで一直線に百爪へ迫る。

そして、間合いに入り込む寸前でもう一度地を蹴り、その肩に刃が届く高さまで跳び上がると同時に、下げていた右腕を振り上げ、その巨軀に向かって袈裟に振り下ろし　その結果、刃と刃がぶつかり合う。

私の黒剣と百爪の黒刃　黒き凶器の衝突で、お互いの顔が数センチ前にまで迫る。

その火花を散らすような金属音に乗せて、私は帽子に隠れた百爪の顔に向かって笑いかけたです。

「取りあえず、私も左手の借りを返させてもらおうですよ」

Fligitt33 右手には憎悪を、左手には純潔を（後書き）

お久しぶりでございます。義肢キャラが大好きな神酒です。

私の他作品をご覧になったことのある方ならお分かりでしょうが、この作品でも義肢キャラ登場です。しかも、ちよつとした繋がりがあつたりします。しかし、フルメタルなアルケミストではありませんのであしからず。

今回の双子は、片腕が義肢でした（腕と言っても肘から先ですが）。私的に義肢とは『失ったものを補う物』、もしくは『自分とは違う一つの肉体の在り方』と考えています。ですから、私の作中の義肢は人の手足と同じように動き。二人の場合は切り離された腕に互いの二つ名に合わせた義肢をつけています。その他の剣やら盾のギミックは……趣味です。

次回更新は早く……したいです、はい。

それでは、また。

暗闇の中を、俺は先ほどより軽くなった背中歩く。

駆は既に戦場から運び終え、治療を受けさせている。

診察によれば、幸いなことに肋骨を二本と片方の肺を穿った傷はそこまで深くはないらしい。

出血も致死量には達しておらず、輸血の血液は常に十分な量が用意されている……それに、あの無鉄砲なお人好しは、あの程度の刺し傷なら何度も負っている。

それらのことから考えて、駆の命には問題ないだろう。

しかし、この夜の登場人物からは退場させられた。

残念ながら、あいつの代役となれる者はこの場に存在しない。

そして、この物語……駆に言わせれば戯曲は、誰が欠けようと止まることはない。

なら、俺は俺のすべきことをするのみ。

ただ、俺が知りえる情報を必要とする者に与える。

たとえそれが残酷な真実でも、本人が望まない悪夢でも……それが、^{ハッカー}電脳破壊者としての役の他に、駆の友人としての俺に課せられた、もう一つの役。

その役を果たすために、既に頭の中では今までの布石が整理され、すべての手順が繰り返されている。

無論、繰り返すといっても同じパターンではなく、様々な条件を追加、省略、変更して行う。

それは終わりのない、世界との千日手、未来とのスリーフォール

ド・レピティション。

それがあまり意味をなさないことは知っている……それでも、ただ歩くだけではいられない。

「よう、だいぶ遅かったやん。デートには少し早くこんど、女の子に失礼やで?」

前方から掛けられた声に反応して、俯き気味だった顔を上げる。すると、街灯のあたる石造りの門柱もんちゆうに寄りかかるようにして、茶短髪で長身の男が立っていた。

……いや、言い方がおかしかった。まるで正体不明な人物の登場のような表現になってしまったが、そうではない。

名前は小野田光といい、俺と光は旧知の仲である。

そして、光がここにいるのは俺がここで待っているように頼んでおいたからである。

「俺はお前が女だと初めて知ったな」

「まったく、相変わらずジヨウダンの通じんやっちゃなあ。まあ、ノリツツコミする玲なんて、想像しただけで笑い死んでしまいそうやけど」

光は門柱に背中を預けたままケラケラと笑い、その屈託のない笑顔を俺に向ける。

……こいつは、昔から変わらない。

小学生の頃、親の仕事の関係でこの場所に移り住むことになり、転校してきた俺に対し、最初に声をかけてきたのは光だった。

既に世界の汚れた部分を知り、それなりにませていた俺にとって、無邪気というより屈託のないその笑顔は、ただの馬鹿にしか見えなかった。

そして、周囲の者から転校生という異質なものに対する興味がなくなつてからも、光はその笑顔で俺に話しかけてきた。

その頃の俺がなにを考えていたかを思い出すことはできないが、俺はいつしかその笑顔を受け入れていた。

それが、駆や彩貴との関係にも繋がることとなつた。

今では想像できないほど消極的なアプローチしかできなかった彩貴、今でも十分想像できるほど鈍感だつた駆、そんな二人を繋げるわけでも離すわけでもなく、二人の間で笑う光、その様子を少し離れて傍観する俺……その、曖昧でアンバランスながら、長く続くだろう四人の関係。

けれどあの日、人を好いて、それ以上に人に好かれていた駆は人を失い、人の道から墮ちていった。

それから、人が変わったように……いや、人とは違う『なにか』になつてしまつたかのように人を拒絶していた駆に対し、周囲もその対応を変えていった。

小学生でも分かるほどの異形かつ危険ななにかを抱えていた駆に対し、彩貴はただ悲しみ、俺はただ見ているだけだつた……けれど、光だけは変わらない笑顔で話しかけた。

拒絶されても拒絶されても拒絶されても、光は変わらなかつた。

そして、駆は彩貴の想いを受けて変わり、彩貴は駆を追うようにして変わった。

けれど、俺は……

「なにポーツとしとんねん」

過去を振り返る俺の思考を遮る声。

それと同時に、目の前に迫る一つの白い物体。

俺は反射的に手を出し、その物体を掴む。

それは布製の……なんの変哲もないただのYシャツ。

「ほれ、頼まれとった着替えやで。早く着替えろや。背中にヤバそうなもんがついとるんは、俺の気のせいやないやろ？」

「ああ、助かる」

最初は背中に伝う熱い液体に不快感を覚えたが、運んでいる途中から気にならなくなっていた。

しかし、先ほどまで忘れていたものも、一度気がつくとなんかになってしまうものだ。

俺は着ていた服を脱ぎ、こびりついた血液の量を見て服としての利用を諦め、その服で背中を軽く拭く。

粘度が増して拭きとりづらくなった血液を適度に拭きとってから、光に渡されたYシャツに腕を通す。

その間に、光は俺が地面に置いておいた服を手にとっていた。

「……お前、なにをしている」

「いや、別に玲の体臭をかぐという変態行為をしとるわけちゃうで。この血の臭いが気になったんや……やっぱ、この臭いは駆の血やな。それもいい感じにヤバイ血や」

「その通りだが心配はない。既に適切な治療を受けている」

「玲がいうんやったら、俺が心配するほどやないってことやな」

光はそう言つて、いつもと変わらない笑顔を俺に向ける。

そして、光は俺の服に付着していた血液が駆のものだと分かった……俺はこの血液に関して、なに一つ発言していなかったのに。

「……よく、嗅覚でそこまで分かるな」

「おう。自慢できるぐらいには、よく利く鼻を持つてるで」

「なら、いま周囲に人がいるか、その鼻で分かるか？」

「ちよい待ち」

俺の言葉を真に受けた光は、クンクンと鼻を鳴らして、周囲の臭気で探ろうとする。

ちなみに、俺には特に感知する臭気はない。

多分、濃厚で強烈な血液の臭気を一定時間以上受けていたために、嗅神経が麻痺しているのだろう。

しかし、元々人の嗅神経はあまり発達していないために、周囲の情報収集に関して視覚や聴覚に比べ劣っている。

周囲に人がいるか嗅覚で判断できるとしたら、それは人以外の動物……引き合いに出すのなら、犬の芸当と言える

「……ここらにおるんは俺と玲だけやね。臭いがないわけちゃうけど、全部残留しとる臭いばかりで、人のおるって臭いがせんわ」

そして、こいつは犬だった。

「……なーんて、ジヨウダンや。自分で種明かしすると、ここに来るまでに妙な違和感があったんや……この時間に誰ともすれ違わん上に、明かりが灯つとる家が一つもないんは、どう考えたつておかしいやろ」
「なるほど、な」

光の言葉と推理は間違つてはいなかった。

ここは枯れた町ゴーストタウンではなく、普段は俺達がよく見るただの町でしかない。

人がいる場所というものは人がいると同時に、見えない何かがあるものだ……そこから人が誰一人いなくなり、見えないなにか一掃されている今のこの状況を、おかしいと思うのが普通の判断といえる。

けれど　ここではそれが普通となる。

「光。あたらぬ蜂にはさされぬ、金持ちけんかせず、臭い物にふた、君子は危うきに近寄らず、聖主は危うきに乘せず、近づくと神はちに罰当たる、触り三百、参らぬ仏に罰は当たらず、瘡も触らねば移らぬ、七日通る漆も手に取らねばかぶれぬ、無用の神たたき、It is ill to waken sleeping dogs. Far from Jupiter, far from thunder. Don't make a rod for your own back. Caesar's wife must be above suspicion.これらの言葉に共通することはなんだ？」

「日本のほうはともかく、英語の方は一回訳さんとなあ。ええ、と……寝とる犬は起こさんほうがいい。シュピターから離れとれば雷

には打たれん。自分の背中を叩く鞭は作つたらあかん、か……つま
り、どんな悪いことでも関わらんなら、起らんってことやな」

「そういえば、外国語全般は得意だったな」

「他の文系科目はからっきしやけどな」

そういつて光は自虐的に笑ったが、俺も不得意分野があるゆえに
気にはしていない。

全教科をバランスよくできる人など、俺の知る限りでは彩貴と駆
ぐらいのものだろう。

前者も後者も完璧なわけではなく、人並みに人並み以上のクセの
ある欠点を有しているのだが……それについては語る必要もないだ
ろう。

「一番有名な諺としては、触らぬ神に祟りなし……ここにはその言
葉が当てはまる。この場合、神はに当たるのは、四谷財閥となるが
な」

「なんやそれ……じゃあ、彩貴は神様の一員かいな」

「その解釈は間違っではないな」

むしろ、あっている。

正確にいうのなら、人が神であるわけないのだが、この地におけ
る四谷の力の強さを表現するなら、それは神と表現しても問題はな
い。

それほどに……それほどだからこそ、こついった事態を意図的に
引き起こせる。

「四谷は古くからこの地を治めてきた。そして、その歴史と財力と権力は特殊な治外法権を生み出した。そのおかげで、彩貴の横暴や駆の行動が許され、ありとあらゆる出来事が四谷の一言で揉み消され、その代わりにこの地には安全と安寧が保証される」

「まあ、それはなんとなく分かるわ。あんだだけ派手にやっついて、二人ともお咎めナシやもんな」

「因みに、もし彩貴の流れ弾が当たって無関係な者がケガをした場合、例えその傷がかすり傷でも、一生遊んで暮らす人生を三回繰り返せる額が与えられる」

「マジでツ！？ そら、意地でも転生したくなる話やね……少しどころやなくてメツチャ恐いけど、あの争いの中に介入したくなるで」

「無論、そういうた邪な考えを持った者には与えられない。明確な回避や逃走行動をとらない者は対象外だ」

「なんやそれ、野球のデットボールかいな」

「そして、今までその対象となった者はいない。狙う者も逃げる者も、互いに他人を巻き込まないように意識しているからな。彩貴は駆の行動を把握した上で、駆だけが当たる攻撃をし、駆は彩貴の能力を把握した上で、自分以外が当たらない位置で攻撃を回避する。

あれほど息の合った演舞ができる二人は、世界中を探してもそうはいないだろう」

「なんやろ。ツッコミどころが多すぎて手が出しづらいわ。取りあえず、二人の夫婦ツプりは不燃ゴミの日に出すとして、玲はあの一方的で問答も容赦も無用なアレが、エンターテイメントに見えるんか？」

「見方の問題だ。無駄に介入せず傍観に徹していれば、ドラマや映画となんら変わらない」

人の手によって安全を確保された危険は、人にとって恐怖スリルという名の娯楽でしかない。

一部の者は、恐怖で背筋を凍る自らの身を危険へと投じる。

あるいは、危険を認識しないがために、恐怖を知らない者もいる。それらすべては生物としての本能に対する背徳行為。

そして、禁断の果実を口にしたものだけに許された、危険信号イエローに身を染める快樂。

しかし 真の恐怖というものは存在するだけで、愚鈍となった人の本能に危険信号イエローではなく侵入禁止レッドのランプを灯火させる。

侵入禁止レッド そこから先には立ち入れない。いや、立ち入ってはならない。

「現在この場に起こっていることは、彩貴の件と根を同じとし類似もしているが、まったくの別物だ。この無人化は強制された訳ではなく、この住人の任意によって起こった現象だ。ただ、四谷から一通の文書が送られ、そこには四谷のトップである四谷源蔵の名とともに、ある時刻が記されている。それだけで、この地の人は理解する……その時刻にこの場に近づいてはならないことを。近づいたなら、命の保証はないということを」

「俺、そんなん知らんけど」

「まあ、お前の住む区域はそういったことにあまり利用されない。それと、お前にはここにいない時期があり、戻ってきた現在は一人暮らしだ。さらに、お前は興味と無頓着の落差が激しい傾向があるからな。知らなくても不思議ではない」

「なんか、馬鹿にされたような気がすんのは気のせいやるか……」

光は俺を責めるような目線をこちらに向けたが、その無意味さを知っているためにすぐに視線を緩める。

「なんか、四谷ってスゴいんやなあ。でも、そんなワガママばつかやっとなら、それをよく思わんやからが暴れだしそうやけどな。デモとかストとか」

「デモは間違っではないが、ストは労働者が雇用者に対しての抗議として、労働を行わないことだ」

「あの、微妙なところに鋭いツッコミいれんのはヤメてくれんか…
…今度のテスト、現社がジョウダン抜きでヤバいんや」

思わぬところで悪い地雷を踏んだらしい。

纏う空気が急速にぐったりしていく光。

俺は空気を変えるために、話を光の興味を引く話題へと戻す。

「お前のいうことは一理ある。だが、この地の住民は四谷に表立った反抗しない。それは、古くからこの地を治める四谷には地盤があり、この地の住民には十分な保証と還元がなされ、なおかつ直接的な強制を行わないなど、多くの理由があるのだが……すまない、話はここまでだ。待ち人が来た」

「みたいやな」

俺と光が話を切ると同時に、少し離れた場所に二つの影が浮かび上がる。

白き姿と黒き姿、黒き剣と白き剣、和倉美海と和倉美空

酷似した形容を有しながら相反の色を有する二人が並ぶ光景は、前に見た時にはなかった、どこか不思議な感覚を俺に与えた。

「予定時刻より多少早いな、和倉姉妹」

「ごめんなさいです。百爪に逃げられちゃって、追跡は諦めて早めにこっちにきたんです」

「別に攻めているわけではない。むしろ、その判断は評価する」

「いえ、本当なら百爪のことは終えてからここに来るべきだったです……でも、防御と退避に徹されたら、腕一本がやっとだったです」

俺の言葉にしっかりとした口ぶりで返す和倉姉。

その瞳は俺に対してまっすぐ向けられて離れず、揺るがない。

……その顔を見るかぎり、どこまでかは分からないが、和倉妹からなにかしら教えられているようだ。

なら、多くを語る必要はなく、目的の場へ向かっても問題はないだろう。

「なんか、二人ともボロボロやねえ」

先ほどまで俺の隣で所在なさげにしていた光が、唐突に言葉を放った。

それと同時に、和倉妹が和倉姉を庇うように前へ進み出る。

光を見上げる視線は酷く鋭い……それはすでに警戒の域を越え、下手な動きをすればすぐさま行動に移すと語っていた。

確かに、和倉姉妹の状態には酷いものがある。

弓道に用いる弓道衣に酷似した服装には、所々に切断されたような損傷があり、一部には赤い液体が滲んでいる。和倉妹の袴はそれが顕著で、歩行の様子から右足にそれなりの傷を負っているらしい。

そして、和倉姉の右腕……黒い義手には、糸らしきものが乱雑かつ複雑に絡みついており、その動きが制限されているのは目に見えていた

光はそのただならぬ姿に興味を持ったらしいが……この状況で首を突っ込んでくるか？

「……小野田先輩、あなたは何故ここに？」

「え、俺か？ 俺は……ま、気にせんでええよ。俺は玲にちよつとお使い頼まれてただけやし。玲の言葉を借りるんなら、エキストラってゆうやつや」

光は笑顔で自らの無関係を述べるが、和倉妹の警戒が解かれることはない。

光も光で自分が置かれている状況を理解していない……俺は下手なことが起こる前に、二人の間に割って入る。

「止めておけ、和倉妹。光は俺の付き添いのようなものだ。もしも手を出すようなら、俺もそれ相応の対応をさせてもらうことになる」
「……分かった」

「光、お前も状況を理解してから行動しろ。興味があるとその他に関する注意が著しく下がるのはお前の悪い癖だ」

「あー……なんか俺、KYやった？」

「ああ、あと数秒遅かったら空気が吸えなくなるぐらいにはな」

「？ ……ま、悪かったんは俺みたいやし、なんかゴメン」

そういつて、理由も分からないまま頭を下げて謝罪をする光。

しかも、その頭が下げられた先は和倉妹ではなく俺である。

まったく、こいつは……しかし、光の間の抜けた行動は和倉妹の警戒心を抜くのに効果的だったらしい。

単に相手にするのが馬鹿らしくなっただけかもしれないが、こちらとしては潤滑にことが進めるのはありがたいことである。

「で、和泉センパイ。美空から聞いたんですが、ここで教えてくれるんですか？ センパイのいう真実っていうものを」

「ああ、俺の後について来い。そうすれば、全てを教え、全てを証明しよう」

光には目線だけでついて来るように語る。

その顔に了解の笑みが浮かんだことを確認してから、俺は先ほど光が寄りかかっていた門柱の前まで歩き、鉄で形作られたスライド式の門扉を開ける。

それほど大きくはないその門扉は、砂利を砕く音や鉄が擦れる音を立てながらも簡単に開いた。

門から視線を上げると、そこに佇むのは広い敷地の中に建てられた規模の大きい建築物。

それは数多くの怪談話を内包する場所であり、同時に俺や光にとっては懐かしき思い出が残留する場所。

「夜の学校なんて、何年ぶりやろ……なんか、ワクワクするなあ」

戌神小学校　ここは、俺達が始まった場所であり、この夜を終わらせる鍵の在処であり、戯曲の終演のために用意された舞台であり　蛇の罪が眠る場所。

役者は既に揃いつつあった。

＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝

大丈夫ですか？　　なんでしたら、救助をお呼びしましょうか？

「いや、いいです。もう助からないですから。すみませんね……
君には偉そうなことをいっておきながら、あっけない」

……はしたないですね。寝言は寝ていうものですよ？　少し待っ
ていてください、今すぐ救援へ連絡します。パートナーの居場所は
分かりますか？

「ああ、美菜みらいさんなら、先にいきました」

……

「死に目は私が見取りました。死因は刃物による頭部損傷による脳内器官の損傷か、四肢切断による失血のどちらかです」

.....

「死体は私が処分しました。あれ以上美菜さんを辱めることは、パトナーとしても、夫としても、兄としても許せませんでした。大目に見てくれると嬉しいのですが」

.....誰ですか？

「言えません。言ったら、君は止まれなくなってしまう」

失礼ですね。私はそこまで愚かではありません

「君は愚かではないでしょうが、賢くはありません」

人を馬鹿にしている余裕があるのですか？

「君こそ、守りたいものができたのでしょうか？　ここで復讐などしてしまったら、君はそれを守れなくなるよ」

知ったような口をお聞きにならないでください。

「知っています。だから、こんな無様で愚かな終わり方なんです」

.....続きは病院でお聞きいたします。ですから、それ以上口を開かないように。

「その言葉は信用できないですよ。君は嘘吐きだからね。だから、ここで聞いてくれるかな。僕のわがママを」

わがママ、ですか？

「二人を　娘達をよろしく頼みます」

.....

「ずっととは、いいません。君が守りたいものを守れるようになってからでいいですから、あの子達を見守ってください。できることなら、あの子達が道を外さぬように、君が導いてあげてください」

..... 貴方は先ほどの自分がいった言葉をお忘れですか？ 私は嘘吐きでございます。私の肯定ほど無意味なものはありません。

「いいですよ、嘘でも。君が頷いてくれれば、僕は安心して先にいける。君が頷いてくれれば、僕は美菜さんと一緒にいける」

.....

「約束、してくれますか？」

..... 分かりました。嘘吐きである私が約束いたします。私はこの命に代えても、その約束を守りましょう。

「ふふっ..... やっぱり、君の言葉は信用できないですね　でも、ありがとう」

それは私の約束。
守られることのない、約束。

＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝

昔の記憶と殆ど変りない校舎の中を歩き、俺達はある部屋へとたどり着いた。

それは、この学校の長の部屋である校長室　　に設置されている、隠し階段を下りた先に存在する部屋。

校舎の地下に講堂ほどの空間があることを、こここの生徒と教師は勿論、校長さえもこの事実を知ることはない。

そこで、俺以外の三人は驚愕によって言葉を奪われていた。

そしてその空間の殆どを占める、無数の黒い箱。

その中にはさらにいくつものサーバーがあり、その全てが数千、数万の無数のコードやケーブルで繋がっている。

そして全てのケーブルが、最終的にその空間の中心に立つ、青白く光る柱に集約されていた。

その青白い柱　正確には、青白い液体が満たされた円柱状の水槽の中には、あるものが浮かんでいた。

「玲、なんや、アレ……いや、誰や、アレ」

最初に、目の前の物体と関わりのない光が、現実へと戻ってきた。光の場合は、その非現実的な状況に意識が飛んでいただけ。

たとえ、目の前にホルマリン漬けにされた蛙の標本のように肉体の所々が切開かれ、内臓器官や筋肉、骨の髄までも晒され、その肉体に数多くのケーブルが生々しく刺さり、繋がれた　無論、そのケーブルは切開かれた箇所にも同じように繋がれている　人の形をしたものがあつたとしても、それは他人事である。

その衝撃の質は　和倉姉妹とは、違う

俺は、光の問いに答えるためにゆっくりと口を開く。

「あれはもう人ではない。あれはこの空間に存在する四谷のサーバーを管理する、人の脳内信号を使用した統合システムの一部だ。人の形をしているが、既に人としての意味をなくしている」

人は死しても人である。

けれど、その死した肉体が機械に繋がれ、体内なかを晒され、物とし

て利用され続けたことを知っている俺は、目の前に浮く物体を人と
して扱うことに抵抗を覚える。

同じようにこの物体のことを知りながらも、人としてとらえるこ
とができる駆は、これを人の名で呼び、俺が物として扱うたびに必
ず同じ言葉を返す。

まだ人だよ、と　　まだ、この人は人として消えてはいない、と。

俺はその物体の中で唯一人として認識できる個所　　眠る人の顔
に似た物を見ながら、物ではなく人の名を呼んだ。

「あれが人だった頃の名は、和倉空海　　和倉姉妹の父親だ」

Fligitt33 そして、消えゆく真実の前へ（後書き）

ああ、早くも主人公の生存が確認されてしまったー（棒読み）

……どう考えても、バレバレでしたね。

奇を衒うのが苦手な作者でスミマセン……でも、どういう形であれ彼が生きていないと、この話の後の物語が真っ暗闇になってしまふのでしかたないんです。

さて、次回で話の決着がつくはずです。脱シリアスパートに向けてもう一息、頑張らせて頂きます。

では、また。

Fluorite 34 すべての役者は導かれ

まるで、近代的なイルミネーションのような、青白い光を放つ一本の柱。

透明な特殊強化アクリルを素材として、筒状に形作られた柱の中には、光と同色の液体が満たされている。

構造的に、それは柱でなく水槽といふべきなのかもしれない。

だが、俺はそれを水槽とは認識しない。

水槽とは、液体を貯蔵するためのものであると同時に、水生生物を鑑賞する際などに用いるものである。

しかし、目の前のそれは、満たされた青白い液体の貯蔵が目的ではなく、内部で水生生物が泳いでいるということもない。

ただ 人の形をしたものが浮いているだけ。

肉体の至る所を切開、もしくは表皮を切り取られ、標本のように内部を晒され、その上で何十本ものケーブルを突き刺されたそれは、何度見たところで慣れるものではない。

それは元々人だった……正確には人の死体だった。

その証拠に、手のひらほどに切開ひらかれた胸部から見える、胸骨と肋骨に抱えられた心臓は止まっている 本来、肺に隠れている心臓さえも、ケーブルを接続する際に邪魔という理由で肺が肋骨の一部と共に切除され、脈動のないその姿を外に晒していた。

そんな、人の死体から逸脱したそれを液体と共に入れているものが、入れたものを観賞するために用いる水槽と、同じ並びでいいのだろうか？

「……和泉センパイ。質問して、いいですか？」

電子機械の独特の稼働音が静かに満たされた空間に、作り出された一つの波。

その声のする方を見ると、俺の顔を見上げている和倉姉がいた。先ほどまで、目の前のものを見たショックにより、放心にも似た状況だったはずなのだが、現在その目に揺らぎはない。やはり、この和倉美海という人間は強い。

その雰囲気や行動から、和倉妹を姉と勘違いする者もいるようだが、人間としての強度や完成度は和倉姉の方が圧倒的に上だ。

現に、和倉姉の隣にいる和倉妹の方は、腰が抜けたように地べたに座り込み、俯いているだけであり、本当に放心してしまっただようである。

光は、部屋に入ってから数分足らずで外へと出ていった。

ある意味、それが正しい反応なのかもしれない。

しかし、俺も和倉姉妹もこの部屋から出ることはしなかった。

なぜなら、俺はすべてを語るためにここにいて、和倉姉妹はすべてを知るためにここに来たのだから。

「無論。俺がここにいる理由の一つは、全ての疑問に答えることだ。俺はこれから嘘や偽りのない真実と、変わることはない事実だけを述べることを、ここに確約しよう」

俺は自分の言葉に対して、表情に出さない冷笑を洩らす。

それは、俺が真実を口にすることが裏切りであり、それを自らの意思で行っている自分自身に対する嘲笑。

だが、俺が事実を語ることかわりはなく、迷いはない。

「……なんで、パパがここに？」

俺の言葉から一拍置いて、和倉姉の重みのある問いの言葉が目の前で紡がれる。

あれが自分の父親と思えるのか……その言葉を、俺の口から出すことはなかった。

「それは、四谷に潰された企業に雇われていた和倉空海が、四谷の管理下にあることへの疑問か？ それとも、和倉空海の肉体が、四谷のサーバーのシステムとして利用されていることへの質問か？」
「両方です」

言葉だけでも感じることもできる、強く重い意志。

和倉姉妹は、両親の仇を討つために数多くのものを切り捨て、暗い世界へとその身を捧げてきた。

その数年間の痛みや苦しみ、悲しみや恨み……そのすべてがつまっている言葉に対し、俺は感情の入る余地のない、事実だけを口にする

「倭国の影人の忍、和倉空海と和倉美菜は、ある企業に雇われた。その使命は、四谷財閥の当主である四谷源蔵の暗殺。その企業は数年にわたり四谷に対抗していたが、四谷はさほど不利益を生まないその企業を相手にすることはなかった。逆に、四谷によって殆ど利

益が生じないその企業は、その状況に対して痺れを切らし、二人を筆頭に数多くの刺客を雇い、直接的な攻撃を仕掛けることを決定した。しかし、四谷はそれを予知していたかのように、ハッカード遠呂智を動かし、その企業の機能を完全に掌握。外部への連絡を封じられ、一時的に身動きが取れなくなつた所で、四谷は容赦なく更なる手駒　黒猫を送りつけた。結果的に企業の重役は全員が死亡。重役警護も兼任していた二人を含む数名の刺客も、例外なく殺害された。この出来事は四谷によって隠蔽され、闇に葬られた……これが、和倉妹から聞いた情報であり、俺が遠呂智に協力して意図的に流した情報だ」

俺の言葉に対して、和倉姉に驚いた様子はない。

「どうやら俺の語つた真実は、和倉姉にとって予想の範囲内だつたようだ。」

長い前置きに対して、目立つた反応を見せない……和倉妹は人の話から知るタイプのようだったが、和倉姉は人の話から汲み取るタイプらしい。

ならば、曖昧な言葉を使う必要はない。

「しかし、事実はそうではない。和倉空海と和倉美菜が企業に雇われたのではない。企業が二人を雇うように仕向けられた」

「……四谷の意志で、ですか」

「その通り。二人は元々四谷に所属していた。四谷の障害を簡単に潰すために、相手の手駒となつて内部情報を収集する密偵であり、最終的にはその背中を刺す暗殺者だつた」

『色葉』^{いろは} 和倉美菜。

同族であり、同士であり、夫婦であり、兄弟であった二人は、特異な才能 異能を有した刺客。

俺は四谷との契約上、直接顔を合わせる機会はなかったが、二人が得た情報の整理等など行うためそれなりの接点はあり、その有能さはよく知っていた。

隠密性や迅速性、技術力や戦闘力、任務成功率を含め、あらゆる面において二人は一流であった。

「和倉妹から聞いているとは思いますが、当時四谷に所属していたハッカーは遠呂智ではなく俺だ。故に、俺は当時の状況を知ってはいるが、実際にその現場にいたわけではない。そして、遠呂智は和倉空海と和倉美菜を殺害していない。このことを前提として話を進めるが、問題はないか？」

和倉姉は無言。

しかし、俺の問いに対する回答は、その貫くような視線が十分に果たしていた。

「では、手短かに話そう。一時的とはいえ四谷に対抗する力を見せた企業に対し、なにかしらの興味を持った四谷源蔵は、その企業を蹂躪せずに支配することを決定した。俺は企業側に忍んでいた和倉空海と和倉美菜にその命令を伝え、二人から内部状況を受け取った。その数日後、雇った刺客が一ヶ所に集められ、企業が自分達の有する力を確認したことによって、緊張の糸が微細な緩みを生んだあの日。四谷は企業を傀儡^{かいらい}とするために、その場に嘔吐きを送り込んだ」

催眠や精神攻撃に耐性を持たない者に対して、遠呂智の虚言は絶対的ともいえる効果を発揮する。

それをうまく利用すれば、交渉や脅迫をすることなく相手を思い通りにすることが可能であり、力でねじ伏せるより容易で効率的であるのは明白。

企業の機能を奪う俺にとっても、一時間程度で終わる簡単な仕事のはずだった。

しかし、企業内部の監視カメラがいくつもの赤く大きな血の池を映したことで、俺の仕事は予定していた時間の半分も経たずに終わった。

「企業重役十一名はただの廊下にまとめて山にされ、刺客二十三名は半数が集められた地下会議室内で死亡。残り半数の殆どが企業内部の各所で死体となっていた。遠呂智が送り込まれた時点で息があったのは和倉空海のみ。無論、初期の計画は断念。俺は有益なデータを吸い出した後、企業の電子システムをすべて破壊。遠呂智はその場を清掃部隊に任せて即帰還。それが上から命令だった。しかし、遠呂智はその命令を無視して行動。その途中で俺に一つの計画を持ちかけてきた。そして、俺は計画に乗った。その計画によって、この四谷サーバーの生体統合システムは作られた」

遠呂智は和倉空海の遺体と和倉美菜の遺灰を回収し、俺に二人の娘達の居場所を調べさせた。

二人が四谷に所属していたため、その住所を突き止めることに何の苦労もない。

俺は遠呂智情報を教え、翌日四谷の者に両親の訃報を伝えるに行かせた時　そこは、もぬけの殻だった。

その後、俺は倭国の影人が二人を連れだしていたことを調べ上げ、遠呂智に伝えた。

しかし、それが分かったところでなにが起こるわけではない。

その頃の駆は独断行動が許されるほど自由ではなく、四谷は死人の親族の行方などに興味はない。

しかし、嘔吐きは納得しなかった。

だから、嘔吐きは抗った。

その哀れな足掻きが生み出したのが生体統合システム……そして、嘔吐きの立てた計画の鍵。

遠呂智に託された鍵を、俺はこの場で使うことに決めていた。

「和倉美海。和倉美空。俺が二人をここに連れてきた理由は二つ。

一つは、俺が知りうる事実を教えること。もう一つは……これを渡すためだ」

和倉姉の瞳が驚愕に揺らぐ。

それでも、声を上げず俺と視線を交わし続けた。

それに応じるように、俺も言葉を絶やさない。

「無論、こちらで人の形に修復してから渡すことになる。証拠管理の関係上、譲渡より二十四時間以内に解析不可能状態にしなければならぬが……この場合は火葬でいいだろう。そちらには土葬の文化も残っているようだが、肉体が残る形式は認められない。火葬の場合は必要なものをすべてこちらで用意しよう」

「……」

「だが、そちらに受け取る気がなければ、新しいサーバーシステムを導入する際、他のサーバーシステムとともに破棄する。保留はな

し。受け取るか否か、この場で判断してもらおうこととなる」

俺の一方的な話が終わり、和倉姉は俺から青い光の方へと視線を移す。

この中にあるものが自分の親であったなら、どういった感情を持つのだろう……ふと浮かんだ思考を、俺はすぐに放棄した。

一方的な加害者である俺に、和倉姉妹の想いを考える権利はない。だから、青い光を迎えるその瞳がなにを映し、なにを考えているかは俺の知る範疇ではない。

しかし、和倉姉のように冷静さを失っていない者は、最終的に同じ回答をするだろう。

だが

「……け……なっ」

突然、頭を揺さぶる衝撃。

なにが起きたのか分からないまま、自分の体が背中から倒れていくことだけは感じ取る。

そのまま床に腰から背中にかけて鈍い衝撃が駆け抜け、瞬間的に後頭部を打つことを覚悟した。

しかし、寸前に胸倉を引っ張り上げられ、後頭部の代わりに首を痛めることとなった。

「ふざけるなッ！！人をこんないじくり回して、何年もこんな場所に閉じ込めて、こんな姿を曝させて……いらなくなったら私達に渡すって……」

そのような衝撃を受けながらも落ちることのなかった眼鏡のレンズ越しに、俺は目の前で怒りを剥き出しにした和倉妹の表情を見た。いたって真つ当な反応。死者に対し斬り捨てて野晒しにするよりも残酷で傲慢な仕打ちを行った者に向けられるべきは嫌悪と憎悪。それが、嘔吐きの願いを叶えるために必要なことであり、どれほどの覚悟を要したかなどは関係ない……結果がすべて。

「……これが人のやることかッ!? それでも人かッ!?」
「ふざけてこのような話はしない。こちらもそれ相応の覚悟を持って行動している。だが 正解だ、和倉妹。如何なるどんな理由があるうが、如何なる覚悟を持っていようが、死を冒涇した俺達は人でなしだ。その事実を繕う気はない」
「ッ!」

俺の言葉に、和倉美空の顔は怒りの色を濃くし、白い左腕が振り上げられた。

自分に向かってくるだろうその腕を、ただ眺めるように見る。
下手に当たれば死ぬ可能性もある真の鉄拳は 俺の髪を揺らすだけに終わった。

「ねえ、さん……?」

白い拳は、後ろから伸びた和倉姉の左手によって掴まれ、その動きを止めていた。

義手と手のひらの間から赤い液体が滲みだし、腕から拳の先までを鮮やかな一本の線が結ぶ。

姉の行動に驚きを隠せない和倉妹。和倉姉の表情はその影となつて確認できない。

「それが、理由なんですね？」

和倉姉から乾いた驚愕の声色で紡がれる言葉。

その一言で、すべてが伝わった。

そして、俺は沈黙によつて和倉姉の考えを肯定する。

液中で静かに浮かぶそれは、和倉空海の肉体を四谷の徹底した証拠隠滅から逃すため、四谷への利用価値を持たせた結果。

だが、それだけならここまでする必要はなかった……和倉美菜のように灰に還す選択肢もあった。

しかし、駆はあえて選んだのだ。

和倉姉妹のためにその肉体を残すとともに、和倉空海との約束を果たすため、悲惨で非道な選択をした。

そして、和倉姉は駆の意図に気づいた。

和倉妹が後ろを振り返ろうとすることで、隠れていた和倉姉の姿が俺の視界に入る。

その顔は人でなしに対する軽蔑でも、親への屈辱による嫌悪と憎悪でも、痛みからくる苦悶でもない、穏やかさに満ちていた。

そして、和倉姉は 頷いた。

「……受け取るんだな？」

「はい」

「受け取りの日時は後日連絡する。なにか要望はあるか？」

「火葬の手配をお願いしたいです。できるなら、お墓も作ってあげたいんですが」

「了承した。その際、こちらで保管している和倉美菜の灰も、骨壺に入れ直して受け渡す」

俺と和倉姉の間で交わされる口約束の契約。

何の証拠も残らないが、こちらに契約を破る気などは一切ない。

和倉姉は俺に対して一度頷き、自らが制止した妹へと視線を移す。それにつられるようにして視界に入れた和倉妹の顔には、行き場のない驚きと怒り。そして悲しみが満ちていた。

「姉さん……どうして」

「先輩を離すですよ、美空」

「姉さんはいいの？ コイツが憎くないの？ コイツが……コイツ等が、パパをこんなにしたんだよ？」

「……」

「ねえ、なんで黙ってるの……ねえッ！ なんで！！ 答えてよ、姉さん。でないと、私、分かんない……分かんないッ！！」

困惑が困惑を呼び暴走する。

自分の意図しない動きによって、和倉姉の持つ白い義手が振れることで傷が広がり、流れていた赤の勢いを増す。

しかし、和倉姉は気にする様子も見せず、暴れだそうとする和倉

妹の背中に自然な動作で腕をまわし、自らの方へと引き寄せ、その体を抱きしめた。

不意に硬直する和倉妹の体を、温度のある左腕が優しくもしっかりと背中から包み込み、黒い右腕が不自然な動きをしながらも、同じ色の髪を撫でる。

「ねえ、美空。パパはお昼寝が好きだったですよ。ポカポカしてるお日さまの光を浴びながら、気持ち良さそうに寝てたです。私達も一緒に寝たり、寝すぎだつてママに怒られたりもしてたです。でも、最後にはママも一緒になって寝ちゃうんです」

和倉姉は抱き寄せる妹の肩越しに、青白い光の中に浮かぶものを遠き日の記憶を懐かしむ瞳に映しながら、その耳元で暖かな言葉を囁く。

それは子供をあやす母親のように、全てを受け止めるような限りない暖かさを持つ抱擁。

その腕の中で、和倉妹は力なく顔を肩に埋める。
衝動は震えに変わっていた。

「美空……パパを眠らせてあげますよ。日の当たる場所で、ママと一緒に」
「……………」

その言葉に小さく、けれどハッキリと縦に振られた和倉妹の首。
同じ体躯であるはずの双子の姉妹だが、俺の目には和倉姉が大きく見えた。

震える妹の背中を優しく叩きながら、姉は視線を俺へと移した。

「よろしくお願いするです」

「……了解した」

俺に向けられた視線には、様々な感情の渦が見え隠れしていた。和倉姉も妹と変わらない悲しみや怒りを抱えている。

それでも、妹の前では気丈に振る舞うその姿は、俺の記憶に残る和倉空海と和倉美菜の姿を彷彿とさせた。

お互いがお互いに支えあう……駆は知っているだろうか？ 自らがその関係を望み 同時に避けていることを。

「話すべきはあと一つ 和倉空海と和倉美菜を殺した者に関してだ」

俺の言葉に和倉姉の体が硬直し、和倉妹の震えが止まる。

長年、和倉姉妹にとって両親の仇は黒猫と遠呂智 つまり、駆の事だった。

しかし、それは駆に頼まれ俺が流した偽りの情報であり、和倉姉妹を自らの所へと導くために仕掛けた伏線。

そして、今から俺が断ち切ることとなる、駆に絡みつく過去のしがらみ。

「……和倉空海と和倉美菜の実力は、過大評価なしでも十分なものがあつた。四谷最強と言われた黒猫としての駆でさえ、二人同時に

相手をするとは敗北を意味するほどに。その二人が命を落とした理由は、倭国の影人の特性。倭玖羅の血脈。近親相姦による、濃厚な血の繋がり。血族の結束を逆手に取る裏切りの刃」

和倉姉が歯を噛みしめ、和倉妹の左手に力が込められる。

倭国の影人は一族の中だけで子孫を作り、近親者同士による交配も少なくなかった。

いくなれば、一族全員が家族のような存在。

そのため、倭国の影人は一族の人間に対して本能的に信頼を置く性質がある。

その性質は連携行動において有効に作用し、和倉空海と和倉美菜の強さの一因としても挙げるができる。

そして、それが最大の弱点でもあった。

「裏切りなんて……」

「ありえないとは言えないな。実際に不意を突かれて昏倒させられ、背中を刺されかけた身としては」

和倉姉は言葉に詰まる。

和倉妹はともかく、和倉姉は俺の渡した手紙を事前に読んでいなければ、無防備な背中に容赦ない刃が突き立てられていただろう。

それが分かっているがゆえに、和倉姉妹はなにも言えなくなる。

事実を知った和倉姉妹の中でどんな決意が生まれるか……残念ながら、それを待つほど悠長な時間はない。

俺は一寸休ませていた口を再び開く。

「和倉妹は理解していない点があるようだが、他は後で話すことにする。まずはここから出るぞ。ここを戦場にするわけにはいか」

殺シ。

突如、全身を突き抜ける危険信号。

俺は咄嗟に歯を食い縛り、心と体を構える。

そして襲い来る　黒い殺意。

殺シ殺シテ殺シタ

殺シ殺シテ殺シテ殺シタ殺シタ殺シ

殺シ殺シテ殺シタ殺シテ殺シタ殺シ殺シタ殺シ殺シテ

殺シ殺シテ殺シタ殺シ殺シテ殺シタ殺シ殺シテ殺シタ殺シ殺シテ殺シタ
シテ殺シタ

殺シ殺シテ殺シタ殺シ殺セ殺シタ殺セ殺シ殺シテ殺セ殺セ殺
セ殺シテ殺シタ殺セ

殺シ殺シテ殺シタ殺シ殺セ殺セ殺セ殺セ殺シテ殺セ殺セ
殺セ殺セ殺セ殺シタ殺セ殺セ

殺シ殺シテ殺シタ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺
セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ

殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺
セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ

「……これは、素直に気絶したほうが、楽だ……それにしても、敵以外への考慮を、したらどうだ」

突然襲い掛かってきた殺意の濁流。

一瞬で意識を根こそぎ流し尽くすような激流は、数秒の間に俺が悪態を吐けるほどまで落ち着いた。

全身からねっとりとした汗がにじみ出るのを感じながら、和倉姉妹へと視線を移す。

「……美空、大丈夫ですか？」

「うん、問題ない……姉さんは？」

「私は、平気ですよ」

和倉姉妹は俺と同じような状態だったが、二人で互いの心配をしているあたり、大きな問題はなさそうだ。

なら、ここで時間を浪費する必要はない。

心身への無理を承知の上で、力を込めて立ちあがる。

「行くぞ。あの馬鹿がすべてを終わらせてしまっ前に」

校長室の椅子に座りながら寝ていた光を放置して、俺達は校庭へと向かった。

体中に纏わりつくような殺気は、校庭に近づけば近づくほど濃く、重くなっていく。

そして校舎の外に出た頃、暗闇が支配する校庭の中に二つの人影

を見つけた。

人影の片方は、校庭の中心に佇む黒尽くめの大男　百爪。

その片腕は和倉姉妹との攻防の際に負ったらしき傷によって力なく垂れ下がり、明らかに万全の状況ではないが、獰猛な気迫は剥き出しである。

そして、その気迫のすべてを向けられている者も、黒い衣装に身を包んでいた。

「まったく……なぜ戦線離脱者がこんな所にいるのか、説明してほしいな」

周囲を包む黒い殺気で息苦しい口から出た言葉には、なぜか呆れの色が出ていた。

そんな俺の言葉に対して、百爪に対する者はこちらに向き直る。暗い夜と黒い殺気の中で、呪われた宝石のようにすべてを引きつける不気味な赤き輝き。

「離脱者とは失礼ですね　私は嘔吐きですよ」

そこには遠呂智が立っていた。

戦闘不能の重傷を負い、治療を受けていたはずの嘔吐きは、なにこともなかったかのようにそこに立ち、白々しい笑みを浮かべる。

「本当に、不可解だ」

聞き覚えのない深く低い声。

百爪といわれる男は、緊張状態において遠呂智に目を逸らされるという一種の侮辱を味わいながらも、指一つ動かさないまま言葉を続ける。

「致命傷ではないが、そうして平然とした姿で立っていていられるほど生易しい傷を与えたつもりはない。しかし、そのようなことより不可解なのは、私の前に立つ者が眼鏡をかけていない嘘吐きということだ」

百爪の言葉は間違っていない。

今の遠呂智には、特徴の一つであり嘘吐きに成るために必要であるはずの眼鏡がない。

「百爪様のおっしゃる通り、私は物凄く痛い思いをしましたし、大切にしていた伊達眼鏡もなくしてしまいました」

遠呂智は虚構めいた口ぶりで話しながら、その体を俺達から百爪の方へと向ける。

その口調、身振り、雰囲気……どれをとっても、それは遠呂智のものである。

眼鏡がないならそれは嘘吐きではない別のもの……それが伊達駆か、新井月朔夜か、はたまた違うものかは分からないが、嘘吐きには眼鏡がなければ成れず、嘘吐きは眼鏡さえなければ封じることができる。

そう本人がいい、俺が流した遠呂智の欠点　　そう、あの嘔吐きが吐いた自らの弱点。

「ですが　それがどういたしました？」

周囲を支配していた黒い殺気が動き出す。

背筋が焼けるように熱く、頭から血の気が失せる　　うねる様な

殺気の暴力に対し、意識より先に体が悲鳴を上げる。

しかし、まだこんなものではない……この殺気は遠呂智自身ではなく、感情の高ぶりによって無意識に滲みだしたもの。

つまり、これはなにかが現れる前兆であり凶兆。

「舌を抜かれたわけではないので、私は嘔吐を吐けません。嘔をつける限り、私が嘔吐きであることに変わりありません。それに、たかが眼鏡がないところで、私の眼は赤く染まったままです。そのようなことだけで私を無力化したつもりでしたか？　それとも　」

遠呂智は言葉を切り、すつと、左手を自らの右目に近づける。

指がその目に触れると、なにかが手のひらへと転げ落ちた。

それと同時に、荒れ狂う殺気が霧散していく　　いや、殺気が一点へと凝縮される。

黒く、黒く、黒く……駆の周囲だけが、明けることのない常夜の闇のように深さを増していた。

「　そんなに俺に会いたかったのか？」

そして、右目に触れていた指を離れた時、深い闇の中に見えたのは、小さく微かでありながら存在する一点の光。

それは 金色の瞳。

「奇遇だな。俺はお前をブチ殺したくてたまらねえ」

嘔吐きによる疑心の戯曲に、夜の獣が放たれた。

Fligit34 すべての役者は導かれ（後書き）

嘘を、吐きました。

お久しぶりの夷です。そして、前回のあとがきにて『次回で決着だよ』など口にしていましたが……このとおり、伸びました。嘘吐いてゴメンなさい。反省はしている。後悔もしている。そして、たまたま正座しながらこのあとがきを書いているため、小説投稿の際にはPCにむかい土下座をしながらボタンを押そうと思っている。割と真剣に。けれど、反省や後悔が生かされることは（ry

次回こそは決着といたしますので、両肘が両耳につく程度の首の長さでお待ちください。

では、また。

夜の従者のような黒。

暗の核心のような黒。

陰の化身のような黒。

影の臨界のような黒。

冥の混沌のような黒。

闇の極致のような黒。

それは、俺に黒い霧を幻視させる程の殺気を自らの中に取り込み、この世の黒をすべて喰い殺すような暗殺者。

新井月朔夜は、不機嫌な気持ちを隠すことなく顔に出し、その金色に輝く瞳で正面の男を睨みつけていた。

「にしても、テメエよくやるよなあ。数年前のすられたモンを取り返しに来るなんて、随分とまあネチネチした野郎だ。少し気配を撒いただけで釣り上がってくれるのはありがたいが、なんか気持ち悪いし胸クソ悪い」

同一の体でありながら、それは完全な別人。

逃走者のように優しくなく、虚言師のように虚ろでもない。

殺意と暴力の渦のような暗殺者の攻撃的な立ち姿に、正面に立つ百爪は全身を使って深呼吸をする。

その一回の呼吸で、百爪は地獄のような黒に対する覚悟を得た。

「……君こそ、置き引きのような真似をするなど、四谷最強の名が泣くぞ」

「勝手につけられた名前が泣こうが、俺の知ったことじゃねえし、テメエにいわれる筋合いはサラサラねえよ」

「それは私も同じ」

「つまり、ゴチャゴチャいわずにさっさとやろうってことか」

言葉を返すことなく、腕を後ろへ伸ばし臨戦態勢に入る百爪。小さく鳴る刃の音が、その言葉を肯定しているようだった。だが、黒猫の言葉はそれを否定した。

「息巻いてるところ申し分けねえんだが、テメエの相手は俺じゃねえ」

巻き戻すような手際の良さで、目の中に入れられる紅い虹彩のコンタクトレンズ。

暗殺者を中心として渦巻いていた深遠の黒さは、主を失って跡形もなく霧散する。

消失した黒色の殺気。その後に残されたのは、虚構めいた赤色の影。

「四谷財閥の最悪であり、三流の嘔吐き。『晦月の遠呂智』ごと三十日八雲が、再びお相手させていただきます」

人を馬鹿にしたような科白のもとに、嘔吐きは戦場へと舞い戻る。それを見ていた百爪は、表情を隠す帽子の下で大きく舌打ちをした。

「おや？ 私が相手ではご不満なようですね」

「一度倒した相手にようはない」

「己の望みを叶えるためならば、一族の掟を破り同族の血さえ啜る、強食思考かつ冷徹な暗殺者である百爪様ともあるう御方が、息の根を止めていない相手を倒したとおっしゃるのですか？ だとしたら、随分とお優しい」

遠呂智の言葉に、抑え込まれていた百爪の殺気が膨れ上がる。

黒猫のような常識外れの現象は起こらないが、俺達のいる場所の空気さえ張りつめる。

その殺気を受ける遠呂智は、取ってつけたような笑みを浮かべる。そして、本物の人殺しに対し、何食わぬ顔でいつてのける。

「先に申し上げますが、私は貴方ほどの方に殺されるつもりはなく、殺すつもりもありません。ですから、精々悔いの残らないように、徹頭徹尾出し惜しみなく本気で殺しにいらしてください」

それは宣戦布告ではなく、一方的な勝利宣言。

悪びれもなく堂々と、嘔吐きらしく淡々と語られる言葉に、百爪の殺気はさらに膨れ上がり 抜けるようにして萎み、小さくなる。それは、まるで嘆息のように。

「一度殺されかけた相手にそのような口を利けるとは、どのような思考なのか……いや、なにが君にそこまでさせるのか。自らの敗北を濯ぐためか。それとも白獅、色葉の弔いか……」

「そのようなことも分からないのですか？　まるで跳べない鳥を彷彿とさせる記憶力ですね」

呆れの混じった百爪の言葉を遮るように、遠呂智は感情を含まない言葉で呆れを示す。

そして、夜闇に輝く深紅の瞳は　激情たる怒りを映す。

「『僕』の後輩に手を掛けた。私が貴方を打ちのめす理由は、それで充分でございます」

異様な空間に毒され動けずにした和倉姉妹が、俺にも聞こえるほど大きく息を飲む。

今の遠呂智　駆にとって、和倉姉妹は学校の後輩であり、俺の提案からとはいえ自宅に招き入れたこともある。

だが、そこまで関わってしまったえば、駆にとって二人は身内同然。困っていれば手を差し伸べ、助けを呼べばすぐに駆けつけ、楽しい時は一緒に笑い、哀しい時は優しく慰め　その涙の原因を叩き潰す。

たとえ、和倉空海との約束がないとしても、百爪が恩人達の仇でなかったとしても、あの馬鹿は自分の傷など思考の彼方へ吹き飛ばし、二人を傷つけるすべての前に立ちふさがっていただろう。

そのすべてを喰らい尽くすがために。

「もうお話はよろしいでしょうか？ 役を与えられていない貴方には、そろそろ退場していただきたいのです。残念ながら、自主退場は認められませんけれど」

炊きつけるように繰り返させる安い挑発。

手練れならば乗ることのない陳腐で軽い言葉の数々。

しかし、それは虚ろな言葉を操る虚言師の口から紡がれるものに似ていた。

そう　人を狂わせる虚言に。

「　いいだろう。もう拘ることはない。なりふり構うこともない。その首、狩り取らせてもらう」

なにかを捨てるように言い切った百爪は、右手に握った爪の刃先を自らの喉元へと持っていく。

黒く光る刃先は、ゆっくりと下へ向かい、その先にあるスーツやシャツを何の抵抗もなく切り裂いていく。

そして、上半身の衣服を縦一線した刃が止まり、その素肌が曝された時、その異常に気付いた。

「私も黒剣と白盾同様、血の罪を濃く受け継いだ者の一人。それも、とびきり醜悪な罪を」

それはスーツの切れ目から、悪寒が走るような生々しい動きで姿を現す。

数えるのなら、四本。

百爪の腕ほどの長さを有し、できの悪い針金細工のような姿をしたそれは、明らかな異形でありながらも見覚えのある形をしていた。

「これが君のいう私の本気だ。私自身、この姿が嫌いでな。他人に見せるなど吐き気がするが仕方ない。見るのならばその目に焼きつけ 君も同じ嫌悪に抱かれる」

使い物にならなくなったスーツやシャツは、袖などに先程と同じように切目を入れられ、ただの布切れとなって地面に落ちていく。それと同じくして、百爪の背中では何かが蠢き、布切れとなった衣服の残骸を払い落とす。

「ろくのかじで
六狩手」

それは 腕だった。

百爪の脇腹に二対に、背中から一対……通常あり得ない場所から生えた合計六本の腕。

大柄に見えた体躯は、その腕を隠すためだったらしく、外気に触れた百爪の体は想像よりも細く、骨張っている印象を受ける。

そして、一番の特徴である六本の腕は、外見のみで歪な形をしているのが分かる骨を、溺死体を思わせる鈍く透き通る白い皮膚が包み、暗青色の血管がその皮膚を押し上げ、表面に生々しい模様を浮

かび上がらせる。

指は親指にあたる一本がなく、指先からは骨らしきものが白い肉を突き破り、黒色に染めた爪のような模様をつけていた。

和倉空海とは違う意味で人から外れた姿に、和倉姉妹は息を呑み、俺も自分の身体が強張る。

「悪いが、首だけを残すなどという手加減はできない」

六本の腕が横方向に振るわれると同時に、地面に落ちたスーツから無数の刃が飛び出す。

尺度も形状も統一性のない無数の凶刃は、不規則な軌道を描きながら、遠呂智の隙を狙うように取り囲んでゆく。

逃げ場を失った遠呂智だが、その紅い瞳は百爪だけを見据え虚言を紡ぐ。

「Tamdiu discendum est, quamdiu
vivas」

「あかぎ報斬」

虚言の二の句を繋ぐ前に、刃の群れは収縮するように遠呂智に殺到し、その身体を喰らい尽くすはずだった。

血肉に染まるはずの凶刃は空を斬り、乾いた刃が搗かち合う音が夜闇に響く。

「Omnia mea mecum porto」

停止していた刃の群れが、夜闇に響く声に反応して弾かれるように動きだす。

風を切る刃は、操り手である百爪の傍を掠めるように通過する。

その目標は、突如として目の前から消え、背後に出現した遠呂智。意表を突かれるような状況に対しても、戸惑うことなく素早く手を打つ百爪。

それに対し、遠呂智はただ立ち尽くすのみ。

「刀戯やうぎ 無刀愛撫むとうあいぶ」

棒立ちの状態から、まるで風に流されるような動作に移った遠呂智は、自らに襲い掛かる刃の側面を撫でるように触れる。

その手に触れられた刃は、元の軌道を大きく外れ、遠呂智を斬りつけるに至らない。

一つ、二つ……フェイントなどを含んでいるだろう刃達を、遠呂智はすべて捌ききった。

目標を仕留められなかった刃の群れは、百爪の指先から伸びる極細の糸によって軌道を変え、不規則なタイミングと予測困難な軌道で再び遠呂智に襲い掛かる。

しかし、その刃が血濡れることはない。

「あれは……どちらが化物だ？」

視界の先で繰り広げられる圧倒的な技と洗礼された技の拮抗に、

和倉妹から驚愕の声が漏れる。

六本の腕から放たれる刃は、時には統率された獣の群れのように乱れなく目標を追い詰め、時には餓え狂った獣のような不規則な動きで目標に迫る。

一方、縦横無尽な動きで襲い来る凶刃の群れに対し、防ぐことも退くこともせず、そのすべてに反応し、その動きに合わせ見過ごし、回避し、受け流し、その斬撃の嵐を捌き切る。

下手に加勢すれば一瞬で場が崩れ、どちらに転ぶか分からなくなる状況で、和倉妹は手を拱き、俺は静観し、和倉姉は 見抜いていた。

「和泉センパイ」

「なんだ」

「あれは自己暗示ですよね」

虚を突くような的確な指摘に、俺は一瞬言葉を失う。

遠呂智が最悪と呼ばれ、自らを三流と呼ぶ理由をいとも簡単に見破った……しかも、明確な確信を持って言いきったのだ。

これはもう観察力や洞察力といったものではなく、物事からなにかを感じ取っていると考えるべきだろう。

これが和倉姉の力……いや、これは和倉美海の性質なのだろうか。俺は和倉美海というものを確認するかのように問いに答える。

「そつだ。あれは一種の自己暗示。しかし、あれは常人の自己暗示とは一線を画す。あれは酷く醜い一人遊びだ」

「一人遊び、ですか？」

「自らが自らを騙し尽くし、自らが自らに騙され尽くす。その間に

自覚や疑念の余地はなく、一切の矛盾を無視する。この世で最も馬鹿げた自己完結。そんなものに意識も無意識も関係ない。そして、今の遠呂智は嘔吐きではない。あれは 刀を愛し、刀に愛される者」

俺が語る間にも、人と刃の接触は幾度となく繰り返されるが、鋭く光る刃がその肉を切り裂くことは叶わない。

痺れを切らしたのは 刃の主。

今まで微細な動作で刃を誘導していた六本の腕を、乱雑に振り下ろす。

今まで自由自在に動いていた刃が、見えない手によって叩き落とされるように降下し、乾いた土のグラウンドに突き刺さる。

まるで 遠呂智を囲うように。

「餐壤」
はんじょう

六本の異形な腕が、暴れ回るように関節の可動領域を無視して動く。

その動きに應えるかのように、グラウンド全体を覆う夜闇の中で、星のような光が瞬く。

そして 遠呂智の肩口が裂け、地を這う星空に鮮血が花開いた。

「センパイッ！！」

和倉姉が叫ぶ。

しかし、ヒュンヒュンと風を斬る音が複数重なり、その声をかき消した。

二十を越える刃が捕らえきれなかった遠呂智を切り裂いたのは刃と百爪を繋ぐ超極細の糸。

百爪の腕が生理的な悪寒を覚える動きで振るわれ、その指と地面に食らいつく刃を繋ぐ幾本の糸が凶刃となって遠呂智を襲う。

分厚い刃より威力は劣るが、広範囲に広がり高速で動く糸は檻のように遠呂智を逃がすことはなく 外部からの接触を遮断する。

和倉姉の踏み込みかけていた足が宙を彷徨い、力なく先ほどまでと同じ地面を踏む。

苦渋の色に染まる表情が、決意によって塗りつぶされた。

「……美空。センパイが倒れたら、私が糸をなんとかするです。ですから、美空は百爪をお願いするです」

「分かった。まずは、あの気持ち悪い腕をへし折ってやる」

「くれぐれも無理はしないように、ですよ」

「姉さんこそ」

和倉姉は遠呂智を犠牲として百爪を討つことに決めた。

元々、和倉姉妹の目的は復讐であり、その目標は遠呂智から百爪へと変わったが、二人の目的に支障はない。

百爪の奥の手らしきものも見ることができ、連戦となれば手負いの二人でも歩がある。

これが終わった後で和倉姉妹が同族殺しを討つた者として一族に迎えられるのか、同族殺しとして一族に追われることになるのかは俺の知る範疇ではない。

しかし 駆はその両方をよしとしない。

「そうだろう？ 駆」

俺は遠呂智の方に視線を戻す。

左肩、右腕、背中、左足……体の至る所に鋭い斬痕が刻まれ、右腕に関しては処置したばかりの傷が開き、流れ出す血が黒スーツの袖をベツトリと濡らしている。

しかし、遠呂智は自らの傷など眼中になく、その紅い瞳は百爪を見据え続けていた。

そして、血濡れた腕を懐へ伸ばし、取り出したのは銀色の光。

手に収まるほど小さなそれは、刀と同じく生物を切り裂くために存在しながら、その命を救うために振るわれる白銀の刃 手術刀^{×ス}。凶器としては限りなく鋭いが、武器としては小さすぎる、この場に不釣り合いな代物。

しかし、それは紛れもない『刀』だった。

「刀戯」

その小さな刃を手に右腕を横薙ぎに振るうが、動きは緩慢といえるほど遅い。

防御など考えもしていないだろう遠呂智に対し、暴れ回る糸のつがその頭部を強かに打ち据える。

無防備な状態で食らった急所への攻撃に、力なく左へ振れる遠呂智の体。

しかし、足はしっかりと地面につき、右腕は体の傷に構うことなく一定の速度で動いていた。

ぐったりと落ちていた首がゆっくりと動き、こめかみから溢れ出

る血に塗れた顔を上げる。

自らの血で瞳や白目さえ紅く染まった右目が百爪を捕らえた瞬間
右腕の手術刀が振りぬかれた。

そして、糸が大気を切り裂く音が……いや、この場を満たす全ての音が消えた。

その音のない世界で、遠呂智の声だけが空しく響いた。

「ふいつとつぎんば
払刀斬波」

嵐の前の静けさは一瞬。

無音を割くザンツ、という音と、音に不釣り合いな光なき爆発。

炸裂した大気は、グラウンドの砂利を吹き飛ばしながら、雪崩のよう
な砂埃とともに風の瀑布となって俺達にまで襲いかかる。

十秒にも満たないだろう短い嵐は、身を屈めて耐える俺の意識を
断絶寸前に追いやるほどの衝撃を撒き散らした後、跡形もなく消失
する。

「……ッ、大丈夫か」

「こちらは、問題ない」

視覚、聴覚……塗り潰されていた感覚が元に戻る。

和倉姉妹は俺より早く危険を察知していたらしく、地に伏せるこ
とで上手く嵐を凌いでいたようだ。

二人は立ちあがり、すぐさま遠呂智と百爪が対峙していた方へと
視線を向ける。

だが、爆発の余波によって、未だ大気はうねり、大地が震え、周

困に広がる砂煙によって状況把握は難しい。

「センパイが敵じゃなくてよかったです……それはもう、いろんな意味で」

和倉姉の口から、本音らしき言葉が漏れる。

だが、それは和倉妹の本音でもあり、俺が何年も前から真に思い続けていることだった。

しかも、あいつは俺達が影響を受ける範囲にいる限り、意識や無意識に関係なく手加減をしているだろう。

それがどれ程の加減かは分からないが、さっきの一振りは系の監獄を突破するに充分すぎる。

「状況は掴めないが、私達が手出しできる範疇ではないのは確かだ」

和倉妹が苦虫を噛むような顔で先の見えない砂煙を見る。

広範囲に広がる煙幕、それを透過する光がない夜闇、未だ微弱な揺らぎを有する大気……視覚と聴覚が無意味と化すこの状況では、加勢はおろか下手に動くことさえ危険である。

それは俺達だけではなく、百爪や遠呂智にも当てはまる。

だが 蛇は狩りに出た。

F a s e s t a t a b h e s t e d o c e r i .

意味のない言葉は明瞭な音として、うねる大気さえ無視して響く。そして、この砂煙の中が遠呂智の狩り場として存在するようにな

る。

スタンス
足構

大気のうねりに遠呂智の声が溶け、その質を変える。

波のように押し寄せせるものから、生物の動きにも似たものへ。

そして、ただ立ち込めているだけの灰色の砂煙が、意思を持つモノのように流れ始める。

セツト
胴構
ノッキング
矢番
セツトアップ
射起

広範囲に拡散する砂塵が、収束して一つの巨大な流れを作り出す。急激に晴れた視界の先で流動する砂塵は、砂と砂の接触によりガラガラという音を立てながら次第にその形をなしていく。

そう それはまるで獲物を一飲みにとんと地を這いずる蛇のように。

ドローイング
引分
フルドロー
会

百爪が砂塵の蛇の体を突き破り、グラウンドに着地する。

纏わりつく砂を払う百爪が見上げるその先には、緩やかに流れる砂塵が鎌首を上げるかのように夜空へと昇っていた。

幻想的ともいえるその光景に対し、百爪は八本すべての腕を蛇に向かいふるつ。

その指先から伸びる、幾つもの瞬き。

「玄毘くろびッ」

何十本という不可視系が、砂塵の蛇の首を何重にも切り裂く。しかし、実体のない現象に対してそれは悪あがきでしかなく、全ての斬痕はすぐさま砂塵の中に飲み込まれていく。

そして、砂塵の大蛇が鎌首を振り下ろし、百爪を飲みこもうと襲いかかる。

襲い来る風と砂の奔流を防ぐため、百爪は全ての腕を交差した。

そして 砂塵の大蛇の大顎が、鋭い毒牙を剥く。

そして 砂塵の瀑布の中から、虚言師が現れた。

「ッ」

砂塵を突き破って出現した遠呂智は、百爪を自らの間合いへと取り込んだ。

想定しようのない展開に対し、百爪は出遅れた追撃ではなく、腕による防御を固めることを選択した。

その間にも遠呂智は動きを止めることはなく、半身に構えた上体を固定するように肩幅に開いた足が大地を踏み締め、なにかのサインのように前へ伸ばされた左手と胸部の位置まで引き絞られた右手が一直線上に並ぶ。

その立ち姿は、幾年もの経験を積んだ熟練の射手。

しかし、その手には弓矢どころか、先ほどまで持っていたはずの

手術刀の影すらない。

「
リリース
離」

けれど、矢は放たれた。

引き絞られていた右手が、一つの矢となって弾かれる。

そして、左手と行き違うように前へと突きだされ 八本の腕が
重なるその中心へ、吸い込まれるように突き刺さる。

そして 直撃と爆音。

それは矢などよりも遙かに重く鈍い、砲撃を思わせる衝撃音。

着弾点となる八重の盾は一瞬にして穿ち砕かれ、肉と破片と骨の
欠片となって飛び散る。

そして、容赦ない衝撃が百爪の体をくの字に曲げ、反作用によっ
て生まれた衝撃波が二人を飲み込もう背後に迫る砂塵を吹き飛ばす。
その一撃によって砂塵は蛇の姿を失い、残滓は一陣の風によって
攫われる。

一拍遅れて、遠呂智の腕に寄りかかるようにして立っていた百爪
の体が地面へと倒れ落ちる。

これが、この夜の決着だった。

「
フォロースルー
残身……ッ。少し、無理をしすぎましたかね」

支えとなっていた糸が切れたようにふらりと体を揺らし、その場に膝を突く遠呂智。

俺はその姿に駆け寄り、倒れそうになる体を支えながら地面に座らせる。

「大丈夫。過剰な痛覚で力が抜けてしまっただけですから」
「無理をしなければいいだろう……と、いつでも無駄か。少し見せてみる」

俺は一番傷が深いと思われる右腕を奪うようにして見る。

百爪の腕を穿った腕は温かな血で塗れており、一部には溺死体のような青白い皮膚を残した肉片も付着している。

それらの感触や感想を無視して、俺は遠呂智の腕に手を這わせる。

「玲様、触診の最中に申し訳ありませんが、手つきがいやらしく感じるのは気のせいでしょうか」

「仕方ないだろう。医療は専門外だ。見よう見まねの触診も血肉のぬめりで思うようにいかない。だからといって力を入れすぎるわけにもいかないだろう……ここはどうだ？」

「ッ」

遠呂智の表情が苦痛にゆがむ。

こめかみ辺りから流れ出す血によって片眼を赤色に塗り潰された顔は、虚構を貼りつける余裕もないようだった。

「……手の方は拳ではなく掌底での打撃だったため問題なさそうだが、腕の方は縫合した傷口がほぼ開いている。また、橈骨が尺骨になんらかの損傷があるようだ……いや、最悪でも骨折程度で済んでいるというべきか？」

「腕の一本程度なら差し上げるつもりでしたが、百爪様は腕が嫌いなようですからね。嘔吐きの腕などいらなかったのでしょうか」

そういつて、遠呂智は自嘲を含んだ笑みを浮かべた。

身につけたスーツは血と埃に塗れており、破れた場所からは生々しい血肉が覗く。

しかし、腕以外の傷はそこまで深いものではなく、骨まで達しているものは見当たらない。

致命傷はないという判断をした俺は、こういつた時のために預かっていた包帯を取り出し、服の上から傷口をきつく絞めることで応急処置の止血することにした。

しかし、遠呂智は包帯を持った俺の手を血塗れの手で遮った。

「ご厚意はありがたいのですが、治療は後回しにしてください」

遠呂智の目線の先にいたのは、うつ伏せに倒れた百爪。

あの生理的な怖気を生み出す腕は、肘から先が食い千切られたような断面を残して消失し、そのすべてから血液を流す。

肩から伸びた人らしい腕も、曲がるべきではない位置が曲がるべきではない方向に曲がっている。

それは、死体としてもあまりに凄惨な姿。

しかし、その死体は一定の周期で微かに動き 呼吸をしていた。

「さて、百爪様は虫の息ではありませんが、確実に生きております。私は百爪様に殺すつもりがないと申し上げましたから、これは当然の結果といえるでしょう」

遠呂智は負っている傷を感じさせない動きで立ち上がり、地面に転がる百爪の前に立つ。

いや 立ちふさがった。

「そして、私が言葉通りにことを成すためには、お二人に百爪様を殺させるわけにもいかないのです。どうか、その手をお下げになっ
てください」

遠呂智が立ちふさがった先には、和倉姉妹がいた。

両親の仇である百爪を目の前にして。

その百爪を倒した遠呂智を目の前にして。

「それは、無理だ」

「ごめんなさいです。でも、これだけは譲れないんです。パパとママが殺されてから、私達はこの日のために生きてきました」

「貴様のおかげで本来の仇を知ることができ、姉の命も救われた。それらのことには感謝する。しかし、それとこれとは話が違う」

それぞれ黒い剣と白い盾を前方へと傾け、明確な殺意を抜き放っていた。

そして、和倉姉が最終宣告を下す。

「そこをどいてくださいです、センパイ。恩を仇で返すことはしたくないですが、センパイが立ちふさがらるなら、私達はセンパイを殺して進むです」

和倉姉の瞳には悲しみが見えた。

それは、遠呂智を殺すことへの悲しみ　つまり、和倉姉には殺す覚悟があるということ。

対して、和倉妹は表情を浮かべることはなく、遠呂智を目標の一人として捉えていた。

まともに右腕を動かせないほどの怪我を負っているとはいえ、先ほどまでの戦闘を見ていれば、油断をする人間は一人としていないだろう。

二人は既に復讐者として、遠呂智と対峙していた。

「恩ですか……どうやら、お二人は人がいいようですね。自分達が私にどれだけ騙され、踊らされ、狂わされたのか。忘れてしまったわけではないでしょうに」

和倉空海、和倉美菜を殺したと騙^{かた}った嘘吐きは、真実を紅く染めて作り上げた疑心の戯曲の舞台上で、二人の復讐者を前にする。

それは、遠呂智が望んでいた筋書き通りの展開。

そして、血と夜と虚構と暴力で満ちた戯曲のフィナーレは　嘘吐きが地獄に落ちることで幕を閉じる。

「では、仕方ありません。陳腐な台詞で申し訳ありませんが、いわせていただきましょう。百爪様を殺すのならば、私ごと殺しなさい」

再び、遠呂智と和倉姉妹は敵対することとなった。

遠呂智が騙らなければ、和倉姉妹は嘔吐きと接触することさえなかつただろう。

だから、俺はこの戦いを止めることも、なにか口出しすることはできない。

なにもしてやれなかつた俺が、遠呂智 駆が望んでいることを否定する権利などないのだから。

つまり、この場に戦いを止める者はいない はずだった。

カチリ、という音がした。

その音源は、遠呂智でも和倉姉妹でもない。

向き合う二組の間に、夜闇の中に橙色の光が灯っていた。

その光は煙草に火をつけ、煙草は火先から一筋の紫煙を立ち上げせる。

「おい、若造ども。いつまで下らん騒ぎを続けとる」

丁寧に後ろに流した茶色の頭髪。

人より肥えた腹部。

一目見ただけで一級品だということが分かるスーツ。袖を通さずに肩に羽織った灰色のコート。

煙草を銜えたまま吐き出した紫煙は、その存在を示すように暗闇に漂う。

その立ち姿があるだけで、周囲の空気が張り詰めているのがわかる。

「喧嘩ならもつと派手に騒げ。せめて世界の終わりを終わらせるぐらいの喧嘩でないと、ただの一興にもならん」

この地を治める四谷財閥の現当主。

俺や駆が従い、従えることのできた唯一の男。

そして、伊達駆という異端に『朔望月相』を与え、四谷最強や最悪を生み出した元凶。

「それでも、キャバクラの嬢ちゃんや乳繰り合っとなの方が数万倍は楽しいがのう」

四谷源蔵は 笑った。

どこにでもいる好々爺のような笑みで。

この時に国一つを転覆させていてもおかしくない笑みで。笑っていた。

Fligitt35 - 紅い牙と暗い爪が交わる夜に（後書き）

お久しぶりでございます。七月の絶望的な状況を超え、なんとか返ってきた夷です。返ってくるなどはいわないでください。素で凹ます。

二ヶ月放置がよくあることになってしまつて、大変情けない限りでございます。そして、また双子編完結せず……最悪な嘔吐きになりつつある自分を叱咤しながら、続きを執筆させていただきまます。ではまた。

私と美海様達の間立ち塞がる一つの人影。

その影は、口に啜えた煙草を早々と灰にしながら、気に入らない笑みを浮かべていました。

「……さて、どうしてくれるかな」

「当主」

「おお、和倉シスターズ。随分といい格好になったもんだな」

美空様の声に笑顔で答えるのは、権力と財力の世界における重鎮であり、武力と暴力によって敵対する者を蹂躞する男 四谷源蔵。このお方、は好戦的かつ気紛れの多い者として世界の舞台裏に広く知られ、各方面の権力者から恐れられています。

「もう少し肩が開け^{はだ}とれば、いい趣味したやつらが喜びそうな絵になりそうだが……駆、お前はどう思う？」

「取りあえず、礼儀として挨拶を致しましょう。お久し……」
「つまらん返しはいらん」

「でしたら、その口にくわえているものを逆さにしてみてもいいかわかりませんか。他人が行わないことを行うことは楽しいことでしょう。それで貴方の口数が減るのなら、こちらとしても助かります。ただ、その程度の熱では舌を消し炭にできないでしょうから、実行する際はライターオイルを口に含むことをお勧めいたします」

「長い」

「ならば、先ほど申し上げたいことを限界まで簡略化いたしましたよ。私は貴方に死んでいただきたい」

「それは無理な相談だ。そんなことより、ワシの質問に答える。それとも、今の露出程度でムラムラしておるのか？」

「前言を撤回させていただきます。私に貴方を殺させていただきます
い」

「お前にワシが殺せるとは思えんがの」

「駆、あのペースにのまれるな」

「分かっております」

誇らしげな笑みを浮かべるその顔を殴りつけたい衝動に駆られながらも、玲様の忠告を受けあらゆる意志でそれを押さえつけた私は、一度解けかけた緊張を今一度体中に張り巡らせました。

そして、血の色に染まっていけない隻眼で対象を捕らえ、この場で最も適確と思われる質問を口にします。

「で、源蔵様。貴方はなぜここにいらしたのですか？ 私が知る限りでは、貴方が夜中に外出する場合の行先は、キャバクラかクラブか風俗街と相場が決まっていますが」

「そうそう、最近お気に入りキャバクラで、入ったばかりの可愛い子猫ちゃんがいての。あの子の売り上げのために、昨日も同伴出勤……って、なんでお前がそんなことを知ってる!？」

「失礼ですね。それでも私は貴方に仕えていた身でございますよ。なに不自由なく貴方の行動を把握できる場所にいたのですから、興味がなくともそれぐらいのことは知ってしまうのです」

「ったく、壁も障子もあつたもんじゃないの。重宝していたものほど、手から離れると厄介だ」

「そうですね。源蔵様にとって、私は特別に厄介な存在なのかもしれません。しかし、私は厄介でしかない。そして、この場の貴方は私にとって 絶対的な脅威」

普段の源蔵様は、年齢を無視した好色を持つ迷惑極まりないふざけた中年男性であり、その言動に巻き込まれることも少なくありません。

その際、苛立ちを我慢できずに拳を振るってしまうことも少なくありませんし、源蔵様も文句をいうだけであり、本気で止めようとすることはありません。

しかし、ここは世界の舞台裏。

この場にいるのが『伊達駆』でありながら『三十日八雲』であるように、この場にいる源蔵様は普段の源蔵様ではございません。

彼の方は、世界の舞台裏に存在する有象無象の化物の中で、頂点の一角として君臨する いうなれば、四牙八爪の巨虎。

そして、その虎の牙の先は間違いなくこの場に向けられています。

「ですから、私は貴方の一挙手を危険視し、一投足を警戒いたします」

「まったく、相変わらずタマの小さいヤツだの、お前は。まだなにもしとらんというのに、一人でビビりおって」

「必要ならばさらに恐れ戦きましょう。それが私の脆弱さを曝け出すことに繋がったとしても、貴方に隙を見せることを望みません」
「いや、ワシはただ遊びに来ただけだぞ」

源蔵様の言葉で、この場に完全な静寂が訪れる。

それは、源蔵様を除いた全員がその言葉を否定した結果といえま

す。

評価を受けた本人は、自らが引き起こした静寂をため息で破壊しました。

「……まったく、ワシもほとんど信用がない。まあ、そんなものはクソくらえだがの……おい、駆。そこに転がつとる野郎だが、まだ生きておるだろうな？」

「……こちらである程度の名を知られている方なら、ショック死など乗り越えているはずです。ですが、流れ出る血液の量と百爪様のこのまま止血しなければ、五分程度で死んでしまうでしょう」

「チツ。スマートな仕事ができんやつだ……ほれ、いけ」

源蔵様が煩わしそうに顎で百爪様を指すと、その後ろから一つの影が跳びだす。

影は私と玲様を驚くべき跳躍で飛び越え、百爪様の傍へと着地いたしました。

そして、命のリミットが削られていく百爪様に対し迅速な処置を行い始めました。

……私はもちろんのこと、美海様達や玲様も周囲への警戒を怠っていたわけではありませんが、源蔵様の指示で動くこの方は、私達の意表を衝くことで行動を封じました。

それほどまでに、この方の出現は突然でした。

人間としての気配を消し、生物としての存在を消し、物体としての存在を消すことで、あらゆるものからの認知を不可能とする、不意打ちや闇討ちに最も適した能力。

つまり、この方は 俺と同じもの。

「紹介しよう。これが本当の 四谷最強の代理だ」

美海様と美空様の表情が凍ります。

源蔵様の言葉はつまり、『俺』の後釜がお二人ではなかったということを意味し、同時に二人が四谷の下にいた時間の根底を打ち崩すこととなります。

ですが 美海様達の心は、その程度では墮ちることはない。

「……なるほど、私達は踊らされてたつてわけですか」

「姉さん？」

「美空。ここは私に任せて戦いに備えてくださいです。どう転がるかは分からないですけど、この場がなにも起こらずに終わるなんてことはないですからね」

美海様の言葉に、源蔵様が感嘆を含んだ嗜虐的な笑みを浮かべます。

やっと、楽しくなってきた。

そう、源蔵様の笑みが語っていました。

「それに、もう四谷に従う必要はなさそうですし。いえ、本当は従う理由なんて最初からなかったんですよね」
「そうだな」

飾り気のない肯定。

ですが、装飾のない言葉の切れ味は人を刺せるほど鋭く、その使

「手は一筋縄ではいかないというのが世界の盤石とされており、源蔵様もそれに漏れません。むしろ悪い方向に漏れているのではないでしょうか。」

「よく分かったのう。ワシと結んだ雇用契約が偽物だと。さすが、若くして二つ名をもっとるだけはあるといったところか。」

「明け透けなお世辞はいららないですよ。あなたが意図的に上げてくれた功名ですから。」

「謙遜なんぞせんていい。」

「源蔵さんこそ、ここまでできてとほけなくていいですよ。私達が欲しいのは、肯定か否定だけです。」

「それはどういう意味だ？」

「そのままの意味ですよ。あなたは私達の質問に答えてくださいです。簡単な質問ですから、答え方も簡単でいいです。だから、余計な言葉はいらない。」

美空様の目に、今までにない殺意と敵意の暗い光が灯る。

対した源蔵様は、相変わらずの笑みを崩すことなく無言。

そして美海様の後ろでは、指示に従い待機している美空様が、呼吸によって集中力を高めながら同質の視線を私に向けていらっしやいました。

その視線に返すべき言葉を持ち合わせていない私は、笑みなど浮かべずに無言。

徐々に、しかしながら着実に高まってゆくこの場の緊張感。

きっかけさえあれば、あらゆるものが転がり落ちてしまうでしょう。

そんななか、源蔵様の態度を肯定ととった美空様が問いを紡ぎます。

「あなたはセンパイのいう通りに私達を雇って……いや、雇ったふりをしてたですね？」

「ああ」

「なら、センパイから計画のすべてを聞いてるのですか？」

「そうだな」

「センパイが百爪を殺させなかったのはあなたの指示ですか？」

「まあ、そうなるかの」

お二人の問答を視界に収めながら、私は閉じた左瞼の上を伝う血液を左手で拭い、同時に自らの状況に対して内心で悪態を吐きます。右腕は玲様の応急処置を受けたとはいえ動かせる状態ではありませんし、体には数多くの傷が絶えることなく血を流し続け、現在保っている意識もいつまで持つか分かりません。

このような満身創痍の体で、どこまでできるでしょうか。

「そうですね……これが最後の質問です」

美海様の双眸に宿る光に鋭さが生じ、源蔵様を射抜きます。

幼い容姿にはおよそ似つかないほどの冷徹な瞳は、油断なく源蔵様の反応を観察しながら、一瞬ですが私に視線を向けました。

その様子を見て、私の直感が自身に告げます。

次で 全てが動く。

「あなたは、センパイの指示で私達に仕事をさせたんですか？」

今まで美海様の問いに対し、表情一つ変えずに短い解答を返していた源蔵様ですが、この問いに關しては他と違いました。

目を閉じた源蔵様は、なにかを押し殺すかのように一度だけ喉を鳴らし、いままで私と美海様達を視界に収められる立ち位置から動き、私に対して背を向けました。

そして、短くなった煙草を素手で握り潰しながら、もう一度喉を鳴らし　笑う。

「　愚問だな。そのつまらん男が、そんな愉快なことと思うか？」

喉を鳴らすことをやめた源蔵様の発言は、美海様達が持つ殺意の矛先を自らに向けることに繋がる。

それを理解していながらも、源蔵様はあえて真実を語ります。敵意を望み、殺意を愛し、害意を楽しむ　この方はそういう方なのです。

「そうですね……それはよかったです」

源蔵様の答えを聞いた美空様達の表情に変化はありません。ただ、静かに口を開く。

「これで　あなたを殺す理由ができた」

言葉をいい終える前に、お二人の姿は闇を裂く軌跡となります。
それは、地を這うような低姿勢での猛烈な突撃。

突き出された黒き剣と白き盾の先が捕らえるのは 四谷の当主。
その捨て身に近い双撃に対し、源蔵様は避けるすべがない い
や、避ける気がない。

美空様達が無防備なその懐に入る寸前、夜風に背中を撫でられた
私は咄嗟に視界を閉じる。

そして それだけで、世界は変わった。

それは、一瞬の出来事とっていいだろう。

和倉姉妹の突撃を皮切りにして、俺には把握できないような速度でなにかが起こった。

そして、その一瞬の事後が四谷源蔵の前で形を成していた。

四谷源蔵に襲いかかった和倉姉妹は、揃って義手を背中であぐら上げられながら地面へ組み伏せられている。

百爪に処置を施していた謎の存在は、一瞬のうちに四谷源蔵の元へ移動して和倉姉妹を追撃したらしく、現在は二人の義手を器用に両膝で極めながら一対の大型ナイフをその首筋に添えていた。

それは、命を断ち切る瞬間。

ただ、その手を引きさえすれば完結してしまうだろうその一瞬は、一つの手によって時間に置いていかれたかのように静止していた。

和倉姉妹の上に乗った者の顔面を片手で掴み、頭蓋を握りつぶさんとする 駆の手によって。

「 テンメイ 」

小さな呟きとともに、しなやかな体がひねりあげられ、頭を掴んだ左手が振られる。

その動作だけで、駆は自分より体格のいい男を投げ捨てた。

これほどの力は遠呂智の駆には出せない いや、俺の隣にいた時点で、和倉姉妹の死の瞬間に間に合わない。

しかし今、駆の紅き左眼は閉じられ 開かれた右眼は金色に輝いていた。

「 人の後輩になんてしてくれてやがんだッ! 」

空虚的な遠呂智では考えられないほどの感情を発露した叫びは、人の怒号というよりも怒り狂う獣の咆哮。

その咆哮の先には、投げ捨てられた人物がなにこともなかったかのように立っていた。

無駄な装備のないスーツを着ているが体のラインに特徴がなく、顔の殆どを拘束具のようなもので覆っているため、人としての特徴を掴めないどころか性別を判断することさえままならない。

ただ、妙に希薄な存在感でありながら、その存在感のすべてが殺す意思によって形成されているような　まるで刃に付随した影。

あれが黒猫の代理……確かに、影を印象づけさせるこの暗殺者は、和倉姉妹よりは黒猫に近い存在といえるだろう。

「……随分と個性がねえヤツだな。こんなつまんねえヤツが俺の後釜かよ」

「人を見かけで判断するな。それに、血を拭うふりをしてコンタクトを外す小細工よりは面白いぞ」

「つまり、俺もそいつもテメエのツラにはかなわねえってわけだ」

黒猫との会話を鼻で笑うだけで絞めくくった四谷源蔵は、駆達に背を向けながら暗殺者の方へ悠々と歩いていく。

四谷源蔵が歩む間、俺は警戒しながら黒猫の後ろにたどり着く。

「玲、あいつが誰だか……いや、あのクソジジイのことを考えればロクでもねえっことは分かり切ってる。そんなことより、そのチビどもはどうなってる？」

「一寸待て」

黒猫の言葉に従い、和倉姉妹の傍で膝を折り様子をうかがう。

幸い、百爪によってつけられたもの以上の傷は見当たらず、無駄な抵抗をする暇もなく地面に叩きつけられた二人は、満身創痍の体も相まって意識を失っていた。

しかし 相手もそれほど甘くないようだ。

「気絶しているが命に別状はない。だが 義肢が破壊されている。」

和倉姉妹の二つ名の所以でもある黒白一対の義肢は、内肘部を刃物で一突きされた後に捻り上げられたことで、上腕と義肢との接続が断たれているようだった。

この義肢が痛覚を伝えるならば、俺の耳は間違いなく二つの発狂を聞くことになっていただろう。

ただ、その痕からこぼれ出る液体が鉄臭くないのは救いか。

「そうか」

周囲の闇がさらに深く濃いものへと変異してゆく。

それは、先程の叫びよりも黒猫らしい怒りと殺意の表現方法。

「なら、手足の三本や四本はもらってもかまわねえな」

和倉姉妹が傷つけられたことで、黒猫は目の前の暗殺者を完全な敵として認識した。

だが、現在の黒猫は左腕が殆ど使用できず、全身につけられた傷からの出血も無視できるものじゃない。

これが朔望月相の欠点　遠呂智の死は黒猫の死であり、黒猫の死は駆の死である　それが死でなくとも、紅き嘔吐きの負う傷は同時に黒き暗殺者の負う傷となる。

遠呂智と黒猫は元をただすまでもなく駆なのだから、当然といえは当然のことだ。

しかし、虚言という言葉によって世界を歪める遠呂智にとっての左腕と、気配の操作と高速の打撃を武器として敵を沈黙させる黒猫にとつての左腕では、意味が大きく違ってくる。

対して、あの暗殺者……俺の推測が正しければ、四谷最強の代理に相応しい歪みと共に対抗しうる身体能力を有しているはずだ。

そして、黒猫を知り尽くした四谷源蔵をバツクにつけ、満身創痍の上に俺達を庇う黒猫の前に立っている。

単純な状況整理をする限り、黒猫にとって不利なものばかりが並び、覆りそうにない結果がすぐそこまで浮かび上がってくる
だが

「まあ、お遊びはこんなものにしとくかの」

しかし、この二者を唯一にして確実に止められる者が一人だけいた。

その男　四谷源蔵は、魂を握り潰すような黒猫の殺気を意に介することなく、新たな煙草に火を点け……一服。

ただその動作だけで、四谷源蔵という強者は誰がこの場を掌握し

ているかを周囲に知らしめる。

「まったく、依頼主に盾突くとは……相変わらず嘔みつき癖が治つとらんようだな」

「黙れ、クソジジイ。相変わらずなのはその頭と腹の腐り具合だ」

黒猫の機嫌がより一層悪くなり、比例するように殺気の圧力も増してゆく。

だが、四谷源蔵はその様子を見て満足そうに鼻で笑っただけ。

「ふん 傷つくほど強靱となり、追い詰められるほど研鑽され、背負うほど勇壮にか。教え込んだワシがいうのなんだが、随分とふざけた性質だの。下手すれば鎧袖一触の英雄よりも厄介だ」

厄介という言葉とは裏腹に、四谷源蔵の声色は弾んでいた。

それは、自らが鍛え上げた黒猫の強さに喜んでいるのか、潰し甲斐のある対象を前にして血が騒ぐのか。

そして、煙草をくわえ 体を翻し、こちらに背を向けた。

「……なんのつもりだ」

「見て分らんか？ この場はこれでお開きになるってことだ」

そう言って、四谷源蔵は歩き出し、俺達から離れてゆく

もう、自分の出番は終わったとばかりに、この場を去ろうとする。

「お前が大切に重ねとる嘘を台無しにしてやるうかと思って、ここまできたんだがの。しかし、これ以上お前を追い詰めると猫と蛇を同時に呼び出しかねん。さすがのワシでも、人の道を半分外したような化け物とやり合うのは御免被るわい」

この場を引つかき回して作り出した一触即発の緊張状態を、こうもあつさりと一方的に切り上げた……これぞまさに、傍若無人といわんばかりの四谷源蔵の行動は、見ていただだけの俺でさえ二、三個の文句が浮かぶ。

まして、元々気性の荒いうえに現在の機嫌は最悪で怒りは最高潮、さらには神経を擦り減らすほど集中して臨戦態勢をとっていたなら

ブツッ

黒猫の方から明確な音として聞こえたその音は、血管もしくは堪忍袋の切れる音か。

いずれにしても、黒猫の怒りが振り切ったことに変わりない。

「……ッぎけんじゃねえぞこのクソジジイ！！　こんだけカマしてくれやがったクセに、この場は開きだあ？　テメエ、ホントになにしにきやがったんだッ！！」

夜闇を張り裂かんほどの怒号とともに、黒猫の姿が消失するいや、恐ろしいほどの急加速で四谷源蔵の追撃に向かっていた。

自らが作り出す幻覚の黒霧を巻き込みながら、一直線に目標に迫り拳を振り上げる。

しかし、主人の危機に反応し、影がその暴力に立ち塞がる。速度を上乗せした黒猫の左拳を、畳んだ右腕で受け切った。

その左手には大型ナイフが握られ、勢いを殺された黒猫へ鋭い一閃が振り抜かれる。

しかし、その斬撃が捕らえるのは黒猫ではなく、闇だけが満ちる空間。

不発の攻撃から、暗殺者は両腕を交差し折り畳みながら地を蹴って跳ぶ。

まっすぐ　こちらに向かって。

瞬く間に俺の前まで距離を詰めた暗殺者は、両腕を抜き放ち抵抗さえできない俺の体を斬り刻む　はずだったろう。

暗殺者の両腕を押さつけている足がなければ。

「テメエ、得物を持つと殺したくなるタチだろ。それを持ってから、テメエのウザったい殺気がダダ漏れてやがる」

暗殺者の襲撃を、片足で受け止める黒猫。

くしくも、それはついさっき行われた攻防の役違いとなっていた。

故に　黒猫は反撃をする。

「悪いが、コイツ等はテメエが触れていいもんじゃねえんだ　下がれッ！！」

腕を踏みつけていた黒猫の足は、テイクバックを無視して腕に蹴

りを放ち 暗殺者を容赦なく弾き飛ばした。

足から放たれる寸到すんけいにも似た零距离の蹴りは、衝撃とともに和倉姉を昏倒させた黒夜の殺気こくやを打ち込む。

同じように意識を闇に塗り潰された暗殺者は、衝撃に対して受け身も取れず、握っていたナイフを吹き飛ばしながら車に跳ねられたかのように地面を転がる。

傷つくほど強靱となり、追い詰められるほど研鑽され、背負うほど勇壮に

目の前の黒い背中を見て、四谷源蔵の言葉が思い出される。

派手に転がる暗殺者は、大きくバウンドしたと同時に空中で乱れた体勢を直し、主人の背後に着地する。

すぐ後ろまで吹き飛ばされて来た自らの影に対し、四谷源蔵は振り返るところか歩みを止めることもない。

「なにを遊んどる。お前があれになにをしよう構わんが、ワシの下にいるなら最低限の働きはしておけ」

主人の言葉が終る前に、その影は動いた。

地を強く蹴り、こちらに向かい正面からの突進。

対し、黒猫は俺達を庇うために追撃ではなく迎撃を選択する。

しかし、暗殺者は黒猫の間合いに踏み込む寸前で 跳んだ。

まるでバネのような驚異的な跳躍は、黒猫だけではなく俺の頭上までも越える。

そして、暗殺者が着地した先にあるのは……意識のない百爪。

「それはワシがもらっていくぞ」

「テメエ、いい加減にしろよ。こんだけ挑発されて契約を破らねえ

ほど、俺がオメデタイやつだと思ってやがんのか？」
「契約？ 違うな。これは、お前の大好きな約束だ」

四谷源蔵の言葉に、黒猫は押し黙る。

『約束』

この言葉は、伊達駆という人間にとってあまりに大きな意味を持っている……それこそ、約束のためなら自らが傷つくことさえ厭わないほどに。

四谷源蔵はそれを承知で……それを知り尽くした上で、あえて最初からではなくこの場をかき乱した後、悠々と退場するために利用した。

最悪で性悪なタイミングで切られたカードは、最大限の効果を発揮し、黒猫の行動を押さえつける。

その間に百爪の巨体を軽々と肩に担いだ暗殺者は、俺と駆の脇を通り四谷源蔵の背を追う。

今、その歩みを止められる人間は、この場にいなかった。

「あと、お前の嫌いなワシからの忠告だ。お前、でかい傷は虚言と糸で塞いどるだろ。早く蛇に戻らんと、三流の嘘が剥がれ落ちるぞ」
「……テメエには関係ねえ」
「お前にとっては関係ないとしても、ワシからすれば関係しとるんだよ」

黒猫は沈黙することで会話を断ち切った。

四谷源蔵からもそれ以上の言葉はなく、影を引き連れ夜の闇へ消えてゆく。

その姿が完全に見えなくなっただけから、俺は自分の体が緊張で力ん

でいることに気がついた。

同時に、精神的な疲労感が一気に押し寄せ、俺はため息を吐くことでそれを緩和する。

「……あれは、いつたいなにをしに来たんだ」

つい、ため息で緩んだ口から心からの言葉が零れた。

これが四谷源蔵……四谷に関係していた俺は、その行動の不可測さは理解していたつもりだった。

しかし、今回の件でその認識は改めなければならぬことが分かった。

四谷源蔵の行動は、予測できないのではない　予測したところで無意味なのだ。

勝手に始め、勝手に壊し、勝手に乱し、勝手に潰し、勝手に落とす。

遠呂智の自己暗示が自らを歪める最も馬鹿げた自己完結ならば、四谷源蔵の行動は世界を狂わす最もふざけた自己完結。

「あのクソジジイがなにしにきやがったのか　今考えれば、あの方は最初に言っておりましたね」

俺よりも長く四谷源蔵の向かう先を見ていた黒猫がこちらを振り向いた時、その右眼は閉じられていた。

代わりのように開かれた左瞳は紅く、立ち姿はすでに遠呂智のものへと変わっている。

「遊びに来ただけ……本当に、それだけなのかもしれません」

向ける先を失った怒りを、黒猫の人格とともに虚構の下に納めた遠呂智は、俺の両脇で倒れる和倉姉妹の傍にしゃがみこむ。

そして、左手で和倉姉の壊された漆黒の義手に触れる。

血が流れていない無機の腕とはいえ、不自然な方向に捻じ曲げられ、体から外れかけた姿は無残で痛々しい。

剣先から指先、手から肘へとなぞるように触れる遠呂智は表情を崩さない。

「ただ、あの方が百爪様の身柄を引き取ってくださいたおかげで、私が美海様達に対峙する理由がなくなりました。そのことだけは、嘘でも感謝しましょう」

感謝の念を欠片も感じさせない声でそういった遠呂智は、義手に触れていた手を和倉姉の脇に入れ、よろけながらも立ち上がる。

そして、和倉姉の矮？を荷物のように片手で抱える。

「すみません、玲様。美空様の方をお願いできますか。いくらお二人が小柄とはいえ、私の腕力で運ぶのは一苦労ですし、まして片腕の使えない今ではお一人を抱えるだけで手一杯になってしまいます」
「分かった」

俺は遠呂智の要望に従い、和倉妹を背負う。

百爪の攻撃に倒れた遠呂智を運んだ時にも思い知らされたが、意識のない人間は非常に重く。

決して力があるとはいえない俺は、その体を背負い切れず足先を引き摺るように運搬することとなった。

その経験があるからか、背負い上げた際に感じた和倉妹の体は存外軽く、安定しづらい重心にさえ注意すれば問題なく運べそうだ。

俺の準備が整ったことを確認した遠呂智は、紅い瞳で向こうを見る。

「脱線や邪魔もありましたが、舞台に掛けられたすべての幕は既に開かれ、そこに立つべき役者も漏れることなく揃い、嘔吐きは多くの罪を重ねてきました。では、参りましょう　疑心の戯曲の終焉

」

仰々しい台詞を吐きながら、遠呂智は歩き出す。

俺は和倉妹を背負い直しながら、遠呂智が向かう先を見る。

そこには、俺と和倉姉妹が出てきた小学校の校舎が変わることなく夜の闇に佇んでいた。

Fligitt35 王者の手が迫れども（後書き）

忘れた頃にやってくるのが定番となってきた夷神酒です……いや、あの……申し訳ありません。

自分でいうのもなんですが、この遅さはかなり問題です。

なので、この和倉姉妹の話が終わり、少しコメディーらしい話を書いたら、この話を一旦完結とさせて頂きたいと思います。そしてある程度の量を書き終えたところで連載再開することになります

ですが、まだ和倉姉妹の話が終わっていません。どれだけ先のことになるのかは私の執筆速度にかかっていますので、すぐすぐのことでないでしょう ヲイ
では、また

私を目覚めさせたのは、体中を巡る鈍い痛みと目を刺す微かな光だったです。

そのピリピリとした痛みに瞼を開くと、青白い光の棒が視界を横断していました。

意識が朦朧とする中、それがパパの眠る柱が放つ光で、私の体が冷たいコンクリートの上で倒れていることに気づくには、かなりの時間を要したです。

だから、自分の傍らに人がいることさえ、声を聞くまでその声に気づけなかったです。

「気がついたのか。まだ寝ていても構わなかったのだが」

首の痛みを感じながら頭上に顔を向けると、すぐ鼻の先に和泉センパイが座っていたです。

青白い光に照らされた和泉センパイの顔は、手元のノートパソコンに向けられて……いや、現状確認なんかよりも、もっと大切なことがあるです。

「……美空、は」

「目を覚まして、最初に尋ねることがそれが、和倉姉。安心しろ。和倉妹ならここだ」

そういつて和泉センパイが体を動かすと、その影に倒れる美空の頭が見えたです。

私は咄嗟に体を起こそうとして、冷たい床に頭から叩きつけられたです。

それは、私が起き上がることに失敗したからで、自分の意識が朦朧としていることを思い知らされたです。

実際に目にしてみるまで、右腕の肘から先がないことにさえ気づけないとは……

「腕は武装解除として外させてもらった。だが、さすがかの有名なシクロ・マキナ・アーム生体兵器義肢の番号つきといったところか。機能停止を狙った攻撃を受けた場合、自動的に全ての関節部や機構部を固定することで、最後まで装着者の剣としての役目を果たす……他の戦闘用義肢とは一線を画すコンセプトだ。おかげで運搬や取り外しの際には存外苦勞させられた」

「苦勞させられた、ですか」

黒剣と白盾の着脱には私達でもそれなりの時間がかかるですし、そのためには特殊な器具が必要なんですが……なんて、疑問に思っても無駄ですね。

和泉センパイにはそれができる知識と能力があつて、必要だからそうしたんです。

美空の話聞く限り、和泉センパイも普通とは言い難いですから、その能力を決めつけるといふのは無駄で危険なことです。

取りあえず、私は冷たい床に痛む片手を突いて立ちあがります。

その瞬間、右肩から背中にかけて骨肉が軋むような痛みが走って、振り絞っていた体の力が抜けてしまったです。

糸が切れたように前倒しになる私。
再び床にぶつかりそうになる私の体は、和泉センパイの手に支えられるです。

「気持ちは分からなくもないが、あまり無理をするな」

「すみません、です」

「ただの忠告に謝る必要はない。それよりも、早く自力で立つてくれないか。俺の腕が限界だ」

「は、はいです」

私は霧散してしまいそんな意識をかき集めて、小刻みに震えだしていた和泉センパイの腕から離れるです。

そして、ゆっくり美空のかたわらにしゃがみ込んで、その状態を一つ一つ確認するです。

……義肢が取り外されてるのは、私と同じですね……呼吸や脈拍は安定していて、身体的な異常は見当たらないです。

ただ、私より受けたダメージが大きいらしく、意識の回復にはもう少し時間がかかりそうです。

それでも 私も、美空も生きてる。

「落ち着いたか」

「はい」

「なら、状況確認といこう」

私の意識が美空の確認に集中してる間に、和泉センパイは元の姿勢に戻ってたです。

そして、和泉センパイは私に話しかける間も、液晶から視線を離すことなくキーボードを叩きつつけるです。

「分かっていると思うが、決死の特技は失敗した。止めたのは、四谷源蔵が連れていた暗殺者だ。恐らく、あれは駆と同じく四谷源蔵によって作られたものだろう。その後、黒猫が四谷源蔵を退け……いや、四谷源蔵が気紛れで退いた。その時、百爪の身柄は四谷源蔵によって回収。その後、俺と駆で二人揃ってここまで運び込ませてもらった。それが現状までの経緯だ。なにか、質問はあるか？」

和泉センパイの話は、ある程度予想できていた内容でした。

私の剣が源蔵さんに届かなかったのは、気絶する前の記憶で分かったことですし、地面に叩きつけられる寸前、腕を組み伏せられた感覚で誰にやられたかは分かったからです。

それに……って、あれ？

「そういえば、センパイはどこですか？ 姿が見えないんですけど？」

「気づかなかったのか。あいつは先程からあそこにいる」

和泉センパイが顔を上げずに指を刺す方向には、確かにセンパイの姿があったです。

二度も同じ方向を見てたはずなんですが、その傍らに座り込んでいるセンパイには気づけなかったです。

青白い光に間近で照らされているセンパイは、目を伏せた横顔を透明な面に映り込むほど近づけ、血濡れた包帯が巻かれた手で光の

柱に触れていたです。

その姿は違和感なく視界に入ってきましたが　なにか、いいよ
うのない不安が私の胸をざわめかせるです。

そして、その口が囁きかけるかのように言葉を紡いだ時、胸のざ
わめきが体中を駆け巡った。

「 Mirabilis dictu .
」

乾いた壁が赤く朱い丹に塗り潰され

青白い光が紅と緋アカの茜アカによって染め上がり

仄暗い闇を深紅アカ　い生命アカの業火アカが喰い尽くし

静かな空気が警告アカと血肉あかの嘘アカ　で満ち溢れ

目に映る全てが、鮮やかな虚言アカに侵食される

気が狂いそうなほどの赤い暴力によって引き起こされる強烈な眩

暈の中、私は歯を食いしばって抵抗し、自分自身の意識を強く説き伏せるです。

これは、形のない幻想……

これは、意味のない嘘……

これは、どうしようもない虚言。

そう自分に何度もいい聞かせると、目の前に赤以外の色が戻ってきたです。

でも、視界を完全に取り戻した時、どっと襲いかかってくる疲労感にはなすすべがなく、私はその場にへたり込んでしまったです。

「上手く退けたようだな」

「……見るだけで、助けてはくれな、いんですね」

「俺はどこかの馬鹿じゃないからな。自分の腕は、他人に差し伸べるより自分を支えるために使う」

センパイから目を外して振り返ると、和泉センパイは顔色一つ変えていませんでしたが、その手はキーボードの上で動きを止めていました。

それがどれだけのことは分からないですけど、さっき私が見た赤色を和泉センパイは知っていて、同じような対処をしたのは確かみたいです。

「……あの赤は、なんですか？」

「大方の予想はついているだろう。それは、遠呂智の紡いだ虚言が生み出す幻想だ」

「あれが、ですか？」

私はこの夜、虚言が作り出す幻想を何度か見たです。

あれだけ現実との境目が無い幻を見たのは初めてでしたが、幻想は幻想であって現実ではないですから、見破る方法はあるはずですが、でも、さっき見た赤は見破るとかいう次元じゃない……幻想に自分の存在が潰されないようにするのが精一杯になっていました。それに……足りないです。

「……翻訳と暗示がないのに、なんで私まで虚言の影響を受けるのですか？」

相手に幻想を見せる場合、センパイはラテン語、翻訳、暗示の三段階で虚言を紡いでいたです。

なのに、さっきセンパイが紡いだのは自己暗示の時と同じでラテン語だけ。

ラテン語の意味が分からない私に、翻訳が足りない虚言の幻想が見えるはずはないのに……

「翻訳と暗示……それは、ラテン語による虚言の後に継ぐ言葉が、虚言を対象に伝達するために必要なプロセスであるという考察か？」

「？ はいです。でも、それが」

「残念ながら、その考察は間違っている」

「え……」

「虚言は意味も虚ろな言葉だ。意味が通じようが通じまいが、そんなことは関係ない。ラテン語である理由も、遠呂智の好みでしか」

い。虚言によつて相手を狂わせる必要な条件はただ一つ、対象に看破されていらない嘘を吐いておくことだ。虚言を後に続く言葉はイメージを強化させるために過ぎない。嘘に嘘を重ねることで、より大きな嘘を吐くように」

「……」
「信じられないという顔をしているな、和倉姉。だが、あいつと会話をして嘘を吹き込まれないわけではない。その嘘が生み出す小さな歪みが虚言の歪みと共鳴して、相手の中に偽りの現実を作り上げ蝕む。それに、虚言は最たる嘘だ。状況によつては、その条件さえ無視して相手を狂わせる」

作業を再開した和泉センパイから淡々と語られるのは、私の虚言に対する考えを否定するものでした。

ラテン語による対象の無意識への侵入。翻訳による無意識から表層意識への反響。そして、無意識と表層意識を暗示によつて掌握。この三段階の言葉によつて、相手の感覚や意志を自由に操作する

今思えば、私は百爪の考察を鵜呑みにしていたです。

そして、百爪の言葉に対してセンパイははぐらかしていた……いや、そうだと思わせるように嘘を吐いてたです。

「ただ、強い意思さえあれば先程のように退けることもできる。しかし、あいつの揺さ振りは一級品だ。混乱、不安、猜疑、焦燥、悲哀、憤怒。ありとあらゆる感情変化が、虚言のついている隙となる。遠呂智と直接対峙した場合、初見でその術中から逃れられる者はまずくない」

「でも、百爪は一度センパイの幻想を退けたですよ？」

「百爪……それは、百爪が和倉美菜を知っていたからだろう。遠呂

智の見せる幻想は、色葉……和倉美菜が教えたものだからな」

「ママが、ですか？」

「和倉美菜の言ノ葉と遠呂智の虚言は類似していたからな。遠呂智が虚言の後に言葉を継ぐのも、和倉美菜の教え故だ。事前に和倉妹から虚言の話は聞いていたなら、百爪がその類似性に気づいていたとしても不思議ではない。そして、百爪は和倉美菜を仕留めた者だ。裏切りとはいえ、あの色葉が無抵抗で討ち取られたとは考えづらく、百爪がなんらかの方法で言ノ葉を防いだ可能性は高い。そう考えれば、百爪が虚言による幻想を退けたことにも説明がつかだろう」

つまり、美空から虚言の話聞いた百爪は、ママの時に使った方法でセンパイの幻想を打ち破ったってことですか。

そして、虚言の幻想が効かない百爪に対して、センパイは自らに虚言を使った。

たとえ百爪が虚言を完全に防げたとしても、自己完結してしまう虚言は防ぎようがないですからね。

「話がそれたな。だが、これから話すことを理解するための前振りだと考えれば、あながち無意味ではないだろう」

話がそれた……和泉センパイはそういいましたが、私はそうは思いませんです。

核心には一切触れず、あえて遠回りをしながら私の誤解を訂正し、必要な知識を教えるから本題へ入る……あまりに出来すぎた進行です。

警戒する必要はなさそうですけど、話を自分の中で噛み砕いて理解することで、和泉センパイのペースに乗りすぎないように注意す

るです。

「嘘を吐き虚言を紡ぐことで遠呂智が抱える歪みは強大になる。そして、遠呂智の歪みを糧とする虚言の力は比例する。現在、その口から紡がれる虚言は、その力故に対象以外にまで影響を与える状態だ。それが、先程見たであろう赤き幻想の正体。遠呂智の歪みの片鱗といえる。全てを一色で塗り潰される……類似した感覚を経験したことはないか、和倉姉」

「……はい」

和泉センパイのいう通り、私は一週間ほど前に同じような感覚を味わっているです。

それは、黒の暴力……センパイを襲った時に、私の世界は漆黒の闇に埋め尽くされたです。

一瞬、自分を見失うほど強い色の後に襲い掛かる強烈な威圧感、私にトラウマに近い恐怖を与えたです。

あまり思い出さたくない出来事ですが、その経験があったから私はあの赤色に対して反射的に対応できたです。

でも 注目すべきはそこじゃない。

「……なんで、そこまで力を上げてるんですか？」

ふつと、キーボードを叩く音が途絶えるです。

……百爪を倒し、源蔵さんが立ち去った今、戦場に残ったのはセンパイ達と私達だけです。

私達をわざわざここへ運び込んだ上で武装解除して、応急処置を

施して寝かせておく……センパイが意味もなく人を嬲り殺すような趣味を持ってなければ、センパイは虚言の力を高めて行いたい目的があつて、その目的は私達に係り合はざる確率が高いです。

そして、和泉センパイはなにかしらの作業をしているのと同時に
真実を話せないセンパイに代わつて、私達に真実を語るために
ここにいます。

止まっていた和泉センパイの手がなにこともなかったかのように動き出して、一定のリズムが戻ってくる。

「早くも核心に到達してきたか……存外、四谷源蔵は損をしたのか
もしれない」

「？ なにをいつてるんです？」

「……だとしたら、本当に存外だろうな」

ほんの少しだけ疲れを見せた和泉センパイは、眼鏡の奥で静かに目を閉じます。

けど、キーボードを叩く音は止まることも、遅くも早くも強くも弱くもならない……まるで、別の生き物みたいです。

そうしていた時間は十秒もなかったですけど、再び開いた和泉センパイの目には鋭利な冷静さが宿っていた。そして、その視線は液晶ではなく私に向けられていたです。

「現在、旧サーバーシステムのデータはすべて初期化を終了し、新たなデータが組み込まれている。そのデータは……和倉空海の脳内データだ」

「パパの……脳内データ？」

「正確にいえば、和倉空海の思考、判断、記憶、反応等に関係する

脳神経の電気信号のパターンと構成を電子データ化し、和倉空海がシステムとして組み込まれる前に保存したものだ」

私はとっさに振り返る。

青い液体の中で静かに浮かぶパパ……いろんなところをいいように切り刻まれたその体に、パパの意思があるとは到底思えないです。

「無論、和倉空海だった体に和倉空海の脳内データをインストールしたところで、それが和倉空海になることはない。それに、和倉空海の脳内データといっても思考や判断などの最低限のデータであって、経験や感性などの積み重ねがまったくない」

「……じゃあ、和泉センパイはなにをしてるんですか？」

「それを話す前に最初の疑問に答えておく。遠呂智が力を高める理由。それは 和倉空海を作り上げるためだ」

和泉センパイの言葉に、私の視線は自然とセンパイのほうへずれるです。

パパと一緒に視界に入っていたセンパイは、さっき見た姿から微動だにしてないです。

まるでそこだけ空間が切り取られていて、私達とは時間の流れが違ってみたいです……あそこで、パパを作り上げてる？

それはデータ入力だけじゃできない……そして、データとセンパイの虚言でそれができらうってことですか。

いつたい、どんなしくみで いや、そんなことよりも重要なことがあるです。

和泉センパイは自分の質問を措いて、最初の質問に答えた。

本題の前に事前知識を与える和泉センパイの話し方から考えて、

和泉センパイのしている作業はパパの作り出すというセンパイを支援してるんでしょう。

そして、パパを作り出す作業は、センパイの虚言と和泉センパイのパソコンが干渉できるもので行われている。
それはつまり

「……パパの体」

それはパパの体、正確にはパパの脳です。

ここでサーバーの一部として使用されていたパパの脳は、機能的にはまだ生きてると思っただけいいでしょう。

また、和泉センパイはパパの脳にパパのデータを入れたといった……つまり、パソコンとパパは繋がってる可能性が高いです。

そして、センパイは虚言を使ってパパの脳に対して干渉する。

だから、パパは体中を切り刻まれても顔だけは一目で分かるほど綺麗に残されていたです。聞く耳を持たなければ、どんな言葉も届かないから。

「どうやら、余計な説明の必要なさそうだな」

緩やかにキーボードから手を離れた和泉センパイは、ノートパソコンを閉じて立ち上がるです。

私を見下ろす眼鏡の奥の視線は、先ほどよりも深い静寂に満ちていた。

「ただ、俺達は和倉空海の人格の模倣品を作るのであって、和倉空海という人間そのものを生き返らせるわけではない。生と死はイコールではなく、生から死への一方通行だ。その矢印を反転させる力は俺にはなく、欲しいとも思わない。実際、俺達が作り上げた和倉空海という人格でさえ、不安定すぎる上に非線形的な変動を絶え間なく繰り返しているために、和倉空海の脳に旧サーバーを後づけしてやっと処理できる状態だ。そして、その旧サーバーも夜が明ければ撤去される」

「つまり、パパは今夜だけ……」

「残念ながらそういうことだ。現状、これだけの情報量を転送する時間も場所も俺達にはない。もしあったとしても、これだけ不安定に変動する情報をそのまま転送はできない。転送できるようにした場合、最適化された情報は和倉空海ではなくなる」

それは、俺が持っている和倉空海の脳内データと変わらない。

最後にそう呟いた和泉センパイは、まっすぐ前に向き直って歩き出し、私の横を通り過ぎるです。

その姿を追うように振り向くと、立ち去る和泉センパイと入れ替わるようにこちらに近づいてくる影があったです。

それは、さっきまでパパの傍にいたセンパイ 晦月の遠呂智

そして、虚言師。

「センパイ……」

「美海様、お体のほうはいかがでしょう。どこか、痛む場所はありませんか？」

「え、あ……だ、大丈夫です」

「そうでございますか。これが終わったら美空様と共に本格的な治療を受けてもらうこととなりますので、もう少しだけご辛抱を」

センパイは左手で包帯を巻いた右腕を押さえながら、私の傍で立ち止まって膝を突く。

私が少しだけ見上げると、私の視線がセンパイの視線と交わるです。

遠呂智としてのセンパイの顔をこれだけ近くで見るのは初めてですが、開かれたセンパイの左眼は 本当に瞳の奥まで赤い。

「では、玲様の後を継いで説明させていただきますでしょうか。これから美海様、美空様、そして空海様の意識を、虚言による幻想を介して接続させていただきませう。それにより、一時的ではありますが、親子の再会を演出させていただきますこうと思います」

「そんなことが、できるんですか」
「虚言は虚ろな言葉。明確な意味や形のない言葉に、個人という枠組みは意味も形ももちません。雑作もないとまでは申し上げられませんが、今の私ならば確実に可能な事柄でございます。無論、お二人の安全も堅くお約束いたします。ただ、私事で申し訳ないので、できるかぎり早急に治療を行いたく思っております、問題がなければ早速行いたいのですが」

近くで見て気づきましたが、右腕に巻かれた包帯はびっしりと濡れていたです。

私達よりも明らかに重傷を負っているながら、平然な顔でなにこともなく歩くセンパイですが、早く治療することに越したことはないでしょう。

それに、まともな動けず意識を保つだけしかできない私に拒否権はなく、センパイを止めることができるとは思えません。

それに　私はセンパイがした約束を信じてるんですから。
ただ、この夜が終わる前に一つだけ聞いておきたいことがあった
です。

「一つだけ質問させてくださいです」

「はい、なんでしょうか」

なんで、私達から向けられた恨みを弁明しなかったのか、もつと
早くにパパのことを教えてくれなかったのか、最初に過去を話して
くれなかったのか、他人の私達に対してここまでするのか……聞き
たいことはいくらでもありますが、この夜が終わらないうちに聞き
たいことは一つだけ。

「センパイは、なんでこんなことを？」

「娯楽でしょうね」

「……」

「そのような目をしないでいただきたい。私は嘘吐きなのですから、
息を吐くように嘘を吐くのはしかたのないことなのでございます。

私は嘘吐き

ことあるごとに聞いたこの言葉は、自分がこれから嘘を吐くとい
ってるようなものです。

そして、センパイが嘘吐きであるかぎり、その発言には矛盾が生
じます。

嘘を吐くといって嘘を吐けば、それは誠か？

嘘を吐くといって誠を語れば、それは嘘か？

センパイは自分が嘘吐きであると称することで、明確な真実を語

ることを避けているみたいです。

そして、その言葉を使うということは、次にセンパイがいうことはたぶん

「そうですね……私は玉石混交の理由をもとに行動いたしました。ただ、その質問に一言で答えさせていたただくなら 大切だから、となりますでしょうか」

そういったセンパイの虚構めいた表情に変化はありませんでした。でもなぜか、その時私にむけられていた深紅の眼差しは、少しだけ穏やかで温かな色になったような気がしたです。

「では、夢幻で束の間の再会を A c t a e s t f i b u l a ,
p l a u d i t .」

センパイの口が虚言を紡ぐ。

そして、私の視界を鮮明な赤が塗り潰し、染め上げ、食らい尽し、満ち溢れ、浸食していくです。

けれど、さつきみたい抵抗する気は起きない。

それは、視界を埋め尽くす赤色が、センパイの眼差しの色だったからでしょうか。

満たされた 赤の先に、一つだけ違う色 があったです。

それは懐かしい　私を何度もおんぶしてくれた　大きくて暖かい背中。

その背中を見たら、胸が熱くなって　視界が歪んで　鼻の奥が痛くなって　赤色の中を駆け出して　なにかが零れて　熱くなって　溢れ出して

「　パパあッ!！」

そして　影がゆっくりと　振り返って

Fligitt36 戯曲は終わり、赤の幕が降ろさせる（後書き）

なんとか一区切りついた……ように見せかけて、終わっていません。

じつを申しますと、これは二月中に書き終えようとしていたものの前半部です。後半部が完成しないがために、このような形の投稿となりました……なんて自虐的な告白だろう。

そういう理由もありまして、次回更新は執筆作業に入っている後半部なので、現在のスピードよりは速く更新させていただけると思います。

では、また

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2751d/>

逃走者！！～せかんど・らん・あうえいッ！！～

2011年3月2日23時03分発行